

仮面ライダーエグゼイド
THE GAME IS NEXT
STAGE

桐生 勇太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

可能であれば私が同サイトで投稿している『GM（ゲームマスター）は異世界に行ってもGMのようです。』<https://syosetu.org/novel/132446/>というほうを先に読んでもらったほうがたぶんいいです。

（そのキャラが作中に登場するので……）

仮面ライダーエグゼイドのトゥルーエンディングのその後の世界。

晴れて小児科医師となった永夢だったが、まだバグスターとの戦いは終わらないよう

で…

「ゲームは次の段階へ」お楽しみ下さい（お楽しみめれば幸いです）
ネタバレですが、主要キャラクターのうち11人は死ぬ予定です。

※大体6部あたりが最終章になると思います。

エピソードまで読み終わった方は、途中で消失したキャラクターが登場するこちらへ
どうぞ<https://syosetu.org/novel/148176/>

この作品の主体は陰鬱×戦争×犠牲

目次

予告・作者の戯言

いつか書こう。 新作予告? | 1

深考：この作品内にはびこる呪いにつ

いて | 5

基本説明

味方キャラ一覧 | 9

敵キャラ一覧 | 18

第1部：GAME IS NEXT S

T A G E

第1話：GAMEは次のSTAGEへ

| 35

第2話：崩壊するCR | 39

第3話：現れたENEMY | 43

第4話：VS・バグスターズ

52

第5話：休戦と新たなるSHADOW

| 57

第6話：MUTEKI初めての敗北

62

第7話：大我のCONFLUENCE

| 69

第8話：捕らわれたI | 73

第9話：許されぬBETRAYAL

76

第10話：KINGキッド VS M

	一ヶ月後	161
	バグスター連合：崩壊編	
	第1話：Hello 俺！	166
172	第2話：誰も気づかないRESET	
	第3話：謎のFantasy	180
	第4話：大我とNOBLEMAN	L
	ADY	184
	第5話：大我のHARDSHIP	
187	第6話：大我とNEW HOUSE	
192	第7話：PARADIXそれは……	
	裏ノ12話：Mたちの窮地	227
	第12話：Mたちの窮地	222
	第11話：時渡りのCRONOS	
	Yの実力	216
	第10話：NOBLEMAN	LAD
	の2・	212
	番外編：だいすきなえむせんせい	そ
209	第「苦」話：地獄まであと……	
200	第8話：本当の「天才」ゲーム	
	「心」	196

	閑話：一つだけ、約束を胸に	331
	第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年	
	開戦	335
339	0—1話：アンギラスのテーマ	
	0—2話：Four Diver ti	
	ment os, op, no l, And	
344	an ti no Gra zio so	
	0—3話：いつも何度でも	348
	0—4話：Jupiter	352
355	0—5話：4号より「time」	
	0—6話：Ori unde a i f	
	i	358
	0—7話：悲しみの向こうへ	362
	0—8話：ノンマルトのテーマ	
367	0—9話：夢のかけら	372
	0—10話：ものけ姫	377
	END OF RIDER CHRO	
	NICLEを誓って1	380
	第4部：決まっていた勝者	
386	第1話：並ビ立テナイ2ツ？ノ正義	
	第2話：犠牲ハ正義デ義正ト性犧	

390

第#話：END OF RIDER

CHRONICLEハ何方へ | 393

第\$話：壊レタセカイノオウジャ

398

記憶を司りし者より：最後を見据えて

401

第%話：戯言ナ戯言 | 404

第&話：魔王ハ魔物ノ勇者サマ

408

第☒話：我NOコの命賭ケて……

411

記憶を司りし者と世界の創生者より

415

第(話：剣ヲ継グ者！ | 418

第)話：剣ヲ継グ者“ | 422

第!話：剣ヲ継グ者# | 425

第!“話：??#&ツ?□?△ | 429

第!#話：劍帝カイデン | 434

第! \$話：サイコウノ戦士 | 438

第15話：英雄王ベオウルフ | 443

だ??☒*?? ?く ?? ?? | 449

第!☒話：心ノ中ニObiヲ持ッテ

454

4 3 1 5 2 4 2 2 2 4 | 457

第四部最終話：誓いを果たす者

	第5部：永遠に眠り続ける世界	470
	第1話：さらばMUTEKIの騎士よ	474
	第2話：LIFEの期限	482
	第3話：NOBLEMAN LADY	485
	の涙	488
	第4話：その名は「ゲムム」	488
	第5話：最強の戦士は何を見る	498
	第6話：涙のCOMMA	502
505	第7話：生きとし生ける、その意味は	502
	第8話：PARAはまたDXに戻る	509
	第9話：DRIVEとEX AID	514
	第10話：知るはずのない情報	517
	第11話：幻夢とゲムム	522
	第12話：ゲムムの夢	525
	第13話：もう一つ先へ	530
	第14話：捕らわれのPARADOX	535
	第4話：天才大学生宝生現夢	540
	第3話：現夢とエリ	547

608	死別の後に：失われた Bonds	594	26話：それでいい	651
603	ありえた可能性のセカイ	590	25話：彼の夢	646
	第16話：ゲナムVSスナイプ	586	24話：記憶を求めて	640
	創世神VS破壊神	575	セカイシユウエンノキロク	637
	第15話：彼の提案	569	23話：喰べられた肉親	634
	うともく	621	630	
	隠話：愛してるよエリ	556	22話：あの時の誓いはいつでも	626
	どこにいろ	555	21話：密会	
	ゼロ：蛮野と現夢	550	19話：闇の底へ	617
	—1話：幸せの終わり		18話：計画の失敗	613
	—2話：この子は永夢		17話：彼の計画	610

36話：合流	695
35話：弄ばれた命達	691
34話：幽閉された姫	686
33話：正体	682
32話：復讐鬼の目	678
パレード：演技と言う名の道化	674
BUT・END・GAME	671
永夢：誤解と言う名の殺意	668
29話：失われて「いない」Bonds	664
28話：踊王との再会	659
27話：悲しきデータの残り香	656

最終章：セカイシユウエン	732
44話：V.S. スタードリーム	728
43：最終決戦開始	724
42話：未来へのSHOOTING	718
41話：純愛ラブソデイ	715
40話：大我の決意	710
めて	708
39話：TADDLE世界に願いを込めて	704
父の覚悟	701
38話：愛の証	
37話：覇者の決意	

そして永遠に眠り続ける世界へ

737

開幕：i x m a Lasbobs

B

u g s t a r

使者：我とともに来たれ

745

死者：我とともに滅ぶべし

748

鍛錬：その時の竜戦士

753

決別：裏切者が一人

756

一人：罪と禍

763

接戦：消えた八月

768

苦戦：父親ということ

772

消滅：散るは永遠の刹那

775

大罪：信じるということ

788

終わった世界と創世者

792

幽世：我が生涯の仲間 P A R A I I D X

へ

798

覚悟：僕もまた……

813

終幕：そして世界は終わった

818

追憶する約束の数え唄

823

天を掴んだその後

828

G A M E ・ E N D I N G

834

墜落する確約の忘れ詩

839

エピローグ

L i f e I s B e a u t i f u l

S o L e t , s E X C I T E

843

小ネタ集

848

三部作編GM×NEXT×ANOTHER

R：TRIPLE STAGE

真実と創世神の最期

856

道を決める者

864

悪意の始まり

873

悪意に染められた家族

876

悪意で始まる物語

889

ルーフマン（屋根男）

893

予告・作者の戯言

いくつか書こう。 新作予告？

ここに、破れて所々が読めない企画書のページがある。

？5号計画について？

概要編

先日、新たなる戦士の雇用及び兵器の開発発が大首領

様より発表されました。

兵器名、仮面ライダー ルバ トという名で、大首領 様の言うところの

「史上最強の仮面ライダーシステム」であり、最強の表れとして、従来の1号や2号、3号4号のような見た目の引継ぎこそないものの、第5号の名を冠しています。

使用するツールは過去の仮面ライダーシステムの仮面ライダー を素体とした

その型のライダーでは第4世代型となっており、代表的な能力として を

使用可能とし、ほかにはオリジナルには存在しない や先に説明

した に関して は 装置を取り付けてあるため、実質的には

に することが可能となっています。

その能力の中でも特に別格の能力であるのが で、戦った を

使用することができると、事実上最強というのもうなずけます。

他、基本的な基礎能力は

パンチ力 50 t

キック力 140 t

ジャンプ力 800 m

と低めではあるものの、即戦力としては申し分のない戦力であるそうです。

問題は、2つあり、1つはこのライダーベルトの資格者は「大首領近衛兵」が約束

されていることが大首領 様のお考えです。

知つての通り、我が新シヨツカーは大まかに大首領、首領、首領近衛兵、最大幹部や大幹部、幹部、戦闘員という風に順列がありますが、特例部隊として「近衛兵」という役職が存在します。

近衛兵とは、基本的に幹部以上の物が使役できるもので、首領様も使役しているものです。主に自分の身の回りの世話をさせる場合や、共に戦うコンビを組みたい方がよく使う方法で、基本的に上下の関係となっていました。

これまでは大首領様は自分の近衛兵は持たず、これからもそうだろうというのがもつぱらの話でしたが、これが覆つたということです。よつて順列が変動し、大首領、首領、大首領近衛兵、首領近衛兵、最大幹部や大幹部、幹部、戦闘員という風に変化します。

それに伴い、「大首領近衛兵」が入つたため最大幹部より1つ上の地位が増えてしまいました。これによつて少々混乱が発生する方や、不平不満を持つ方が続出するでしょうが、なにとぞご理解とご協力をお願いいたします。

2つ目の問題は、使用する存在の話です。これに関する情報は、実はほとんど集まつていません。どこの出身なのか、何歳なのか、力、経歴などが不明の状態です。使用するベルトの製作や、その使用者の手引きは大首領様がお1人でやつてしまつたらです。名前のみは発表されていて、

名を天 司というものです。

おまけにどうやら脳改造の施術を施さずに仲間に取り入れたそうので、裏切りの可能性も指摘されているというのが現状です。

以上、新たな幹部の概要説明はここまでとなります。

新シヨツカー研究員から各位へ

深考：この作品内にはびこる呪いについて

皆さんにとって、「呪い」とは何でしょう？

足がなく白い着物を着た青白い顔の女が現れて、「呪ってやる」と言うのが一般的ですかね。

上記からテンプレ通りに事が運ぶとすれば、まあ呪い殺されるかお坊さんに払ってもらうの2通りですかね。 作品によってはその幽霊と仲が良くなったり、幽霊が何故か満足したりと言う風にもなります。

では、「呪い」の代名詞ともいえる「リング」や「螺旋」でおなじみの貞子はどうでしょう？

呪いのビデオなるものを視聴して呪われ、やがては貞子に殺される……

分かることは、呪いと言うものは基本的に「誰かの人生を決める（変える）」ということです。 乗り移って操ったり、自殺に追い込んだり、そのまま殺したり……

「誰か」が本来歩むべきだった、歩もうとしていた人生のルールから大きく進路を外させ、狂わせる。 端的に言えばそういうことです。

ではここで貴方をモデルとして「呪い」を見てみましょう。

あなたはごく普通の中学生で、そこそこな成績を取り、そこそこに友人がいます。そしてあなたには女性のAという親友がいます。

Aは内気な性格ですが、親しいあなたには貴方だけに見せる笑顔があります。趣味も同じものが多く、よく下校中に貴方とAは話しながら帰ります。

Aとは小学生の頃から同じ学校、同じクラスで、貴方は子供ながらAに恋愛感情を持つていました。

ですが、中学2年生になったころ、Aと貴方は別々のクラスになりました。

まあクラス分けの確率では当然ですね。HRの長さが担任によって違ったりすることもあってか、同じ時間に下校することはなくなっていきました。

Aと合えない日が続きます。

休み時間を利用して貴方はAのいるはずの教室へと行きますが、いつもいません。担任に聞いても「学校には来ていたが、休み時間にどこにいるかは分からない」と言われます。

そして、1ヶ月後……………

Aは自殺しました。原因は内気な性格が災いしてのクラスメイトによるいじめです。

休み時間に教室へ行ってもいかなかったのは、外でいじめを受けていたから。

貴方は放心しながら、家へ帰ります。

同じ道をAと歩いていたことを帰路で思い出し、涙が溢れます。

貴方は家へ着き、誰もいない自室で寝ずに一晩過ごします。

やがて朝になります。貴方が出した答えは……………

1：Aをいじめた奴らを残らず殺そう。台所へ行つて包丁を持つ ↑この下を見ろ

2：Aの分まで精いっぱい生きよう。学校へ行く準備を開始 ↑あとがきへ行け

貴方が選んだ答えは死んだAの「呪い」による殺人事件です。

死んだAが貴方を動かしたのかもしれない。

この呪いは復讐を遂げるまで続きます。

ある意味では、一番楽な呪いです。

この呪いにかかったのは私の小説ではハイパー無敵ソルティ、Obiパラドクス等。

呪いの形は様々。ある意味ではくと言えば多分星の数ほどあります。

よく読んでみると、そんな呪いが溢れています。

生きるとは、呪われるということ。

死ぬことは、誰かを呪うということ。

死んだ人が本当に望んでいることなど、生きている人には分からないのだから………

基本説明

味方キャラクター一覧

仮面ライダーエグゼイド（宝生 永夢）

本作、共にTV版の主人公、聖都大学付属に勤務している医者

過去の経験から患者のことを第一に考える好青年で、ほとんどの相手に敬語で接する礼儀正しい性格。必要ならどんな努力も厭わない努力家でもあり、ドクターの仕事に誇りを持っている。

研修医から念願の小児科医になり、気を抜いているときに新たなバグスター達が出てきてしまったという不運なキャラ。

天才ゲーマーMの異名を持っていて、ゲームがうまい。

基本的に優しい性格であり、面倒見もいい。子供には結構舐められがちだが、結局仲良くなる。

本編の16年前、彼が8歳の時に交通事故に遭遇して瀕死の重傷を負ってしまいが、搬送された病院で難しい緊急手術を乗り越えた結果、一命を取り留めた。

この出来事によって「誰かを救いたい」との思いを抱き、医師を志すようになった。

仮面ライダーゲーム、（檀 黎斗（創生黎斗））

この小説を含めた三部作構成の小説の『GM（ゲームマスター）は異世界に行ってもGMのようです。』の主人公。何ともはや異世界に行っていた。

本小説の檀黎斗とは別人（もとをただせば同一人物）であり、俗にいう平行世界の檀黎斗である。

異世界で勇者（笑）として世界を救い、現在は子持ち（マジ）であり6人の妻がいる（大マジ）

あることがきっかけで自分の身体の中に入っていたポッピーポパポに命を救われ、「いろんな人たちが笑顔になれる、楽しいゲームを作って」と言う願い兼約束を果たすべく、何といい人になった（本当は元に戻っただけ）

異世界で魔法に適用し、数は少ないものの生身の状態でレベル99に到達した。単純なパワーやスピードならエグゼイドのマキシマムマイティXレベル99と対等に近い。半分化け物である。

使用ガシャットは【HYPER CREATOR GOD X】ガシャットレベル∞
説明は不要な気もするが、要するにゲームフィールドの垣根を超えて現実世界を創生

できるといふ、三部作の公式ムービートリロジーに登場する「ゴッドマキシマムマイティX」ガシヤットレベルビロン（10億）の究極上位互換ガシヤット。

性能は完全なぶつ壊れであり、無敵能力を有してさらに1秒ごとに10%ずつ全身体性能が上昇する（事実上無限に強くなる。その比率、10秒立てば初期状態より約2.5倍の力になる。つまり単純計算で1分立てば15倍、1時間で90倍。1日で2160倍、1年で788400倍になる。おそロシア）など、処遇『勝てるわけがない』キャラクター。

何でも作れ（命以外）何でも治せる（死者以外）万能中の万能。まさしく「ぼくのかんがえたさいきょうの」である。強すぎ。

仮面ライダーブレイブ（鏡 飛彩）

主人公とともに聖都大学付属に勤務している外科医

「俺に切れないものはない」というセリフをよく吐き、天才外科医として活躍中。嘗てはアメリカに滞在しており、その超一流病院に留学していた。本職の心臓外科を始めとした専門医資格も複数所持しており、ベテランでも躊躇するレベルの高難易度の手術もこなせる。

かつての彼には百瀬小姫という恋人がいたが、医学の勉強に打ち込む余り彼女を疎かにしてしまう事が多く、彼女を怒らせることもあった。

そして5年前に小姫はバグスターウイルスに感染してゲーム病を発症、最終的に彼女の肉体はグラフィイトに乗っ取られてしまい消滅、彼女は飛彩の目の前で死亡してしまつた。

この出来事が彼を仮面ライダーの変身者にした切っ掛けであつた。

また、実は以前の彼は甘いものが好きではなく、食べるようになったのは小姫が死亡した後である。これには小姫がよく飛彩に甘いものを差し入れていた事が関係している。

仮面ライダースナイプ（花家 大我）

元放射線科医で、今は「花家ゲーム病クリニック」の院長をしている。

怖そうな眼光と少々乱暴な物言いで怖がれることもあるが、とてもまじめで優しい人。

過去にグラフィイトバグスターとの戦いに敗れてしまい飛彩の彼女、百瀬 小姫を救うことができず、飛彩に恨まれているときもあつたが和解。今は主人公とも良好な関係

を築いており、頼れる人。

「花家ゲーム病クリニック」のバイトの西馬 ニコとはよくケンカをし、よく仲直りするという、素敵な関係。

実は最近ゲーム病が沈静化し始めたために家計は火の車であり、いよいよヤバイ。

今日も今日とて株に手を出して食いつないでいる。昨日食べたものはミニのカップヌードルが二つ。

仮面ライダーレーザー（九条 貴利矢）

仮面ライダーレーザーの変身者であり、監察医務院に所属する監察医。アロハシャツの上には赤いレーザージャケットを羽織ってサングラスをかけていると言うチャラ男じみている外見が特徴。

5年前、貴利矢の友人・藍原が謎の病気を発症した。貴利矢は衛生省から密かに入手した資料でそれが死に至る病「ゲーム病」であると知り、藍原へ告知した。だが、藍原は未知の病気と死への恐怖からパニックを起こして逃げ出してしまい、ショックで呆然自失のまま、交通事故に遭い死亡してしまった。その事故の後、彼はバグスターウィルス の根絶を亡き友に約束するのだった……

軽薄な言動も多いし、茶化すことも多いし、嘘も多いが、主人公が一番信頼を寄せているといっても過言ではない人物。TV 版本編では一度死んでしまっており、その後バグスターとして復活した。

口癖は「あれえ？ 乗せられちゃったあ？」や「乗せられてやるよ」などがある。

仮面ライダーパラドクス

イダー達の間関係の変化や状況が変わる様子をパズルになぞらえて表現することが多く、感情が高まり、興奮すると「心が躍るな!!」というフレーズをよく口にしていく。

また、自分を苛立たせる相手に対しては「俺の心を滾らせるな」と言い放つ。

実は彼こそ「天才ゲーマーM」であり、永夢の「ゲームの遊び相手が欲しい」という願望から生まれた永夢のバグスターだったのだ。その後はいろいろあったが永夢とは和解。共に戦う中で、永夢の相棒のような立ち位置になっていく。

？ 仮面ライダーゲーム（檀 黎斗神）？

自称神・説明不要。

グラフィアイトバグスター

詳しい説明は敵キャラクター一覧を参照

？仮面ライダーハイパー無敵ゲムデウスクロノスX（香坂 若菜）？

聖都大学附属病院に入院していた末期の癌患者だった。

4才の頃から入院しており、現在では9才になる。

外の世界のことを知らなかったり、そもそも立つて歩くことが困難なため友人はいない。かつて病院から抜け出した際に主人公である宝生永夢に発見され、優しく保護される。

優しくフレンドリーな永夢に幼いながらも初恋し、生きる活力が生まれた

……………のだが、後に彼が「仮面ライダーエグゼイド」だったことを知る。ピンの彼を助けようと彼女は仮面ライダークロニクルガシャットを使用して別作のラスボス「ハイパー無敵ゲムデウスクロノスX」に変身。見事に永夢を救った。

そして、変身の副作用をうけた結果、彼女の幼く、病に侵された体で受け止められるはずもなく……………僅か9才と言う若さでこの世を去った。

が、たまげたことにエピソードで復活する。お幸せに。

？ゲームⅡ・偽ゲーム・錆ゲーム（宝生現夢）？

主人公、宝生永夢の父親。

永夢がかつて交通事故にあつた日と同じ日に事故にあい、記憶を失う。

蛮野天十郎に拾われ、ラスボスバグスターや改良型シグマサーキュラーの製造をした。

記憶が戻った後は永夢の手助けのために活動し、蛮野天十郎を一度撃破。しかし、強力なガシヤットを使ったがゆえに副作用の効果で死亡。

？仮面ライダークロノス（檀 正宗）？

言わずもがな檀 黎斗の父親。TV版当時は「絶版おじさん」の名で親しまれた。

本編では現在のところ過去の回想編のみの登場。

「原作」と違い、こちらの小説では元々は妻を、息子である黎斗をめいつぱい愛す優しい父親だったが、ある出来事により豹変。幼少期の黎斗を邪険に扱う非情な男に変貌してしまい、黎斗がゲームを作るために何を犠牲にしてもかまわないという歪んだ心に変わるきっかけを作ってしまった。

重ねての説明になるが、親ばかと言えるほど黎斗を愛していて、本小説での回想シーンでは妻を交えて家族三人で散歩をするなど、家庭を非常に大切にしている人格者であった。

黎斗を愛する心を無くしてしまった正宗は、心の隙間を埋めるように自分の会社のみで心血を捧げるようになってしまう……処遇悲劇のキャラクターである。

敵キャラクター一覧

? Re : ゲムデウス?

復活したラスボス。自分の意志で持つて暴れる。

永夢の体を二つに切り裂いた。

スベック

パンチ力 ? t (ゲムデウスは基本武器を使う)

キック力 ? t (基本攻撃は武器)

ジャンプ力 ひと飛び ∞ m (翼があるため測定不能)

速度 100 mを0秒?

? 蛮野天十郎? レベル一兆

バグスター連合を永夢達と戦わせ、データを取っていた狂人。元は「仮面ライダー

ライブ」に登場。ハイパー無敵ソルティのデータを流用し、ムテキゲーマーにもダメージを与えることができるようになっていた。

スペック

パンチ力 9400t

キック力 18500t

ジャンプ力 ひと飛びm

速度 100mを0.0001秒

?ハイパー無敵ソルティ?レベル不詳

ゲーム：ハイパー無敵ガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合のリーダーを務める。

元は人間との共生を夢見ていたが、人間達に仲間が殺されたことによりその夢をあきらめ、バグスターを滅ぼそうと襲い来る人間達を逆に倒そうと仮面ライダーたちの撃破を画策し、バグスターのなかで特に強い力を持った精鋭で「バグスター連合」を結成した。

特性が無敵であり、ハイパー無敵以外では攻略不可能。

主な攻撃は、格闘によるキックやパンチが主体。

スペック

パンチ力 250 t

キック力 250 t

ジャンプ力 ひと飛び250 m

速度 100 mを0.05秒

?魔王ベイオウルフ(プロトゲムデウスB)?レベル(180~800)

ゲーム:タドルクエストガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合の参謀から亡きキッドに代わり副リーダーを務める。バグスター全体のため、バグスターの未来のために戦うことを主な目標としていて、高圧的で唯我独尊的な言動からは想像がつかないほど誠実な性格をしている。

実はもともと非常に繊細で傷つきやすく、引込み思案な性格であり、そのせいでかつて仲間を救えなかった過去の自分自身を脱却しようとした結果が今の偉そうな言動を作った。

その後最終決戦時でプロトゲムデウスBとなるが、あまりに無茶な負荷が体にかかったために腐敗、自壊を始めてしまい、強大な力を得た引き換えに自然消滅が確定してしまい、死なばもろともという言葉通りに力の限りに暴れた。

培養して変身した時の身長は、大体5mくらいで、仮面ライダーアークよりもデカイ。プロトゲムデウスβとなった時は、第一形態のままでは体長10mとより大きくなっている。(魔王の変身は負けフラグとは言っただけではない)

本編には登場していないが、プロトゲムデウスβの第二形態も一応設定としては存在しており、サイズは60mにも及ぶ。まさしく怪獣。

スペック

パンチ力 300 t

キック力 500 t

ジャンプ力 ひと飛び600 m

速力 100 mを0.1秒

主な攻撃は、魔法や剣術による技巧系の攻撃が主体。

プロトゲムデウス形態のスペック

パンチ力 980 t

キック力 2550 t

ジャンプ力 ひと飛び2 km

速力 100 mを0.0001秒

主な攻撃は、パラドクス以外のすべてのバグスターの権能。

? O b i パラドクス? (レベル100※ただし純粋な戦力値なら1000)

ゲーム：ガシャットギアデュアルから生まれたバグスター。バグスター連合のメンバーではない。実質的にはバグスター連合の一員だが階級を持つておらず、本目的はパラドと融合し、元の「究極のゲーマー」に戻ることに。そのため連合員としての地位は持っていない。

基本的にあまり戦力差のある戦いを良しとせず、極力相手に合わせて戦うタイプ。

それでも天才ゲーマーとしての才能はパラドと同等だが、パラドが漫然とガシャットのモデルになったゲームをヒントに戦うだけに対して、此方のO b i パラドクス(以下O b i)はリアルに自分の体を動かして戦う点を考慮し、物理の法則など「三次元によって物理に起こりうる全ての事柄」を想定しているため、元のパラドよりもO b iのほうがるかに強力かつ合理的な存在と言えるだろう。

※上記に「ガシャットギアデュアルから生まれたバグスター」と書いてあるが実際にギアデュアル内から生まれたわけではなく、あくまでガシャットギアデュアルのゲームから誕生したパラドから分離した存在であるため、誤解のないように注意。

スペック

存在としては完全にパラドの上位互換。

どんな戦いでもほぼ完璧にこなす。

タイプボクシングのスペック

パンチ力 150 t

キック力 50 t

ジャンプ力 ひと飛び48 m

速度 100 mを2秒

タイプカポエラのスペック

パンチ力 50 t

キック力 200 t

ジャンプ力 ひと飛び200 m

速度 100 mを0.08秒

?リリム・シフォン・エリーゼ? (レベル700)

ゲーム：ときめきクライシスガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合の

特別大隊長を務める。

幹部系統では唯一の穏健派であり、そのことを隠している。

スペック

パンチ力 30 kg

キック力 50 kg

ジャンプ力 ひと飛び1 m 84 cm

速度 100 mを12.48秒

彼女は過去に「前々から大喧嘩するキッドとハイパー無敵ソルティを止めるのは私の役目だった」と言っていたが、こんなスペックで止められるとは思えないのだが…?

現在大我の元で仕事の手伝いをしている。

? グラフアイト? (レベル100)

復活したあの竜戦士。本編に登場。

下記のドラゴナイトハンターZのガシヤットから生まれたバグスターとは別物。

スペック

パンチ力 90 t

キック力 90 t

ジャンプ力　ひと飛び90m

速力　100mを0.9秒

かつての仲間と戦うことを良しとしないパラドが強引に決闘を申し込み、その結果グラファイトは敗北。以降は仲間キャラになる。

本人は気づいていないが、海帝との戦いで少なからず技量が上がっており、見た目は変わらないまでも力は向上したようだ。

？海帝（カイテイ）？（レベル300）

ゲーム：ギリギリチャンバラガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合の大隊長を務める。

一撃必殺が売りで、自分と敵の開いたゲームフィールドでその効果を発揮する。

剣術は一流であり、誇りを持っている。自分が全力を持って戦える敵を探しており、21話でブレイブと衝突。圧倒的な力で追い詰めるも、途中で乱入したグラファイトに決着を阻まれ、グラファイトと激突する。

スペック

パンチ力　？

キック力？

ジャンプ力 ひと飛び95m

速力 100mを0.1秒

主な攻撃は、持っている日本刀「蓬莱海 真打」による斬撃攻撃。

？キッド？（レベル300）

ゲーム：ドレミファビートガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合の副リーダーを務める。

ポッピーピポパポが大好きで、二人の時だけ口調が「ボク」になる。怪人体はなく、人間体のみ、ただし超絶強い。単身でハイパー無敵、タドルレガシー、爆走バイク、デンジャラスゾンビ、パーフェクトノックアウトを倒したほどの実力者。

基本的な能力値は低めだが、それを本人の技巧で完全に補っているヤバイやつ。

主な攻撃は、自分のゲームエリア内に大量の動く音符マークを出し、それを敵と取り合って勝敗を決める。

第11話の時点で死亡。ハイパー無敵ソルティについて何か知っていたようだが：

スペック

パンチ力 15t

キック力 15 t

ジャンプ力 ひと飛び150 m

速力 100 mを0.015秒

? 迅速屋ガルーダ? (レベル150)

ゲーム：爆走バイクガシヤットから生まれたバグスター。バグスター連合の参謀を務める。

どうやらモータスは彼の弟分だったようで、モータスのバイクを破壊、およびモータス本人を殺害した宝生 永夢に強い怒りを感じている模様。

スペック

パンチ力 95 t

キック力 95 t

ジャンプ力 ひと飛び95 m

速力 100 mを0.95秒

主な攻撃は、格闘系。本来はレースで勝負し、その結果によって勝敗を決する。

? スネイク? (レベル99)

ゲーム: バンバンシユータイングガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合の参謀を務める。

本人の実力は高かったものの、相手が悪かったとしか言いようがない。

第12話で死亡した。

名前は当然あのゲームの……

? グレンラガンソルティ? (レベル100)

ゲーム: マイティアクションXガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合の大隊長を務める。

実はゲーム「マイティアクションX」のラスボスでもあり「マキシマムマイティX」のラスボスでもあった。つまり二つのゲーム、両方とも同じキャラだったということである。

第20話で死亡。最後はパラドと永夢の新しいガシャット「マキシマムマイティブラザーズダブルマックスガシャット」の力の前に敗北。その後副リーダーのベイオウルフに処刑されて消滅した。

主な攻撃は乗っているロボットを利用した格闘術。

? Neo-ガットン? (レベル110)

ゲーム:ゲキトツロボットガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合の大隊長を務める。

第12話で死亡。

? グリフォス? (レベル80)

ゲーム:ジェットコンバットガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合の大隊長を務める。

第12話で死亡。

名前の由来はPSPのエースコンバットの主人公から。

?カヴェンディッシュ? (レベル80)

ゲーム：シャカリキスポーツガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合の大隊長を務める。

第12話で死亡。

?ラオロン?

ゲーム：ドラゴナイトハンターZガシャットから生まれたバグスター。蛮野にとらえられ、改造を施されていた。

?クリス? (レベル100)

ゲーム：デンジャラスゾンビガシャットから生まれたバグスター。バグスター連合の特別隊長を務める。

第12話で死亡。

?スガートとペッポー? (レベル50・50)

ゲーム：マイティブラザーズXXガシャットから生まれたバグスター。双子。バグスター連合の特別隊長を務める。

パラドと永夢と同じように、協力プレイのコンビネーション攻撃を得意とする。

第20話で死亡。最後はパラドと永夢の新しいガシャット「マキシمامマイティブラザーズダブルマックスガシャット」の力の前に敗北。その後副リーダーのベイオウルフに処刑されて消滅した。

主な攻撃は、二人の連携術を利用した入れ代わり立ち代わりの格闘術。

?グレンラガンソルティ? (レベル100)

ゲーム：マキシمامマイティXガシャットから生まれたバグスター。

上記のブラザーズよりも強く、巨大なロボットに乗っている。マジ〇ガーZではない。

第20話で死亡。最後はパラドと永夢の新しいガシャット「マキシمامマイティブラ

ザードダブルマックスガシヤット」の力の前に敗北。その後副リーダーのバイオウルフに処刑されて消滅した。

主な攻撃は乗っているロボットを利用した格闘術。

?スレイヤ?

ゲーム：タドルレガシーガシヤットから生まれたバグスター。

記憶を消されており、無敵ソルティ等の仲間の事を覚えていない。

何故か百瀬小姫に恋しており、鏡飛彩と彼女をかけて戦う。

レベルは200。

?デイーノ? (レベル100)

ゲーム：タドルファンタジーから生まれたバグスター。途中参加。バグスター連合の参謀を務めるが、魔王とはそりが合わないよう。

簡単に言えば勇者。それ以上でもそれ以下でもない。魔法も剣も、かもなく不可もない強さ。完全にバイオウルフの下位互換であるが、それを言うとはマジ切れする。

?ヤマト? (レベル200)

ゲーム：バンバンシミュレーションズから生まれたバグスター。途中参加。バグスター連合の参謀を務める。

第12話で死亡。

その他のバグスター

作中に登場するザコキャラ。ソシヤゲバグスターの出番は実際ほとんどなし。

第1部：GAME IS NEXT STAGE 第1話：GAMEは次のSTAGEへ

最近は、なんだかゲーム病の患者さんが少なくなってきた。大我さんは「おかげでうちは火の車だ。CRに来る患者をよこせ」といつていたが、とてもうれしそうにしていた。

「最近救急通報が来ないな、永夢」

「ねー、いいこといいこと」

僕の名前は 宝生 永夢（ほうじょう えむ）最近念願の小児科医になったばかりだ。最初は忙しくて目が回りそうだったけど、意外とすぐに慣れた。休憩時間に病院の地下のCRにきて一休みしていると、パラドとポッピーが話しかけてきた。

「うん。ゲーム病の根絶まで、あともう一息だ。これからも頼むよ、パラド」

「任せとけ。それで永夢、今日は仕事早く終わるか?」

急になんだろう?!

「いや、今日は少し残るかな」

「なーんだ、つまんないなあ」

ふてくされたようにパラドが口をとがらせる。

「永夢の家と一緒にゲームやろうと思ったのに…」

「ごめん。また明日ね」

「ならパラド！ 私のドレミファビートで遊ぼうよ！」

「永夢とやりたいんだよ…」

いつも通りの他愛ないおしゃべりを終えて、上へと戻ると

バグスターウイルスの感染者がごった返している。しかも、前の時と同じように、人の体に乗っ取るタイプみたいだ。

「ッ!? なんで?! 救急通報も来てないのに…くっ! 変身!」

「マイティアクシオンX! マイティジャンプ! マイティキック! マイティマイティアクシオン! X!」

持っていたドライバーとガシヤットで変身する。だが、患者の体がバグスターに乗っ

取られた以上、へたに攻撃はできない。

「く、どうすれば…」

行動を起こせないでいると、突如謎の声が聞こえてきた。

「エグゼイド、私たちバグスターは新たな境地へとたどり着きました。今度こそこの世界の支配者の座をかけて戦おうではありませんか」

「!? お前がこの感染の首謀者か!? どこにいるんだ!」

「申し訳ありませんがまだ姿は見せられません。体が安定しなくてね…ですが、「貴方の身近な存在」から生まれたとだけ言っておきましょう」

「どこからウイルスを持ち込んだんだ!」

「それは言えませんね…とりたいところですが、裏切り者のパラドクスとポッピーピポパもそこにいることですし、いずれ分かることです。いいでしょう、教えます
………

私たちは人間たちが使用するスマホに存在し、この機会を待っていた者たち。壇 正宗は消え、ジョニーマキシマも消滅した今こそソーシャルゲームの力を入れたわれ

ら「ソシヤゲバグスター」にとって絶好の機会！」

：ソシヤゲバグスター…どうやらバグスターとの戦いはまだ終わっていないかったみたいだ。

第2話：崩壊するCR

「ソシヤゲバグスター…目的はなんだ!?!」

「分かり切ったことですね…当然、我々バグスターたちの世界完全統治ですよ」
くそっこいつと話している暇なんてない。感染した人たちを助けなくちゃ…

「これで!」

【ドクターマイティダブルエックス!ダブルガシャット!キメワザ!ドクターマイティクリティカルフィニッシュ!】

とりあえず近くの患者から治そうとする。だが、当たった光弾は何も起こさずに散つた。

「!?! どうして!?!」

「永夢!」

声のしたほうを見ると、飛彩さんが変身状態でこつちに来た。

「飛彩さん! 急にバグスターが!」

「とりあえず、CRに行くぞ!」

「はい!」

数分後

「大変なことになったな…永夢、外の様子はどうだ？」

「沢山のバグスターがいて…とんでもないことになってます」

「新しい敵、ソシヤゲバグスターか…」

とりあえず、CRのメンバーは全員集まった。飛彩さん、ポツピー、パラド、貴利矢さん、黎斗さん。

「ソシヤゲバグスター…永夢、何か通常のバグスターと違う点はあったかい？」

「ドクターマイティダブルエックスガシャット」で抗体を打ち込みましたが、ウイルスを消せませんでした」

「ふーん、なるほどね。つまりウイルスが…」

「変異したということか」

「そゆことだな」

貴利矢さんや飛彩さんも、僕と同じ考えだったみたいだ。

「あれはあくまで自分と社長さんでゲームデウスのために作ったもんだからな…別個で変異が起きたやつには効果がなかったんだろ」

「そういえば飛彩、院長は？」

「親父は…感染した。おそらく、院長室をうろつているだろう」

「そんな…」

場が重くなったところで、黎斗さんが話し始めた。

「永夢、おそらくこの感染は、世界規模で起きている」

「どうしてそう思うんですか？」

「新しいバグスター、確かソシヤゲバグスターだったか？ ソーシャルゲームである以上、おそらく感染の原因は、スマートフォンだろう。それならば、奴らは世界の情報機関すべてに散った可能性が高い。感染者の数は、どう楽観的に考えても20億人は下らないだろう」

「なるほど」

「確かにな。俺が持っているスマホも、使えなくなっている」

「となるとインターネット系列はすべてダウンか…厄介なことになっちまったな」

貴利矢さんがふうと息をつく。平和になってきたと思ってたのに、こんなことになるなんて…

「とにかく、永夢、ここは危険だ。とりあえず今はどこかに隠れよう。対策は、そのあとだ」

確かに、パラドの言うとうりだ。でもそれは…

「永夢、「患者を捨てていく」と考えてるなら、それは違うぜ。今はいったん退いて、そこから動くべきだ」

「貴利矢さん……」

「ならば、私が衛星省から逃げていた時に使っていた隠れ家がある。そこに行けばいい」
こうして僕たちは、新たに表れた脅威に手も足も出せず、CRをあとにした……

多くの患者たちを置いて……僕はこの後、「ハイパー無敵」の力すら無効化するほどの力を持った敵たちと戦っていくのだが、それはまだ、先の話であり、今の僕は、この戦いの結果、多くの命を失うとは、想像すらしていなかった。

第3話：現れたENEMY

この隠れ家に来てすこししたタイミングで、バグスターたちに異変があった。

「これは…一ヶ所にバグスターが集まってる!？」

バグスターは人々の体から離れて集まり、多くのビルの中へと吸い込まれていった。

「飛彩さん、どうします?」

「どういう敵かわからない以上、用心しなければ…小児科医、俺と来い」

「永夢、自分もいくぜ。社長さんとパラドはここでポツピーを頼むわ」

「わかった」

「分かりました。まずは近くの幻夢コーポレーションから行きましょう!」

幻夢コーポレーション1階

「入り口には特に何もありませんね…」

街はいま、ほとんど元に戻っていた。人々の体に入っていた多くのバグスターはなぜか体から分離し、多くのビル内に潜伏している状態だった。

「エレベーターは…止まってんな。しょうがねえ。永夢、階段で行こう」
「はい……………いい!？」

2階に入るや否や、おびただしい量のバグスターが襲ってきた。全員なぜか服がダーツの的のようになってる。

「やばっ! HYP ER大変身!」

「爆速 変身!」

「術式レベルHUNDRED 変身!」

【HYP ER無敵!】

【爆走バイク! シャカリキスポーツ!】

【タドルレガシー!】

「うおおおおお!」

素早く戦闘員バグスターを倒すが、すぐさま蘇ってしまう。

「不死属性!? …いや、何か特殊な条件が?」

蘇ったバグスターが再び襲い掛かるが、横から投げ入れられたホイールに弾き飛ばされた。

「永夢! …ここは任せろ!」

「貴利矢さん…お願いします!」

僕と飛彩さんは貴利矢さんに任せて、3階へ急いだ。だが、やはりここにも大量のバグスターがいる。今度はなぜか全員巨大な果物で殴り掛かってきた。おまけにさつきと同じく復活するタイプだ。

「ちっ………ここもか。小児科医、先に行け」

「すみません!」

飛彩さんを置いて、4階へと上がる。だが、またいる。今度は人数は1人だが、正確に銃を撃ってくる。球を弾き飛ばして蹴り飛ばすが、すぐまた蘇る。

「くそっ! どうなっているんだ!」

このままじゃちが明かない。無敵の力で負けはないが、勝つこともできない。

…その時、後ろから声が聞こえた。

「このフロアのバグスターはソシヤゲの「エスケープ・イナバウアー」のバグスターです。弾丸をはたき落とすのではなく、ギリギリまで引き付けて回避する、反射神経を鍛えるゲームですよ」

いつの間にか階段付近に人が立っていて、教えてくれた。変な服だ。緑の長ズボンに白や青やら紫やらのシャツ、更に暗い紫いろのフード付きタオルを付けていて顔が見えない。

「あっそうか! スナイパー役と服が一緒だ!」

言われてみれば確かに長い廊下にスナイパーがいて、それを避ける人という関係が成り立っている。

「よっ！ ほっ！ おおっとお！」

立て続けに避ける。5発…10発…そして20発目。

【GREAT! GAME CLEAR!】

「やった！ ありがとう」

「いえ………お供しましょう。こっちです」

「え？」

その人は、慣れたふうで脇道に入り、「非常用はしご」のほうへと行った。

「これでほかのバグスターに会わずに最上階まで行けます。ついてきてください」

「ありがとうございます。職員の人ですか？」

「そんなところです」

僕はその人の後について行って、上を目指した。

一方貴利矢さん視点

「くそ！ どうすりゃあいいんだ！」

数が減らねえ…このままじゃやられる。

…その時、後ろから声が聞こえた。

「おおい!! にいやアん!! ここのフロアのバグスターは「アタック・ポイント」つーゲームだア!! そのバグスターたちの服の模様、的に見えねえかい!!? そこを攻撃しなア!!!」

気が付けば、真つ黄色なライダーズジャケットを着て、これまた黄金色のサンングラスというなかなかお目にかかれないものを付けたおっさんが立っていた。こいつらの弱点…なるほどね。ここか…

「ノリノリで行くぜ…そりゃあ!」

【シャカリキ・GREATER STRIKE!】

【GREAT! GAME CLEAR!】

「よっしゃあ! 誰だか知らねーけど、サンキュウ…あり?」

後ろを振り向くと、おっさんはもういなくなっていた。

「なんだったんだ…?」

一方飛彩さん視点

「ツク……きりがない………！」

倒しても、倒しても復活するバグスター……どうすれば……

…その時、後ろから声が聞こえた。

「おい、勇者よ」

声のしたほうを振り向くと、地味なジャージを着た若い大男が立っていた。2m……いや2m40はある。

「この階層のモブは「FRUIT・SAMURAI」のモブだ。手に持っている果物を切ればいい」

言われたと売りに切りかかってみると、驚くほど簡単に倒せた。そのまま全滅させる。

【GREAT! GAME CLEAR!】

「ふう……Thank you だ………ん？」

振り向くと、大男は消えていた。

「………どこに行った？」

僕視点

「ついた…社長室だ…」

社長室の中には5人ほどの人がいた。一人はとても大きくてジャージ姿、もう一人は黄色のライダーズジャケットを着ていた。暗くて奥のほうはよく見えないが、全員無事のようにだ。

「避難していた人達…？ 皆さん大丈夫ですか!？」

近づこうとしたとき、後ろからつかまれた。

「え…?」

気が付くといつの間にか飛彩さんと貴利矢さんが肩をつかんでいた。

「どーも変だね。おいそこのおっさん、あんたさっき俺と会ったよな？ バグスターがごった返してるから階段は使用不可。避難用のはしごはすぐに見つけたけど、あんたが使った後はなかった…? どういうことだい？」

「俺も監察医と同じだ。大男、お前は2階にいただろう？ 上にいた小児科医に会わずに、どうやってここに来た？」

その時、ふっと僕を案内してくれた人が前に出た。

「…………お答えしましょう。それは、ここに居る方は全員バグスターだからですよ。無

論、私を含めてね…」

「……………！ その声、僕がCRで聞いた……………！」

「お久しぶりです、宝生 永夢。私たちは新たに生まれた「ソシヤゲバグスター」と徒党を組む存在…あなた方のガシヤットから生まれた「ラスボス系バグスター」です」

ラスボス系……………バグスター……………

大男が前に出て、あるものを取り出す……………ガシヤコンバグヴァイザーII…！

「培養」

「Infection! Shit game! Bad game! Dead game!
a me! Fuck game! I, m a Bugstar!」

「我は「タドルクエスト」ラスボス 魔王ベイオウルフだ」

「Infection! I, m a Bugstar!」

「おいイらは「爆走バイク」ラスボス 迅速屋 ガルーダってんだア!!!」

「そしてこの私も、ゲーム「ハイパー無敵」ラスボスにして全バグスター連合のリーダー、ハイパー無敵ソルティ」

つまり、ここにいる人はみなバグスターってことか…

「この他にもあと10人ほどは幹部がいますが、とりあえずの紹介はこの3人にしておきましよう」

「目的は……やっぱり……」

「はい、我がバグスター連合と全人類の戦争です」

「これは……強力な敵だ。」

第4話：VS・バグスターズ

「そつちがその気なら………勝負だ！」

まずリーダーから倒す……勢いよくつかみかかると、器用に避ける。全然捕まらない。
い。

「では、開戦と行きましょうか。宝生 永夢……培養」

【Infection! Let game! Good game! God game!
me! Great game! I, ma Bugstar!】

「変身の音が……違う!?!」

「ここに居る仲間はあなたを倒しうる力を持っていますが、私はその中でも別格ですよ」
言いながら殴られた。鈍い痛みが顎に走った。………痛い？

「攻撃が……効いた？」

「言ったでしょう？ 私はハイパー無敵ソルティ。あなたと同じく無敵の力を持つものです。当然、無敵同士ならお互いダメージも入りますよ」

相手を油断なく見つめ、そして攻撃の手は緩めない………こいつ………強い！

「ゲームなら……負けない！」

一方飛彩さん視点

「さあ、ゆくぞ勇者よ。まずは小手調べだ……」 「クダケチール」

俺の頭上で激しい閃光が瞬いた。次の瞬間、衝撃で一瞬上下の感覚がなくなる。

「ぐ……………おおおおお！」

間髪入れずに切りかかるが、いつの間にか背後に回り込まれた。瞬間移動魔法の「イドオウ」か……ろくに防御もできず、蹴り飛ばされた。

「まだだ！ いけえ!!」

空間に光の魔法剣を大量に生み出し、一気にバイオウルフへと飛ばした。

「ぬるい……………」 「モドール」

反射魔法によって、攻撃の全てがこちらに戻ってきた。それを「バリア」で相殺した。いいぞ勇者よ…………… 「ヤミトバーシ」

今度は向こうが闇の魔法剣を展開し放ってきた。今度はこちらから行く……!

「お前が受けろ！」

今度は俺が「モドール」を使って全てはじき返す。だが向こうも反射し返したため、滅

茶苦茶に四方八方へ剣が飛び跳ねた。縫い目でも縫うように近づき、剣をふるうが、奴の剣に止められた。

「さすがだな……我に剣を使わせるとは……だが、不用意に近づくのは関心せんな。相手の戦力がわからん以上、お前は相手の出方を見るべきだった。ぬうん!!」

「しまつ……ぐあー!」

あつさりと奴の剣に弾き飛ばされ、俺の変身は解けてしまった。

一方貴利矢さん視点

「自分の相手はあんたつてことかい?」

「まあそおいうことだわなあ!!! いっちようよろしく頼むぜ兄ちゃあん!!」

いうが早い、一気に距離を詰めてきた。とつさに身構えるが、急に視界からあいつが消えた。

「上だぜえい!!!」

声の聞こえるとおおり、上を見る。ホントにいたよ。普通は戦略的に嘘ついたりするで

しよ……

「ずいぶん親切な奴だな!!」

とつきの判断で体を宙に投げ出してよける。

「……………爆走バイクのラスボスと聞いてさぞかしバイク乗りの名手なのかと思いきや、ずいぶんとまあ優秀な格闘家さんだことで」

「ン? ……………ああ、まあレースの後はたいい「不服だ」とか言ってくる奴らとの殴り合いだかなあ!!」

……………けど、バイクに乗った時の俺は、3倍は強いぜ……………まあ、ここじゃあ狭くて使えねえけどなあ!!」

「……………まじか」と考えているうちにまた奴が消えた。直後に首に鈍い痛みが走った。「つてえわけで、しばらく寝てな。兄ちゃん。じきに返してやつから……………おめさんとはいつか、バイクでツーリングしてみてもいいかもしんねえなあ。気が合いそうなあ。」

……………俺の狙いは、もとからあいつ一人だ……………

あいつは、あいつだけやあぜつてえに殺してやる!!!

俺のかわいい弟分、モータスの走り屋の魂、バイクをぶつ壊した宝生 永夢はぜつてえに殺す!!!!」

僕視点

……………何だか後ろからかつてないほどの殺気を感じる。まずい、飛彩さんも貴利矢さんもやられてしまったみたいだ。このままじゃ……………

「……………今日はもう終わりにしましょうか」

「へ？」

突然出た敵からの休戦の提案に、僕はただ目を丸くするだけだった……………

第5話：休戦と新たなるSHADOW

「終わり……………つて？」

「簡単な話ですよ。今回はあくまでお互いの戦力把握です。私はこの連合のリーダーなので、いきなりあなたが私と戦うというのは本来ないことなのですよ。「起動したと同時にラスボスと戦えるゲーム」などないでしょう？ 次にあなたが私と戦うのは、あなたの方がバグスター連合の全員を倒した時です」

急すぎて話が半分しか理解できない。つまり、まだ戦う時じゃないってこと？

「さ、組手はもう終わりだ。ガルーダ、ベイオウルフ、2人を開放してくれ」

「へいへい」

「……………フン」

飛彩さんと貴利矢さんが引きずられるようにしてここに連れてこられた。2人とも特に大きな怪我は無いみたいだ。

「飛彩さん、大丈夫ですか!？」

「問題ない……………監察医は、気絶しているだけだ。じきに目が覚める」

貴利矢さんを担いで運ぶ、結構重い。ふいに後ろから声がした。

「これは我々と全人類の戦争ですよ。宝生 永夢……生き残ったほうが、次の世界の支配者だ」

振り向いた時には、もうそこには誰もいなかった。ただ、あの声の残響だけがわずかに残っていた……

とあるビルの地下室

「さて、敵情視察も終わったことですし、今日の課題は終わりですね……

よし、十分に培養は完了したようですし、目覚めの時と行きましようか……………」

暗い部屋の中、ハイパー無敵ソルティが自分のバグヴァイザーIIのボタンを押した。同時に先端から光があふれ、人の形を作っていく。

「ここは……………どこだ？ 俺は確かに、あのライドプレイヤーの弾を受けて死んだはず……………」

「ここはバグスター達の拠点ですよ。新たなる幹部として、我々は貴方を歓迎します。

ゲーム「ドラゴナイトハンター乙」中ボス、竜戦士グラフィイトさん……………?」

隠れ家

「つてわけで、逃げてきたのか……………永夢、大丈夫だったのか?」

不安そうな顔でパラドが僕の顔を覗き込んでくる。

「うん、僕は平気さ。パラドこそ、こっちには何もなかったかい？」

「ああ、特に何もなかった。こっちは平和なもんだったよ」

2人で話していると、貴利矢さんがこっちへ来た。首の部分に氷袋を当てている。まだ痛むみたいだ。

「大丈夫ですか？ 貴利矢さん、もう少し横になっていたほうが…」

「うんにゃ、平気だ。これからどうするかって話だけどさ、少し調べたら、もう世界中でゲーム病に感染している人はいないみたいなんだわ」

え？ もうみんな完治していたの？ なんて？

「なんで？ って顔してんな。どうやらあいつら、人の体で自分を培養した後、残留せずに人の体から出て行ったみたいなんだよ。今じゃもうネットも、交通も早いところじゃ元どうりって話だ」

「じゃあ、あいつらは一般の人は襲わずに、僕たち仮面ライダーだけ狙ってるってことですか？」

「そうなるな。で……………」

「たのもお
!!!!!!」

「な、なんだあ!？」

今度のは初めて聞く声だ。こんな隠れ家に来れるってことは、バグスターだろう。一体今度は何だろう？　ってか、どうでもいいけどずいぶんおちやらけた声だったな。どんな奴だろう。

第6話：MUTEKI初めての敗北

隠れ家のシャッターをぶち破って人が飛び込んできた。

「見つけたぞ！ エグゼイド！」

入ってきたのはやんちゃな学生という感じの男だ。なんだが高校のプロゲーマーだった時期の僕と制服の着崩し方が似ている気がする。

「いただきに来たぜ！」

「何をだ！」

「とつとと出ていけ！」

パラドと黎斗さんが速攻で変身して襲い掛かる…が

「しやらくせえ…どけえ！」

なんとそいつは変身もせず、2人を投げ飛ばし、あっさりに変身解除させた。

「なっ……………こいつ……………」

パラドが信じられない、という顔であいつを見る。この圧倒的な力、まるでゲームデウスXだ。

「なんなんだ……………お前！」

「俺か？俺はゲーム「ドレミファビート」のバグスター、「ステップ・キッズ・キング」のキッドだ！」

「ステップ・キッズ・キングのキッド」：聞いたことある！ドレミファビートの隠しキャラで、出現条件が難しすぎる、EXキャラクター……！

確かその条件は、

1：まずゲーム機に1000円を入れ、ゲーム開始。

2：どれでも好きな曲を選び、パーフェクトクリアする。

3：パーフェクトの場合、無料でもう一曲遊べる。

4：3を繰り返し、「ドレミファビート」に存在する全100種類以上の曲をパーフェクトでクリアする。※一度でもミスれば、1からやり直しになる。

5：通常ならここで「GAME CLEAR」と画面に出るが、1%以下の確率でEXキャラのキッド（主人公が通っている場所で「踊る少年の王様」と呼ばれている1番踊りがうまいキャラ）が登場し、「おいお前、ハニーをかけて、俺とダンス勝負だ！」と勝負を誘ってくる。

6：勝負に乗り、無事にパーフェクトクリアすれば特別なカードが配られ、幻夢コーポレーションに持って行けば特別なグッズと交換される。

だったはず。おまけにそのEXステージは滅茶苦茶な難しさになっており、なんとドレミファソラドに入っているすべての曲がごちゃ混ぜになっていて、しかも曲の組み合わせはランダムに10秒ごとに変動するという、もともとがほぼクリア不可能の上、すでにそこまでたどり着く時点でほとんどのゲーマーは疲れ果てているため、パーフェクトクリアどころかクリアすることもできないという、ゲーマー泣かせのキャラだった。

僕（パラド）も何度もクリアしようとしては失敗し、結局グッツの配布期間終了後にようやくクリアできたという、「世界で唯一ゲーマーMが負けた存在」とまで呼ばれている奴だ。

「目的はなんだ!?!」

「エグゼイド、ハニーをかけて、俺とダンス勝負だ!」

そういうえばハニーってなんだ!?! と思いつつも、無敵ガシヤットで変身する。

「HYPER大変身!」

変身して、様子を見る。普通に操作して音を拾うだけでも一苦労だったのに、体を使って本当にダンスをするとその難易度は格段に跳ね上がるだろう。

「俺たちも行くぞ!」

「ああ、邪魔するぜえ!」

音楽が鳴り、宙を音符が舞う。なんと向こうからこっちに音符が飛んでくるのではなく、自分で自分の分を集めるタイプのようだ。右から左から、上から下からと滅茶苦茶に音符が宙を舞う。

そこへ貴利矢さんと飛彩さんがキツドのダンスの邪魔に入った。

「おっほお！ 無粋な奴らだねえ！」

なんとキツドは貴利矢さんのガトリングの連射も飛彩さんの魔法剣の攻撃もすべて避け切り、かつ完璧に音符を取っている。信じられない。

「くっ……負けられない！」

こっちも何とか食らいつくが、途中で最悪の事態が起きた。よりにもよってドレミファビート内で1、2、3位で最速の曲が混ざった。とてもすべてを拾いきることはできず、2、3個取り逃した。

完璧に踊れるものと、新しい仕様に戸惑うもの、勝負の結果は火を見るより明らかだった。

「くそっ……負けた……！」

その時、僕の体の全身に、鈍い衝撃が走った。

「ぐっ……な、なんで……？」

今の状態は、ハイパー無敵、無敵だ。なのになぜ、僕は今変身が解除されたんだ？

「信じられない」って顔してるな。エグゼイド。確かに本来なら俺にお前を攻撃する術はない。だが、お前を「倒す」ことはできる。「システムの死」ってわかるか？」

「システムのな………死？」

「ああ……例えばだ、お前の大好きなゲーム、「マイティアクションX」の場合、一定時間無敵のエナジーアイテムをとった場合のマイティを殺す方法と言ったら、1つしかないだろう？」

何だ？ そんなの簡単………!!

「崖から落ちる………？」

「そうだ。いかに無敵であっても、防げないもの………「システムそのもの」からのペナルティだ。あくまでお前の無敵は敵キャラからの攻撃を想定して作られている。他にもあるだろう？」「プレス機にプレスされたらゲームオーバー」、「制限時間以内に指定の場所に行かなければ死亡」、「銃の命中率が%以下になれば強制的にゲームオーバー」とかな。

俺の場合、「ダンスの勝負をして、負けたほうの体力から最大値の半分を引く」だ。だから今のお前の体力は半分消えて、見事に変身が解除されたってわけだ」

「そ、そんな………くそお!!」

変身が解除されたまま、キッドに向かって殴りかかる。かわされ、ドライバーを思い

切りけられた。ドライバーにつけられていた、ハイパー無敵ガシヤットは粉々に砕け散ってしまった……………

そこから流れるような動きで、飛彩さん、貴利矢さんもあっさり倒されてしまった。

「俺の目的は、その扉の奥にある……………！」

まずい、あそこには、ポツピーが……………！ 何とか上体を起こそうとするが、体が言うことをまるで聞かない。

そして、無情にも扉は開かれた……………

「助けに来たよ！ マイ・ハニー？ もう大丈夫さ！ ボクが助けに来たんだ！ ポツピーポパポ〜？」

.....
は？
.....

第7話：大我のCONFLUENCE

俺の名前は、花家 大我（はなや たいが）少し前まで「ゲーム病専門医」として、数が減ってきているゲーム病をうれしく思いながらも少しずつ減っていく収入にいつ電気やガスが止まるかとハラハラしていた。

そんな時に、突然訪れた大規模なパンデミックはまさに悪夢だった。近くにいた知り合いや、せつかく治りかけていた患者たちが暴走し、俺自身もニコ一人を守るだけで精一杯だった。

だが、ほどなくしてそのウイルスどもはすべて人体から体外へ飛び出し、それぞれのバグスターへと集合したみたいだ。

バグスターは基本的に大きな建物の中に潜伏しているみたいで、今はほとんどの人が外にたたき出されている状態だ。どうやらCRも例外じゃなかったみたいで、中には誰もいなかった。テンパる院長を残して、俺とニコはまえにゲナムの野郎が捕まった場所の近くにあったゲナムの隠れ家に行ってみた。

「……、だな……………」

着いてみたものの、出入り口だったシャッターはひしやげっていて、本当にここにいる

のかと不安になる。だが、ここ以外に心あたりはない。シャツターに近づいたその時、誰かがシャツターをくぐって飛び出してきた。学生服を着崩したそいつは、なぜか知らんがポッピーピポパポを抱きかかえていて、そのまま俺たちの横を抜けて走っていく。「ま、まて……………くそ……………」

エグゼイドの奴が、満身創痍の状態で顔を出し、その場に倒れた。野郎……………バグスターか……………！

「ニコ！　ここにいろ！」

俺はその場にニコを置いて、奴を追う。

「第五拾戦術…変身！　ごらあ！　待て!!」

大声で怒鳴りつけると、あいつは立ち止まってこつちに振り向いた。

「ん？　なんだ？　お前」

「こつちのセリフだ！　ポッピーピポパポ誘拐してどうするきだてめえ!!」

この前は、ポッピーピポパポが洗脳されたからな…めんどくさいことになる前に、止めないとまずい。

「誘拐って…それはあいつらだろう？　こんなにかわいいポッピーピポパポを誘拐したくなる気持ちははかるが、俺が許さん。こうして助けに来たわけだ」

……………こいつ、何か勘違いしてないか？

「兎に角、お門違いだ。出直して来い。気難しそうな顔に似合わず、優しいおっさん」
「うが早いか消えちまった……だが、聞いた感じだと乱暴したり無理やりいうことを聞かせたりする気はなさそうだ。そこが唯一の救いか……っていうか、誰がおっさんだ。」

「とりあえず、戻ってあいつらと情報の交換をしねえと……」

「……………ブレイブ、スナイプ…こうして生き返ったのも何かの因果だ。あの時のようにクロノスが邪魔しに来る心配もない。もう一度お前たちと決闘するときに近いな……………」

第8話：捕らわれた I

私の名前は、ポッピーピポパポ。少し前まではCRにいて、そこから黎斗の隠れ家に行つて、いつの間にかこうして誘拐？ されている。でもこの子は「誘拐されていたのを助けただけ」つて言ってるから悪い子じゃないと思うんだよね。話せばきつとわかってくれるよ。

ガシヤン

……………なんて思っていたら、いつの間にかあの子はいなくなっていて、私はこうして牢屋に入れられちやつた…多分あの子の意思じゃなくて、ほかの人の指示だと思ふんだよね。あんなこと言つてた子が、こんなことするなんて思えないもん

……………ん？ 誰か、来た…さっきの子かと思つたけど、来たのはきれいな赤いドレスを着た、長い金髪に縦ロールがよく似合う、お嬢様オーラ全開といった感じの子だ。

「あなたは…誰？」

「ポッピーピポパポさんね…悪ガキキッドから話は聞いてるわ。私はゲーム」ときめ

わたくし

き・クライシス」のラスボスのような存在：主人公とヒロインの恋路を阻み、やがて返しされて恥をかく存在：悪役令嬢リリム・シフォン・エリーゼよ。友人などの親しい間柄には気軽に「リーゼ」と呼ばせているわ。貴方もそうして？」

そう言つて、彼女はじつと私の顔を：正確には目を見てきた。

「……………あの？　何かついてます？」

「きれいな瞳：優しく包み込むようだわ：…あの子があんなに惚れるのもうなずけるわね」

そう言つて、彼女は安心したように笑つた。

「リーゼさんも、優しい雰囲気はあると思いますよ？　悪役令嬢だけど…つて！　ご、ご

めんなさい！」

「あら？　そんなの気にしなくていいわよ。むしろ悪役に生まれたからこそ、今こうして優しい心が手に入れられたのかもしれないわね：「どんな困難、障害があつても、真実の愛が断ち切れることはない」つて、悪役が負けたからこそわかることでしょう？」

そういつてリーゼさんは、優しく微笑んだ。本当にきれいな人だなあ……………

「あら、話がずれてしまったわね：私も当然バグスター連合のだけど、俗にいう「穏健派」なのよ」

「おん…けん…？」

「名前の通り、おだやかで、行き過ぎや誤りのないことよ。できれば私は戦わずに、人々とは手をつなぎあつていきたいの。にらみ合わずに、みんなが笑顔の世界…素敵だと思わない？」

「……………私と、同じだ…！」

その後しばらく、二人の理想を話し込んでしまった。

「…あつ、そういえば、あのキッドつて子はどうしたの？ っていうか私、なんで牢屋に？」

「ああ……………それなんだけど、実は貴方はうちのソルの意向で処刑されそうなのよ」

……………ふへ？

第9話：許されぬBETRAYAL

しばらく放心していたと思う。しよけい…それは何という意味の言葉ですか？

「でも安心して。今ソルのことをキッドが説得しているわ」

「うまくいくなあ…っていうか、ソルって誰？」

「ああ、うちのリーダーよ。正式な名前は「ハイパー無敵ソルティ」っていわね。呼びにくいから、ソルね」

話していると、また奥の扉が開き、二人の人影が見えた。

「会うのは初めてですね。初めまして。私の名はハイパー無敵ソルティです。我々バグスター連合の規定に従って裏切り者のあなたを処刑しに来ました」

ああ…こゝ、殺されちゃう……

「おい！ 彼女は殺させないぞ！ せつかくあいつらから助け出したところだったのに…」

うう、キッドって子が何とか説得しようとしてるけど、無理そうだよ…

「お前は黙っているキッド！ 大体ポッピーピポパポは我々の裏切り者だといっただらう！」

「え？ そうなの？」

「……ッお前は俺の話の何を聞いていた!？」

あ、あれ？ このハイパー無敵ソルテイ、聞いてた話だと冷静沈着で丁寧な言葉遣いのはずだけど……

「ソルはね、普段はいいんだけど、大の仲良しのキッドとはああなのよ。一番信頼してるんでしょうね」

そ、そうなんだ……

「ソル、とりあえずまだキッドはちゃんと理解してなさそうだから、この子と二人きりで話し合わせるっていうのはどうかしら？ そうすればもう少し冷静に話が進むと思うのだけど……」

「そうはいかない。これは決定事項だ。裏切者は即処刑。例外は認められない」

「あら、それを言うならこの決まりは基本的には正々堂々と戦ってその結果生殺与奪を得たものに処刑の権限が与えられるはずよ？ 貴方にはその権限はないわ」

「そうは言ってもこいつに……キッドに殺す気があるとは思えない。ここは私が……」

「末端の兵ぐらいだったならそれもいいかしらね。でも、貴方はリーダーよ。最上位の存在が好き勝手にやる組織なんて、まともに回ると本気で思ってるのかしら？」

「……………」

す、すごい、あつという間に丸め込んだじゃった。リーゼさん、恐ろしい人…じゃなく
てバグスター。」

「……………わかった。ならばここはいったん出直そう。だが、キッド、お前がもし裏切った
りした場合は、俺も容赦はしないぞ?」

「さて、あとは二人でゆっくり話してちょうだい。私は出るわ。ポッピーさん、ごきげん
よう」

ポンとキッドの肩をたたいて出て行っちゃった…やっぱり綺麗だなあ……………上品で、
いつも落ち着いてる…

「えつ…と、キッド君? いろいろ誤解があるみたいなんだけど、まず、私は別につか
まってるわけじゃなくて、自分の意思であそこにいたの」

「えつ?」

そこから私は、これまでのこと、自分が思っているレイヤーの人たちとずっと一緒に
仲良く楽しくゲームをして過ごす生き方のことを話した。

「……………そっか」

「だから…ごめん。ここにはいられない。永夢達のところへ帰らなくちゃ…」

「わかった。ボクも一緒に行くよ!」

「え?」

「ポツピーの幸せはボクの幸せだからね。協力しない手はないよ！」

…それはとつても心強い。だって永夢の無敵だつて倒しちやつたようなのがこつちについてくれるなんて願つたりかなくなつたり……でも…

「それじゃあキッドはあの無敵ソルティに狙われちゃうよ？ いいの？」

「あいつがポツピーを殺す気なら、ボクがあいつを倒すよ」

そういつて、キッドは牢のカギを取り出した。

「あれ…持つてたの？」

「ん？ さつき出ていく直前に、リーゼから渡されたんだ」

牢の扉を開けて、建物の外へと出た。そこには…

「やっぱりこうなつたか…この際ポツピーピポパポは見逃そう………」

これより、裏切り者キッドを粛清する」

どこか寂しそうな表情の、ハイパー無敵ソルティが立っていた。

第10話：K I N Gキッド VS M U T E K I ソル
テイ

「こうなることは予見されていた…だが、それでも俺は友であるお前を信じた…だが、もうそれも終わった」

「……………んなこと言われてもな…ソル、俺は俺が進もうと思った道を進むだけ。これが俺の生き方だ」

「……………ふっ…そうだな。だからこそ俺はお前を信頼し、副リーダーに就かせたんだっ
たな」

…完全に一触即発だあ…ど、どうしよう……………

「キ、キッド…？ ここはいつたん…」

「悪いけど、逃げるってのはナシだよ。ここでボクがあいつから逃げたら、バグスターとして終わりだ。だから、逃げない」

だめだ。キッドはここで無敵ソルテイと決着をつけるつもりみたい。

「そうだ。それこそ俺の認めたお前だ…培養」

「Infection! Let game! Good game! God ga

me! Great game! I'm a Bugstar!

キッド視点

さて…カツコよく勝負開始したはいいが、はつきり言つて勝てる気がしないな。どうしよ。

そもそもこの組織は完全に実力主体で作られてるんだ。つまり、末端の兵ほど弱く、階級が上がるにつれ当然強くなつていく。俺はただ単に強いから副リーダーだが、リーゼやソルのように力とカリスマの両方があるわけじゃない。おまけにただ戦つてもあいつが勝つしな。もはや笑える。

「さあ…いくぞ!!!」

ま、全力出し切りますかね。さあ、踊りの時間だ……………

「行くぜー!」

お互い全力疾走で走り出す。まったくの同タイミングで両方の拳が交錯した。鈍い音とともにお互いのけぞる。

……いつてくぞ。どうせあいつは無敵効果で聞いちゃいねえんだろ。せこいぞコラ。

「さあ、俺とダンスで勝負しな!!!!!!」

音楽がスタートし、音符が大量にゲームエリア内に流れ込む。踊りなら、俺はだれにも負けねえ……!

「考えたなキッド……俺はお前にダンスでは勝てん……ダンスではな!!!」

いうが早いか掴みかかってきやがる。こいつ……俺にダンスを踊らせない気か?! ……!
! いや、あいつは攻撃しつつも音符はしっかりとってやがる……音符を取りながら俺に攻撃を加える気か!

「俺の究極の体術……お前の天性の舞踏術……両方混ぜたなら、どっちが上かな?」

蹴られる、避ける、飛ぶ、殴られる、殴る、飛ばされる、避けられる、蹴る……や、べえ……押し込まれる……!!

「俺は……俺は、負けねええええ!!!」

最後の音符……あれさえ取れば、引き分けに持ち込める……!

腹部に響く、ミシリという音、ソルのキックが、正確に俺の体を打ち抜いた。

「が……は……」

やられ……た……いやあ……強ええなあ……やっぱり……惚れ惚れするぜ……

その場に倒れこみ、動けなくなる。同時に音楽が終了し、ペナルティが発生した。当然対象は俺だ。

「これで……終わりだ……キッド、お前は俺にとって一番いけ好かない奴で、一番反抗してき

て、一番自分勝手に、一番俺が信頼していた…友だった………」

やっべえ…もう…後がねえや………」

そんな時、急に銃弾が飛び、目くらましのようになった。どうやらポツピーが隠し持っていたバグヴアイザーIIを使ったみたいだ。煙に乗じて、ポツピーを担いでその場から離れた。

第11話：踊王の最期

変わらずにキッド視点

俺は這う這うの体でソルから逃げ、やつとのことでエグゼイドたちの待つあの隠れ家にたどり着いていた。

「……………ポッピー、ごめん」

言うが早いポッピーを縛り上げた。

「!? ちょ、何するの!？」

「ごめんね、ポッピー、ボクにも考えがあつてさ、君が帰りたいのは分かったけど、ソルがいる手前、半端な強さの奴らじゃだめだ。だから、これからエグゼイドでも、誰でもいい。もう一度戦つて、あいつらの力を見極めたいんだ。大丈夫。殺すなんてこと、しないから…ね？」

ポッピーは少しの間沈黙し、その後渋々うなずいた。許可もとつたことだし…いくか。

「おおい！ まだそこにいるかエグゼイド！ 何対一でもかまわない！ポッピーを返してほしければ、俺と戦つて勝利しな！」

さて、行きますかね……………

永夢視点

ポッピーをキッドというバグスターに連れ去られた時に、大我さんとニコちゃんもこの隠れ家に来た。結局ポッピーは連れ去られてしまったけど…取りあえず大我さんとお互いの情報を交換して、キッドを攻略するための作戦を練っていた。そんな時、

「おおいー、まだそこにいるかエグゼイド！ 何対一でもかまわない！ポッピーを返してほしければ、俺と戦って勝利しな！」

突然外から聞こえた大声…間違いない、キッドの声だ！

「みんな…行きましょう！」

全員で外に出ると、目の前の建物の屋根に、キッドと縛られたポッピーの姿があつた。

「勝負だキッド…ポッピーは返してもらおう！」

「俺にも時間がねえんだ…早速始めさせてもらおうぜ！」

音楽が始まると同時に、かねてからみんなに説明していた体勢になつてもらう。

「へえ…全員掛かりとはね…なりふり構わず勝ちに来たってことか？」

「MAX大」

「グレードX・0」

「第五拾戦術」

「術式レベルHUNDRED」

「爆速」

「「「「変身!!」」」」」

「レベルマックス！最大級のパワフルボディ！ダリラガン！ダゴズバン！マキシマム
パワーX！」

【赤い拳強さ！ 青いパズル連鎖！ 赤と青の交差！ PERFECT KNOCK

OUT！】

【マイティーアクションX！アガツチャ！デンジャラスゾーンビー！】

【スクランブルだ！出撃発進！バンバンシミュレーションズ！発進！】

【迎る歴史！目覚める騎士！タドルレガシー！】

【爆走バイク！アガツチャ！ぶっ飛び！ジェット！トウザスカイ！フライ！ハイ！ス
カイ！ジェットコンバット！】

まずは僕以外の全員で一斉に攻撃を仕掛ける。攻撃といっても遠距離武器で狙うだ

けだ。最初に戦ったように、格闘でぶつかつたら多分また投げ飛ばされる。だから攻撃は捨てて、僕は踊ることに、皆にはキッドの邪魔に専念してもらおう。

「うおっ！ …なるほどな。この距離なら俺からの攻撃手段はないし、仮に近づいて攻撃しようにも近づくうちに音符を取り逃す。よく考えてあるじゃないか」

ひとまずはこれでいい…後は、僕が失敗せずに完璧に音符を取りきるだけ…！

「パラド！ 頼む！」

「ああ！ 永夢！ 受け取れ！」

パラドからエナジーアイテムを受け取る。

【伸縮】 【ジャンプ強化】 【高速化】

今の僕にはハイパー無敵の力がない…だから、足りない速さ、ジャンプ力はエナジーアイテムでカバーするしかない！ それでも無理なら、体を伸ばして対応する！

「…やるねえ！ やるねえエグゼイド！」

…どつちが！ あいつもヤバイ！ 全弾よけながら、一個も音符を取り逃してない！

ま、負ける、かも…

「今のところ、俺とお前は両方パーフェクトだな！ 負けないぜ！」

ま、まずい…このままじゃ、いつかミスる…っえり！

目の前で、キッドが突然転倒した。

「がっ……しまっ……た！」

これは……チャンスだ！ これを逃したら、多分もう二度目のチャンスはない！

「くそが……！ うおおおおおお！」

「絶対に勝つ！ うおおおおおお！」

その瞬間、音楽は止まった。

「俺が……K I N Gたるこの俺が……負けた……！」

……やった……勝った………………！ 僕たちの勝利だ……！

キツド視点

いやはや、まさかあのタイミングでなあ……ソルから受けた腹の傷がうずいてすつ転ぶとはね……

悔しいけど、負けは負けだ。認めるしかねえわな。

そんなことを考えていると、エグゼイドの奴がこつちに来た。どうやらもうポツピーから事情は聴いているみたいだ。無様に倒れこんでる俺に話しかけてきた。

「ポッピーから全部聞いた…どうして？」

「何が…「どうして」なんだ…い？」

「だって！　こんなことしなくても！　君はもう日に二度ダンスで敗北してる…！　一度に入るペナルティは設定されている全体の体力から半分…無敵ソルティとの戦いで50%減って…今のでもう0%…死んじゃうんだぞ！」

「ああ…そんなことか…そりやお前…別にいいんだよ。全力で戦った…出し切った…んで、負けた…」

やべえな…もうだからだら話す時間はなさそうだ…

「エグゼイド…いや…永夢…今のお前じゃ、あいつに…ソルには勝てねえ…俺程度に手こずるようじゃ、てんでだめだ…俺は確かにあそこの副リーダーさ…けどな、俺とあいつとの力の差が、わずかだと思うな。研鑽を積み…より強くなれ…そうしねえと、あいつには勝てねえぞ…」

そもそも、俺にはもう生きる理由なんてないしな。ダンスで負けた時点で、もう俺は死んだようなもんさ。ポッピーも、俺のことは恋愛対象としてみてなさそうだし…

「永夢…あと一つだ…ソルには、あいつには弱点というか、俺やほかのバグスターにはあるが、あいつにだけ無い物があるんだ…それを見極める…それと、ポッピー…君にも一つ、伝えなくちゃいけないことがあるんだ…」

ポツピーは泣きじやくりながらも、俺の顔に耳を向けた。

「君はきつと気づいてないけれど…君は、きつと、

俺が彼女に伝えると同時に、俺の体が胞子のようになった。意識が消える直前、ポツ

ピーの顔が見えた。

ハハ…その驚き顔…やっぱり気づいてなかったみたいだね。

第12話：NEXT副リーダー

魔王ベイオウルフ視点

「ベイオウルフ、いますか？」

一人でいると、無敵ソルティがこつちにやってきた。表情こそ取り繕ってはいるが、奴があまりよくない状態だということがわかる。 表情こそ取り繕ってはいる

「……という経緯でキッドは我らがバグスター連合を裏切りました。結果的に裏切者の討伐には失敗しましたが、どうやら逃げた先でエグゼイド方と勝負をして死んだようです。欠員は随時補填する必要があるため、貴方に白羽の矢が立ちました。できれば次の副リーダーはあなたにやってもらいたい」

「……………承知した。謹んで受けるとしよう」

おそらく、奴もすっかり考えてのことだろう。断る理由はない。

「そうですか。ではその他のメンバーにもそのように伝えておきます…では」

行ったか…それにしても、我が副リーダーか……………急すぎて実感がないな…

しばらく一人でぼうつとしていると、いつの間にかガルーダが来ていた。

「お前か……………」

「異例の昇格だつてえんでなあ、祝いに、もとい駄弁りにきたぜえ」

「こちらはまだ了承もしていないのに、当たり前のように近くに座り込んだ。勝手な奴だ。」

「気分が悪い。出直せ」

「ああ？　んなこと言つてたらおいイらだつてえ気分も機嫌も最悪だぜえ？」

「……………キッドが殺られた…もといリーダーが半分殺つたてなあ…どう思う？」

「どう思う…だと？　そんなもの、決まっている。」

「裏切者には死あるのみ。結成した当時からこの決まりは「そんな建前なんてのは聞きたかねえんだよこつちは」

「……………我は本当に自分が副リーダーでいいのか疑問だ」

「てえ言ううと？」

「そこを聞くかと思いつつも、自然と口は動く。」

「我は、あいつに…リーダーに詳しい経緯を聞いたときに、裏切者であるキッドの死を悼んだ。そして、裏切者の討伐に活躍して、褒められるべき奴の行動をどこか呪っていた

…

「我はキッドが、奴が死んだことに確実に悲しんでいる。死んで当然の、むごたらしく殺されて当たり前のあいつをだ。そんな決まり、規律よりもキッドとの友情を優先しか

けているような欠陥者が、果たして組織の上に立つ資格があるのかどうか、そこがわからない」

つまるところ、それなのだ。今からでも無敵ソルティに撤回を伝えるべきか…？

「……………そこよ、そこ」

「……………ん？」

「おめえさんは相も変わらずクソまじめだねえ？ そんなん、みいんな思ってるぜえ？ もちろん、おいイらもなあ。難しく考えすぎなんだよ、おめえは。いいじゃねえか、どう思おうが」

「……………そういうものか？ ……………そういうものなのかもしれないな」

そう言うと、ガルーダは「そういうもんさあ」と笑った。

「…なら、お前の愚痴に付き合ったんだ。今度は我に付き合え。憂さ晴らし…もといちよつとした運動だ…培養」

「…ハッ、いいぜえ？ おいイらもちょうどそういう気分だったんだ。 培養」

【Infection! Shit game! Bad game! Dead game! Fuck game! I'm a Bugstar!】

我は新たな心持ちとともに、勢いよくガルーダに向かって殴りかかっていった……………

一方エリーゼお嬢

「あら、呼んだ覚えのない客ね。今日は一人で飲み明かそうと思っていたのだけれど？」
「キツドの冥福を祈っているんですよね？　ご一緒しても？」

「半分は死んだ原因なのに、参加するなんてなかなかの喜劇ね？」

「本当に殺すことを決めていたなら、あそこの煙幕の時の対応も違っていたかもしれないね」

「そうね…貴方たち二人は、本当の兄弟のように仲が良かったわね…いいわ。掛けなさい」

「はい………それにしても、外が少しうるさいですね」

「ガルーダとバイオウルフでしょう。放っておきなさい………ほら、あなたの分よ」

「有難うございます…　ん…いいワインですね。銘柄は？」

「フランス産、ドメーヌ・ルロワの最高級赤ワイン　ミュジニー（十年物）よ。これぐらい知っておきなさい」

「手厳しいですね………かなわないな」

「そうね。前々から大喧嘩するキツドと貴方を止めるのは私の役目だったものね」

「そうですね…」

「一っただけ聞かせなさい。彼を、キツドのことを今はどう思っているの?」

「裏切者なのに、やっぱりあいつは私の…俺の親友だ」

「そう……………」

「……………? リーゼさん、何処へ?」

「そのワイン、残りはあげるわ。もう少し酔えば、無理やり止めてる涙も出てくるでしょう? それじゃ、ごきげんよう」

「…ふふ……………やっぱり、あの人にはかなわないな……………」

キツド……………キツド……………」

第13話：FORTYONEをもう一度

実はあの後、粒子となって消えてしまっていたキッドの体の中から、謎の塊が発見された。

政府の人たちに届けて数日後、驚愕の結果を聞かされる。

なんと、その塊は高威力を備えた爆弾だった。結局それが入っていた理由は分からなかったし、キッドの消滅時刻と同時に爆弾は活動を止めていた。

キッドの死をみとつてから少し経った頃、僕たちはCRに戻り、一般の人たちも皆元の生活に戻っていた。バグスター連合の奴らがどこにいるかはわからないけど、とりあえずは一般人が襲われる心配はなさそうだ。

…そんな時、突然CRにオレンジの靄のものが入ってきた。

「な、なんだこれ!!」

オレンジ色の霧は人の形になって、よく飛彩さんがケーキを食べている机の上に降り立った。現れたその姿に、その場に居合わせた全員が息をのんだ。

「久しぶりだな、パラド、ポッピーピポパポ」

現れたのはそう、忘れるはずもない、その姿…

「「「「「グラフィアイト!?!」「」」「」」「」」「」」

現れたのはグラフィアイトだった。前と同じ雰囲気をもとっている。

「グラフィアイト、どうして…いや、そんなことよりも、今俺たちは」

パラドが状況を説明するよりも早く、グラフィアイトの口が動いた。

「知っている…俺はその切り込み隊長をしている」

「なっ……………」

やっぱりまた戦わなくちゃならないのか…?

「ブレイブ、スナイプ！ 俺はこうして蘇った！ 邪魔をするクロノスはもういない！

もう一度、俺と勝負してみる気はないか!?!」

「…いいぜ…すべてのバグスターをぶっ潰す…当然、お前もな」

「いいだろう、何度でも切除してやる…!」

そんな時、パラドが二人を押しつけてグラフィアイトの肩をつかんだ。

「グラフィアイト！ …やっぱり、俺たちの仲間になる気はないのか……………?」

「……………そうだな。道こそ違えたが…お前たちは俺の生涯の仲間だ」

「なら……………!」

言いかけたパラドに、グラフィアイトがぴしゃりと言い切った。

「同じ道が歩めず、その道の障害となるなら、たとえ仲間でも叩き潰すのみ!!」

「そ、そんな……………」

「今夜零時、あの日の決闘の場で待つ。待っているぞ。ブレイブ、スナイプ……………」
そうして、グラフィアイトはどこかえ消えていった……………」

???
視点

「ヒヒ、ヒヤハハハハ!! 実験の経過は良好だ! この「私」が作り上げた新しいバグ
スター達と衛生省の仮面ライダーたちをぶつけ続ければ、更なる戦闘データが取れるだ
ろう……………」

そのデータに偉大な私の頭脳を注ぎ込み、私は新たな完全な存在となるのだ!
やはり私は…ネットワーク世界の神だ……………」

午前零時三十分 グラフィアイトの待つ決戦場

「……………きたか……………遅かったな、ブレイブ、スナイプ……………?」

……………なっ!? なぜお前が……………!? ブレイブとスナイプはどうした!?!」

「お前は本当に変わらないな…グラフィト……………」

「質問に答えろ……………!」

パラド!!!」

第14話：グラフィアイトVSパラドクス

パラド視点

「もう一度聞く。ブレイブとスナイプはどうした？」

俺はしばらくグラフィアイトを見つめ、しゃべり始めた。

「二人とも、俺が倒したんだ。だから、代役として俺が来た」

「倒した…だと？　嘘を言うな。ブレイブはレベル100だ。レベル99のお前が勝てるわけがない」

まあそうなんだよね…まあ、今は説明する気もないけど…

「約束の時間はとうに過ぎてて、ここにいるのは俺だけ。それが証拠じゃだめか？」
「……………」

よし、ここまではこれでいい……………重要なのは、これからだ。

「そういえばさあ、俺とお前、仲間だったつてのもあるけど、戦ったことなかったよな。実はお前と一度戦ってみたかったんだよな。お前はどうか？グラフィアイト」

「それは奇遇だな…俺もだぞ。パラド」

うん、これでまずグラフィアイトは俺との勝負を拒まない。

「ところでさ、「戦士」の決闘ってのはさ、やっぱりお互いのすべてをかけて戦うんだよな？」

「無論だな。命を、名誉を、おのれの全存在をかけて戦うのが決闘だ」

「ならさあ、グラフィイト、俺が勝ったら、お前の「戦う理由」をよこせ」

「戦う、理由……………？」

「俺が勝ったら人間の味方になれとは言わない、「俺」^{パドクス}の味方になれ。

人間のために戦う、「俺」の味方になれ」

……………頼む、乗ってくれ、グラフィイト……………

「いいだろう、分かった」

「……………！ よし、なら早速始めるか！

俺はパーフェクトパズルとノックアウトファイターの仮面ライダーパドクス！

マックス大…」

「俺はドラゴナイトハンターZの竜戦士、グラフィイト！」

「変身！」「培養！」

【ガツチャーン！マザルアップ！

赤い拳強さ！青いパズル連鎖！赤と青の交差！^{パーフェクト}PERFECT

【^{インフェクッション}Infection！^{レツ}Let's ^{ゲーム}game！^{ノックアウト}Knockout！^{パド}Bad ^{ゲーム}game！

デッドゲーム！ What your name?
 The Bugster!

【ガシヤコンPARA||BLEGUN】

「行くぞ、グラフィイト！」

「来い！ パラド！」

始まった…あそこまで見えを切った以上、負けられねえ……………！

俺はPARA||BLEGUNを自分の胸にあてがった。

《b》【PERFECT CRITICAL FINISH!】

「パラド……………何を……………?」

自分で自分を撃つなんて、何やってるか理解できないだろうな……………

【逆転】

グラフィイトが対応に困っているすきについて、エナジーアイテムを投げつけた。このアイテムは、自分と相手の体力を入れ替える能力がある。つまり、俺の今の自爆ダメージがグラフィイトのダメージになったわけだ。

「グ…パラド…貴様！」

「悪いなグラフィイト！ 俺は負けるわけにはいかねえんだ！ 文字通りどんな手を使

ってでも勝たせてもらおうぜ！」

次だ。取りあえず、エナジーアイテムでけむに巻き続ける！

【混乱】

「ぐわッ……！」

今度は混乱で行動封じ。怯んだすきに殴りつけた。

【暗黒】

また別のエナジーアイテムでグラフィイトの周りを闇で満たす。視界をつぶしてもう一発を狙う。

「……………そこだ！」

「危ね!?……………何!？」

なぜかグラフィイトは俺のいる場所を正確に狙ってきた。かろうじて避けたが……効いてなかったのか? ぼやぼやしているうちに闇の霧は晴れてしまった。

【透明化】

体を透明にしてグラフィイトに肉薄する……………が、またグラフィイトは俺のいる場所を正確に狙ってきた。今度はもろに食らった。

「な、なんで……………?」

「心眼もつてすれば目など必要無し! この程度の策ならば、俺には勝てんぞ!」

「…… ああそうかい! ならこれだ!」

【停止】

時を止めるエナジーアイテムで、俺以外の時間をすべて止めた。

「忘れたかパラド！ 俺の体内にゲムデウスウイルスがある限り、俺に時止めは効かん！」

「やべー！」

「ドドドドドドドドドド紅蓮爆竜剣!!」

【鋼鉄化】

すんでのところで鋼鉄化を使い、防御した。だが、滅茶苦茶熱い。痛い。大ダメージだ。

「ああああああ……ぐが！」

倒れそうになるが、気合で起き上がる。

「くっそお……アイテムだよりでやってんのに、ほぼ互角かよ……」

グラフィイトが肉薄し、グラフィイトファンングを振った。PARA^パ||BLE^ラGUN^{ブレイガン}を受け止め、いったん下がる。

【挑発】【分身】

自分に挑発をつけ、その状態で体を分身させた。挑発のアイテムの効果でグラフィイトは俺を狙うが、その俺自身が増えるため、グラフィイトはめつたやたらにファンングを

振り回すだけだ。本物の俺を狙おうにも、挑発のアイテムのせいで体は言うことを聞かない。

「頼んだぜ分身！ その間に……！ せっかくこの日なんだ！ 楽しもうぜ！」

【クリスマス】

クリスマススのエナジーアイテム。効果は俺のコスチュームをサンタっぽくして、あとは雪を降らせることくらいだ。

「……ツパラド貴様！ ふざけずまじめにやれ！」

グラフィイトは完璧に激怒している。

「……グラフィイト、知ってるか？ 黒い色は光を吸収して、白い色は反射するんだぜ？」

【発光】

「！……しまっ……」

降り始めた雪がアイテム「発光」の効果を増し、グラフィイトの目をつぶした。

【KNOCK OUT CRITICAL FINISH!】

「ぐああああああ!!!」

グラフィイトはもろにこれを受け、たたらを踏んだ。

死闘は、まだ続く。

一方そのころの飛彩と大我

「う、ん……………パラドの奴が出したコーヒーを飲んでるうちに、寝ちまったみてえだな……………ハ！」

「じ、時間は?!……………12月25日AM3時……………パラドおおおおお」

「む……………ん……………パラドが出したケーキを食べているうちに、寝てしまったようだな……………ハ！」

「じ、時間は?!……………12月25日AM3時……………パラドおおおおお」

またパラド視点

「おらあああ！」

「あああああ！」

「こへきて、戦いの決め手がないな……………どうするか……………」

「……………パラド、なぜそこまでしてお前は俺を仲間に入れたがる？」

「仲間、だからだ……………」

「だが、もうほとんど敵のようなものだぞ？ それをわざわざ……」

俺はその時初めて、自分の感情に任せて叫んだ。

「もう誰も！ 死なせねえ！」

「ラヴリカが……死んだ……」

「永夢。命と笑顔を守る、皆のドクターになって……」

「最高の戦いができた。悔いはない……これでいい……」

ラヴリカの、ポップピーのグラフィイトの命が消えた、消えかけた瞬間を思い出す。

「お前は俺の仲間だ！ だから、何が何でもお前に勝つ！」

ついに俺は、禁断のエナジーアイテムを使った。

【終末】

終末のエナジーアイテム……どこからともなく鐘の音が聞こえ、クロノスが現れた。

「な、にい……!？」

「グラフィイト、こいつは別に檀 正宗が変身してるわけじゃないぜ。そういうアイテム

ムなんだよ！ いけ！ クロノス！ 一発叩き込みな！」

【CRITICAL・SACRIFICE】

終末のエナジーアイテム、それは伝説の戦士クロノスを召喚し、攻撃してもらうアイテムだ。

第15話：NEWな仲間

「……………む……………」

俺とグラフィアイトの決闘に決着がついて数時間。朝日が昇りきったころ、俺が待つているとようやくグラフィアイトは目覚めた。

「起きたか。おはよう、グラフィアイト」

「パラド……………そうか、俺は…負けたのか……………」

俺はゆつくりとうなずいて見せた。あんな酷い戦い方だったけど、勝ちも勝ちだ。

「パラド、俺は今、お前に対して何を思っていると思う？」

「……………卑怯者……………とか？」

グラフィアイトは「意外と真面目なんだな」と小馬鹿にしたように笑った。

「確かに思った。「卑怯者」「せこい奴」とな。だが、それと同時に「流星はパラドだ」とも思った」

「……………アイテムだよりで勝ったような奴の、何処が「流星」なんだ？」

「パラド、覚えているか？ 昔、まだエグゼイド達との戦いが本格的に始まる前お前はゲームをやっていたな」

「パラド…何をしている?」

「ん? ゲームだよ。お前もやるか?」

「いや……………いい……………」

「な、なんだよ、じつと見て」

「ああ…その相手、強いんだな。体力も攻撃力も機動力も見たところお前よりずっと上だな」

「ん? ああ、そうか、グラフィイトはゲームの敵キャラだけどころいうことは知らないのか。大抵のゲームは、プレイヤーよりも敵キャラのほうが強いぞ? それをキャラの持つスキルとか、アイテムでうまくひっくり返すんだよ。「格上相手にどう立ち回るのか」それがゲームの醍醐味だ」

「…よくわからんがそういうものなのか?」

「あの時の、あの言葉の通り、お前は見事に俺に勝利した。ゲームデウスウィルスの方によって限界を超えた俺との差を見事に埋め、ついに俺から勝利をもぎ取った」

グラフィイトは一言一言を噛み締めるように話し続ける。

「俺は正直驚きっぱなしだった。

「混乱」や「逆転」はもちろんのことだが、俺の不意打ちに近かった「紅蓮爆竜剣」をとつさに「鋼鉄化」で防いだ一瞬の判断力、

「クリスマス」で俺を激昂させてからの「発光」のスタンを狙う策略、

そして、元々は「仲間はまた増やせばいい」などと言っていたお前が俺のためにあそこまでするのはな…

どれも一つ一つ、考えられ、卓越した技術が見られた……………見事だ。そして、お前の勝ちだ。パラド。素晴らしい戦いができた。礼を言う」

「……………それじゃあ……………」

グラフィアイトは少し目を閉じて、笑顔で俺を見た。

「これからよろしく頼む。パラド」

「ああ……………ああ！」

俺はグラフィアイトとともにCRに戻ろうとした。その時、

「見届けさせてもらったぞ……………竜戦士グラフィアイト」

声のしたほうを見ると、巨大な奴がいた…永夢から話は聞いている…間違いない…！

タドルクエストのラスボス、魔王バイオウルフだ……………！

「……………」

や、ヤバイ……………俺もグラフィイトももうボロボロで、とても勝てねえ…！」

……………？　なんで襲つてこないんだ？

「……………グラフィイト、見事な戦いだつた」

……………え？

「……………意外だな。参謀のお前なら、迷わず俺とパラドを殺しにかかると思つたが…」

俺が啞然としているうちに、グラフィイトが話しかけた。グラフィイトの言う通りだ。

「今は副リーダーだ…殺す理由もないのでな…なんせ、グラフィイト、お前は我々の連合に残るためにあそこまで戦つたのだろう？　そこまでの忠誠を見せられた以上、我がお前を殺すことなど無いぞ？」

そうしてバイオウルフは意味ありげに笑つた。

「本来であれば敗れたものにはするべき作業があるのだが、お前には決闘の規定に従つてパラドクスのもとで戦わねばならぬという決まりがあるので…それとパラドクス、裏切者のお前の処罰は、疲労困憊しているものへの攻撃は我の主義に反するので、今回は不問にする。以上。文句があるなら、我に噛みついてくるがいい。一瞬で消滅させてやろう……………」

呆然とする俺とグラフィアイトを置いて、バイオウルフは振り返らずに歩いていく。

「……………グラフィアイト、お前が歩む新しき道、全霊をもって進むがいい……………」

こうして、俺達には頼れる味方が一人増えた。

第16話：MAXIMUMとBROTHERS

朝、電腦救命センターでパラドが飛彩さんと大我さんに追い掛け回されていた。

「ど、どういたんですか?!」

「永夢! 助けてくれ!」

「黙っている小児科医!」 「引っ込んでろエグゼイド!」

騒いでいる内容を聞いてみると、どうやらグラフィアイトは飛彩さんと大我さんとは戦わず、パラドと戦ったみたいだ。それでパラドがグラフィアイトを匿っていると考えて、追い掛け回しているみたいだ。

「ま、まあ取りあえず落ち着いてください!」

その後数分間、僕も交えて、飛彩さんと大我さんをなだめるのに必死だった。

そして、貴利矢さんやポツピーにも協力を仰ぎ、「バグスター連合を倒すまでグラフィアイトの処遇は保留」という形で決着した。

「ふう〜…少し休憩しようかな?」

僕はその後、いつも通りの小児科医としての仕事をしていた。休憩時間も迫り、休憩することにする。

「じゃあね、若^{わか}奈^{かな}ちゃん。また来るよ」

そう言い残して、僕は直前まで話相手になっていた女の子の病室から出た。あの子はちよつと寂しがり屋さんなんだ。時間がある限り、これからもあの子の話し相手になってあげよう。

僕は階段をのぼり、屋上へと向かう。しばらく待っていると、後ろからパラドが現れた。あの時と同じだな。なんて思う。

「永夢……………グラフィイトのことなんだけど……………俺、あいつにやつぱり生きててほしいんだ！」

「だから……………！」

「大丈夫だよ。パラド。僕はグラフィイトを倒す気はないから……………今はバグスター連合の奴らを倒すことが最優先だしね……………全部が終わったら、一緒に衛生省に行って恭太郎先生にグラフィイトもパラドと同じ扱いにしてくださいって頼んであげるよ」

そういうと、パラドは顔を輝かせた。

「永夢……………ありがとう！」

「……………でも、恭太郎先生がよくても、飛彩さんと大我さんがね……………」

そう言って、僕はゆつくりと明後日のほうを向いた。ごめん、パラド、流星にあの二人組は僕には止められないよ……

第17話：THREE BODIESの力

僕は今、パラドと一緒に三体のバグスターと相対している。

「我々の使命は、言わずもがな貴様らの討伐だ！ 塩漬けにしてやる！」

「いや砂糖まみれに！」

「胡椒一択だろう！」

………何だかまとまりがないな………

「「兎に角！ 勝負だ！」」

叫ぶと同時に、襲い掛かってくる。

「MAX大変身!!」

【ガッチャーン！レベルMAX！^{マックス}】

最大級のパワフルボディ！ダリラガン！ダゴズバン！マキシマムパワーX！

【ガッチャーン！マザルアップ！】

赤い拳強さ！青いパズル連鎖！赤と青の交差！^{パーフェクト} PERFECT

^{ノックアウト} KNOCKOUT！

「行こう、パラド！」

「ああ！」

僕はパラドと別れ、グレンラガンソルティに駆け寄った。同じく機械に乗っている者同士、多分このほうがいい。

「そりゃあー！」

グレンラガンソルティを殴りつけるが、あつさり受け止められた。流星は僕が持つてるゲームのラスボス、強い。

「さあ、塩漬けになるがいい！」

相手のパンチを、僕が受ける形になった。派手に後ろへ吹っ飛ばされる。体に鈍い痛みが走った。

パラド視点

永夢と別れた俺は、ペッポーとスガアの二人を相手取る。

「行くぜ！」

こつちが駆け出すと同時に、向こうも走り出す。走り出すとほぼ同じタイミングで、まるでYの文字のようにペッポーとスガアが二手に分かれた。あまりにも同じ速度、タイミング、動きのテンポで、一瞬俺の思考が「どつちを狙うか」ということを考

え、動きが鈍る。せめて片方のほうが早かったりすれば「前に出ているほうから狙う」ことを無意識に選択するだろう。だが、ペツポーとスガールの動きは、まるで何十年も組んで踊っているダンサーのように完璧に同時だった。一瞬のスキを突かれ、先制攻撃を受けてしまう。

「うぐつ…攻撃力はそこそこ…か？」

弱くはない、だが、特別に強いわけでも、早いわけでも重いわけでもない攻撃だった。

「ハ」の……………」

目の前のペツポーに蹴りを入れようとしますが、すでに後方へ逃げていて、からぶつた。そのすきに背後のスガーが攻撃してくる。相変わらずそこまで強くはないが、体には確かにダメージが残っている。

「つらあつ!!」

体を反転させながら裏拳を入れるが、もうスガーはそこから離脱していた。今度はペツポーがから空きの背中を狙ってくる。

「くつそ……………」

どう攻撃しても避けられる。徐々にダメージがたつてる…このままじゃヤバイ…!

「アイテムを……………」

「させん!」

片方から距離を取り、エナジーアイテムを取ろうとするが、もう片方に邪魔される。その後も段々と俺は追い詰められていき、ついに変身が解除されてしまった。

「一人なら…勝てるのに…なんて連携だ…!」

「当たり前だ! パラドクス! 俺たちは確かに砂糖だの胡椒だの意見こそ食い違いますが、戦うスタイルが全く同一のものなのだ! 兄ペツポーレベル50! 弟スガーレベル50! 二人合わせて、お前の99を超えるレベル100だ!」

うぐ…このままじゃ、永夢が孤立しちまう…!

「さあ、「弟」「兄」よ! グレンラガンソルティに合流するぞ!」

え、永夢……………!

永夢視点

グレンラガンソルティに押されて、防戦一方になっていると、後ろのほうでパラドがやられた。

「パラド! だいじょう…」

「よそ見している場合か!」

これで一気に三対一。もはや防御もまともにできず、どんどん追い込まれる。

パラド視点

……体が、うまく動かせない……やつとの思いで顔を上げると、永夢が三体に嬲りにされてる。

……俺が弱いせいで、永夢がピンチだ。

このままじゃ永夢が死ぬかもしれない。

俺に命の意味を教えてくれた永夢を。

俺を仲間にしてくれた永夢を。

俺を救ってくれた永夢を

こんなところで、絶対に死なせない……!!

「永夢……い……ま……行く……!!」

不意に体が軽くなり、自分がまるで宙を舞う綿毛……いやヘリウムにでもなったみたいだ。

霞んでいた視界は一気にクリアになり、動くものすべての動きが見えるみたいになる。

あふれ出る力の望むまま、俺は雄たけびを上げながら走り出す。

「おおおおおおおおおおお!!!」

今の俺なら勝てる。理由は分からないけど確信していた。変身せずにスガーを殴りつけた。殴られたスガーがバットに打たれたスーパーボールみたいに吹っ飛んで行く。

「なっ！ こいつ、何処にこんな力……」

セリフが終わるよりも先に、ペッポーもぶん殴る。こつちも同じように冗談みたいに吹っ飛んでいく。

「おのれ!!」

グレンラガンソルティに殴られる。ちよつとかゆい。全然効かない。

「……………あれ?」

何が「あれ?」だこいつ。顔にへばりついているグレンラガンソルティの拳を引きはがし、背負い投げのような形で後方に向かってぶん投げる。

「おおおおおおお!! おのれえええええ! ロケットパーンチ!!」

落下の間際、グレンラガンソルティは自分の乗っていたロボットの右腕を飛ばしてきた。

……………見える。分かる。

……敵落下速度 9.8 m/s

敵相対距離 $X 8.55$

敵発射角度 $Y 62.2$

$Z 15.89$

敵発射弾速 325 m/s

…一瞬で敵のロケットパンチの軌道を計算し、俺は奴のパンチを余裕たっぷりに避けた。

「……………うそ……………」

最後にあいつは間抜けな声を出しながら落っこちていった。これでしばらくは上がってこれないだろ。

「永夢……………!」

永夢を見ると、ライフゲージは残り一つだけ。ギリのギリで間に合った。

「待ってろ……今俺が……」

理由は分からないけど、確信があった。手をかざすと、手のひらから光が出て永夢の

体に降り注ぎ、あっという間にライフゲージを最大の状態に戻した。

「永夢、ここから離れるぞ！」

永夢を担ぎ上げ、走り出す。

……………ここまでくればもう大丈夫だろう。

「永夢、痛むところはないか？」

「ああ、大丈夫……………」

うん？ 何で永夢は訝しげな顔でこっちを見てくるんだ？

「……………パラド、いつの間にあんなに強くなったの？」

……………！ なんで俺、あんなパワーが出せたんだ？

考えようとする、何だか頭がぼうつとしてくる。俺はそのまま、その場に倒れこんだ。

第18話：二人でCLEAR

「ら……ど……………る……………ば……………」

「……………ん……………」

「パラド！ 聞こえるか!？」

目を開けると、永夢が目の前にいた。

「ここは……………?」

「CRのソファだよ。帰ってきたんだ」

いつの間にか眠っていたみたいだ。心配そうな顔で、永夢がこつちを覗き込んでくる。

「ごめん……………永夢……」

「心配したんだよ。急に倒れちゃうんだから……体はどうだい？」

特に異常はなさそうさ。頭もいたくないし、だるいわけでもない。その旨を永夢に伝えると、ほっと胸をなでおろした。

「良かった……………それでパラド、さっきの急に出てきた力のことなんだけど……………」

「それが……………分からないんだ。急に体が軽くなって、力が湧き出て……」

事実、今の俺はさっきのような力はもうない。いつもの状態だ。

「そっか……………あの力なら、あの三体二勝てると思っただけど……………」

……………そのことは俺も考えていた。でもこの状態じゃとても無理そうだ。一体何がトリガーに…

「ヴァーハツハツハ!! 話は聞いていたぞお!! この☆神☆が知恵を貸してやろう!」

……………なんか来た。でも、こいつに頼めば……………

「ゲムム、ハイパー無敵ガシャットって、また作れないのか?」

「無論、この私に作れないものはない! ……が、言っておくがハイパー無敵ガシャットは作らんぞ」

この非常時に何言っただいこいつは。どう考えても、ハイパー無敵ガシャット以外じゃ返り討ちに合うだけだ。

「よく聞け。永夢、パラドもだ。確かにここでハイパー無敵ガシャットを作ればほとんどすべてのバグスターは倒せるだろう……………ハイパー無敵ソルティを除いてな」

「……………?」

「いいか? 確かにほとんどのバグスターは倒せるだろう。だが、ハイパー無敵ソルティには同じ無敵属性が備わっているんだ。だから、たとえハイパー無敵の力を使っても、勝てるとは思えない。それに例え何人がかりでかかろうが相手は無敵なんだ。結果

的に無敵同士である永夢とハイパー無敵ソルティの一对一の戦いと変わらん。

当然ハイパー無敵の力を使えるのは天才ゲーマーの永夢のみ。量産しても何の意味もない。

それに相手は過去に永夢が敗北したキッドに勝利している。無敵の力を手に入れたとして、勝つ見込みはゼロだ」

……………確かにゲムムの言う通りだ……………けど……………

「じゃあどうすればいいんだよ？」

「通り一遍は、永夢とパラドの成長に期待するしかないな」

「…僕と、パラドの成長？」

永夢が完全に頭に？を浮かべている。俺も同じだ。

「簡単だ。これからも永夢達には、ぎりぎりの戦いをしてもらおう。そうして、徐々にプレイスキルを上げてほしい。キッドも言っていたろう、「研鑽を積み、より強くなれ」と。

このままハイパー無敵ガシャットを作って永夢にぬるま湯の戦いを続けさせれば、最後に負けるのは確実にこちらだ。戦いに慣れ、ガシャットの力を完璧に使いこなせるようになれば、あるいはハイパー無敵ソルティにも勝てるかもしれない」

……………なるほどな……………

「わかった。けど、このままじゃ結局無理だと思う。せめて、俺らの力をもう少しでも強

くはできないか？」

「僕も、パラドの意見に賛成です。黎斗さん、お願いできませんか？」

「……………了解した……………が、ゲームの原案は君たちで作ってくれ。それまで、私は英気を養うとするよ……………」

そう言い残して、ゲムムの入っている「元」ドレミアアビートのゲーム画面は暗くなつた。

「よし、パラド、一緒に頑張ろう！」

「ああ、やろうぜ、永夢！ 俺たち、二人の力で！」

第45～170話・天を掴んだその後に

真つ暗な世界に、私は一人で立ってる。「あの人」は無事なのだろうか？

きつと「あの人」は優しいから、あの事を引きずってしまいう気がする。気にせずに頑張り続けてほしいのだけれど：

一人でそんなことを考えていると、ふと誰かの視線を感じた。

「……………」

不躰な視線を送ってくるのは、さっきの黒い靄。

「……満足か？」

「……ええ。満足よ。」

「そうか……………」

あの人なら、大丈夫。そう思う、信じてる、信じたい。

「……………」

「……一つだけ、聞きたいことがあったのだけれど、

「……………」

どうして手伝ってくれたの？

靄は歪んで笑った。

「神話でもよく聞くだろう？ 神は気まぐれなんだ。助けることもあれば、助けないこともある。今回は、興が乗った」

．．．．．そう。

「ああ。だが、おかげでお前はこんなありさまだ。死んでいて、しかし消えきれず．．．悪くすると永遠にこの世界の中だ」

それでも私はそれでいい。「あの人」はそれだけの価値がある人だったから．．．
「．．．．．そうか」

きつとこれからも、あの人の人々のために戦い続けるの。私はそんなあの人を助けたかった。

「そうだな。お前はそう言っていたな。だから俺はお前に天を掴ませた」

そう．．．それに、「あの人」なら、あるいは私がどんなに遠い世界に行ってしまっても、きつといつか迎えに来てくれるって、そう思うの。そういう人だと思う。だから、私はここで待つてるの。それでいい。

「そうか．．．．．」

どれくらいの時が立ったのだろうか？ いつの間にかまたあの黒い霧が来ていた。

「お前の言うとうりになりそうだな……奴は強い。心も、力も……」
もちろん、そうよ。だから、私は……

「ああ、わかつているさ……」
頑張つてね。私はここで待つてるから。

また、どのくらいの時が立っただろうか？ ふと横を見ると、あの霧がいた。

「……」
前の言うとうりになった。丁度いいと未来予知は使わなかったが、お前の言うとうりになったな。俺の予想は大外れだ」

そうみたいね。

霧は、いつしか消えていた。目の前がまぶしく開き、「あの人」の私を呼ぶ声が聞こえる。

わたしは、そのままこえのするほーへかけていった。

第19話：NEWパワー

永夢視点

次の日の朝早く、僕とパラドはあの三体のソルティと相対していた。

「昨日はなぜか知らんが敗れたが、今日はそうはいかんどー。塩漬けにしてやる！」

「そーだ！ そーだ！」

今日はもう昨日の僕たちとは違う。思い知らせてやる！

「パラド！ 行こう！」

「ああ、行くぜ！ 永夢！」

僕はパラドを体の中に取り込み、白衣の中からガシヤットを取り出し、スイッチを押した。

〔MAXIMUM MIGHT BROTHERS DOUBLE MAX!!!〕

「DOUBLE MAX……だ……だ……い、変身！」

〔ダブル・マキシマム・ガシヤット！ガツチャーン！ダブルレベル・マッ……クス
!!!!〕

最大級のワフルタッグ・レイドガン！ マルズバーン！

最大級のパワフルタッグ……………」

「ふん！」

僕はガシヤットの上にあるスイッチを入れる。同時に二人のマイティブラザーズが現れ、

空から二つの大きなアーマーが降ってくる。

「俺とお前で！お前と俺で！（GAME CLEAR!）」

マキシマムマイティブラザーズ（OH YES!）ダブルマツークス!!!!!!」

僕とパラドが考えた、最強のガシヤット。レベルは10+99で一人が109、二人で218だ。

「さあ、お前らが協力なら、僕達は「超」強力プレーでクリアしてやるぜ！」

「パラド、僕はグレンラガンソルティをやる！」

「なら俺はあの兄弟だ！」

二人で同時に走り出す。Yの字に分かれ、僕はグレンラガンソルティと相對する。

「レベルアップしたか…！ だが負けん！」

僕とあいつの拳がぶつかり合う。前のままだったら僕は吹っ飛ばされていたけど、今回は相殺した。つまり互角！

「よし！ そおりゃあ！」

殴る、蹴る、つかみ合う。なかなか押し切れない。でもこれなら………！！

パラド視点

「さあ、前のお礼をしてやるぜ！」

俺は距離を取ろうとする二体をそれを上回る速さでつかみ上げた。

「は、はい……」

当たり前だ。前回はレベル99だったけど、今はレベル109だ。二体のレベルを合わせても、俺のほうが強い。このゲームではレベルの差は絶対なんだ。

「おらー！ そらー！」

片方を投げ飛ばし、もう一方は蹴り上げる。

「ぎゃあー！」「うげっ！」

やっぱりもう負けない。これで勝てる。

永夢視点

「永夢！ 決めるぞ！」

パラドのほうを見ると、もう二体とも満身創痍になっていた。

「わかった！」

ここで一気に決める。フィニッシュは必殺技で決まりだ！

僕はマキシマムのアーマーから分離する。分離した状態でも、実はレベルが下がることはない。そして、アーマーのほうも勝手に動いて協力してくれる。つまり……………

レベル109が二人、つまり合計218の状態。さらにパラドも同じことができるから、計四人。

つまりマイティブラザーズXXの一人のレベルが10、マキシマムマイティXのレベルが99、両者のレベルを足し、さらにそれが4に増える…レベル(10+99)×4

＝436

サバ読みでレベル440という大台に乗ったことになる。

「ガツチャーン！キメワザ！MAXIMUM MIGHTY BROTHERS
LEVEL MAX！CRITICAL DOUBLE BREAK！」

分離した状態の片方のアーマーが三体を横に投げ、もう一方のアーマーがそいつらを上空へ昇竜拳よろしく殴り上げる。飛び上がったところを僕とパラドでキックをかまし、コンボをつなげる。一通り蹴ったところでかかと落としの要領で叩き落とし、最後は

待機していた二つのアーマーが空高くヘジャンプし、三体が地面に激突するのと同時に
思いきり踏みつけた。

……………オーバーキルすぎだろ……………

第20話：そのSPIRIT

濛々と立ち込める煙の中を、僕とパラドは睨んでいる。場合によっては倒しきれなかったという可能性もある。用心することに越したことはない。

「ぐが、ががが……………くそ……………」

やっぱり生きてた。流石の生命力だ。このまま一気に……………？

「な、なんだ？」

「この気配……………あいつだ！」

パラドが予想したとうり、突如現れた黒い霧の中からベイオウルフが姿を現した。

「……………久しいな。パラドクス……………」

ベイオウルフ…相変わらずすごい迫力だ。大きいっていうのもあるけど、底が知れない。

「ふ、副リーダー……………来たのか……………」

ベイオウルフの登場によって、三体が安心したようにほっと息をついた。次の相手はこいつってことか？

「覚悟はできているな？ 三人とも……………」

「ああ……………やってくれ……………」

……………！バグヴァイザーIIを取り出し、仲間へ向けた…何かやるつもりだ…！ 強化
？ それとも撤退？

兎に角ろくでもないことというのは伝わる。阻止しないと…！

「させない……………!?!」

パラドと一緒にとびかかったが、拳がぶつかる直前、ベイオウルフの姿が掻き消えた。
やられた。瞬間移動の魔法だ。

「三人とも…よくやってくれた……………さらばだ……………」

距離を取ったベイオウルフは再びバグヴァイザーIIを向け、仲間紫色の霧を吹きかける。霧が三体を包んで……………

「ぎやあああああ！」「ぐあ……………！」「ぐ…げえ……………！」

三体は突如苦しみ、そのまま消えてしまった。

「なっ!?!……………死んだ!?!」

「ベイオウルフ！ お前は一体……………何やってやがる!?!」

狼狽するパラドを静かに見つめ、ベイオウルフはゆっくりと口を開いた。

「敵ライダーとの戦いにおいて、双方の平等性を守るため、及びこちら側の戦士達のサンブルの回収により戦況が一気に傾くのを避けるためだ。情報を根こそぎ研究され、リプログラムミングのようなことをされてはもはや戦いにならないからな。」

「な……………何を言ってる……………?」

後者は分かる。確かに敵の情報を解析したら、

その敵の弱点を突くような武器を作るのは当然だ。でも……

「なんで殺したんだ? 仲間じゃないのか!? 連れて逃げることで……十分……」

「それでは意味がないのだ……………こちらの陣営の戦士は全員が完全体。何度でも復活が可能だ。対してお前たちは、一度死ねばコンテニユアの術はない。戦いに不平等は無いだ」

「不平等って……………それでいいのか!? 仲間が三人も死んだんだぞ!」

「この決まりごとに関しては、仲間たち全員の了承を取ってある。我々はゲームのガシャットから生まれた存在だ。だがエグゼイド、この戦いは決して「人類がバグスターを攻略するゲーム」ではない。と同時に、パラドクス、お前がかつて目指した「バグスターが人間を攻略し、滅ぼす究極のゲーム」にするつもりもない。

これはバグスターと人間、二つの知恵を得た種族同士の全存在をかけた生き残り戦、戦争だ。

お前たち人類からはゲーマドライバーを操る仮面ライダーが、我らバグスター連合からは特に強い力を持ったラスボス系バグスターの精鋭部隊が、共に対等に、全てを懸けて世界の覇権を取り合う代表戦だ」

僕は息をのみ、やつとのこととでその息を吐きだした。こいつら、本当に対等に、そして本気で勝ちに来て……今までのバグスター達は、どこかで「また蘇れる」という甘さがあった。だけど、こいつらにはそれが無い。自分たちに制約をかけ、背水の陣で勝負を仕掛ける……これがこいつらの力の秘密だったのか……

「話は以上だ。我はもう戻る。おめでどう、エグゼイド、パラドクス、お前たちはもう四人の精鋭を倒した」

そう言つて　バイオウルフは消えていった……

その日は新しいガシヤットの性能に素直に喜ぶことはできず、若干重い気持ちで僕とパラドはCRへ戻つていった。

「……………我には分からん……………。パラドクス、あのレベル436がお前の限界か？ あの変身した時よりも、遥にお前が変身せずに見せた力の片鱗のほうが強かった……………。現にお前は、あの姿では演算能力も、回復能力も使えんではないか……………」

番外編：だいすきなえむせんせー その1・

わたし聖都大付のなまえは、香坂こうさか わかな
 せーとだいがくふぞくびょーいんにゆーいんにゆーいんしているおんなのこ。

もうわたしは9さいで、ほんとはもう「がつこう」にいかなくちやいけないんだけど、4さいのころからずーとびょーいんにいるの。

ママが「わかなちゃんはとっーてもおもいびよーだからびよーいんからでちやだめなの」っていった。

おそとにでてみたいっていうきもちがあつて、まえにびよーいんからこつそりでたことがあるんだけど、すぐにいきがくるしくなつて、そのばにうづくまつちやつた。

どうすればいいかもわかんなくてないてたらびよーいんのせんせーがさがしにきてくれたの。

とつてもおこられちゃうつーておもつたけど、せんせーは「みつけた！よかつた……さ、わかなちゃん、びょーいんへもどろう？」つてやさしくはなしかけてくれたの。かか係りのかんごしさんはとっーてもおこつてたけど、そのせんせーがいつしよーけんめいかばつてくれて、そんなにおこられなかつた。

あとでなまえをきいたら、ほーじょーえむつてなまえらしい。

もちろんそのせんせえーにもすこしおこられちゃったんだけど、いっしょに「どーしてびよーいんからでたの？ いやなことでもあった？」ってきかれた。わたしはおもわず「ともだちもそんなになくて、びよーいんはつまんない」っていつちやった。おこられちゃうかもしれないっておもったけど、せんせーはわらって「それじゃせんせーがたまにあそびにきてあげるよ！」っていつてくれた。

それからせんせーはたまにわたしのびよーしつにきて、おはなしをしてくれる。とくにせんせーはすごいゲームがとつてもじよーずなの！ せんせーのおかげでともだちになれたおとこのこもすつごくうまいっていつてたけど、せんせーはもつともつーとじよーずなの！ 「こーがんざい」のはりをわたしのおててにさすときのなんばいもはやくゆびがびゆんびゆんうごいて、もうめでおいきれないぐらいはやいの！ それにすつごくしんけんなかおで、なんだかおもしろい。

さいきん、びよーとーのわたしのおへやがひらくたびにわたしはぱつとかおをあげる。えむせんせーかな？ つておもうんだ。えむせんせーといると、とつてもあんしんして、どーじにとつてもどきどきするの。

わたし、えむせんせーがすきなんだとおもうの。それもママやパパ、友達になつてくれたあの男の子や、テレビで見るヒーローとかでおもう「すき」とはちがうきがするの。

あしたなら、いえるかな？ このきもち、つたえられるかな？
くらくなつてきたし、もうねるね。 おやすみなさい…せんせー……………

第21話：Legendなお侍

飛彩さん視点

「そこなる童わっはよ！またれい！」

散歩がてら、近くのケーキ屋でケーキを食べ、さてCRへと戻るかと席を立ったところで、急に後ろから声をかけられた。あたりを見回しても、近くには定員もいない。精々前の席に座っていた男しかいないが、完全に無視しているあたり、どう考えても声をかけられているのは俺だろう。見れば剣道の道着を着て、へそのあたりまでありそうな髭、おまけにちよんまげを結った白髪の老人が立っていた。

「……………何か？」

有り体に言つて、不審すぎる。宗教の勧誘か、はたまたコスプレイヤーの迷子か、それとも侍のタイムスリップか？

「吾輩……………いや失礼。某それがしは遊戯ゲーム「ギリギリチャンバラ」の最終的ラスボス首領にして、海田カイデンの剣の師、海帝カイテイと申す！」

……………!?こいつ、まさかバグスターか！

「いざ尋常に……………剣闘士よ！ 斬り捨て御免!! 培養！」

【Infection! Shit game! Bad game! Dead game! Fuck game! I'm a Bugstar!】

現れたのは、カイデンとはまた違った、武士の鎧を身にまとったスリムな体系のバグスターだった。武器は日本刀が一本……一刀流か！

「いぎー！ 参るー！」

「…つくー！ 術式レベルHUNDRRED！ 変身！」

【迎る歴史！目覚める騎士！タドルレガシーー！】

互いの剣がぶつかり合い、火花を散らす。重い攻撃だ。力では向こうが上か……！

「なら俺は速度だ！」

走り出し、距離を取ろうとする……だが

「ついて……来るー！」

完璧に、いや余裕で追いかけてくる。

「こんなものか？ 興覚めよの……」

袈裟懸けの刀が迫る。慌てて魔法の障壁を張るが、なんと何の抵抗もなく障壁を切り裂いた。敵の刀が俺に迫る。すんでのとところでかわすことに成功した。

「速度も重さも、そして攻撃力もけた違い……お前は一体……」

「攻撃力？ フンツ、笑止なり！」

ギリギリチャンバラは元々一撃必殺の遊戯なり！ そなたも某も、一撃さえ入れれば勝負は決す！

「一触即決」それがこの勝負の決まりなり！ たとえ敵方の何者、無敵であろうが何だろ
うが、先に切ったほうに軍配が上がるのみ！」

一撃即死の勝負だと……!?! 冗談にもならん。くらった瞬間アウトとは……!!

「然るに！ ただの一撃、掠ろうが、指先で軽く弾こうが、「攻撃」が当たった瞬間、当てられたものに強制的な死が発動するというわけよ！」

魔法で後方に瞬間移動し、光の剣を出して奴のほうへと飛ばす。刀をプロペラのように体の前で回転させ、あっさりはじかれる。ならばとマントを硬化化させ、槍のように突き刺すがこれも刀の腹で受け止められる。そこへ魔法で眷属を召喚し、一斉に襲わせる。

「この程度の兵つわものなどぬるいわあ!! 喝!!!!」

なんと立った一薙ぎで10体すべて切り伏せられた。強すぎる。

「今世には限界を超え、修羅道を行く剣士がいると聞き及んでいたが………これっぽちとはな………期待外れよの………」

速攻で近寄って俺の剣を弾き飛ばす。とどめを刺さんと振りかぶられ、白刃が俺の体に食い込む……!

「ぬう!?! お主は!」

その直前、何かが割って入った。真っ赤な体の、あいつ……………

「東国統一にして唯一無二剣帝武士、海帝と見受ける……………俺の名は竜戦士グラフィイト、お前が探していた、「ゲムデウスウィルスに適合し、限界を超えて戦う修羅の戦士」とは俺だ! 仲間の仲間ブレイブに変わり、俺が相手をしよう!」

続く

第22話：劍帝武士VS紅蓮竜戦士

グラフィアイトはどうやら単純に強い敵と戦うためだけに来たようだ。そういえば最近あいつに会っていないかったし、大人しくするのもにも限界が来たのだろう。

「むう……………本来であれば一度「斬り捨て御免」といったからには仕留め損ねた場合は切腹するのが武士の在り方だが……………ここは今世。羸^{ソルテイ}琉帝も某を攻めることはあるまい」

「……………つまり、「受けて立つ」……………ということか？」

「……………ふっ、無論！」

……………完全に二人……………いや二体だけの世界にはいられたな。もう二体とも俺がいたことなんて忘れているんじゃないか？

「……………ブレイブ、後ろの奴は任せたぞ」

それを言われて振り返ると、そこにはあれだけ戦鬪があつたにもかかわらず、相変わらずケーキ屋の紅茶とロールケーキを食べ続ける、さつきカイテイのことを無視していた男がいた。

まさか……………あの男もバグスターか！

「……………ああ、美味しかった。定員さん、お勘定……………あれ、いないな……………まああれだけの騒ぎ、みんな逃げるか。……………さて、会うのは初めてだね。聖魔騎士ブレイブ。俺はゲーム「TADDLE FANTASY」ラスボス、勇者デイーノだ。宜しく頼む」

「……………術式レベルHUNDRED！ 変身！」

【ガシャット！ガッチャーン！レベルアップ！迎える歴史！目覚める騎士！タドルレガシー！】

グラフィアイトに助けられたなど、絶対に認めん……………！

グラフィアイト視点

さて……………気迫、足捌き、武器、構え、呼吸、視線、脱力度合、速さ、持久力、判断力、反射力、どれをとつても超一流といえる。正直言つて、体が震える。早く戦わせろ、死合しあひをさせると腕が、足が叫び声をあげている。

「……………フフ……………体が喘あはっているぞ、若き竜戦士よ……………」

直後に視界から海帝が消える…いや消えかけた。ギリギリ視界の端にとらえ、追いつがる。

「素晴らしい速度だな海帝！」

「ついてくるか！ ついてくるか！ グラファイト！ 面白い！ 面白い！」

……………さらに速度が上がった！ 一瞬の内に消え、あまりの速度に思考が止まる。直後に背後からの無音の殺気を感じ、半ばがむしやらにグラファイトフアングを振る。

「反応しよるか！ よい、よいぞ！ グラファイト！」

何とか博打に成功し、受け止めてみせる。今度は俺の番だな…………

「紅蓮爆龍剣！」

炎と斬撃が混ざり合い、一つの渦となつて海帝に降り注ぐ。

「炎と剣の絶妙なる妙技、しかと見せてもつらつたぞグラファイト！ 見事なり！ ……が、ただ太刀筋が甘い！」

渦の斬撃と炎を真つ二つに切り、海帝が飛び込んでくる。

「……………つくお!!」

正確に撃ち込まれた面打ちは、何とか受け止めた。が、俺の押し返した剣の跳ね返る力を利用し、今度は胴を狙ってくる。

一度でも剣が掠れば、こちらの負け。その事実が、いつもは死も恐れぬ精神を持つ俺の動きを初めて鈍らせた。……………が、何処まで行っても俺は竜戦士。体をひねり、無理くり避ける。無理な体制になつたためバランスを崩してたたらを踏む。

「ぬおっー」

結局転んだ。無様に、顔面から地面に体を打ち付ける。戦闘にも、死合にもあまりにも致命的すぎる無防備な背中をさらし、倒れこむ。その瞬間、死を確信する。……：嗚呼、どうせ死ぬならならもう少し、もう少しだけこの素晴らしい武士との戦いを続けたかった……

永遠にも思えるコンマ00の時、待てども来るはずの衝撃は来ない。ゆっくりと首を回し、目を開くと、剣を下げ、その場に立ちながら俺を見つめる海帝と目が合った。

「……………キ……………キサマ……………貴様ア
!!!! 何故!!! なぜ斬らん!!!? 何故俺を斬らん!!!? 俺への情けか!!!? それとも侮辱か!!!?

この俺を、グラフィアイトを!!! 竜戦士を、侮辱する気かアアアア!!!!!!」

俺は絶叫しながら海帝を睨めつける。やがて、奴はゆっくりと口を開いた。

「……………背中^の傷は、総じて逃げ傷なり。貴殿のような武勇に長け、未来への光あふれる者の最期を、そのような屈辱に満ちた傷で閉じさせるわけにはいかん。立つがよい。戦士も、武士も、忍^{しのび}も、それぞれが誇りを、思いを持っている。某の思いは一つ。「名譽ある勝利と敗北を」それ以外には一つもない」

「……………倒れた俺への追撃は、武士の……………いや、誇りを持つ者の恥と?」

「……………左様。それは、貴殿も同じはず」

「最高の戦いができた。悔いはない！」

「正々堂々と戦い、決着はついた！なのに貴様は、神聖な戦いに泥を塗った！」

「ブレイブ！スナイプ！俺に敵キャラを全うさせてくれた貴様らに、心から感謝する！」

……………そうだ、俺もあの時、確かに俺の望む敗北を得ようとしていた。

「……………戦いの、誇りの啓示、感謝する……………続けよう」

俺はグラフィイトファンングを構えなおし、目をつむった。

「……………心眼か。速度で劣り、目で追えないのであれば心の目でとな……………見事なり！」

心の目で、奴を見る。……………動いた!!!

自分のすべてを信じ、グラフィイトファンングを振るった。お互いの剣が交差する。

「……………何と……………」

海帝の剣は、俺の目の前の地面に突き刺さっている。つまり、俺がああ、剣帝の剣を吹き飛ばしたのだ。

「某の負け、か……………」

「……………いや、最初に俺は負けた。次に貴方に勝った。俺は、これでようやく貴方に並んだ」

海帝はしばらく考えるそぶりを見せ、そしてうなずいた。

「そうか……………ではこれは、分けということであるな？」

「……………ああ」

「とするならば、今回は勝負無しとするか。また会おうぞよ。わずかの戦い、間に成長す姿、まさに竹。竜戦士よ、さらば」

その言葉を残し、海帝は消えていった……………

第23話：NOBLEMAN　LADYは何処へ

三人称視点

「ベイオウルフ、ごきげんよう」

「む？　どうしたエリーゼ」

椅子に腰かけ、これからの戦略を練っていたベイオウルフにエリーゼが声をかける。犬猿というわけでもないが、特別親しいわけでもないためにベイオウルフは少し怪訝そうに首をかしげた。

「ソルはいるかしら？」

「いや……………見ていないな。何かあったか？」

単純に興味があつたのか、掘り下げてベイオウルフは質問した。

「なら言伝をお願いできるかしら？」

「いいだろう。それで、用件は？」

5 mもの巨体を持つ魔王だが、こう見えて彼は仲間、友人思いな部分がある。快く承諾し、近くのメモ用紙を一枚はがしてペンを手に取る。5 mもあるだけあって、持っているペンはまるで爪楊枝のようだ。

「この度私わたくし、リリム・シフォン・エリーゼは、バグスター連合を除名させていただき、特別隊長の座を解任させていただきました。と、伝えて頂けるかしら？」

「……………何？」

聞き間違いか何かかというような風に、完全に思考が停止している。

「お前……………本気か？ 裏切りは第一級の厳罰、死罪が下されるのだぞ？」

「もちろん、理解していますわ。それを踏まえた上での行動なのよ」

椅子からゆつくりとベイオウルフは立ち上がり、真つすぐにエリーゼを見下ろす。

「本気なら、我は貴様を殺さねばならん……………」

「それ」を言った瞬間、エリーゼから圧倒的なプレッシャーがベイオウルフにたたきつけられた。ベイオウルフは何とか踏ん張ろうとするが、うまくいかずに少しよろめいてしまう。

「あら？ 何か思い違いをしているようね？ ねえベイオウルフ、貴方あなたごとき雑魚が私を死刑にできる、と？ 勝てる、と？ 本気で思っているのかしら？ ふふ、お笑いね。戦術や剣技がどうのこうのいう前に、「無謀」という言葉を教授してあげても宜しくつてよ。」

「……………ぐむう……………」

ベイオウルフは何も言い返せず、どもるばかりだ。何故なら今エリーゼが言った言葉

はすべてバグスター連合にとっては周知の事実だからだ。勝てない。その事実はたとえ天地がひっくり返ったとしても変わらないものだった。

「死なばもろとも……!!?」

「あら、来たのね」

決死の覚悟で亜空間から剣を取り出したベイオウルフの腕を現れたハイパー無敵ソルティが掴んだ。

「やめておけ、ベイオウルフ、無駄に傷を負うことになる」

「ぐっ……だっだが！ これでは副リーダーの面子も何も無いぞー！」

「面子を気にして無駄死にした副リーダーか、それも笑えるな」

またしてもベイオウルフはどもり、黙った。

「さて、リーゼさん、貴方は確かに好きな時にこの連合を辞め、気が向いたならまた入ることが出来る唯一の特別枠です。だからこそ、本来「特別隊長」のみでなく貴方だけに「特別隊長」の座があるのです。

しかし、意味もなくやめるのは困ります。差し支えなければ理由をお聞かせ願えませんでしようか？」

「あら？ 女が動くとき、そんなものは決まっているでしょう？ 愛する方のためですわ！」

後方から珍しく出たベイオウルフの素つ頓狂な「はあ!？」という声をハイパー無敵ソルティは黙殺し、うなずいた。

「承知しました。これまでありがとうございます」

まさにとつてつけたような社交辞令。ハイパー無敵ソルティが顔を上げるときには、もうエリーゼの姿はなかった。

「おい！ どういうつもりだソル！ 何なんだあのふざけた理由は!？」

ベイオウルフは激昂しながら掴みかかるが、

「仕方ないでしょう………なにせよ、恋はある意味難病です。治るといいのですが………」

ハイパー無敵ソルティは完全に自分の世界に入っていた。

エリーゼ視点

「さて、これで私は自由の身ですね。ちやちやと荷物をまとめて出ましようか」

つぶやくと同時に、早速荷物をまとめる。生活に必要なものは持つて行って、趣味のお酒や備蓄していた食べ物はおいていきましよう。使用人たちと一緒に、荷物を運び出す。思えばそこそこ思い出があるものね。

お酒の一气飲みの勝負をするソルとキッドの二人、喧嘩する二人、最後の勝負をしていた二人……何だか二人のことばかり出てきてしまいわね。とても下戸な海帝、馴染まないうちに出て行ってしまったグラフィイト、やたら天上に頭をぶつけるベイオウルフ、いつも大騒ぎする三人組のグレンラガンソルテイ、スガーにペツポー、思い出があとからあとからあふれ出てくる。

私はこれから、ある人に会いに行く。一目惚れ、というか一番好みのタイプのあの人、なよなよ弱弱しくなくて、

俺は完璧に出来るんだっていう傲慢そうな風でもなくて、

やたら偉そうでもなくて、

チャラチャラもしないで、

ゲーム大好きでもなくて、

脳筋な風でもない、

不器用な優しさがあるあの人、ああ、考えただけで胸が切なくなりますわ……………

一ヶ月後

「……………」
俺の名前は宝生永夢。今は浮浪者をやってる。

少し前まではCRで皆と一緒に戦っていたんだけど、もうそれもやめた。

ゲームドライバーもライダーガシヤットも、小児科医師免許証も失って、ただその日その日を生きるだけ。

もう、戦うのが疲れた。嫌になった。

いつもの食事場所に行くと、黒い袋の上にカラスがわんさかいる。

……………こいつら、俺の飯を……………

「おら、散れ散れ。俺の飯だぞ」

カラスを払いのけ、ビニール袋を腕で破く。中から野菜の欠片やら食べ残しの肉に冷えたスープ、この匂いはコンソメ、野菜、それとシチューやらめんつゆやらか？ いず

れにしても、旨そうな匂いが立ち込める。

袋の中に頭を突っ込み、食べる。……………旨いな。

しばらく食べ続けていると不意に目の前の扉が開き、中からレストランの雑用係が出てきた。

右手には黒いビニール袋……………新しい飯だ！

「おい」

「うわ！ お前……………また来てやがったのか！ 帰れ帰れ！ うちの残飯いつも食い散らかしやがって！」

「食いもん寄せ。そうすりゃ帰ってやる」

袋を凝視しながら近づくと、不意に頭に衝撃があった。どうやらあいつが不審者とかを追いかう用の棒でたたいてきたみたいだ。 野郎……………

「やりやがったな!!!」

駆け寄って思いきり顎を打ち抜いた。奴はそのまま近くのごみ箱の上に倒れこみ、倒れたごみ箱がけたたましい音を立てた。

「おい！ どうした？」

「何かあったのか？」

しまった。扉の奥から声が聞こえる。それにこの裏路地に表通りの連中が今の音で集まってきた。

俺は急いでその場から離れた。もちろん奴が持っていたビニール袋も持って行く。

しばらく走り続けた。もう大丈夫だろ。いつも通りに橋の下へ入って、座り込んでビニール袋を開けた。

………ラツキーだったな。肉が多い。調理前の下ごしらえの段階で切り取られた生の脂身もあるが、お構いなしにかぶりついた………うめえなあくくく

さて、腹も膨れたし、明日の朝まで寝るか。近くに落ちているダンボール箱をかき集めて、布団を作る。

………まあこんなもんだろ。

そのまま横になり、目をつむる。

突然の音で起こされた。顔を上げるとバイクをブンブン鳴らして、ゲラゲラ笑っている暴走族が目に入った。

「おい！ うるせえ！ 寝れやしねえ！ 静かにしろ!!!」

大声で怒鳴るとあいつらはこっちに来た。

「なんだ、こいつ……………ってホームレスじゃねえか！ ウケルｗｗｗｗ」

「やっぱ！ 超汚ねえｗｗｗｗｗｗ 臭そうｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「……………チツ……………」

めんどくせえ。殴ったほうが早えな。殴るか。

そのまま三人ぐらい殴り倒したら、蜘蛛の子散らすように逃げていった。……………ザコ

……………

もう一度横になって目をつむる。ふとCRの思い出が頭をよぎった。

ポッピィ…

黎斗…

貴利矢…

飛彩…

大我…

院長…

パラド…

………俺には、元々過ぎた場所だった。ここらへんでダラダラ生きていくほうが気が

楽だ。

人殺しの俺には、病院なんて場所は眩しすぎる。

バグスター連合：崩壊編

第1話：Hello 俺！

副題：「俺」が「お前」で「お前」が「俺」で

パラド視点

「パラド！ 救急通報だ！」

「ああ！ 行くぜ！」

永夢と一緒に、走り出す……………が、途中で急に意識が遠のいた。その場にうずくまり、うめく。前を見ると、気づかずに走り去る永夢の姿があった。永夢……………つたく、気づく。く。普通……………

・
・
・
・

目が覚めると、何だか見たことがあるような気がする場所にいた。

……………そうだ、俺が永夢に無敵の力で圧倒されて倒された、あの場所だ！

「気が付いたみたいだな……………ここは、俺がお前と別れた場所だ」

声のするほうを見ると、誰かいる。誰だ？ 真つ白なタキシード、髪型はパーマで俺とそっくりだけど髪の毛の長さはだいぶ短め。顔は……………俺？
!!!?

「よう、俺」

声も、しぐさも、顔も、どう見ても俺だ。俺そのものだ。

「お前は……………一体？」

「俺か？ 俺はあの日、永夢に負けたお前が失った感情が具現化したものだ」

「感情……………？」

こいつの言っていることがわからない。こいつは一体何なんだ？

「お前がエグゼイドに敗れた時、お前は主に

命の重要さとその意味を知り、守ろうとするものと、

命を踏みにじり、新たな世界を贈ろうとする、戦い続けることを選んだ二人に分かれ

たんだ」

「まさか……………お前のその髪の毛の長さは……………！」

「そうだ。俺はお前。お前は俺。俺は一番最初の頃の「心」を持ったお前だ」

まさか、俺が二人に増えるなんて……………そんなことが？

「納得いかないって顔してんな。俺とお前はもう会ったことがあるんだぜ？」

エグゼイドと協力して、クロノスを倒すときのとっておきで俺に言ってくれたじゃねえか。

「俺、ナイス！」 ってさ……………？」

「な!?! あれが……………お前!?!」

「俺はお前を助けに来たんだぜ？ いつの間にはお前は、仲間ができちゃった。そして、それを見捨てられなくなった。」

いいか？ たいていのゲームは主人公以外の仲間は死んだっていいんだよ。最後にプレイヤーが勝てば、エンディングはみられる。いちいち死にそうな仲間助けて時間食って、おまけに自分まで危険にさらして…お前の「強さ」は一体どこに行っちゃったんだ？ そんなんじゃ「天才」どころか「ゲーマー」にすらなれないぞ?」

「……………ふざけんな……………！ 俺は……………お前みたいにはならない！ お前には「心」がない！お前は、ただの勝利に癒着する機械だ！」

勝つために命を犠牲にするなんて、認められない。俺は唾を飛ばして叫んだ。

「はっ！」

俺の言葉を聞き、あいつ、もう一人のパラドクスは心底信じられない、という顔をした。

「お前……………それ本気で言ってるのか？ 俺に心がないって？」

なめるのもたいがいしろ!!! 俺はなあ！

お前なんかよりも失われる命の重要性、命の意味を分かっている!!!」

「どういうことだ？ 本当にこいつは分かっているのか？ ……いや、でもあいつはさつき確かに仲間は死んでもいいって……………」

「はあ……………もういい。……………ツチ まさかこんな奴がこの戦争の元凶の一人なんてな……………」

「……………俺が、元凶？ ど、どういうことだ？」

「それについては、俺からお前に言うことは何にもない。ただ、これだけは言うておく。バグスター連合の側につけ。それだけでお前の罪は許してやる」

「俺がお前から側につくって……………本気でそう思ってるのか？」

「いいか？ まずお前が戻れば、エグゼイドのマキシマムマイティブラザーズWMAXは使えない。そして当然レベル99越えの力を持つグラフィイトも味方になる。レベルと、物量の差でバグスター連合が戦争に勝つのは確定的だ。それにお前と俺がまた一人に戻れば、「天才」を超えた究極の戦士が誕生するはずだ。今夜、俺はお前にまた会い

に来る。答えを聞かせてもらおうぜ？」

言いたいことだけ言って、あいつはどこかえ消えていった……

第2話：誰も気づかないRESET

飛彩さん視点

「さて、始めようか………培養！」

【Infection! Shoot game! Bad game! Dead g

ame! Fuck game! I'm a Bugstar!】

「うおおおおお！」

お互いの剣をぶつけあい、押し合う。パワーは互角のようだ……

「ならこいつだ！」

空中に魔法を展開し、光の剣が奴に殺到する。

「俺にもそのぐらいはやれるさ！」

相手も同じ魔法を発動し、引き分けになった。

「やるなブレイブ！ 勇者の俺と互角とは！ たかが医者風情が！」

「見下したいのか褒めたいのかどっちだ！」

??? 視点

「どうだ？ 素晴らしいだろう!! このまま実験の戦闘データが収集できれば、世界最強の力が手に入るぞ！」

「ええ、おめでとうございます……ですが、このままでは少々まずいかもしれませんね」

「ん？ 何が言いたい？」

「ブレイブとディーノの力が等しくすぎます。このままでは決着がまずい方向になってしまふ気が……いえ、すみません、口が過ぎました」

「なになに、気にするな。お前は私の大切な右腕だからなあ……確かにお前の言っていることも念頭に入れたほうがよさそうだ……」

「それでしたら、一応スイッチの用意を……」

「いや、それはいい。いったんもう少し戦いを見てみよう。意外なところで差が出るかもしれない。これもデータの一つだ……」

「流石です。ではこのままもう少し見てみましょう。私は引き続き、この二人の戦闘

データの数値化を進めます」

「ああ、分かった……………」

飛彩さん視点

くそ、戦闘を初めて一時間、一向に勝負が決まらない……………」

「ブレイブ、このままでは永久に終わらなさそうだな……………」

「これで……………終わらせる!!」

【TADDLE CRITICAL FINISH!!】

お互いの剣が交錯し、両方とも炎に包まれる。そして……………」

「引き分けか……………やるじゃないか、ブレイブ……………」

「が……………く、くそ……………」

ライダーゲージが0になり、変身が解除される。そして……………」

【GAME OVER】

「さ、小姫……………すまない……………」

俺の体は粉々になり、空中に溶けていく……………」

???視点

「ブレイブも死んでしまったか．．．．．君の言うとうりになってしまったな．．．．．」

「仕方ないでしょう。こういうこともあります。で、どうします？」

「単純に生き返らせただけでは、また同じ結果になる、か．．．．．」

「わかりました、手は打ちます。任せてください」

「ああ、任せただぞ」

「では失礼して．．．．．」

【RESET】

グラフィアイトはどうやら単純に強い敵と戦うためだけに来たようだ。そういえば最近あいつに会っていないかったし、大人しくするのも限界が来たのだろう。

「むう………本来であれば一度「斬り捨て御免」といったからには仕留め損ねた場合は切

腹するのが武士の在り方だが……ここは今世。麤琉帝ソルテイも某を攻めることはあるまいて」

「……………つまり、「受けて立つ」……ということか？」

「……ふっ、無論！」

……………完全に二人……いや二体だけの世界にはいられたな。もう二体とも俺がいたことなんて忘れているんじゃないか？

「……………ブレイブ、後ろの奴……は任せたぞ」

それを言われて振り返ると、そこにはあれだけ戦鬪があつたにもかかわらず、相変わらずケーキ屋の紅茶とロールケーキを食べ続ける、さつきカイテイのことを無視していた男がいた。

まさか……………あの男もバグスターか！

「……………ああ、美味しかった。定員さん、お勘定……………あれ、いないな……………まああれだけの騒ぎ、みんな逃げるか。……………さて、会うのは初めてだね。聖魔騎士ブレイブ。俺はゲーム「TADDLE FANTASY」ラスボス、勇者デューノだ。宜しく頼む」

「……………術式レベルHUNDRED！ 変身！」

【ガシャット！ガツチャーン！レベルアップ！辿る歴史！目覚める騎士！タドルレガシー！】

グラフィイトに助けられたなど、絶対に認めん……………！

第3話：謎のFantasy

飛彩さん視点

「……………あれからしばらく攻防が続くが、一向に決着がつかない。何をやっても同じ攻撃力で、毎回相殺し合ってしまう。無意味に時間だけが流れていく。」

「ブレイブ、このままでは永久に終わらなさそうだな……………」

向こうも理解しているようだ。一か八か、決めてやる！

「これで……………終わらせろ！」

決め技を放とうとした俺の体に何かが投げつけられた。見ると、そこにはガシヤットギアデュアルβが落ちている。誰かが俺に向かって投げたようだ。

「これは……………」

拾い上げてみると、真ん中に綺麗に線が書いてある。……………そうか！

「物は試し……………俺に切れないものは、無い!!!」

空中に放ったデュアルβに一闪、線をなぞるように真つ二つに切り裂いた。

【TADDLE FANTASY…Let's Going King of Fantasy!】

【TADDLE LEGACY】

「術式レベルHundred fifty」

二つのガシヤット、タドルレガシーとタドルファンタジーを起動し、ゲーマドドライブに差し込む。

【デュアル！ガシヤット！ ガシヤット！ ガツチャーン！ デュアル・レベルアップ！

辿る巡るRPG！ タドルファンタジー！ アガツチャ！ 辿り着いた世界！

神々のレガシー！】

「本当に変身できるとはな……………」

正直賭けの要素がかなり強かった。成功に胸をなでおろし、同時に自分に備わった強大な力に気付く。

「フーン！」

いつもと同じように空中に魔法の剣を展開する。ところどころ黒い剣が目立つが、いつもの倍ほどの剣が出現した。

お互いの飛ばした剣が交錯し、相殺し合って消えていく。当然数が多い俺のほうに軍配が上がった。

「ぐあつ……………くそー！」

苦し紛れに障壁を張っている。前までなら破れないが、今回はどうだ？ 拳を握って一撃、多少の抵抗を感じたが、拳は障壁を突き破り、そのままディーノの命中した。

距離を取ろうとするが、追いつがって切りつける。

「これで……………終わらせる!!」

〔FANTASY・LEGACY CRITICAL FINISH!!〕

ディーノは炎を、俺は剣を氷に変えて撃ち込む。お互いの剣が交錯し、俺に炎は届かない。目の前には、氷凶家になったディーノの姿があった。ガラガラと崩れ、消えていく。

「……………よし……………」

あのまま戦いが続いていたら恐らく相打ちになっていただろう。そう考えると寒気がする。だが、勝った。周りを見回すが、誰もいない。

「……………このデュアルβは……………誰が……………?」

誰もいない虚空に向かって、俺はつぶやく。静まり返った場所で、風の音だけが嫌に大きく感じた。

??? 視点

「勇者が一人に、魔王が二人……か……なかなか良かったぞ」

「有難うございます。それで、この後はどうしましょう？」

「そうだな……ブレイブのデータはこれくらいでいいだろう……次はスナイプだ」
「分かりました。少々お待ちください」

第4話：大我とNOBLEMAN LADY

朝早く、「花家ゲーム病クリニック」の扉をたたく音がする。なぜか急ぎを感じる風に大きな音で乱暴な音という感じではなく、絶妙に中にいる人物に聞こえるように、しかしあまりうるさい音という感じがしない。

大抵いつも、ドアを破らんばかりのけたたましい音とともに、担がれた患者が入ってくるのが普通だが……

ま、まさか電気、水道、ガスの集金か？ 金、足りるよな………？

「……………すみません、何方どなたか居らっしゃいませんか？」

財布の中身を確認していると、訝しんだような声が聞こえた。……ええいままよ。行くだけ行って、金が足りなかったらお帰り願おう。

「はいは……………えっと、どなた？」

ドアを開けると、目の前に金髪の女がいた。それも昔の貴族が来ているようなドレスを着ている。ゆっくりと首を後ろに回し、カレンダーの日付を確認する。……………今日はハロウィンではない……と。

「御機嫌よう、花家大我様。

わたくし

私の名はリリム・シフォン・エリーゼ、元ではありますが

一応侯爵令嬢でしたわ。この度は事前に何の連絡も申し上げず、急に此方へお邪魔してしまつた事、先ずはお詫び申し上げますわ。何卒、平にご容赦を……」

「え？ あ？ う？ その、ええと？ お、お気になさらず……？」

急に大人顔負けの自己紹介。対応にただただこまる。しかも誰なのかほとんどわからない。

……つやばい、俺とこの女で使っている漢字に数の量が違いすぎる……これじゃ、俺がアホみたいじゃねえか……つと、メタいな。

「……えつと、すまんが結局誰なんだ？ 肩書や名前だけじゃわからないんだ」

そう言うと、その女は花のようにふわりと微笑み、口を開いた。

「うふふ……それでしたら、ゲーム「ときめきクライシス」のラスボスバグスター、と言えば宜しいかしら？」

「な!？」

とつさにその場から飛びのき、距離をとる。ゲームドライバーを腰に巻き、ギアデュアルβをもって睨みつける。

「てめえ、何が目的だ？」

「あらあら……そんなに怖い顔をしないで下さいまし。年上の殿方に睨まれてしまつ

たら、どんな女性でも恐がってしまいますわ……どうか落ち着いて貰えないでしょうか？」

しばらく無言でにらみ続けてみたが、完全にどこ吹く風だ。まったく動じずにニコニコ笑ってやがる……

「……………わかった……………まあ話だけなら聞いてやる。何の用だ？」

そして、俺のある意味での地獄の幕開けとなつた呪文がこの直後に放たれた。

「……………実は私、貴方に、花家大我に恋をしてしまいましたの。なので、できれば此方で貴方の仕事のお手伝いをしたいのですけれど……………いかがかしら？」

「……………は？」

第5話：大我のHARD SHIP

「ちよつと大我！ 何この人形みたいな人！」

「大我様！ まさかもうお相手がいらっしゃったのですか!？」

今、俺はニコとエリーゼの両方に挟まれている。はつきり言つて地獄だ。

「いったん二人とも落ち着け……頼むから落ち着け」

その後しばらく、ニコにはエリーゼが来た経緯を説明。エリーゼにはニコとの関係を説明した。

「……………というわけで、俺とこいつはそういう関係じゃない。分かったか？」

「そ、そうですの……………良かった……ここまで来たのに、その日のうちに散る恋なんて、笑えませんわ！」

……言うまでもないが、この病院の仕事を手伝わせるとかありえない。さつさとお帰り願おう。エリーゼにその旨を伝える。

「大我様は私わたくしのことが嫌いなんです……………？」

……………そんな小動物のような目で見てもだめだ。ウイルスと一緒に仕事をする病院なんて、冗談じゃない。

「嫌いとかじゃなくなてな……無理だ。俺はすべてのバグスターをぶつ潰すって決めてんだ」

「あら？ ではポッピーさんも倒してしまうのですか？」

「あいつは………いいんだ。次裏切ったら殺るって決めてる」

「では私は？ 殿方を襲った記憶なんて有りませんが？」

「………」

してやったりという顔でエリーゼがフンスと鼻を鳴らしてどや顔になる。………うつつぜえ。

「ダメだここは病院だ」

「病院には菌が溢れていて当り前………というかワクチンなどにもウイルスは使うのでは？」

「CRに行け」

「何時でも大我様のお傍に………」

「………自分の連合に帰れ」

「辞めました」

「………出ていけ」

「シンプルですね。では私もシンプルに………」

嫌、です♡」

「……………誰か助けてくれ……………」

こうなったら力づくでたたきだすか？

「時に、大我様？ 病院の経営のほうはうまくいつてらっしゃいますか？」

「……………何が言いたい？」

「檀黎斗への賄賂の散財、医療器具の維持費、光熱費、バグスター専門という政府の認可になつてしまったため元の闇医者稼業は続けられず、かと言つてほとんどの患者さんは大手の電腦救命センターCRに行つてしまう……………半分趣味でやっている株も大した実りは期待できず……………」

こ、こいつ……………まさか、すべて知つたうえで……………！

「建物の老化も著しい……………建て替え、もしくは補修工事が必要ですね……………その上で水道、ガス、電気代、バイトへのお給金……………大丈夫ですか？」

「な、なに、が……………いい、たい？」

「私が代わりにお支払いしましょうか？」

一瞬、目の前のこいつが女神に見えたというのは墓場まで持つて行こう……………

「お、お前になんの、なんの得がある……………」

「ええええ、勿論、お慕いしている方が貧困で苦しんでいる等と言うのは此方もとても心苦しい事です。それに、好きな方の力に少しでも成れたらと思うのも、当然でしょう？
それに、代わりに私を此処で働かせて頂きたいと言う打算も有りますし、其れに付きましても手伝いが増えるという意味では貴方の方にも十分に利が有るでしょう？
如
何ですか？」

も、もう駄目だ……………断れねえ……………

「ちよ、ちよつとお！ そんなの認めないし！」

俺が折れそうになったところで、たまりかねたニコが割って入った。

「美女と野獣が一つ屋根の下とかあり得ないし!!」

……………おい、誰が野獣だ。

「そ、そうだ！ あたしが稼いだお金で……………」

「あら？ ゲンムコーポレーションの立て直して全て株に代わっているのでは？」

「……………あ」

ニコでもダメか……………終わった、な……………

「い、いいし！ 株全部売るし！ お金に換えてやる——！」

「やめろ、あの会社がつぶれる」

……こうして、俺の病院、花家ゲーム病専門クリニックにバイトが一人？ 増えた。

第6話：大我とNEW HOUSE

そこから数時間後、凄まじいの一言だった。恐らく俺が言いくるめられるのを分かってたんだろう、次々と病院の中に業者の奴らが入ってきて慣れ親しんだギシギシと鳴るベッドをはじめ、ガタつく机、うまく高さの調節ができないイスなど古そうなものはすべて持っていかれ、代わりに新品の、いかにも西洋貴族のお屋敷にありそうな家具様たちが運び込まれてきた。壁は速攻で傷んでいる部分は張り替えられて上からタイルを張られ、床は磨かれワックスをかけられ、机の上のPCは最新機器に代わっていて、ポケットWi-Fiで済ませていたのに光回線が入ってきて、画鋲で壁につけていた時計は柱時計に代わり、もはや別の場所に移動したみたいだ。

「ど……………何処なんだ？　(こ)……………」

「……………マジ意味分かんないんだけど……………」

少し前までいつも通りの、汚いながらも掃除をいつも欠かさなかったオンボロの俺の病院という名の城は外見はともかく内面はもうなくなっちゃった……………

「はは……………見ろよニコ……………このベッド、人をダメにするやつだぞ……………ほくら、ふかふかだ……………あははははははは……………よくみりやあのイスも……………はは……………」

ベッドの上でゴロゴロ転がってみると、ニコが悲しい顔をしていた。

「ああ……………大我が壊れた……………」

壊れてねえよ……………壊れたふりでもしてねえとやってられねえんだ……………

「どうすんだよこれ……………」

「アタシ、ちよつと文句つけてやる！ 待つてて大我！」

頼むぞニコ……………俺はもうだめだ……………お前が…最後の希望だ……………！

「ちよつとお！」

「あら西馬さん！ 玄関先のあの「花家ゲーム病クリニック」の看板は、もしかしてあなたか？」

「え？ そ、そうだけど……………」

「素敵ですわ！ とても読みやすくて、引き寄せられる内容！ 色とりどりの色彩は、と

ても気品がありますわ！」

「えっ!? つそ…そうかな……………へへ……………」

「ところで、少々髪の毛が痛んでますわね……………こちらのリンスなど如何かしら？」

「ああ、最近夜遅くまでゲームしてたから……………つてそれ！ すごい高い奴じゃん！

いいの!?!」

「ええ、もちろんですわ」

「うわ〜！　ありがとう〜！」

ダメだ……あつさり手なずけられた……

「大我くすごいのもらっちゃった〜！」

もう駄目だ……全員やられた……こうなったらCRに連絡を……

「エリーゼさんはいい人だよ！　私を逃がすのを手伝ってくれたし！　この明日那さんとポツピーが保証するよ！」

……ダメだった……

くそ……もうどうにでもなりやがれ！

「大我院長、コーヒーをどうぞ」

エリーゼがコーヒーを持ってきた。院長つて俺か……

「……………う、うめえ……………!!!何だこの旨さは……………! く、くそ……………ニコと同じように俺が高級なものでつられると思うなよ……………!」

そう思いながらエリーゼのほうを見ると、インスタントコーヒーの袋をいそいそと片付けるエリーゼの後ろ姿が見えた……………なん…だと…

「カップに粉と水を入れて電子レンジに掛けたんです。こうする事で苦み、酸味、コク、香りが深まりますわ。コーヒーの温度は80度から90度ぐらいにしています。こうすることでまろやかな味わいになってさらに香りも引き立ちますわ。基本的に温度が高すぎると苦味が増して、低すぎると酸味が増すので、自分の好みに合わせて温度を調整するので、今回は私の好きな風に入れてみましたわ。お口に合ったかしら……………?」

旨すぎるとはとても言えず、俺は仏頂面でコーヒーをがぶがぶ飲み続けた……………

第7話：PARA∥DXそれは……

「心」

永夢視点

また救急通報が鳴ってる……現在時刻23時……場所は……CRの裏か！
……前の時は結局途中でパラドが消えちゃうし、現場に行ってももう飛彩さんが片付けた後だったし……

「パラド、行こう。今度ははぐれるなよ？」

「……………」

「…パラド？」

「……………！ あ、ああ。そうだな。い、行こうぜ…」

やっぱり何だか変だ。何か悩んでるんだろうか……考えても仕方ない！ とにか
く行こう！

パラドと走り出し、ふと前を思い出す。僕が必至で走ってたからパラドとはぐれたん
だよな……………まさか、いや、まさかね……………思いつつ、一応後ろを見る
……………パラドがない！

「ちよ……………嘘だろ！ パラド!? おーい！ パラド〜!？」

ダメだ……くそ、まだいくらも走ってないのに……
「後から来いよ!!」

誰もいない闇に向かって叫んだ。仕方ない。マキシマムマイティXで行こう……
しばらく走っていると、前に三人の人影が見えた。

「よく来たなエグゼイド……俺はゲーム「デンジャラスゾンビ」ラスボス、ゾンビスレ
イヤーのクリスだ」

「ワターシはゲーム「シヤカリキスブーツ」ラスボス、カヴェンディッシュだヨ〜」

「ピピピピ……システム起動…戦闘人形モードレベル130、ワタシハゲーム「ゲキト
ツロボッツガシャット」裏ボス、Neoガットン」

「んで毎度だぜえ！ ガルーダだア!!レベルは200ウ!!!」

「久しいなエグゼイド、言うまでもないが、ベイオウルフだ……」

………ちよ、多くない？

パラド視点

永夢一緒に走っていると、不意に道の横に「俺」が現れた。永夢は気づいてない。永夢……ごめん。そっちは任せた。俺はこいつと戦う……！

「思いきりがいいんだな。じゃあ約束の時間だ。広い場所へ行くぞ。」

もう一人の俺と歩き始めると、後ろから声が聞こえた。

「ちよ……嘘だろ！ パラド!? おーい！ パラド!?」

……ごめん、永夢……これは、俺の問題なんだ……！

「後から来いよ!!」

……ああ、分かっている。すぐに行く！

「……さあて、ここらへんでいいだろう。……で？ 答えは？」

「お前もわかりきってんだろ……！ 断る！」

「……まあそうだろうな。じゃあお前を倒して取り込むしかねえ……勝負と行こう

ぜ。」

「心」を持ったお前が勝つか、「心」を持つてる俺が勝つか……完全に決着付けようぜ？」

「時間がねえ、行くぞ！ マックス大変身！」

【デュアル！ ガシャット！ ガツチャーン！ マザルアップ！】

【赤い拳強さ！ 青いパズル連鎖！ 赤と青の交差！ PERFECT KNOCK

OUT!

「仮面ライダーパラドクス…レベル99………」

俺の変身を見届けて、あいつは懐から紫色のゲーマドライブを取り出した。

「な、なんだそれ………?」

「これか? これは檀黎斗が死蔵していた奴で、プロトマイティアアクションXガシャットオリジンよりももうひとつ前に作られた奴だ。名前は「ゲーマベルト・プロトタイプ」だ。そして俺の体から出た情報をもとに作ったこのガシャット……ガシャットギアデュアルBUGだ………」

始めるぞ。最大変化」

【ガギャット! バッギヤーン! ノウリョクジョウシヨウ!】

【青きパズル強化! 赤の拳殴打! ゲーム世界王者! 完全 決着!】

「2つのレベル50のゲームが淀みなく混ざった………The・Bugstar Ob
iパラドクス…」

レベル100………来いよ、パラドクス、お前のすべてを否定してやる」

第8話：本当の「天才」ゲーマー

パラド視点

「お前を片付けて、一秒でも早く永夢と合流する……………」

「ツハハ……………」
「二兎追うものは一兎も得ず」、だぜ……………」

せこい先々の戦略考える暇があったら俺に攻撃してこい!!!」

【ガシヤコンPARA||BLEGUN】

俺は武器を顕現して襲い掛かる。

「太刀筋はいいな。流石俺だ」

空中にあるホコリをつかみ取ることは、基本的に難しい。あまりに軽すぎるため、握ろうとしたときの空気の流動によって吹き飛ばされてしまうからだ。いま、まるでもう一人の俺はまるでホコリのように完璧に俺の動きに対応し、ギリギリの、一つよ避けそこなえば重大なダメージに繋がる攻撃を避けている。

それも、恐らくわざとギリギリに、しゃべる余裕さえありながら、全く反撃してこない。

「なめんなー!」

虚勢を張るが、どこ吹く風だ。俺はゲームエリアのアイテムを一か所に集め、選択作業に入る。

（高速化は下。マッスル化は一つ上。鋼鉄化を左に：!?)

「あつ…!?!」

アイテムの連鎖を確定しようとしたときに、いきなり俺の意思とは別の動きが起きた。せつかく並べたアイテムが滅茶苦茶になってしまった。前を見るとObiパラドクスがしきりに左腕を動かしている………そうか！こいつにも俺と同じ能力が………！

「勝負中に相手から視線を斬るのはいただけないぜ？」

奴の右腕が、気づけば俺の胸の三センチほど前に停止している。

…俺は悟る。次の瞬間、この腕は動く。俺を打つ。

（ヤバイ！）

（避ける！）

（避けれる？）

（避けなきやヤバイ！）

（どう避ける？）

（飛ぶ？）

（ダメだ！）

（足が伸びてる！）

（足を曲げなきや、）

（飛ぶことはできねえ！）

（間に、合わねえ！）

（下がる？）

（ダメだ！）

（距離が近すぎる！）

（踏み込まれたら、）

（即座にアウト！）

（武器を…！）

（ダメだ！）

（斧じゃ降るよりも早く来る！）

（銃に変える？）

(両腕の距離が開きすぎ…)

(つていうか、)

(変えてもどうにもなんねえ！)

俺はあつという間に次の瞬間までの時間を使い果たし、奴の掌底が胸を打つ。

俺は遙か後方に吹っ飛ばされて、その勢いのまま壁に激突した。永夢と戦った時もこんなことがあったなど、一瞬まったく今の戦いと関係ないことを考えていた。

意識を集中させ、膝立ちになる。

目の前に何かある。

相手の足だ。

サッカーボールを蹴るみたいに威力たつぷりの右足がガードした俺の腕もろとも顔面を打った。

後ろにはね飛ぶが、後ろは壁だ。またしても壁に突っ込む。

ミシリと鳴った音は俺の腕からか？顔か？それとも壁か？

そのまま俺はズルズルと倒れこんだ。

「おいおい……………まさか二発で終わりか？ 冗談だろ？」

まったく……………しようがねえな……………」

【回復】

急に力がこみ上げ、体力が戻る。

「な、何のつもりだ……………？俺を助けるなんて……………？」

「別に、お前を助けるつもりはないさ。ただ……………後から「俺のほうがレベル1低かったから負けた」なんて言われたら困るからな。だからハンデだ。

1：俺は武器は使わない。

2：エナジーアイテム取得の邪魔はするが自分では取らない。

3：お前が死にかけたり完璧に決着がついた場合でも5回までは助ける。

以下の三つを約束するぜ」

余裕も余裕ってわけか……………この野郎…上等だ！

「舐めたプレイしやがって……………!!!」

「舐めてなんかないさ。むしろお前にとってはフェアだ。ここまでハンデがあれば、お前もさすがに「次こそ勝つ」とか分け分かんねえこと言って逃げだしたりしねえだろ？」

勢いをつけて殴りかかるが、まったく攻撃が当たらない。こうなったら…！

【高速化】

エナジーアイテムを取った俺は一気に最高速になって襲い掛かる……………」

「あ、当たたら……………」

攻撃がまつたく当たらない。何度やってもギリギリに最小限の動きで躲される。

「いいか？　高速化のエナジーアイテムは確かに移動速度が跳るが連続攻撃には向かないんだよ。」

あまりの速さで逆に小回りが利きにくくなってどうしても攻撃の動作が予備動作が大きく、隙だらけテレフオンな攻撃になる。

だからお前の攻撃は出が早くなっただけで実際は元より避けやすくなってるんだよ。」

だから俺は最小限の動きで躲せる。さらに……………」

正面から飛びかかろうとした俺は顔面に肘をぶち当てられて宙を舞う。さつきよりもダメージがでかい！

「このように相手の攻撃速度、推進力が高い場合は迎撃に成功できればカウンターパンチとしての効果が期待でき、より相手に与えられるダメージは深刻なものになりやすい……………」

な、なんで……………なんでこんなに差があるんだ？　同じ自分同士だったのに……………」

「納得いかねえって面だな。言つたろ？お前はもうゲーマーじゃないんだ。真の戦いを忘れたお前に、俺が負ける要素はただの一つもない。例えお前がどんな手を使おうともな。

力が強い奴は速さと手数で

速い奴は的確で堅実な一撃を重ねて

防御力が高い奴は毒とアイテムで

体力が多い奴はそれを上回る攻撃力で

全部持つてるやつはこちらも全部使って……………

それがゲームであり、闘争そのものだ……………俺こそが、本当の「天才ゲーマーM」だ」

この時、俺はこいつから逃げて永夢のもとに行くべきだった。
だけど、俺はそれに気づかなかつた。
永夢が地獄を見るまで、あと………

第「苦」話：地獄まであと…………

永夢視点

五対一という、このピンチ……………負けるかもしれないという不安が、僕を震えさせる。
その時、

「小児科医、あの魔王は俺が切除する。」

「永夢！ その乗り物二人組は任せろ！」

「永夢ウ！ ゾンビスレイヤーは私の獲物だア！」

後ろを見ると、見慣れた顔ぶれ……

「飛彩さんに、貴利矢さん……それに黎斗さんも！」

四対五……………これなら何とか！

「じゃあ、一緒に行きましょう！」

【マキシマム・ガシャット！ガツチャーン！レベルマークス！最大級のパワフルボ
デー！ダリラガン！ダゴズバン！マキシマムパワーX！】

【ガシャット！ガツチャーン！レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マ
イティーアクションX！アガツチャ！デンジャラスゾンビー！】

「デュアル！ガシャット！ ガシャット！ ガツチャーン！ デュアル・レベルアップ
 ！
 迎る巡るRPG！ タドルファンタジー！ アガツチャ！ 迎り着いた世界！ 神々
 のレガシー！」

「ガシャット！ガツチャーン！レベルアップ！爆走バイク！ アガツチャ！シャカリキ
 ！メチャコギ！ホットホット！シャカシャカ！コギコギ！シャカリキスポーツ！」
 かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀と滑った 後
 ろの正面だあれ？

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀が滑った 後
 ろの正面だあれ？

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に つるつる滑った 鍋
 の鍋の底抜け 底抜いてたもれ

かごめかごめ 籠の中の鳥は いつもかつもお鳴きやある 八日の晩に 鶴と亀が
 滑ったとき、ひと山 ふた山 み山 越えて ヤイトを すえて やれ 熱つ や

籠目籠目 加護の中の鳥居は いついつ出会う 夜明けの番人 つるつと壁が滑った
 後ろの少女はだあれ？

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出会う 夜明けの番人 鶴と亀が滑った 後

ろの少女はだあれ？

通りゃんせ 通りゃんせここはどここの 細通じや天神さまの 細道じや ちつと通して 下しやんせ 御用のないもの 通しやせぬ

この子の9つの お祝いに お札を納めに まいります 行きはよいよい 帰りはこわい こわいながらも通りゃんせ 通りゃんせ

その時僕は、まだ何も分かっていなかった。

この後に起こる悲劇を。

その地獄を。

僕が人殺しになるまで、あと30分…………

番外編：だいすきなえむせんせー その2 ■

わたしはそのひはとつてもたいちよーがよくて、「こーがんざい」のてんてきのがらがらしたおとをたのしみながらろーかをおさんぼほしていた。

やっぱりびよーしつのでたのしいな。そのひごとにしすずつかわつていて、なんだかそのせかいにいったみたいなきぶんになれる。

「あ、若奈ちゃん、今日は顔色がいいね。自分で歩いてるし」

ろうかのかどをまがつたら、ぼつたりえむせんせーにあつちやつた。えへへ……これがうんめい……なのかなあ？

「せんせー、おはよーございます」

うん、ちゃんとあいさつできた。はなせるときに、おくちはつかわないとね。

「これから少し時間があるし、またお部屋編でお話室してあげようか？」

……！ やつたあ！これがぞくにゆー「おうちでーと」だ！ れんぞくでいいことおきちやつた！

せんせーといっしょにろーかがあるいていっていると、ほかのおともだちにもすれちがった。そしたらみんながくちぐちにわたしにちゅーいしていった。

「おい、むこうのほうから、「ぼさつ」がくるぜ」

なんのこと？とくびをかしげていると、むこうからせんせーのおともだちのせんせーがきた。

「小児科医、仕事はどうした？」

むこーからきむずかしそーなかおをしたせんせーがきた。たしかかがみひいろつていうなまえだったはず。

……なるほど、ぶつちよーづらだから、ぼさつ菩薩か……

「……何故俺は子供から逃げられるんだ……？」

「真面目な顔が逆に怖く見えるんですよ。もうすこし頬の力を抜いてみたらどうですか？」

「お前は気を抜いた顔をしすぎだ、小児科医」

……わたしはこのせんせー、わらったらすてきなかおになるとおもうんだけどな……

「しかし、このまま子供に意味なく嫌われ続けるのも確かに問題か……ん？」

………！ 君は……！

かがみせんせーがおどろいたかおをしたときに、わたしはきづいた。

このひとは、わたしのびよーきのことをしっているんだ。

「……………一人で歩けるのかい？」

「……………はい……………たいちよーがきようはよかったから……………」

…やっぱりすこしえむせんせーいがいのおとなのひとはにがてな……………

「ああいたいた、飛彩、探したぞ」

「む？ 親父、どうした？」

「実は

……………ふたりしてむずかしーことはなしはじめちやった……………

「…じゃあ、飛彩さんと院長は忙しそうだから、もう行こうか。若奈ちゃん」

「うん……………ねえ、せんせー」

「うん？」

「あのふたりは、おや親子こなの？」

「うん、そうだね。若奈ちゃんのお父さんとおなじだね」

「あのせんせーのおかあさんは？」

「……………あー、そういうえば会ったことないなあ……………どんな人なんだろう……………？」

「こんなひとかな？ 私に切れないトマト切りにくい食材はないわ！みたいな」

「ぶはっ……………はは……………そんな気がしてきちやったよ……………」

いがいにうけたらしく、せんせーはくちもとをおさえてわらっている。

「せんせーのおかあさんは？」

「元氣だよ。今でもゲームしていると「勉強せい！」って追い掛け回されるんだ。今は僕はマンション暮らしで、母さんは実家だけだね」

「……………おとうさんは？」

「あ……………えっと、ぼくが小さいころに死んじゃって……………よく覚えてないんだ。」

母さんの話だと、超絶にイケメンで、柔道5段、空手道6段、合気道4段、剣道5段で、勉強ができて、生物学のバイオテクノロジーと遺伝子解析、改変、アンドロイド型AIや工服用ロボットの科学と生物学が両方できて、確か医学の知識もあったらしいし、アメリカに留学して博士号を21歳で取った（日本での制度の場合どんなに順調に行っても取得は最短27歳）らしいんだ……………あ、ごめん、難しかったよね」

ううん、とわたしはくびをふった。わかるよ……………なんとなく、だけど。」

「せんせー、きょうはなんのげーむをみせてくれるの？」

「うん、そうだねえ……………」

きょうもわたしは、せんせーとのいっしょのじかんをたのしんでた。

第10話：NOBLEMAN LADYの實力

同日・夜23時25分大我さん視点

不意に雨が降り出し、いつしか土砂降りになっていた。今日はもう閉めるか………いつも通り俺は病院の戸締りをし、さて就寝するかという時に………

「大我院長はどこで寝られるのかしら？」

「………お前、まさかここで寝泊まりする気か？」

「ええ」

じよ・う・だ・ん・じゃ・ね・え!!!

「流石にそれはダメだ。近くでホテルにでも泊まってくれ」

「お支払い………」

「いくらでもお泊りになってどうぞ、はい」

（ちつくしよおお！金の悩みなんてなけりゃこんな奴バグスター！）

もはや生活のすべての主導権を握られて、手のひらで遊ばれる………一瞬もう出て行ってやろうかとも思い、思わずクリニクの出口に足を向けた。その時

「「おおりゃー………!!」」

耳をつんざくような大声とともに、病院の入り口を突き破って三体のバグスターが現れた。見たところそれぞれ「バンバンシューティング」「ジェットコンバット」「バンバンシューミレーション」のラスボスバグスターだ。

「殺してやるぜスナイプ！………って」

「エリーゼさん!?!」

「なんでこんなところに!?!」

三体ともこいつの顔を見るなり固まっちゃまった。顔なじみか？

「まあいいや。俺たちの目的はスナイプの討伐だ」

「そうだそうだ」

「ヤロオ……人の病院の玄関ぶち破ってからに………！ 第伍拾戦……」

「お待ちになって、大我様」

俺と奴らの間に入るようにエリーゼが来た。流石に邪魔だと怒鳴りつけようとしたが、俺は開いた口をすぐに閉じることしかできなかった。

「……………」

いつもの……と言ってもまだあってから一日もたっていないが、エリーゼは、こいつは実に表情がコロコロ変わる奴だった。いつでもどこかを、何かを見ていて、その行動は一見調子に乗っているようでいつも確実に考えてのことだった………だが、今は違

う。

とても悲しげな、そして厳しい表情で目の前にいる三体をじつと見つめていた。

「私がこの方に代わって貴方達の相手をするわ。かかってらっしゃい」

「へ？」

「いや……………」

「でもエリーゼさん……………」

「ヤマト、グリフォス、それにスネイク、ごめんなさいね。私はあなたたちの敵だわ」

その言葉を聞くと、三体はそれぞれとても悲しげな顔をして、そしてすぐに顔を引き締めた。

「ああ……………」

「なる……………ほど……………」

「いつか……………こうなるとは思ってたけど……………」

考えてみれば、エリーゼはどう戦うんだ？ 普通に培養？ ラブリカは確か好感度の上下で戦ってたが……………いや、こいつは女か、ならラブリカみたいにお付きの女みたいのは無しか。じゃあ自分の相手への好感度によって戦闘力が変わる？

いや待て、それ以前にこいつは攻略の対象じゃない。そうだ。飽くまで主人公とヒロインの恋路を邪魔する敵？ キャラだったはずだ。それにこいつの雰囲気からして、肉弾

戦とは考えにくいし……………

「行きなさい」

そうエリーゼは一言つぶやいて、すぐに目線を切った。俺の手を引いて、病院の中に入っていく。

「お、おい……………」

「いったいどうしたんだ？　俺がそう思うのと同時にいきなり三体の目の前に別の三体のバグスターが現れた。

「あれは私の使用人たちです。一人が門番^{ゲートキーパー}、一人は近衛兵^{ニアリーガード}そして側用人^{サイドブレーカ}。順にレベルはそれぞれ100、300、500となってますわ」

「(っ)ひゃ……………」

余りと言えば余りの過剰戦力。もしこいつが俺に惚れずに敵のままだったらと考えると背筋が凍る。

「いたいけな淑女が戦いなどするはずがないでしょう？　悪役令嬢というものは冷たく「この者をつまみ出しなさい」と傲慢に命じるものですわ」

そういつてエリーゼは微笑んだが、何処か無理をして笑っているような気がした。

そんな風に俺が驚いている間にも戦いは進んでいたようだ。当然と言えば当然か。いかに三対三でも、レベルがあまりにも高すぎる。すぐに決着がつき、三体は遠くへ投

げ飛ばされていた。

「二応元は仲間ですし……ごめんなさい。やはり殺すことはできませんわ」
「いや……別にそれはいいんだが……」

その時

不意に夜がより一層濃くなった。いかに夜で雨が降っているといってもここは都会が近い。空の雲ぐらいはよく見れば見えるものだ。だが今はそれすらない。周りの街灯もすべて消えて、何の音もしない。静かな…静か過ぎる。まるで真つ暗な闇の中に放り込まれたかのような……

ゴーン……ゴーン

どこかで鐘がなっている。重く、強い鐘の音が……

不意に、空間がゆがんだような気がした。そして次の瞬間、さっきの三体が投げ飛ばされた方向から天を貫くような火柱が上がった。そしてその直後、また世界に光が戻り、

普通の夜が訪れた。エリーゼの仕業ではない。
一体……何が起こってるってんだ？

第11話：時渡りのCRONOS

同日・夜23時20分グラフィイト視点

俺は今、大雨の中パラドとエグゼイドが別々に戦っているのを遠くのビルの屋上から
見ている。

「パラドか……………エグゼイドか……………」

俺はどちらに付くべきなんだ？ 俺は、人間に味方する奴の味方だ。普通なら、パラ

ドの方に行くべきだが……………」

「……………お前なら、きつと「俺のことはいい、永夢を頼む」と言うんだろうな……………」

パラドが真に望むことをする。それが俺の使命だ。ならば……………」

「まずはエグゼイド達に加勢する。そこからパラドの救出に向かう……………培養！」

「インフェクシオン！
デッDead game！
ザThe Bugster！
レツLet's
ゲgame！
ワツWhat
テヤyour
ネname？
バツBad
ゲgame！

培養し、ビルの屋上から飛び降りる。地面が近づく中、不意に何かきらめいた気が

した。とっさに愛刀のフアングを目の前に突き出す。

「気づいたか……………竜戦士……………」

武器と武器がぶつかり合い、俺は横に吹き飛んだ。転がりながら受け身を取り、立ち上がる。

「……………海帝……………」

土砂降りの中、海帝は立っていた。

「久しいな。息災であったか？」

「……………それが不意打ちをした者の態度か？」

「其方ほどであれば、今程度の一撃、難なく捌くであろう？ 不意打ちにもならんわ」

最悪だ。どうやらすでに俺の相手は決まっていたようだ。いくら何でも海帝を振り切って向こうの戦いに参戦することはできない。

「出来れば立ち合いは俺としては今度が望ましいのだが？」

「それがかなわぬこと、言った其方が理解している以上、某が何を言うのかも検討がついておるのだろうか？」

まあ無理だろうな。俺は腕と足に力を込め、一気に加速する。

まともに正面からぶつかり、海帝は少し後退した……………

……………おかしい、海帝なら、避けるか回り込むか、はたまた押し切るかしたはずだ

が………

「どうした海帝！　ぬかるんだ地面は苦手か!?」

「む……………ぬう……………」

何度も互いの武器で撃ち合う。やはり変だ。前に戦った時よりも、僅かばかり海帝の動きが遅く、そして攻撃は軽く感じる。心なしか息も上がっているような気がした。

「おおおおお！　紅蓮爆竜剣!!」

刃に紅蓮の炎を纏わせ、空間を焼き切る。斬撃に触れた雨粒が一瞬にして蒸発し、あたりに水蒸気がもうもうと立ち込めた。視界が暗れると、何とか防いだものの、今度は大きく後退した海帝の姿があった。

……………俺が、伝説の剣豪を押ししている？

まさか……………このままいけば勝てる？

俺は、強くなっている！　かつての海帝との戦いを通し、確かに奴の動きがとらえられる！

このまま勢いを俺が掴んでいるうちに決着を急ごうと走り出した……………

その時

急に当たりの景色が色を失い、世界は真つ暗な闇に閉ざされた。空を見れば時折分厚い雨雲の隙間から健気に輝いていた月も、星も見えなくなっている。

ゴーン……ゴーン

「……これは一体……」

海帝もあまりの異常事態に驚き、呆然としている。そして、空間が一瞬ゆがみ、海帝が、雨が……時が止まった。……間違いない、これはクロノスが使っていた【ポーズ】だ。だが、奴はもう死んだはず……何がどうなっている!?

不意に時がまた動き出し、エグゼイドたちが戦っていた方向から大きな火柱が上がった。

しばらく呆然と立っていると、いつの間にか海帝はいなくなっていた。

気が付くとエグゼイドたちの方からは戦いの音はしなくなっていた。恐らくあの火柱によって決着したのだろう。パラドの方からももう戦いの音は聞こえない。俺はエグゼイドたちのいる方へ走り出した。

同日・夜23時30分パラド視点

「な……………何が起きた……………」

急にあたりが暗くなったと思ったら、空間がゆがんだ。次の瞬間にはなぜか俺が戦っていたもう一人の俺は消えていた。あたりは静まり返っている。

「兎に角……………あの爆発……………永夢のところへ行かねえと……………」
散々あいつに攻撃を加えられて、俺はもう満身創痍だった。

「ちくしょ……………この……………ポンコツの体……………」

ふらふらとよろめき、俺はそのまま雨の中、コンクリートの上に倒れこんだ。

第12話：Mたちの窮地

同日・夜23時05分飛彩さん視点

「私の相手はお前か……………勇者よ」

目の前に立つベイオウルフを睨みつける。

「初めに合った時は負けたが……………今度はそううまくいくと思うな」

「フン……………多少レベルが上がったようだな」

自分のガシヤコンソードを氷モードに換え、奴の近くの地面を凍らせる。氷に足を取られたところを一気に切り込んだ。

「ぬ……………少しはやるようになったな……………」

奴の刃渡り2メートルはあろうかという剣を砕き、奴を切りつける。

「…ツチ……………」

「させるか！」「クダケチール」！

多少の気恥しさを思いながら大きな声で呪文を唱える。僅かに拮抗し、やがて俺の呪文が奴の呪文を押し切った。

「……………グ……………！」

「終わりか？ 魔王！」

「……………フ……………フフ……………フフフ……………見事だ勇者。よもや私の脇差を壊すとはな……………」

「……………何？」

奴が空に手を振ると、目の前の空間がゆがみ、奴はその中から大きな長刀を取り出した……………」

「バ……………バカナ！ 大きすぎる！」

それもそのはず、奴が振り上げた刀は、刃の部分だけで8メートルほど。

5メートルの巨躯を誇る奴よりも、ずっと大きい！

「見せてやろう、私の奥義を！「クダケチール」」

奴は自分の長刀に呪文をぶつけた。

!!!!!!

「勇者よ、これは今お前が使っている氷と炎の魔法剣と同じものだ。受けてみる……………」

邪王穿天剣!!!」

とつさに剣でガードしたが、衝撃までは止められない。

俺は大きく吹き飛ばされ、そのまま意識を失ってしまった……………」

「フン……………他愛もない……………後は……………」

同日・夜23時05分貴利矢さん視点

「さーて、俺の相手はどいつだ？」

「ワターシが行くヨ〜〜たま〜にはバイクとバイク自転車もイーんじやナイ？」

「おおっとオ、おいイらも行くぜえ！野郎三人でツーリングだア!!!地獄のなア!!!」

よりよつて俺だけ二対一かよ……………

「行くぜえ!!レエーススタアートオー！」

「キーミに仕切ラレ〜ルの癪だね〜」

「待てこらあ！【爆走！CRITICAL STRIKE】」

バイクに乗って全速力を出す、全く追いつかない。

「あんたら早すぎだろ！」

「マ〜人間でも自転車デ時速223キロは出せるからネー」

マジでバケモンじゃねえか……………考えているうちに、急に後ろから何かがぶつかってきた。

「よそ見は禁物だぜ！にいちやアん!!」

「なる…! いつの間に後ろに!!?」

「二人で話すのに夢中になつて居る隙になア!!!」

「ヴアハハハハ!! こいイ!」

「……………死ね……………」

目の前のクリスがハンドガンの弾を連射する。2発ほどは避けたが3発目が命中した。

「うが……………げべべべ!!」

怯んだところに今度はサブマシンガンが殺到した。

「ぎやばばば!!!! こらあ!! ハメるな!!」

「怯んだゾンビを集中狙い……………文句を言われる筋合いはないな」

物陰に転がり込み、キメ技スロットホルダーにデンジャラスゾンビガシヤットを差し込み、ボタンを押す。

【CRITICAL DEAD】

私の分身が何十人も地面から飛び出し、私もそれに紛れて飛び掛かる。

「さあ! 本物の私を見つけてみろお……………って」

クリスを見ると、何か石のようなものを投げつけてきた。その石は円を描くように固まる私が混ざる分身集団の真ん中へ転がり込んだ。それは……………手榴弾だった。

「あ……………うぎやあああああああああああ!!!!」

手榴弾は大爆発を起こし、せつかく出した私の分身はすべて消えてしまった。

「敵が多人数の時は重火器を使う……………当然だ。さて……………最後に一人残ったお前が本物だな？」

目の前にショットガンの銃口がにゅつと現れ、直後に火を噴いた。

「ぐあつ……………！」

散弾が私の体に命中し、私は後方へ吹き飛んだ。変身が解除され、私はその場に崩れ落ちた。

「フン……………さて、後は……………」

同日・夜23時10分永夢視点

僕自身もNeoーガットンには力が劣っていたが、何とか勝負は続いていた。気が付くと辺りは敵だらけになっていた。まさか……………みんなやられてしまったのか？

「勇者は倒した……………後残っているのはお前だけだ」

よそ見をしている間にNeoーガットンの拳が僕を打ち抜き、僕は遙か後ろへ吹き飛んだ。壁を一枚ぶち破り、奥の壁に激突して変身が解けてしまった。

「(ハ)は……………病室……………？」

間違いない。ここは西都大学附属病院の病室だ。よく見かける壁、机、テレビにベッド。

「え……………せんせー?」

誰かの声が聞こえた気がするけど、兎に角早くここを離れなくちやまずい。患者さんが巻き込まれでもしたらシャレにならない。重い体を引きずって変身しようとするが、マキシマムマイティXガシヤットは碎けてしまっていた……………そんな……………くそ!

「大大大変身!」

【ガシヤット!ガツチャーン!レベルアップ!マイティアクションX!】

アガツチャ!ぶつ飛ばせ!突撃!ゲキトツパンチ!ゲ・キ・ト・ツ・ロボツツ!】

病院から飛び出して再びNeoガットンに殴りかかるが、全く効かない。

「一対多数は気が引けるが……………恨むなよ。【クダケチール】」

「うわあああああ!!!」

避ける間もなく極大呪文に飲み込まれ、空高く打ち上げられる。何とか着地をしようともがくが…

「そおらア!」

空中をジャンプしたガルーダにバイクごと体当たりされてさらに横に飛ばされた。

地面をボールのように転がり、やがて止まる。ベイオウルフ、ガルーダ、カヴェン

ドイツシユ、クリス、Neoーガットン…………敵が多すぎる。さらに魔の悪いことに、なぜか遠くから三体の別のバグスターが飛んできた。

「エグゼイド……………これで、戦争は終わりだ……………！」

ベイオウルフが僕の目の前に立ち、剣を振り上げる。

……………終わり……………か……………

裏ノ12話：大好きな永夢先生

同日・夜23時25分香坂若菜視点

いっしょけんめー「につき」をかいてたら、いつのまにかおそくなっちゃった。まどをみてみるともうまっくらであめがふつてる。はやくねなくちやおもつてにつきをよこのつくえにおいておこしていたべつどもとにもどした。

めをとじたしゆんかんのことを、わたしはきつとわすれない。すごいおとといっしょにめのまえのかべがくだけでひとみたいなのがころがってきた。

「ここは………病室………？」

やがてそのひと？はきらきらしたひかりにつつまれて、ひとになった。つて………うそ………

「え………せんせー？」

なんでえむせんせーが？………そーいえば、びよしつのでれびでみたことがある。

「心配はいりません。早期発見と迅速な治療を行えば、感染者の命は守られます。電脳救命センターのドクターが、最先端の医療機器によって、万全の態勢で治療にあたります」

あ……………でもわたし、もってない……………ど……………どうしよう……………

「力が欲しいのか？」

きゆうにこえをかけられてふりむくと、めのまえにひとのかたちをしたまっくろなけむりみたいなのがあった。

「どうなんだ？」

「せんせーをたすけられるように、なりたい」

「ククク……………良いだろう。ならば少女よ、天を掴め。お前が今まで生き、刻んできた人生を一瞬の栄光に捧げるがいい……………付いてこい」

そういうとそのひとはずんずんあるいていく。あわてておいかけるけどからだぜんたいがいたい。くらくらしめたおれそうになる。

「なにをやってる？早く来い」

わたしはあしにちからをこめてはしりだす。なんとかおいつけた、

「乗れ」

えれべーたーのなかにはいると、そのひとはてきとうにぼたんをおしはじめた。するとよめなかつたけど「CR」つてもじがでてどんどんちかにもぐっていった。

「ついたぞ。……だ」

おりれすぐにとびらがあつて、このひとはあけることができないみたい。

「面倒なセキュリティを付けてくれたな……」[エンチャント・オートマタシステムズ]
そのひとがてをとびらにむけるとなにかひかって、とびらがあいた。

「すごい……まほうみたい」

「これは魔法だ。つと……これだな」

そのひとがちかくのたなをがさごやると、はこをとりだしてみせた。そしてそのなかから……

「これだな？」

「そ、それ！」

わたしはそのひとからかめんらいだーくろにくるをおもわずひつたくった、

「さて……このまままごまごしているとあの男が殺されるな。おい、俺の手を取れ。」

「レポート」

おずおずとてをとると、きゆうにあたりのけしきがかわった。

「()は……」

「その角を曲がれば、お前の大切な男がいる。行け」

「さいしよからこうしてくればよかつたのに」

「あまり魔法は使いたくないんだ。見られると面倒だな」

いや、いまはそんなことはいいんだ。はやくせんせーのところへいかなくつちや。

第13話：そして少女は天を掴む

Sad Romance (Violin Version)

同日・夜23時27分永夢視点

……これは夢か？ 目の前にこの場にいるはずのない少女の姿があった。

「若菜………ちゃん？」

「………」

ど、どうしてあの子がこんなところに!?

「若奈ちゃん！ こつちに来ちゃだめだ!!」

とにかく、ここから若菜ちゃんを離れさせないと……! あの子は外で生きられるほど丈夫じゃないんだ!

「せんせい、せんせいは、わたしがたすけるよ………」

【KAMENRIDER CHRONICLE!】

「うそ………だろ！ なんて若奈ちゃんがそれを!？」

【Enter The GAME! Riding The END!………】

流星の神……その者、天を掴むライダー………名を刻めクロノ・ストーリー! 今こそ

時が極まった！」

若奈ちやんがクロニクルガシャットのボタンを押すと、あの子は光に包まれ、やがて頭上から板がかぶさり、あの子は僕が見たことのない暗い金色のクロノスになった。空から降ってくる雨はやまないが、世界から光と言う光が消えた。

「……………！ まずい！ ガルーダ!!」

雰囲気から相手の戦力を悟ったベイオウルフが一目散に一番近くにいたガルーダに向けて走った。ガルーダを抱え上げ、もう一体の場所へ向かおうとするが立ち止まり、その場に魔法のシールドを張った。間に合わないことを悟ったのだろう。

そして次の瞬間、

【PAUSE】

一瞬、しかし、おそらくそれは数分、あるいは数十秒だったかもしれない。時は止まっていた。

……………そして……………

【RESTART】

時はまた動き出す。

けたたましい叫び声に重なるように、炎の柱が吹き上がった。炎が晴れると、そこにはたった二体しか残っていないかった。

「お……おい！　バイオウルフ！　しつかりしろ！」

「あ……ああ………大丈夫だ。だがまさか、張ったバリアを突き抜けるとは………ぐふっ
！」

そこにいたのは満身創痍のバイオウルフとそれに守られていたガルダーのみ。飛んできた三体も、最初からいた奴らも全員あの一瞬で死んだようだ。

「いかがした！　他の者はどうした!？」

「おい！　どうなつてやがる！」

急に道の向こうから武士のような姿をしたバグスターとパラドによく似た仮面ライダーが来た。他の場所にもいたのか……

「い………いったん………退くぞ………」

バイオウルフが言うと同時に全員うなずき、量子化して消えていった。後に残ったのは若菜ちゃんだけだった。

「せんせー………うっ!？」

急にあの子の体がぶれ、変身が解けた。クロニクルガシャットが地面に落ち、砕け散

腕をめちやめちやに振り回し、何とか消えていくあの子を掴もうとする。だが無駄だった。僕の手の平はむなしく空を切り、あの子はそのまま消えていく。

ゲーム、仮面ライダークロニクルで死亡したプレイヤーのデータは、基本的にプレイヤーを倒したバグスターに準ずるプロトガシャットに保存される。

もしもレアキャラの仮面ライダーや混戦時の同士討ちなどで死亡したプレイヤーのデータはそのプレイヤーが持っていたクロニクルガシャットに、破損していた場合は運営が管理するマスターガシャットに保存される。

……だが、マスターガシャットそのものももうない。つまり

あの子のデータの行き先が、何処にもないということ。行き場のないデータは消えるだけ。

つまり、無いのだ。あの子を救う術が、この世のどこにも存在しない。

雨は、まだ止んではいなかった。ずぶ濡れになりながら僕はいつまでも泣きわめいていた。

第14話：永夢の行く先

「……………」

「嘘……………嘘よ！ 先生は嘘を言ってるんだわ！ そうでしよう宝生先生！ そうだと
言ってください！」

目の前にいるのは、僕に寄り縋って泣きわめくあの子のお母さんだ。僕は何も話すこ
とができない。

「……………申し訳ない、宝生先生、私も妻も、まだ娘の死が理解できていない。どうか、ど
うかもう少しだけ、私と妻に考える時間をくださいませんか」

「そんなはずはないわ！ 死に目にさえ会えなくて、体すら……………ここ、こんな……………！」
顔を手で覆い、ついにあの子のお母さんは泣き崩れてしまった。手に持っていた袋が
落ち、中のお菓子が辺りに散らばった。きつとあの子と一緒に食べるつもりだったんだ
ろう。

結局、僕はどうすることもできずに泣き続けるお母さんを介抱するお父さんを見つめ
ることしかできなかった。

……………

「さあ永夢、マキシマムマイティXは直しておいたぞ」

どうしても仕事に集中することができず、CRに逃げるようにして入り込むといきなり満点の笑顔の黎斗さんに出くわした。黎斗さんの腕にはすっかり元通りになったガシヤットがあつた。

「おい神、ちよつとこつち来い」

氣を利かせた貴利矢さんが黎斗さんを奥の方へ引きずつた。

「お、おい何をする……………」

飛彩さんも大我さんもポップピーもパラドも皆、押し黙つたまま何も言わない。いや、言えないのだろう。

「永夢、どうした？……そうか、あの少女のことだな。なら安心しろ永夢、何も問題はない」

「え……………？」

そう言われ、僕は一瞬期待した。もしかすると、助ける方法があるのではないかと期待した。

「調べてみたが、あの少女は末期のガンだったそうじゃないか。あの時にどうこうしたにかかわらずにあの少女はいずれ死ぬ運命だったんだから、君が悔やむ必要性は全くないぞ！」

恐らくその場にいた全員が「何を言ってるんだこいつは」と思っただろう。CR内の雰囲気完全に凍り付く。

その直後、僕の右腕が吸い込まれるように黎斗さんの顔に近づき、その勢いのまま殴った。

「お、おい永夢！」

倒れた黎斗の胸ぐらをつかみ上げ、もう一度殴ろうとする俺を見かねたパラドが後ろから羽交い絞めにした。

黎斗の顔を見ると、驚きのあまり硬直している。

他の皆、貴利矢さん、飛彩さん、大我さん、ポップー、パラド、そして、俺自身。

.....生まれて初めて、生身で生身の相手を殴った。今まで生きてきた自分の生の経験から考えても、決してあつてはならないことだった。

ピシッ

自分の胸で何か音がした気がした。

とてもじゃないがその場にいられなくなり、俺は逃げるようにして上の病院に戻った。

.....

.....

.....

.....

.....

…

「おい、お前だ、お前」

病院の廊下をぼんやり歩いていると、急に横から声をかけられた。

「やつと気が付いたか」

声のした方を振り向くと、目の前にあるのは鏡だった。壁に立てかけられた鏡には、自分自身が写っている。だが、おかしい、この鏡の中の自分にはたにたと笑っている。

「なあ、よかつたな。あいつが死んで」

「こいつは……俺は何を言ってるんだ？」

「だってそうだろう？ あいつが死んだおかげでお前は今生きてるんだ。ラッキーじゃねえか」

「……………違う」

「嘘つけよ。じゃあ何か？ お前は死にたかったとでも？ 一丁前に死を悲しむつもりか？」

俺は……悲しい。……悲しい、はずだ。

「はあ、お前が殺しておいて何言ってるんだか」

何を言ってるんだ!? 殺したのは俺じゃない!

「お前だよ。宝生 永夢。」

だってそうだろ？お前が負けそうになって、助けるためにあいつが死んだんだぞ？
逆に言えば、お前がもつと強かったらあいつが命をなげうつことはなかった。

お前が弱かったから死んだんだ。お前のせいで死んだんだ

お前が殺したようなもんだ。お前は人殺しだ」

……ちが、う……僕は……俺は……そんな……

「違うはいさ」

「違う!!!」

叫びながら殴りつける。だが、我に返つてよく見ると僕が見つめていたそこには笑う
自分の姿はおろか、その壁には鏡すらなかった。幻想だったんだ。

「あの……どうかしましたか？」

近くにいた患者さんが訝し気に聞いてきた。

「あつ……いえ、何でもありません」

「そうですか？ ならいいんですが……人殺し」

「は!？」

驚いて振り向くとその患者さんは「はい？ 何ですか？」と言ってきた。

……幻聴だったのだろうか？ その時少し慌てた様子の看護婦さんが俺の横を通

どこへ行こうとも、何をしようともその声は消えなかつた。やがて、俺にはその声が優しい子守歌に聞こえ始め、大きな声で笑い始めた。ライダーガシヤットを落とす、ゲームドライバーを投げ、白衣を脱いで、走り出す。

病院を出て、何処までも……どこまでも……

こうして俺は、浮浪者になった。

第15話：鏡灰馬より日向恭太郎へ

ポッピー視点

……永夢がいなくなつて、一か月が過ぎた。CRの雰囲気は最悪で、特に黎斗と他の皆の仲がひどいことになつて。黎斗は自分がどれだけのことを言つたか分かつてないみたいで、全然謝ろうとしない。

飛彩はいつもよりも多くいろいろなところから仕事を探しては、それに漬かり続けている。

まるで何かしていないとどうにかなつてしまひそうで、それで仕事を増やして誤魔化している感じがする。

貴利矢は暇さえあればいつもいろいろな場所を探し回つては何も見つからないで不機嫌になりながら帰ってくる。時折ため息をついて椅子に腰かけたと思つたら何か思いついたように立ち上がり、また寂しそうな顔になつて椅子に座り直してを繰り返している。

ニコちゃんも色々調べてはみてくれているみたいだけど何も手掛かりはないみたい。

……あれからバグスター連合は出てこない。みんなが言うにはあらかたの幹部がやられて、一時作戦を練っている可能性が高いらしい。

ぶらぶら廊下を歩いていると、向こうからすごい勢いで飛彩が走ってきた。

久しぶりに見る飛彩は少しやつれていて、黄ばんだ白衣、伸び放題の髭、ぐちゃぐちゃのネクタイ、真つ赤な瞳と、一瞬誰だか分らなかつた。

「飛彩、どうしたの？」

「親父に話がある……それだけだ……」

それだけ言ってまた走り出す。急いで追いかけるけど、どんどん離される。ついに見失っちゃった。

しばらくその場で考えて、多分院長室だろうと当たりをつけた。小走りで行ってみると……

「……………」

無言で扉を殴りつけ、飛ぶように飛彩が飛び出してきた。私には目を合わせず、髪を掻きむしって向こうへ行ってしまった。

「あ、あの……………」

恐る恐る扉を開けて院長室に入ると、疲れ切った眼をして椅子に腰かける院長と目が

合った。

「飛彩と……………何かあったんですか……………?」

嫌そうな顔で眉をひそめ、ぶつきらばうに院長は床に散らばる書類の一枚を指さした。

拾い上げて、読んでみる……………! 嘘……………これって……………!

解雇申請書

聖都大学附属病院及び電腦救命センターC R勤務小児科医師兼仮面ライダーエグゼイド

宝生 永夢は、両者の勤務を継続的に二週間以上無断欠勤し、結成された懲罰委員会を欠席。

その後、登録している住宅マンションに帰宅せず、警察の搜索虚しく現在行方不明。

聖都大学附属病院医院長鏡 灰馬はこの事態を重く受け止め、

聖都大学附属病院のゲーマドライバー、ライダーガシャット、並びに小児科医師免許証を剥奪し、

聖都大学附属病院から解雇することの了承を衛生省の衛生大臣官房審議官に申請する。

聖都大学附属病院医院長 鏡 灰馬 調印

……こんな……嘘……！

「院長！ どういうことですか！ これ！」

「………飛彩にも、同じことを言われたよ。」

………私だって辛い。彼の努力は、わたしもよく理解しているつもりだ………

だが、もう私個人の意見や権限ではどうすることもできないんだ……」
院長は目を伏せ、大きく一つ息を吐いた。

「……もう一か月になる。一か月だ。彼が、誰よりも職務に忠実でまじめだった彼が、
一か月……」

もう……もう待つことはできない」

「そ、そんな……」

「もう私の方から審議官には送った。そこにあるのはそのコピーだ」

永夢……

私はどうすることもできず、ただ茫然と窓の外、自

分の見ている方角にあるいはいるかもしれない永夢の姿を探していた……

最終話：間違った選択

CRを飛び出してから一か月たち……さらにそこから二週間たち……

永夢視点

「……………腹が減った……………」

ここ最近、何も食べられていない。前まで使っていた場所には警備員がいて、とてもじゃないが飯を取りに行けない。

「さすがに殴るのはやりすぎたか……………」

悔やんでも、もうどうしようもない。仕方なく俺は新たな食い物がある場所を求めて歩き出した。

……………

……………

……………

……………

……………

……

もうすっかり夜になった。町の中では何も見つからず、仕方なく霧の濃い山にまで入って野生の木の实を探すが何も無い。

歩き疲れて座り込むと、目の前は崖………というより急斜面だった。試しに石を転がしてみると、斜面をきれいに転がっていき、やがて茂みの向こうに石ころは消えた。

「餓死はさすがにシヤレになってねえぞ………」

完全に手詰まり。何もできない。何も無い。

何の気なしにふと自分の体を見つみると、酷い有様だった。

泥だらけのTシャツに敗れ放題のジーパン、靴に至ってはそこがすり減りすぎて靴下のようになっている。

……ふと、ズボンにつけているベルトが目に入った。

「すごいや革製品って食えるんだっけ………?」

本物ならいざ知らず、流石に合成品は無理だろ………いや待て、

「………まあ、餓死より楽か」

近くの木に登り、枝にベルトを巻き付ける。…相変わらず、夜は続く。

「………あの日みたいだな………」

思い出したくもない記憶。自分の罪の記憶。消えない記憶。思い出してしまう記憶。会えたら会いに行こう。

そんなバカなことを考えながらそろそろ日が昇ろうとしている雲がやたら多い空を見て、俺はベルトに首を通した。

ゆっくりと息を吸い、吐き出す。何度か繰り返し、目をつぶる。

枝から降り、一瞬の浮遊感、そして、首を絞めつけるベルトの感触。

意外と苦しくないんだな。と、関係ないようであることを一瞬思った。

夜が終わって朝が来た。

長い 長い

夜だった。

静かな 静かな

夜だった。

夜が終わって朝が来た。

靄に霞んだ木の枝に、一人の男が揺れていた。

かつて宝生 永夢だった。
一人の男が揺れていた。

「……………うん、何処だ……………」

気が付くと僕は一人、雪山に立っていた。

一面の銀世界、ふと足元を見ると、目の前に少女が倒れている。

確認するまでもなく、その少女は死んでいる。寂しそうな、悲しそうな顔をした少女

……………

そばにいるウサギは、彼女の死を理解しているのだろうか……………？

ふと、日の光が強まった気がした。雪は光をはじき、僕の目をくらませる。

次の瞬間、雪は消え、僕は夜空の下に立っていた。

目の前には蠢く巨大な骨。

「彼」は生き返る気がなかったものの、事故で生き返ってしまっていた。

彼はもう一度死ぬことを切に願っていた。

彼や、彼の仲間たちにとって、「平和で静かな毎日」は墓場にしか存在しなかった。人々は、そんな彼を宇宙の墓場へと送った。

彼は喜び勇んで死んでいった。

僕は彼の冥福を祈るため、目を閉じた。

目を開けると、また景色が変わっていた。そこは、燃え上がるような夕焼けの広い河原だった。

河原のあちこちには大きな穴があり、その一つの中に少年がいた。

少年は泣きじやくりながらも、一生懸命に穴を掘っていた。

全ては地球にさよならをするためだった。

不意に、彼の放った土が僕の方へ飛んできた。驚いて目をつむるが、土が当たる気配はない。

恐る恐る目を開けると、そこはもう河原ではなく、海岸だった。

海岸の一際大きな岩の上に、さつきとは別の少年が立っていた。

厳しそうな顔をしたその少年は、一人で黙々とオカリナを吹いていた。

悲しげな…悲しい雰囲気曲だった。

ふと、その子が僕に気が付いた。

その子は怒り、何か叫んだ。

持っていたオカリナを僕の方に投げってくる。

目をつむるが、やはり衝撃は来なかった。

次は、病院の病室だった。

かつて、あの子がいた場所、あの子がいたベッド、すべてがあの日のまま。

もう、あの子はいない。

ふと、目の前のカーテンが大きく揺らめいた。

窓が開いているのだろうか？

近寄ってみると、そこは僕の知っている病院の外の景色ではなかった。

大きな川を挟んだその先に、地平まで続くパセリの花畑。

よく見ると、その花畑の中心に、誰か座っている。

……ああ……

僕は、あの子を知っている。あの日に別れたあの子……

窓から転がり出て、走り出す。

走る

走る

川の水をかき分けながら走り、何度も転びそうになる。川を出て、あの子に向けて走り出す。

あの子は僕を見つけた時、心なしか少し悲しげな顔をしていた気がした。でも、それもすぐに消え、あの子は笑顔になった。

……そうか！ 僕が見たあれは夢だったんだ！

あの子は死んだんじゃない。ここにいたんだ！

僕はいつしか笑っていた。あの子に駆け寄り、抱き上げる。

もう、僕は君から離れないよ。若奈ちゃん。

【仮面ライダー エグゼイド

THE GAME IS NEXT STAGE】

〈完〉

第2部：永夢の帰郷

第1話：帰ってきた永夢

鏡 飛彩視点

「鏡先生！ 急患です!! 車にはねられて、木に突っ込んだようです! 胸に木の枝が刺さってます!」

カルテをまとめていると、慌ただしく看護婦が部屋に入ってきた。

「経緯は?」

「はい。山の斜面付近で自殺を試み、木の枝にベルトを巻き付けて自殺を図ったようです。」

幸か不幸かぶら下がってからしばらくして枝が折れ、斜面から落下。

下の道路へ転がり出たところ、たまたま通りかかったトラックと接触。

近くの木へと吹き飛び、そこで枝が胸に刺さったものと思われ、現在心肺停止です」

「名前、年齢は?」

「24歳です……名前は……その……」

なぜここで言いよどむのか、俺はもう少し考えるべきだった。

「どうした？」

「……………先生、落ち着いて聞いてくださいいね……………」

名前は、永夢。宝生 永夢です」

持っていたペンを取り落とす。

「……………聞き間違えたな。すまん、もう一度言ってくれ」

「……………宝生 永夢です……………」

……………あの……………馬鹿……………!!!!

「……………容体はもう少し詳しくわからないのか？」

「……………はい、今X線で検査を」

「分かった。すぐに行く」

……………

……………

……………

.....

.....

.....

「鏡先生！」

「検査の結果は？」

「はい.....申し上げにくいのですが.....」

トラックに撥ねられた時点で、完全な四肢のマヒ、明らかに頸髄の損傷です。

それと、おそらく呼吸困難の状態、嚥下困難、不整脈、浮腫チアノーゼ.....

歯状靭帯が切れ、頸髄がねじれています。

折れた肋骨が内臓を傷つけ、そのうちの一本が右の肺に突き刺さっています。

それと、両腕と両足ですが.....すべて骨が砕けている上に神経と血管も滅茶苦茶で

す。その上、

悪くすると空気栓塞の恐れがあります.....鏡先生、分かりますね。

これでは腕と足の整復は不可能です。両腕と両足を切断するほかありません」

「.....！」

何ということだ………！　くそ！　椅子に倒れこむように座り込み、頭を抱える。

どうすれば………！　例え命を拾っても、両腕と両足を失えば………

あいつがこれから医者として生きることが難しい………！

「鏡先生！　大変です!!」

後ろでレントゲンのチェックをしていた医師が叫んだ。今度はなんだ！

「………どうした？」

「胸に刺さっている枝が………心臓にまで達しています。」

今は心肺停止状態であるため、裂け目は広がっていませんが、

もし心臓が鼓動を再開してしまった場合、

心臓が動くと同時に、血圧で傷が避けて大出血し即死します!」

第2話：鏡飛彩、人生最大の手術

「心肺停止で血圧も脈も計れません！……こんな状態でオペをするんですか!?!」

「慌てるな……必ず助ける。緊急オペだ。人工心肺装置を用意しろ」

周りの医師や看護師たちが息をのむ。

「さしあたって肺の穴をふさぐため胸を開く開胸手術と、心臓の枝を除去して心臓の穴をふさぐ二つを並列して二か所同時にやる。準備を急げ!」

「「は、はい!!」」

.....

.....

.....

.....

.....

「人工心肺……………正常に作動しました。」

「術式開始……………先ずは開胸手術からだ……………最優先、「心臓の枝の処置」胸腔を開き、心臓が露出したところで心臓に刺さった枝を除去する……………メスを」

「はい」

差し出されたメスを握る俺の指が心なしか震えている。……………かつて自分がやる手術でここまでの緊張があつただろうか？ いや、無かつた。

……………多分これは、俺の生涯で一番難しい手術になるだろう……………

「……………五―五の肋骨を切除……………」

「鉗子……………いや、第二鉗子を……………」

「……………ここまで重要な手術、少しでも手元が狂えばもう一貫の終わりなのに、俺の指の震えは止まらない。」

「心嚢を開くぞ……………!!!」

露出した心臓を見て、俺は愕然とした。

枝が予想を超えて心臓に食い込んでいる。左心房に突き刺さり、裏側の大動脈弁まで貫いている。

……………この心臓は、もう使い物にならない……………

「か、鏡先生……………どうします?」

「……………人工心臓をはめる。心臓切除だ。引き続き人工心肺装置を継続……………」

人工心臓が届くまで心嚢は一旦保留。肺はどうなっている?」

「肋骨を切除し、裂け目はふさがりました。次はどうします?」

「……………頸髓の手術からだ……………椎弓形成術場合によっては硬膜切開術をやる……………傷

ついた内臓を切除し、移植する……………肝臓、膵臓、腎臓……………3つだ。

それと大動脈輸血を……………1000VL/1STだ。ビタミンK1を」

……………

……………

.....

.....

.....

.....

「す、すごい……………移植を三ついっぺんにやってしまった……………！」

「鏡先生！ 人工心臓が届きました！」

「来たか……………！」

ひったくるようにケースを受け取り、開く。これで命の危険はなくなる……………！」

「これより心臓を切除し、人工心臓を移植する」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「すごい……！凄すぎる……！全てやり遂げてしまった！」

「……ふう……」

「さあ鏡先生、後は我々に任せてお休みを。もう手術室に入って42時間になります」

「ふらふらになりながら、何とかなったことへの満足感が押し寄せてくる……良かつ

た…………

「さあ、後は我々の仕事だ。軟部拳上器を使おう。ノコギリで患者の両腕と両足を切るぞ」

手術室から出ようとしていた俺の足が、急に石のように固まった。

俺は…………俺は……………！

「……………待て!!」

「はい？」

「……………これより両腕と両足の整復作業に入る！」

「ええっ!!?」

戻り、永夢の前へ歩を進める。俺は、何とかこいつを助きたい！

「これは賭けになるが、何とか整復して見せる……………!」

急に俺の前に他の医師たちが立ちふさがった。

「……………? 何だ？」

「鏡先生……………やはり先生は今、同僚さんの治療で気が動転しています。整復は不可能とお伝えしたはずですよ」

「だ、だが……………あるいは……………!」

「早急に腕を切除しないと、壊死が進んで命にかかります！」

患者の命を賭けるとは、医者として許せません！　おい、鏡先生を外へお連れしろ」
いつの間にか背後に回っていた二人が俺の腕をつかむ。そのまま引きずるよう
にしてい俺の体が手術室の扉へと向かう。永夢の姿が、どんどん遠くなる……

「くっ………！　放せ………！　放せ………！」

第3話：鏡飛彩、人生最大の手術2

「放せ!!!」

腕をつかむ二人を振りほどき、吠える。

「お前たちは……………ここにいる全員は賭けてはいないのか!？」

お前たちはいつでも患者が必ず、100%治ると保証して治療しているのか!？」

そんな保証ができるものは神しかない!？」

……………俺は……………我々は神じゃない! 人間なんだ!!!」

人間が人間を治すなら……………賭けるしかないだろう……………?」

俺は、こいつの両腕を、足を、元通りに直してやりたい。

……………他ならぬ、こいつ自身の未来のためにも……………!」

周りを見回す。今度はだれも俺を外へ連れ出そうとする者はいなかった。

「……………輸血を続けてくれ。両腕、両足の接合整復術を行う」

「……………鏡先生、壊死まであと2時間ほどしかありません。それ以上時間が過ぎれば、例えくつつけても無駄になってしまいます。一箇所にかける時間は、30分……………やはり無理です……………」

「落ち着け！ なぜ弱音を吐くんのだ！」

叫んだ自分自身、一番よく理解している。後2時間以内に4箇所は……………不可能だ。

「……………！ しまった！ 上腕動脈に傷が……………！ 輸血をもっとだ！」

「鏡先生！ 血圧がどんどん下がってます！」

「シヨックが起こったようです！ チアノーゼの症状が強くなってきました……………！」

「……………く！ 酸素吸入を急げ！」

「手術はどうします……………？」

「続行する！ 一刻を争うんだ……………！」

「昇圧剤を使いますか？」

「ダメだっ!!」

……………くそっ……………

……………くそ……………

せめて、俺があともう一人いれば……………!?

「我々も、力を貸そう」

不意に手術室の扉が開き、誰かが2人入ってくる。

「親父……………！ それに、白河先生……………！（本名・白河一樹：エグゼイド本編13話に

外科の名医として登場。永夢と飛彩に助けられたことがある）ど、どうして？」

「いや何、ゲーム病を治してくれた永夢と、すい臓癌を治してくれた君、二人まとめてお礼ができるなんて、そうそうないだろう？」

「飛彩、わたしも昔はそこそこ優秀だったんだぞ？」

「……………あ……………ありがとうございます……………！」

「さあ、手術を続けようか……………」

……………

……………

.....

.....

...

次の日、俺の目の前には、ベットの上で眠り続ける小児科医の姿があった。

「手術は無事に終わった。だが、まだこいつの意識が戻らない……………」

「まあ、助かってよかった、としか言えねえなやるじゃん、大先生」

目の前にいる監察医が俺を茶化す。軽くあしらって、俺は小児科医のいる病室から廊下へ出た。

待っているぞ……………永夢。

永夢視点

若奈ちゃんと二人きりで、どれくらいの間がたっただろうか？

いや、そんなことはどうでもいい。今は、若奈ちゃんが僕の目の前にいる。それだけで十分だ。

「若奈ちゃん、次は何して遊ぼうか？………ん？」

ふと後ろを見ると、飛彩さんが立っていた。僕の腕をむんずとつかみ、ひきずっていく。

「ちよ……ちよつと！ 飛彩さん!？」

何するんだ!？ 若奈ちゃんから離れちゃうじゃないか！

「放してください………放せ！ 放せよ！」

いつの間にかパセリの花畑を出て、川を渡っている。このままでは僕は病あの子のいない場所院に逆

戻りだ。

「やめろ！ 放せ！ 畜生！ 若奈ちゃん!!!」

飛彩の腕の力は強く、振りほどけない。俺の体が病院に入ると同時に、花畑は闇に飲まれ、あの子の姿も消えた………。

鏡飛彩
殺してやる……!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

許さねえ……!!
許さねえぞ……!!

畜生……!!

……畜生
……畜生

第4話：黎斗のMEMORY

貴利矢視点

「そういえば、君は私のことを殴らなかったな？なぜなんだい？」

永夢の病室を出て、CRで一息ついていると檀黎斗が声をかけてきた。

「ん？」

「君は永夢と仲がいい。特にな。鏡飛彩や花家大我の「頼れる仲間」とは違い、君と永夢は何だか「つるむ友人」のような感じがするからな。私はてつきり、君にとどめを刺されるものだと思っていたぞ」

そういつてドレミファビートの画面が暗転するが、俺は話を終わりにする気はない。

「アンタがそこまで馬鹿じゃないのは知っているつもりだ。あそこであんなこと言ったら永夢が怒るのは目に見えてるしな。アンタなりに、何か考えがあつたんだろ？」

「まあ、そうだな」

「いちおう、話してもらおうか？」

画面にまた光がともり、檀黎斗は一言だけしゃべった。

「ああいった苦しみは本人にしか分からない。野次馬が「うんうん、わかってるよ」とい

うような安いフォローをしても逆効果だ。元凶である私が言うのもなんだが、永夢自身に解決してほしかった。それだけだ。まあ、こんな事態になるとは思っていなかったがね……………今回は私のミスだ。目が覚めたら素直の永夢に謝るとするよ」

「……………だからって、あんたのやったことは許されねえよ……………」

「今問題が起きているのは君じゃない。許されないといつても、君に許しを請う気持ちには全くないよ」

それだけ言って、檀黎斗は今度こそ何も言わなくなった。

檀黎斗視点

「……………ツチ……………」

今のやり取りで、思い出したくもないことを思い出した……………うんざりだ、あの記憶は……………

「お母さん……………どうして……………どうして……………！」

「僕は、もっとお母さんとゲームの話がしたかったのに……………」

『辛いわねえ、黎斗君……お母さんがいなくなっても、しつかりね……』
 (うるさい……五月蠅い……！)

(お前らなんか、お母さんが死ぬまで一回も病院にお見舞いにい来なかつたくせに……！)

(やめろ……!!お母さんのお葬式で、安い涙なんか流すな……！)

(僕を口先で励まして、「自分は優しい人間なんだって思って、優越感を得たいだけだろう……!?)

(いらない……)

(口先だけの優しさも、安い涙も反吐が出る……！)

「父さん、あんたもだ……お母さんが死ぬとわかつた途端、生活の全部を会社優先にして、母さんの葬式にも来ないあんたも同類だ……！」

『黎斗君、何か言った?』

「いえ……なにも? どうもありがとうございます。僕一生懸命頑張ります」

『あら、黎斗君、もうすつかり大人になったのね?』

……懐かしいな、思えば、あの日から私は他人に対して仮面をかぶるようになったんだ。

……永夢、君は強い男だ。必ず帰ってくるだろう。

……美しい水晶を持つ君には、流石に私と同じ轍を踏ませるものな……。

第5話：貴利矢のNEW POWER

貴利矢視点

「……………おい、起きろ、九条貴利矢、聞こえているのか!?」

「……………んあ?」

いつの間にか眠っちまってたみたいだ。まだ少しぼうつとする。

「ヴァーハツハツハ!! 新しいガシャットを作ったぞお!!」

「いややかましいわ神」

自慢したいならよそでやってくれと思っていたら、俺の方にそのガシャットをパスしてきた。

「……………へ?」

「君のだ。使いたまえ」

「ええええええええええええええええええええええええ!!!!?」

「な、なんだ……………?」

こいつが自分以外の輩にガシャット渡すとか信じらんねえ。普通自分の分から作るだろ!

「安心したまえ。やばいものじゃない」

「君にクリスマスプレゼントをあげよう」

「な、なんだこれ……………!?!」

「このガシャットはこうやって使うのさあ……………ブウン！」

「[デンジャラスゾンビー!」

「真実とともに、闇に追放してやる……………!」

「[CRITICAL END]」

「……………うん、信用できん。俺の前世（笑）がそう言ってる」

「去年のクリスマスのはもう忘れよう……………うん、そうしよう。」

「参ったなあ……………このガシャットの力なら君を苦しめたガルーダにも勝てるのになんか
したのか……………」

「待てそこk[#]w^しs^くk」

「いいかい？ まずこのガシャットのレベルは10だ」

「ほうほう……………10か……………ザコじゃん!!!」

「よく言うわ！ 10に倒されたくせに!!!」

「はあ……よく聞け、これは、10であり、Xなんだ」未知数

「エックスか……なんだ、びっくりした……あれ、Xって聞いた途端もつと信用ならなくなったぞ？」

「まあ実際に使った方が早いだろう。外へ出ようか」

「促されるまま外へ行こうとしたが……」

「まあいい！ 私もつれていけ！」

「ええ……」

「極力こいつは出したくないけど……まあ説明もさせなきゃいけないし、仕方ない。」

「シヤバだあ！ ヴァーハツハツハ……ヴァー……ヴァー……！」

「喜ぶこいつをバグヴァイザーIIにぶち込み、外へ出る。」

「こらあ！ ここからだせえ！」

「はいはい、静かにしましよーね、ゲンむつち」たまごつち

「誰がゲンむつちだあ！ 九条貴利矢アアア!!」

「……こらへんでいいか。バグヴァイザーIIを地面に置き、スイッチを押す。」

【暴速HORSE!】

「……馬？」

「そう、馬だ。詳しい使い方は、わたしを此処から出したら教えてやる！」

……しよーがない、出すか。意を決し、バグヴァイザーIIのボタンを押した。

「まずは普通の爆走バイクガシャットを刺し、次にそれを刺せばいい」

「なるほどね……未知速……変身!!」

【ガツチャーン！レベルアップ！爆走！独走！激走！暴走！爆走バイク！アガツチャ！
高速！音速！光速！暴速ホース！】

軽快な変身音とともに、俺は一頭の馬になった。

「あ……ガチで馬なのね……」

しばらく走ったりしてみる。……うん、前よりスピードも、小回りもいい、ジャンプもできるし……でも、これ……

「あんまり飛び抜けてないな。これならジェットコンバットのほうがまだ……」

「言つたろう？ それはXだ、と……その時点ではまだ10の力だ。そこで！グレイドX-0！変身！」

【ガツチャーン！レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクションX！アガツチャ！デ・デンジャラスゾーンビ！デ・デンジャラスゾーンビ！】
ポウ！つという奇怪な声をあげながら檀黎斗が俺の背中に乗ってきた。……その時、俺の体が勝手に動いた。

「このように相方が乗りさえすれば、いかん無くその性能は発揮され……おい！暴れ

るな！落ちるだろ！」

言われても、全く止まらない。止まろうとしても、体が言うことを聞かないのだ。

「ああっ……………うぎやあああああああああああ！！！！」

あつさり振り落とし、宙に浮いた檀黎斗にあるうことか俺は後ろ飛び蹴りを見舞ってしまった。

「ぐ……………九条貴利矢アアアア!!死んだらどうする！何のつもりだ!？」

「わ、わりい……………勝手に体が暴走しちゃって……………」

「暴走!?! そんなバカな!」

その後どうやっても暴走は治らず、落ち込んだ神（笑）はドレミファビートに自らこもっちゃった。

「……………なぜだ……………? ガシャットの不具合なんて初めてだ……………」

……………んー、これ、なんで使えねえんだろうな? 使い方はあつてはるはずんだけど

……………変身もできたし……………

意味が分からないと言う顔をしていると、ガルルーダが「仕方ねえな」と言う顔をした。「いいかア？ 今んとこうちのハイパー無敵ソルティと渡り合える可能性があるのはそっちのエグゼイドの同じくハイパー無敵だけだ。それ以外の奴じやダメーじすら与えられねえだろ？ あいつが死んだらこの戦争、お前らの詰みだぜ？ 後釜なんかいねエだろ？」

俺たちは圧倒的に勝ちたいわけじゃねエ。正々堂々とやらなくちやいけねえんだ。こつちとしても、そっちのラスボスに勝手に死なれちや困るんだよ。」

……………！ そうだ！ このまま永夢が目覚めなかつたら……………

いや！ 何考えてんだ自分!? 永夢を信じないでどうすんだ！ 大丈夫だ…永夢なら……………！

「……………まあいつかア。取りあえず病室どこ？ 迷ったわ」

「……………永夢は……………まだ目覚めてない。……………意識不明だ」

「…え？ マジかよ!? どうすんだよこのリング!? このままおきっぱだと100%腐るぞ!？」

知らねえよ……………持つて帰れよ……………家で食えよ……………

「まあいいや。なら二人でツーリングでもどオだ?」

「……………それはただのツーリング? それともバトルか?」

ヒッヒッヒッヒッヒッヒッヒッヒッヒッヒッヒッヒッ
 「あんた笑い方きつから安定しねえな……………」！！！！！！！！！！

まあ仕方ない。こうなったら大先生織先生に頼むしかねえけど…………

あの人常に固いんだよ……………性格フニャフニャの自分と合うかな…………

「じゃあ早速外行くかア！」

「行くぞ、監察医」

「へいへい鏡センサー」

「爆走バイク！」

「タドルレガシー！タドルファンタジー！」

「培養！」

「二速……………」

「術式レベルHundred fifty……………」

「変身！！」

「デュアル！ガシャット！ ガシャット！ ガツチャー！ デュアル・レベルアップ
 !

！
 迎る巡るRPG！ タドルファンタジー！ アガツチャ！ 迎り着いた世界！ 神々

のレガシー！」

「ガツチャーン！レベルアップ！爆走！独走！激走！暴走！爆走バイクー！」

「ヒヤツハア！ ついてきなア！！！」

「乗れ！ 先生！！」

「飛彩でいい！！」

「……………おお、行くぞ飛彩！！」

「クダケチール！！」

飛彩が呪文を放つが、避けられた。やっぱりバイクじゃ無理か……………

相方のレベルは高いけど、逆にレベル差がありすぎて何だか動きずらさが増した。

それに最近俺バイクになつてなかつたし……………最後の変身はちよろつと永夢を乗せただけだったし……………このままじゃ、性能的にも、いずれ負けちまう……………！！

「おい！ もっと速度は出ないのか？！」

「これ以上は……………無理だって……………！」

「オイオイ！これじゃ俺の独壇場じゃねエかア！」

連携もできたてすぎてうまくいってねえしよオ……………！おせエし、がっかりだぜエ

！！

ぐ……………クツソ……………

！！！！

第7話：貴利矢のLEVEL UP

貴利矢視点

「このままゴールすりゃあ俺の勝利だア！負けた場合はキッドと同じ、ペナルティが待ってるぜえ！」

叫ぶと同時に、ガルルダは思いきり速度を上げ、はるか彼方に消えていった。

「ぐ…………ちつくしよう！」

「……………」

このままじゃ絶望的だ。確かキッドの能力は「ダンスに負けた方は全ライフの50%カット」だった…………レースで負けたうえに、そのあとレース後に乱闘があるんだ！勝つのは厳しい……………！

「何とかこの状況を打破したいんだろう？九条先生？」

「この私が、策を授けてやろう！ヴァーハッハッハ！！」

「そりゃありがてえ……………!? 何でいんの神!?!」

ふと横を見ると、腕を組んで立っている檀黎斗がいた。

「ん？ 私がドレミファビートに自主的に戻った時、君がセキュリティ設定をしなかつ

ただろう？ あれは私が入ったからと言って自動的に檻になるわけじゃないぞ。

まあいつもはポッピーがやっていたから、君は知らないかもしれないけどなあ！

ヴァー……ハハハハハハハハハハハハ!!」

マジか……知らなかった……これヤバイ奴やん。

「……まあ今はいいや！ その策、教えてくれよ！」

「良いだろう！ 教えてやる！ ガシヤットを抜き、変身解除！ 以上だ！」

「………はい？」

「オンラインゲームあるあるだ！ 回線を切つてログアウトすれば、君がその直前にどれだけ不利だったとしても勝負無し！ さあ早くやるがいい！」

……なるほど、ねえ………確かにこのままじゃ勝つ見込みはゼロだ。素直に変身を

………

「おめさんとはいつか、バイクでツーリングしてみてもいいかもしんねえなあ。気が合いそうだあ」

「二人でツーリングでもどオだ？」

「俺たちは圧倒的に勝ちたいわけじゃねエ。正々堂々とやらなくちゃいけねえんだ」

「………ダメだ。逃げられない………！ 悪い飛彩、俺にもう少し付き合っちゃく

れねえか？」

「……………良いだろう」

「……………そういうことだ。神、悪いが、あんたの策をどぶに捨てちまうことにした」

檀黎斗はにやにやと笑っている。そのまま横を通り過ぎようとしたその時、

「君ならそう言うと思ったよ、九条先生。良いだろう、では二つ目の策を教えてやろう」

「……………はい？」

思わず「あんのかよ!？」と転びそうになった。……………今バイクでよかった……………

「一つだけな……………これで策は最後だ。」

よく聞けよ……………? 「ゲームのデンジャラスゾンビには馬はない」それだけだ」

それだけ言うと、檀黎斗はそのまま消えていった。

「飛彩、花家先生に電話頼む」

「? ……………あ、ああ」

「はい、もしもし。此方、花家ゲーム病専門クリニックですわ。」

私はアルバイトをやっておりますエリーゼと申します。其方のお名前をお聞きして

もっ。」

……………誰? ……………ま、まあいいや、とりあえず変わってもらおう。

「えーと、聖都大学附属病院で監察医兼、脳救命センターC Rで仮面ライダーレーザー

をやっております九条貴利矢と申します。そちらに西馬ニコさんいらつしやいませんか?」

「承知いたしました。しばらくそのままでお待ちください。九条様」

……………いや、本当に誰?

「何? アタシ忙しーんだけど?」

「ニコちゃん急にごめんね、聞きたいことがあるんだけどいい?」

「マイティアクシオンX」か、「デンジヤラスゾンビ」に乗り物つて出てくる?」

「は? ええと、「マイティアクシオンX」にはクリア得点でチヨウ早く移動できるバイク、「デンジヤラスゾンビ」には確かラストの爆発オチの前でキャラが町から脱出するときにバイクに乗ってたよ。……………それが?」

「……………ん。ありがと。それで十分。じゃーね

悪いんだけどさあ飛彩、スロットに付けてあるガシャットを俺のベルトにさしてくんない?」

「ん? ああ……………これだな」

【暴速HORSE!】

【ガツチャーン! レベルアップ! 爆走! 独走! 激走! 暴走! 爆走バイク! アガツチャ!

高速! 音速! 光速! 暴速ホース!】

変身すると同時に自分の体に変化が起きた。

まず体が真つ白な白馬になり、背中にサドルが現れ、前に神が乗った時よりも乗りやすくなった。おまけに乗っているブレイブにも影響が現れ、腰から下、足にまで真つ白の鎧がブレイブに装着された。

「すげえ！ 力がみなぎる！ これなら勝てるかもしんねえ！」

ガルーダ視点

俺の余裕の勝利かと思っていたが、どうやらそう簡単にはいかねえみてえだ。

「そう来なくっちゃなア！ さあ、来なレーザー！！！！」

第8話：ガルーダとの決着

貴利矢視点

多分このガシヤットはタドル系としか共闘できなかつたんだろう。信じられないくらい速度が出て、彼方に消えていたガルーダにもう追いついた。

「速エなアおい!!!」

「生憎負けられないんでな!!!」

「……………いいぜエ……………「爆走バイク」の醍醐味、見せてやるぜエ……………!」

どこから出したのか、ガルーダはショットガンを片手で構え、こつちへ照準を合わせた。

「……………!」

多分飛彩のシールドではじけると思う……………はじける、よな?

「……………やアめた。やめとこ」

ガルーダは銃を投げ捨てた。前に向き直り、一度ハンドルを強く握った。

「……………なんで、撃たない……………?」

爆走バイクは、何でもありのゲーム、追突、爆弾、銃、何でもあり。なのに……………

「……………へッ…道具なんか使わねえですよ……………おいらが認めた男と一度、純粋な速度だけのレースをやってみたくなつてなア。ライバルだぜ……………今まで、おいらに追いついた奴なんざいなかった……………だから……………余計な、余計……………ワクワクすんだよオ!!!!!!」

目の前のガルーダは本当に、心から嬉しそうな喜声をあげた。

「……………来な、レーザー、それにブレイブ、世界最速、決めようぜ……………!」

「……………悪いな……………」

「あん? 何が?」

「いや……………ほら……………そっちは一人なのに……………俺たちは二人だしさ……………」

そうなのだ。実質これは、一対二。正々堂々とは程遠い、セコイ戦い。

「……………へッ……………気にすんなよオ!!!」

おいらだつて二人分だぜ!!! おいらと、この相棒バイク、イダティーンで最強タッグよオ!!!!!!
こつちこそすまねエなア! 即席コンビには荷が重いかア!」

「……………! 上等だぜ! 絶対負かす!!!」

……………本当は、分かつてる。今のは俺たちへの気使いだつて、負い目を感じさせないように、わざと……………

「あんた……………最ツ高のレーザーだな……………マジで……………」

「さア……………結果は……………？」

どうなった……………？ 流石にここでペナルティはきつい……………

「結果報告：選手A・ガルーダ、23・01秒」

「……………おオ、自己ベスト超えた」

頼む……………やべえ……………手が震えてきた……………いや、前足か……………

「続いて選手B・レーザー&スナイプ、23・01秒」

……………！

「……………ありや……………同時かア？」

「引き……………分け……………だな……………」

……………この後は、第二試合、レース後の格闘で終わりだ。

「……………おいらはよオ……………引き分けたの……………生まれて初めてだぜ……………」

……………だろうな……………だからこそ、「迅速屋」世界最速を、見る者達全てに届けるも

の……………

「おいらは……………尊敬するぜ、レーザー、おめえさんをよ……………」

だか……………ダラダラとシバキ合いたいとは思わねえ……………だからよオ……………

一発で、決着付けようぜ……………今度は武器も魔法も何でもありだ。

お互い距離を取り、正面から各々の最高速でぶつかり合う。いいか？」

「……………分かった」

……………これが、最後の勝負……………これで、決着がつく。

「よし、じゃあおいらが離れるぜ」

ギリギリ見えるか見えないかの距離までガルーダは離れた。

「……………行くぜ、ガルーダさん」

俺も、あんたを尊敬するよ……………本気で、

走り出し、限界まで速度を吊り上げる。ガルーダは銃を持ち、撃ってくる。

一発……………二発……………

横に飛んでの確に避ける。

やがて、ガルーダは銃を捨て、前輪から刃を出した。ウィーリーをしながら突っ込んでくる。

「……………今だ！ 飛彩!!!」

「おう!!!」

飛彩が剣を氷結モードにし、地面へ振った。みるみる地面が凍り、うつすらと氷の膜ができた。

「おわア!!!」

氷の地面をウィーリーで走れるわけがない。ガルーダは落車し、派手に吹っ飛んだ。

何でもありの、この勝負、どんな手を使つてでも、俺は勝つ。それがあんたの道にも
かなうはず……

【暴速 CRITICAL CRASH!】

その場で反転し、決め技の後ろ飛び蹴りを思いきり叩き込む。

車の衝突事故みたいにガルーダは吹き飛び、何度かバウンドして止まった。

.....

.....

.....

「あー、負けた……………」

……………目の前のガルーダは虫の息だ。放っておいても、多分死ぬ。ただ……………最後に……………」

「あのさあ……………生まれ変わったら、俺とまたツーリングしようぜ？」
「ハッ……………いいねエ……………りよーかい。」

「おいらの……………俺の完敗だぜ。最高のレースを、有難うな……………」

「……………ああ……………さよなら、迅速屋さん」

「へッ……………それは、もうおめえさんの名だぜ……………？」

「それとな……………あのリング、お目さんと会ったところに置いてきた。よかつたら食え」

消えゆく誇り高きレーサーに、俺は一つ礼をした。

俺は……………できればいつか、あんたみたいな奴になりてえよ……………」

「貴利矢ー！ 黎斗を見なかった!？」

後ろからポツピーが走ってきた。どうやら神（笑）はまだ帰っていないらしい。

仕方ねえ、探すか……………！

ガルーダがいた場所には、動きを止めた爆弾が一つだけ。白衣のポケットにぶち込

み、歩き出す。

バイオウルフ視点

「ガルーダ……………今まで有難う、さらばだ……………いや、我らしくない……………」
いま、我はCRに一人いる。目の前の柵を開き、ケースを一つ取り出した。
中に入っているのは、全てプロトガシヤット。

「これで……………」

第9話：目覚めたM

永夢視点

「ん……………」

俺はゆっくりと目を開く。よく見たことのある天井が目に入った。

病室に入ってきた看護婦がお盆を取り落とし、廊下へ飛び出していった。

「んう……………ぐツ!!!」

起き上がろうとすると全身に痛みが走った。痛む腕を無理やり動かし、掛けられている布団をはぐ。

「おわ……………一体…何が？」

……………首を吊ったただけだったはずだが……………えらい怪我だなオイ。

そうこうしているうちに、けたたましい音と共にドアが開いて何人か入ってきた。

「永夢！」

「小児科医！」

「永夢！」

「永夢ウ！」

「永夢！」

上からポツピー、飛彩、貴利矢、黎斗、パラドだ。

「……………俺の手術は、誰が……………？」

「それはね、飛彩や……」

そこまで聞ければ、もう十分だ。ベッドから跳ね起き、飛彩を殴りつける。

「ぐッ……………!!」

「手前！　なんで俺を助けた!?!」

倒れたところに馬乗りになり、もう一発殴ろうとしたが他の面子に止められた。

「やめろ！　永夢!!」

「落ち着け！　どうしたんだ!?!」

「お前が俺を治さなきゃ……………俺は死ねたのに……………!!」

なおも嘔みつこうとしていると、飛彩の鉄拳が俺の顔面に突き刺さった。

「(っ)はッ……………」

羽交い絞めにしていた他の奴らごと後ろに倒れこんだ。

「……………ヘッ……………怪我人を殴るとは、大した天才外科医様だな？」

「主治医を殴るとは、大した患者だな？」

飛彩は俺の胸ぐらをつかみ、無理やり俺を立たせた。

唸りをあげた飛彩の拳が、俺の顎を正確にとらえた。脳が揺れて、近くの壁にもたれかかる。

「……………お前は……………医者だろうか？ お前が人の命を救うんだろ？」

……………どうして、自分で自分を殺すんだ!!!」

不意に出た、その言葉、きつとこいつは、ただ思った言葉を吐いただけだろう。だが、その言葉は、俺の心にさあつと黒い影を生んだ。

「……………でてけ……………全員、出ていけ!!!」

俺は飛彩の顔を見きれなかった。ただ顔をそらし、叫ぶのみ。

「もう、いい……………」

それは、今まで自分の人生で聞いた声のなかで、最も悲痛な、悲しい声だった。それだけ言って、飛彩は病室を後にした。

他の奴らも、一人、また一人と病室から出ていき、とうとう誰もいなくなつた。

……………

……………

……………

.....

.....

「永夢さん？ 入りますよー？」

看護婦が、病室に入ってくる。だが、その病室の中には、宝生 永夢の姿は、何処にもなかった。

そこにはただ、開け放たれた窓から入る太陽の光と、カーテンを浮き上がらせる風だけ.....

第10話：本当の心は……

永夢視点

もともと自分が暮らしてた、橋の下のダンボールの家。そこでうずくまっていると、パラドが現れた。

「……………よくここがわかったな……………パラド……………」

「俺の心は、お前とつながってるからな……………」

もういいや。めんどくさい。

「帰れ……………帰れよ……………！」

「なあ……………永夢、

もう……………もう、やめないか？」

……………何言ってるんだ？ こいつ、何を辞めるって？ 生きることか？

「はぐらかすなよ、もう、強がるのはやめろ、永夢。」

何が「俺」だよ、お前の一人称は「僕」だろ？

もう、いいんだよ、泣いていいんだ。

永夢、無理に強がって、「お前にとって強い自分」を演じるな。

もういいんだよ……………」

「ハッ……………誰が演じてるって？」

「お前だよ。永夢。」

邪魔する奴は容赦しねえし、口調は「俺」、まさに俺、パラドクスの真似っこだろ？」

「……………うるせえ……………」

「永夢……………お前は……………」

「うるせえって言ってるんだ!!!」

殴りかかるが、ひらりと躲かれた。

「強い自分を演じるな、永夢、お前はもう十分に強い奴だ」

「ふざけんな！」

俺は……………僕は、女の子一人救えない……………その程度なんだよ!!!!!!」

「お前が届かないなら、ほかの皆がいるじゃねえか、永夢、お前もわかってるだろ？」

俺は今、お前の心の通りに話してるだけだ。いゝ加減、心の闇に逃げるな!!!!!!」

「うう……………うううううううううううううううううううううううううう!!!!!!」

!!!!!!」

!!!!!!」

頭が……割れそうだ。……いたい……痛い……

「……永夢、CRで、俺は待ってる」

それだけ言って、パラドは消えた。

「言いたい放題言いやがって!!!」

僕は……俺は……僕は……!!!」

また、あの温かい病院に帰る、そんな資格が、自分にはあるのだろうか？

頭を掻きむしり、泣きわめく。僕は……どうすればいい？

……

……

……

……

……

「永夢……永夢……？」

泣きつかれ、いつの間にか眠っていたみたいだ。空は赤く染まり、目の前にはポツピーがいた。

「今度はポツピーかよ……………」

「永夢……………私、永夢に帰ってきてほしい。永夢とまた、一緒に仕事がしたい。ドレミファビートがしたい。皆で……………一緒に笑いたい」

「俺には…僕には、そんな資格はない。他の人でいいじゃん、

適合手術をすれば、またエグゼイドは現れるんだ。

ハイパー無敵だって、本当の天才ゲーマーのパラドにやらせれば……………」

「永夢以外じゃ……………いやなの……………」

「……………ッ

何でだよ!!! 僕なんか……………どうして、どうして僕なんだ!？」

「私……………永夢が……………好きなの……………!」

「君はきつと気づいてないけれど…君は、きつと、永夢のことが好きなんですよ?」
「前に……………キッドが私にそういったの。だから……………」

胸が、痛い。穴が開いているみたいだ。

「僕は……………僕には、そんな……………愛されるほど、価値なんて……………」

「私、永夢が好き。」

一生懸命患者さんのことを考えている永夢が好き。

ゲームをしている永夢も好き。

別の一生懸命な姿が見られるから。

ジエツトコースターに乗っているときも好き。

なんだかんだ、不承不承のくせしてしつかり楽しんでいて好き。

そして……何より好きなのが……

患者さんが治って、心から嬉しそうな笑顔をしている永夢が、一番大好き」

涙が止まらない。僕は……僕は……

「もう私、帰るね……さよなら……」

そう言い残して、ポツピーは消えた。

「……………」

いつの間にかダンボールの上に見慣れない箱がある。開けてみると……

「……………これは………テガミ?」

一つ一つ開いて、読んでみる。

「蓮介さん……………」

お久しぶりです、宝生先生。

あの時に送ったアップルパイ、お口に合ったでしょうか？

あの後無事に結婚式を挙げ、今ではおなかに赤ちゃんがいます。

親身になって彼女の話を聞いてくれた先生のおかげです。

一度、ぜひ遊びに来てください。

名取蓮介

「これは……上杉さん……」

先生、元気かい？

あの時放送で俺の息子のことを言ってくれたの、嬉しかったよ。

これからも俺は、事件を追っていく。

先生、あんたも頑張ってくれ。

上杉平次

「周平くん……菅土夫さん……曜子さん……勇樹くん……颯太くん……ソラさん、シドさん、シシドさん……」

どの手紙にも、ありがとう……ありがとう……としか書いてない。

こんな……僕なのに……

「……………これは……………若菜、ちゃん……………？」

それは、一冊のノート。

「につき

こうさかわかな」

……………なにか、書いてるのだろう……………

僕は恐る恐る、日記を開いた。

「○が×にち、きようはとつてもやさしいせんせーにあえた」

「△が●にち、きようはえむせんせーにげーむをみせてもらった」

「□が▽にち、せんせーといっしょはたのしい。きようはたくさんおはなしができた」

「これ……………全部、僕のことばかり……………」

そして僕は、ついにあの日、あの子が最後に日記を書いた日のページを開いた。

「◇が☆にち、きようもせんせーはかっこよかった。

せんせー、わたし……………わたしね……………せんせーのこと、だいすき」

僕はすべて理解した。あの日、あの時、あの子が言おうとした言葉を。

若奈ちゃん……………僕は……………僕は……………

第11話：夢を見た

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀と滑った 後
 ろの正面だあれ？

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀が滑った 後
 ろの正面だあれ？

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に つるつる滑った 鍋
 の鍋の底抜け 底抜いてたもれ

かごめかごめ 籠の中の鳥は いつもかつもお鳴きやある 八日の晩に 鶴と亀が
 滑ったとき、ひと山 ふた山 み山 越えて ヤイトを すえて やれ 熱つ や

籠目籠目 加護の中の鳥居は いついつ出会う 夜明けの番人 つるつと壁が滑った
 後ろの少女はだあれ？

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出会う 夜明けの番人 鶴と亀が滑った 後
 ろの少女はだあれ？

通りゃんせ 通りゃんせここはどこ 細通じや天神さまの 細道じや ちつと通して 下しゃんせ 御用のないもの 通しやせぬ
この子の9つの お祝いに お札を納めに まいります 行きはよいよい 帰りはこわい こわいながらも通りゃんせ 通りゃんせ

いつの間にか、眠っていたみたいだ。また僕は、あの花畑にいた。

……僕は、どうすればいいんだろう？

花畑へ、行くのか、行かないのか……

「先生、また来たのね」

声のした方を見ると、そこにはあの子が立っていた。

「私、先生が好き。だけど、私が好きなのは、いしやの先生だわ。今の先生は、あまり好きじゃない」

「そんな……どうして？」

「だって、今の先生は病気だもの。病院の皆は、皆で先生を治したいと思ってる」

「ちよ……ちよつと待ってよ、若奈ちゃん、僕は怪我をしてるけど、病気なんかじゃ……」

「じゃあ、どうして病院の人たちは皆不安そうな顔をしているの？」

先生の気持ちが病院の皆にも伝わってるんじゃないかしら？」

若奈ちゃん……………

「先生は、皆の笑顔を守るんでしよう？」

皆のことを、癒してあげて。寄り添って、不安を取り払わなくっちゃ。

先生、医者以上の、癒者いしやになつて。

命と笑顔を守る、皆の癒者になつて……………

私が好きになつてよかつた……………そう思えるような、先生でいて……………」

END OF RIDER CHRONICLEを誓って2

永夢視点

目が覚めた僕は、歩き出す。病院へ、CRへ向かって……

「来たな、永夢」

病院の入り口前。パレードが立っていた。

「昨日からずっと立ってたのかい？」

「ああ。約束だからな」

「……………ありがとう。パレード」

「ああ、お帰り……………永夢」

パレードと拳を合わせて、病院へ入る。CRへ向かって……

……………

……………

.....

.....

.....

「院長先生、ご迷惑おかけして、申し訳ありませんでした!!」

「宝生君、無断欠勤は重罪だ。分かっているね」

「.....はい.....」

「少し前に、審議官に君の解雇申請書を出した」

「.....!」

予想はしていたけど.....やっぱり.....

「だが、まだあの書類に調印はされていない。後は審議官がうまくやってくれるだろう」
「え~~~~~! 院長、どういうこと!?!」

横からポツピーが飛び込んできた。

「だから言っただろう?」「私個人の意見や権限ではどうすることもできない」と。私は
審議官と口裏を合わせただけだ。.....内緒にしてね.....?」

「院長、凄い!!!」

「さ、宝生君、君にはまだまだここで働いてもらおうよ!」

.....胸が熱くなって、涙がこぼれそうになる。だけど.....まだ.....

「あの.....飛彩さん.....」

「.....なんだ?」

「その.....本ツ当にすいませんでした!!! ごめんなさい!!!」

「.....もう、いい.....」

今度の言葉は、なんだか少し暖かいような気がした。

「フン、せいぜい働け、小児科医」

「飛彩さん.....ありがとう、ごさいます.....」

.....僕は、幸せ者だ。本当に、そう思う。

「.....さあ永夢、白衣とガシヤット、それにゲームドライバーだ」

貴利矢さんが僕に渡すが、僕は一瞬ためらった。そして.....

「すいません、僕ちよつと行くところが.....」

確か、あの子の両親に伝えたあの日、僕は聞いていたはずだ。

.....

.....

.....

.....

.....

「久しぶり、若奈ちゃん……………」

僕は今、あの子のお墓の前にいる。

「若奈ちゃん……………ごめんね、僕が弱かったから、君が……………」

今でも思い出す。僕が足りなかったから……………」

「若奈ちゃん、今の僕や、医学じゃ君を助けることはできないんだ。だけど……………」

でも、もう僕は、あの日とは違う。

「……………若奈ちゃん、いつか僕は、君に追いつくよ。

いつの日か、君を助けて、治して見せる……………」

だから……………だから、ここで待っていてくれないかな？

その日が来るまで、君にこれを預かっていてほしいんだ」

墓石に白衣を丸め、置く。

「いつか……また……」

……きつと、僕の人生は、今が第一話。

これまで、辛いこと、悲しいことがたくさんあった。

それは、きつとこれからも続くだろう……

いや、もしかすると、もつと酷いが起こるかもしれない。

ふと思うことがある。

日々を過ごし、自分は毎日満足しているのかと？

毎日、自分が目指すことに向かつて、やるべきことをやり楽しいと思えることで、自

分の欲求を満たしている。

それはすべて未来につながって……その未来って何だろう？

人が死に、その意識が途絶えたらあるいは何の意味もないのでは？

生きているときに望んだことが満たされていても、死んだらすべてが無意味になるん

じゃ……？

でも、一生懸命、生きていこう。僕は、それでも日々を過ごす

あの子が救ってくれたこの命には、きつと大きな意味があるから。あの子の命にも、意味があるはずだから。

その意味に向かって、歩いていく。走るのは早くていいだろう、でも、時にはゆっくり歩いてても周りがよく見えるんじゃないだろうか？ 立ち止まって、振り返ってみてもいいかもしれない。

その場に立ち、両手を合わせて礼をする。

今 は も う 会 え な い 彼 女 に、 僕 は 一 人、
終 わ り の な い 戦 争 の 終 わ り
 END OF RIDER CHRONICLEを誓った……

「じゃあ、またね、若奈ちゃん」

振り返って、歩き出す。

不意に風が吹いて、木の葉を揺らす。

風の中、お墓の前に僕の白衣を胸に抱いて手を振る少女がいるような気がした。

閑部：決着を……………

閑話：一つだけ、約束を胸に

永夢視点

「エグゼイド、お久しぶりですね」

傷もだいぶ癒えてきて、CRで休んでいると急にテレビの画面が変化してハイパー無敵ソルティが映った。

「……………久しぶり、だね……………」

「もう他のお仲間から話は伺っていると思いますが、現在こちらは壊滅一歩手前です。先に現れた謎のクロノスによって、ほとんどの仲間がやられてしまいました。」

そこで、急な話ですが最終戦争を始めます。

時は一週間後、場所はA、B、C、Dと別れ、

A地点には私、ハイパー無敵ソルティ、

B地点にはベイオウルフ、

C地点にはObiパワードクス、

D地点には海帝がいます。

こちらがその地点を表す地図です。

条件は一つだけ、すべての地点で一斉に戦闘開始、

つまり、散開です。決着がついた際は、近くに置いてある照明弾を空に打ち上げても
らいます。

我々のチームは赤、あなた方は青を。

全てが終了して、他の場所で仲間が戦っているなら合流して共闘可能です

以上です。質問はありますか？」

何かのプレゼンみたいだなと思いつつも、気を引き締める。

「特にはない。了解だ」

「そうですか。なら、こちらからは以上です。では、また………」

.....

.....

.....

.....

.....

「……………という連絡がありました」

飛彩さん、貴利矢さん、大我さん、ニコちゃん、パラド、黎斗さん、エリーゼさん、ポツピーを集め、全員に話す。きつとこれが、最後の戦いになる。

「……………問題は、配分なんですけど……………」

「永夢、最後ならば、使わざるおえないだろう？ ハイパー無敵ガシヤットだ」

黎斗さんが、僕にパスをする。このガシヤットも、久しぶりだな……………

「じゃあ、僕がハイパー無敵ソルティと戦います」

「……………なら俺はベイオウルフだ。あいつには借りがある」

「俺も行くぜ」

「なら私も大我様のお供をしますわ」

「4つ中3つは因縁がありそうだから……………私もベイオウルフにしよう」

飛彩さん、大我さん、エリーゼさん、黎斗さんはベイオウルフか……………

「俺は、俺と戦う」

「パラド……」

正直、このObiパラドクスとかいうの、謎だ。どんな奴なんだ？ ちらつとしか見たことないし……

「俺が海帝と戦う。我が敵として申し分なし！」

グラフィアイトは海帝か……まあ一撃＝即死とか、リスクー過ぎて誰もやりたがらないと思っていたけど、流石だな。

「じゃあ……決まりですね!!!」

ポツピーはニコちゃんをお願い。皆でクリアしましょう!!!

「おう!!!」

「ああ!!」

「ブウン!!!」

「うん!!!」

「ええ……」

「よっしゃー……つて、なんかアタシ蚊帳の外くね!？」

よし……絶対勝つぞ……!!!

第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年 開戦

永夢視点

……………今、僕の目の前にはハイパー無敵ソルティが立っている。

「……………やはり、最後はあなたと私、こうなると思っていましたよ」

「まあ、お互いに無敵だからね。宿命でしょ」

「……………まったくそのとうりですね。……………培よ」

「ちよつと待った」

「……………何か？」

変身を中断されて、無敵ソルティは訝し気に眉をひそめた。

「ずつと気になってたんだ……………どうして君たちは、僕らと戦うんだい？」

そうだ。パラド達の時とは違い、僕たちはいまだに彼らの根本的な理由を知らない。

「……………これは、真面目に答えなければいけないようですね」

「うん、隠さずに、話してほしい。ずつと気になってたんだ。」

君たちは、正々堂々が過ぎる。いつも、正面から。人質なんか取らないし、大抵の特

殊能力も全部相手に話してしまふ。君の無敵の能力しかり、海帝の即死攻撃なんてその典型だ。言い出さなければ、多分どんな敵でも倒せる……それこそ、無敵の力を持つ僕でも。

君たちには、僕には人の心があるように思うんだ。優しくて、正直で……真つすぐな……」

つまるところ、それがすべてだ。徹底しすぎたフェアプレイ。必ず、変更不可能な自身のレベル以外はすべて相手に合わせる行動。まるで……

「まるで……時代劇に出てくる志士みたいだ

それに何より……君たちの名前もそうだ。

バイオウルフ、あれは北歐神話のドラゴンと相打ちになった英雄じゃないか。

ガルダはインド神話の神鳥ガルダ。乗っているバイクのイダティーンも、仏教天部の最速の神、韋駄天。

クリスはゾンビを倒すというだけでほほい奴のはずだし、キッドもせいぜい《やんちゃ坊主》程度の意味しかない。

グリフォスも戦闘機ゲームの主人公の名前だし……

君たちは、まるで……誰かのために、命を賭けて戦っているみたいだ」

「……いつか、気づくと思っていましたよ。そうです。」

ガルーダやキッドは元から悪い奴と言うことはなく、

その他の仲間たちはガシヤットでしかゲームが存在しないため自分で自分に名を付けました。

それぞれがそれぞれ、その名に恥じない存在になることを願って……

いいでしょう、お話しします。この戦争が起きたわけを、なぜ戦いが起きたのか、なぜ我々が戦うのか、名前の意味、そしてこの階級の順列……すべてお話ししましょう。

……ですが、1つだけ。全てを知った後、私と全力で戦ってもらいます。命を賭けて、

手加減は無しです。約束できますか？」

「……………分かった。聞かせてくれ」
「分かりました……………」

ハイパー無敵ソルティ視点

ついに戦いが始まると思ったら……………まあいい。彼にはすべてを知ってもらおう。

「……………まず、
私たちが生まれたところから話しましょうか……………」

0-1 話：アンギラスのテーマ

「エリーゼお姉さん！ 見てみて！ 外にお花が生えてたんだけ！」

「あら、勝手に外に出てはダメじゃない……………まあいいわ。ありがとう。私のために摘んできてくれたのかしら？」

「うん!!」

僕の名前は、よくわからない。でも一つだけわかるのは僕が「ハイパー無敵」というゲームのキャラクターってことだけ。みんなは僕のことを「ソル」って呼ぶんだ。

僕の摘んだ花を受け取って、優しく微笑んでくれるのは僕の……………いや、皆のお姉さんでお母さん、エリーゼ。

「あまり一人で外に言ってはダメよ？」

「へへ、ごめんなさい」

「ぐしゅ……………うう……………おねえさん……………」

「あら、マオ、どうしたの？」

向こうから泣きべそをかいたマオがきた。マオは何かのゲームの魔王だからマオ。

「キットが僕のマントとつたあ……………ぐすん……………うえええええええええええ！」

その場で膝をついてわんわん泣き出しちゃった。

「マオはおっきいのにだらしないなあ。よし、僕が取り返してやるよ!」

早速マオが逃げてきた道を行くと、マントをきてへんなポーズを決めるキッドがいた。

「おい! マオにマント返せよ!!」

「なんだよソル! 俺のだぞ!」

二人で引つ張っている、マントがビリリ!!!と言う音と一緒に破けちゃった……

「びええええええええ!!!」

後ろからトボトボついてきたマオが大泣きした。やべ……

「……………二人とも? 今すぐそこに正座なさい……………」

「……………つひ……………」

「……………二人とも、早く来なさい!」

「うわああああああ!! ごめんなさあああああ!!!」

この後滅茶苦茶お姉さんに怒られた。

「……………お姉さん、怖かったあ……………」

「つへ、ビビってやんの」

「キッドも足震えてるぞ!!」

もう、もとはと言えば……………

「キッドが悪いんだぞ。マオのマント取るから」

「仕方ないだろ？ 貸せていっても貸さねえんだもん。だいたい、破いたのお前じゃ
ん」

「キッドが悪い！」

「ソルだ!!」

「~~ソル~~いつ!!」

「……………二人とも?」

「……………っひ……………」

……………いつも優しく、綺麗なエリーゼお姉さん。

……………だけど、怒るとメツチャこえ……………!!

「喧嘩するたびに二人ともお説教よ。二人とも覚えてらっしゃい」

「……………はーい」

「さ、マオ、破れたあなたのマントを取ってきてちょうだい。できる限り縫ってあげる
わ」

「ぐす……………うん……………」

次の日、黒いマントに白い糸と言うかなり目立つ方法で縫われたマントをマオは嬉し

そうに着ていた。

.....

.....

.....

.....

.....

ここには、いろんなバグスターがいる。

エリーゼお姉さんは孤児院のシスターって感じた。

皆に頼られていて、お世話して.....皆のお母さん。

「あら、どうしたのソル？ 一人で.....眠れないかしら？」

「ううん.....お姉さん、本で読んだんだけど、この世界には「人」っていうものもいるんでしょ？」

僕、いつか会って見たいなあ……皆で仲良く、楽しく暮らして……」
そう言っていると、急にお姉さんが笑い出した。

「……………どうしたの？」

「うふふ……………ソルはいい子ね、だけど、あれはおとぎ話の本よ、「妖精」や「天使」みたいなに、「人」はこの世にはいないのよ」

「……………ふうん、そうなんだ……………なーんだ」

今、一瞬だけお姉さんがすごく悲しそうな顔をしていたような気がするけど、気のせいだろ。

今は笑ってるしね。

0—2話・Four Diver timentos, op
, no. 1, Andantino Grazioso

……あの日から、大体二週間ほどたった。今はすっかり口調も変わり、俺の体も結構大きくなってきたと思う。

……問題はこれだ。

「……………この廃マンション、人がいないはずなのに何か話し声が聞こえたりするんだよねえ。やんちゃなガキとも思っていたけど、近所の誰もここに出る奴や入る奴を見てないっていうし、変な話だよなあ」

「……………でも、確かに結構ここ雰囲気あるよな。なんか出そうだけ」

……………そう今壁を挟んで向こうにいるのは、エリーゼさんが言っていたいるはずのない生物、人間だ。

「……………まさか……………本当にいたのか？ どうなってるんだ？」

そつと壁に空いた穴を覗く……………姿は結構似てるな。っていうか同じだ。

「……………お、おい、誰かに見られてる気がしねえか？」

「お、おれも……………行こうぜ？」

あ……………行っちゃった……………

まさか、本当にいるとはな……………なら、よく外に落ちてた「新聞」とかいう文書に書いてあるのは全部本当のことだったのか!

「ついに終幕! 仮面ライダークロニクル」

「バグスターウイルス専門医宝生永夢さん、感動の会見」

「奇跡の研修医、宝生永夢さんは語る」

「一年にわたる命がけの治療・宝生永夢に密着!」

「永夢研修医の会見、遺族より感涙続出」

「奇跡の小児科研修医、異例の経歴!」

幼少時↓事故にあい、同夜に父も失う

学生時↓伝説化しているゲームMとして活躍

受験時↓急に医師を志し、見事現役合格

近時↓研修期間始まってすぐにゲーム病と対決

バグスターウイルス専門医として会見」

……………じゃあ、今まで俺たち以外のバグスターが人間と戦争してた?

「……………マジか……………」

とにかく、他の奴らにも話してみよう……………

.....

.....

.....

.....

.....

「つてわけで、本当に見たんだよ。人間。マジで」

「.....にわかには信じられんな。..だが、嘘を言ってるとは思えんし.....」

「やっぱりカイも信じらんねえか.....つてかこいつ最近老けたな。」

「おい、羸琉、貴様、今何か無礼なことを考えていないか？」

「やべえ.....最近勘よくなつたな.....」

「まあともかく、ホントに見たんだって!!!」

「誰でも夢に見るものがある。」

「ドラゴンの背に乗って冒険すること。」

誰も見たことがない伝説の武器を手に入れること。
妖精と花畑で遊ぶこと。

白馬の王子様とやらの助けられること。

自分の背中に翼が生えて、自由に空を飛ぶこと。

俺にとっての夢は、人間と仲良く生きることだ。

0—3話：いつも何度でも

全員仲間を集めて、今日のことを話したけどいまいち反応が悪い。

「……………いや、おめえを信じないわけじゃねエゼ？　ただ……………急すぎて、なんとも……………」

ただ、この場にエリーゼさんはいない。聡明なあの人が人間の存在を知らないはずがないんだ。多分、エリーゼさんは故意に人間の存在を隠してた。思えば俺の生涯最初に人間の存在を否定したのはエリーゼさんだ。

「だからさ、他の皆には内緒で、こっそり人間たちにテガミを出すってのはどうだろ？」

「おお！」

「面白そうだな！」

「いいじゃん！」

「ここにはたくさんのバグスターがいる。ここに集めた仲間たちやエリーゼさんを始めとする「ラスボス」系列。そしてあまり力がないが数が100程の「ソシヤゲ」系列の二種類だ。

「ここにいるのは全員ラスボスバグスターばかり……………」

「俺はそれ、流石にやめといたほうがいいと思うぜ」

「……いや、もう一人、「不明」系がいた。こいつはパラドクスβ。いつの間にかここにやってきて、多分一番年下。何でもこなすリーダータイプだ。」

「………何でだ？ パラド？」

「………いや………正直言つて、俺は皆に隠してたけど人間の存在は知ってたんだ。ただ………」

「まあ確かに人間とバグスターは戦争してたみたいだけどさ？ きつとわかってくれるつて。話だけなら聞いてくれるよ」

「ああ、もう一人の俺にも、優しくしてくれている人間はいたけど………嫌な予感がするんだ」

結局話は有耶無耶みたいになったけど、その夜、俺はこっそり外へ出た。

新聞やら家にあつた書物で大体なにがどういいう施設かは分かる。書いた手紙をもつて警察署やら衛生省の建物に手紙を投函した。

今日は。人間の皆さん。

私はバグスターのソルと申します。

私達は先にあなた方と戦つたバグスターとは違います。

私達はぜひ人間の皆さんと仲良く暮らしたいのです。

私達に戦いの意思はありません。

一度、ぜひ視察してみてください。

きつと私達のことがかわかっていただけると思います。

住所：東京都 ○○○区 ○ー○ー○

お待ちしております。

……うん、内容に問題はないはず。完璧だ。

……

……

……

あれから一週間……うーん、動きなし。何でだろ？

いや、確か人っていうのは会議とかが長引くっていうし、まあこんなもんなんだろ。

パリン！

「んあ？」

広めの広場になっていいる部屋の真ん中で突然窓が割れて、何か部屋に入った。音に反応して、他の皆も出てきた。

「なんだ？これ？」

空き缶のようなそれが転がって……………

突如、全ての景色が真っ白になった。急に強い光が、全員の目を眩ませた。そして、

「突入—————!!!」

真っ白になった世界に大量の何者かが入ってくるのを感じる。

「ぎゃああああ!!」

誰かの悲鳴が聞こえた。そして、直感的に俺は誰かが死んだことを理解した。

0—4話：Jupiter

(何が起こったんだ!? 何も見えない……………!)

視界が全く見えない中、銃撃のような音がする。同時に、誰かの悲鳴も。

「おい! ソル! 俺だ!」

「…パラド!」

急に襟のあたりを掴まれ、どこかへ引つ張られた。

「とつさに目を隠したからな……………お前、目は?」

「見えない……………」

「じゃあ、ここにいろ。俺が入ってきた奴らをたたき出す」

「……………何が起こったんだ……………?」

「……………いきなりライドプレイヤーが入ってきた。詳しくは分かんねえ」

それだけ言って、俺の近くからパラドの気配が消えた。

「……………う……………」

だんだん、目が慣れてくる。そして……………

「……………ツひ……………」

目の前には、倒れ伏す仲間たち。10……………いや、もつと……………?」

俺の方に駆け寄ってナイフを振りかざしたライドプレイヤーに上段蹴りをたたきこむ。その変身が解けて……………

「……………自衛隊?」

その場に倒れたのは、どこからどう見ても自衛官だった。

「……………なんで……………?」

どうして、人間が……………?」

答えが頭をよぎるよりも先に、向こうから何人かのライドプレイヤーが吹っ飛んできた。

「くッ……………てめえら! いったい何のつもりだ!」

通路の壁から向こうを見ると、パラドが何十人もライドプレイヤーに囲まれている。た。

パラドはライドプレイヤーの撃つ銃弾を避け、また何人か吹き飛ばす。地面に倒れたライドプレイヤーの変身が解け、自衛官が苦悶の声をあげた。

「……………!? ソル!? おまつ何でここに!」

俺の姿を見たパラドがこつちに駆け寄ってきた。気づけば俺の後ろにはライドプレ

イヤーがナイフを振りかぶっている。白刃のナイフが俺の体に迫り……

割り込んできた。パラドの体に深く突き刺さった。

「……………！　ぱ、パラドオオオオオオ!!!」

ライドプレイヤーを思い切りぶん殴り、パラドを支える。

「ぐっ……………おい、ソル……………」

「なんだ？」

「俺を……………置いてけ……………二人とも死ぬことはねえ……………いいか？　いちいち死にそんな仲間助けて時間食って、おまけに自分まで危険にさらして……………そんなことになるくらいなら、俺を捨てろ」

俺は……………俺は……………

ゆっくりとパラドから手を放し、走り出す。見捨てた俺は泣いていて、見捨てられたパラドは微笑んでいた。

パラドの周りをライドプレイヤーが取り囲んで……………そこで俺は見るのをやめた。

「っへ……………心配すんなよ。生きれるんだったら、俺も生きるさ……………」

そう、パラドの声が聞こえた気がした。

0—5話：4号より「time」

後のObiパラドクス視点

ソルは、泣きながら通路の向こうに消えた。出来ることなら生きてくれよ……………

「……………さて、来いよ。俺は虫の息だぜ？」

言うと同時に、ライドプレイヤーが躍りかかってくる。

俺はライドプレイヤーの間を滑り抜け、後ろから思いきり蹴り飛ばした。

五人ほど巻き込みながら吹っ飛んで、壁に激突した。あと14つとところか……………

何人かは今のを見て少し怯んでいるみたいだ……………

「どうした？ こいよ!!!」

今度はこつちから襲い掛かる。銃撃音がして、足に弾が二発ほど食い込むが、無視。

アッパーカットで宙に浮かせ、そのまま組み付いて背負い投げを決める。

不意に後ろから忍び寄ってきたライドプレイヤーに羽交い絞めにされた。

他の奴が駆け寄ってきて俺の胸にナイフと突き立てる。一本、二本……………

「アアアアアアアアアア!!!」

胸に刺さったナイフを引っこ抜き、俺を羽交い絞めしてくる奴の腕に突き立てる。

うめきながら手を放したので、無防備な顔面にキックをたたきこむ。

「はあ……………ハア……………」

多すぎだろ……………畜生……………

「覇羅^{バロード}弩！ 助太刀いたす！」

「……………あ？」

鉄パイプを握りしめた海帝が駆け寄ってくる。そのまま流れるような動作で一瞬にして五人も屠った。

「……………お前も逃げろ、海帝、仲間を危険にさらすなんて嫌だ」

「……………フン、いやなに、某も敵に追われていてな。二人の方が都合がよからう？」

……………つへ、それっぽい理由つけやがって……………でもな

近くのライドプレイヤーを俺も可能な限り早く叩きのめす。

「悪いな。ここは俺で十分だ。お前の分もやってやつから、海帝はソルのことを頼む」

「むう……………承知した」

それだけ言つて、海帝もソルが走つていった通路へ消えた。

その時、再び閃光手榴弾が投げ込まれ、爆発した。

「ぐっ！ ちつくしよ……………」

多少視界がぼやけるが、何とか腕で防いだからギリギリ見える。

「第二部隊、突入—————!!」

窓が何度も割れ、また何人かのライドプレイヤーが暴れこんでくる。

畜生……………!!

キリがねえ!

体中が傷だらけだが、体に活を入れて立ち上がる。

「オラアアア!!手前らかかってこいやあ!!!」

なんとなく、分かってる、今がなぜ、こんな状況になっているのか、多分、ソルが何かやったんだろう。あいつは人間と一緒に生きることが夢だったものな。

だから、きつと何らかの手段で外と接触したんだろう。

この状況は、その結果だ。

……………俺が、あの時にもつと強く止めておけば良かった……………

0 | 6 話 : O r i u n d e a i f i

後のObiパラドクス視点

突入してきた奴らは全部倒したし、外にいた奴らもソル達がやったみたいだ。
俺は重い体を引きずりながら、ゆっくりと外へ向かって歩いていった。

.....

.....

.....

.....

.....

後のハイパー無敵ソルティ視点

最期のライドプレイヤーをロープで縛り、一息つく。

乱暴にドアが開いて、傷だらけのパラドが這い出てきた。

「……………!! パラド!!」

駆け寄ろうとしたが、パラドは「大丈夫だ」と言うように顔を振った。

「……………こいつが、あいつらのリーダーか?」

「ああ、そうみたいだ」

皆、この人間、もとい隊長を憎し気に睨んでいる。

「あんた達、なんでこんなことをしたんだ……………? 教えてくれよ」

そう言っても、この人間は黙ったままだ。

「まあいいさ……………直接あんたの脳に聞く」

その人間の頭に手を置き、俺はその人間に感染した。

苦悶の声が聞こえるが、無視。そのまま記憶をつかさどる部分に接続する。

「間久部審議補佐官、何か御用でしょうか?」

「ああ、ご苦勞、衛生省の私が、防衛相の君を呼ぶとは意外だと思っただろうが、まあリラツクスしてくれ」

「は、有難うございます。……………それで、ご用件はなんでしょうか?」

「先日、様々な政治関連の建物にテガミが来たのを知ってるね?」

「はあ……………確か、バグスターからと言う話でしたが……………」

「そうなんだ、そこで、しばらく前から検討されていた適合手術を受けた自衛官達の部隊を実践投入しようと思っっているんだ。この問題が一般市民にもれれば、再び混乱が起きる。綽々と、誰にも気づかれることなく決着をつけたいのだ。間の悪いことに、今CRのドクターたちは新たに確認されたゲムデウスXの火消しに追われている状態だ。そこで君たちに白羽の矢が立ったというわけだ」

「……………しかし、件のバグスター達は我々に好意的と聞き及んでいますが……………?」

「そうだな。その通りだ。だが、そんなことは問題ではないのだ。問題は、近隣住民の心の平穏だよ。今の日本はバグスターによって国民を失った。だから、人間に対して好意的なのか平和主義か、害であるのかそうでないのか、そこはどうでもいい。人間にとって害になりそうかそうでないか。そこだけなのだよ。だいたい、バグスター^{星の不具合}如きが人間と共存したいなどとおこがましい。ご丁寧に、この文書にはこいつらの拠点がどこにあるのかさえ書いてある。即刻除菌作業に当たってくれ。……………いいね?」

「……………分かりました。では私はこれで」

「……………」

全てわかった……………そうか……………俺のせいか。

……俺が……

……俺が……

俺が人間を信じすぎてたんだ。

……これだけきれいごとを本に書いている連中なら、きつと心も優しいはず、と

……今ハッキリと分かった。

……俺たちバグスターは、人間と共存は不可能だ。

0—7話：悲しみの向こうへ

後のハイパー無敵ソルティ視点

……あれからどれほど経っただろう？

いつしか皆で移動していた。新たな居場所を求めて……

……だけど、皆分かつてる。今動いたところで、いつまたあの襲撃が起きるかわからない。

目先の問題から目をそらすことだけが目的の、一時的な非難、それだけだ。
仲間たちの数を、数える。

1 …… 2 …… 3 …… 4 …… 5

……15ほど、数が合わない。

あの惨劇で、15も死んだのか……

俺は、あの日のことが起きた理由、原因を皆に話した。

皆、静かに聞いていた。静かに、まるでそこは宇宙空間にいるようだった。

罵声を浴びせたりする奴なんて一人もいなかった。

ただ皆目を開き、しつかりと俺を見つめていた。

皆、聞き終わると皆静かにそれぞれの寢床へ行った。最後に残ったのは、俺だけ。

.....

.....

.....

.....

俺は今、あの人の、エリーゼさんの部屋の前にいる。

ようやくわかった。

あの人が俺たちに人間の存在を教えなかったのは、きつと知っていたからだ。

人間とバグスターが相容れないことを。

俺たちはあの時、幼かった。幼すぎた。

きつと、俺たちの、俺の夢を壊さないために.....

声を殺していたため、あの人は気付いていないみたいだ。そして、何より

.....

彼女は、泣いていた。

始めてみた。

あの人の涙。

それだけで、

それだけでもう息が止まりそうだった。

エリーゼさん、あなたは.....

あなたは、いつも気高い。

いつも誇り高い。

正しく、

美しく、

清らかで、

時に厳しく、

恐ろしく。

だけど、

今のあなたは、とても悲しげに、

寂しげに、

苦しげに、

泣いていて、

支えていなければ、

こぼれ落ちてしまうかのような……………

どこの何よりも弱弱しく、

夢げに……………

俺は……………

俺は……………

取り返しのつかないことをしたんだ。

0—8話：ノンマルトのテーマ

……あれから、少し経った。

俺は、ずっと考えていた。これからどう生きていけばいいのかを。

人間との共存は、おそらく不可能だ。おまけに、俺のせいで皆が危険にさらされていく。

俺の考え出した答えは、1つだけ。

それを今、全員の前で話す。

「皆……俺、人間と戦おうと思ってるんだ」

仲間たちが、息をのむ。

「このままいけば、先は真つ暗だ。俺や、マオとかの「ラスボス」系列のバグスターはある程度人間に襲われても生還出来たり撃退できる程度の力はあるけど、「ソシヤゲ」系にはそれが無いんだ。

だから、人間を倒そう……と思う。

ただ、無差別に殺すつもりはない。適合手術を受けた、現在仮面ライダーとして動いている連中だけを倒したい……と思う。仮面ライダーを倒して、ライダーシステム

ムをすべて潰す。勿論一般市民は襲わない。そうすれば、後のライドプレイヤーは烏合の衆も同然だ。人間は俺たちバグスターを倒す方法はほとんど皆無になる」

「……………つまり、人間は強制的にバグスターの下につく。つてことか？」

パラドの問いに頷く。

「ああ。だから、俺は戦おうと思ってる。俺はハイパー無敵のラスボスだ。怪人体になれば、おそらく無敵属性が付与されるはずだ。かなり戦えるはずだ……………と思う」

「おい、ソル、お前だけで戦うつもりか？」

「……………ああ、もとはと言えば、俺が全部の始まりだ。俺が人間に文書を出さなければ、こんなことにはならなかった。俺のせいだ」

そう言うと、パラドは「何も分かってねえな」と言った。

「お前だけのせいじゃない。俺もあの日、お前を強く止めればよかったんだ。俺のせいでもある」

そして、パラドは輪から飛び出し、全員の前、つまり俺の横に立った。

「皆、俺もソルと一緒に戦おうと思う。他にも、俺たちと一緒に戦おう、戦えると思う奴は一緒に戦ってくれ。明日の朝まで待つ。そこで決める。それ以降残った奴らは留守電だ。きた奴らだけで戦争を起す。」

それでいいか？」

そして、その日はそこでいったん解散になった。

その夜、意外にも一番に来たのはマオだった。

「聞きたいことがあるんだ。それをまず教えてほしいんだよ……」

相変わらず体は大きいのに小心だなと少しおもう。

「何が聞きたいんだ？」

「本当に戦うの？」

「は？」

今更それを聞くかお前と違ってしまった。

「だって……ソルは昔からとつても優しかったじゃないか！」

僕がキツドにマントを盗まれた時も、取り返そうとしてくれて……！

このマントの縫い目、覚えてるよね？ちよつと失敗しちゃったけど、ソルの優しさの象徴だと僕は思ってるんだ。諦めるの？ ソル、夢だったじゃないか、人と一緒に生きるのが……！」

「マオ……」

俺のために……有難う。

だけど、それは違うよ。

俺のあれは、夢なんかじゃない。

叶うわけなかったんだ。元から。
あれは……夢とは言わない。

ただの……妄想だ」

元から無理だったんだ。だけど、俺はそれを知らなかったし、知りもしなかった。
そして、知ろうとしなかった。

「で、でも……」

マオは泣きそうな顔になった。

でも、これが俺の出した答え。

あのマントの傷は、取り返しがつくけれど、

仲間の命は、取り戻せない。

それが、過去と今の最大の壁だ。

「もう諦めたよ。」

……それに、中途半端な未練ほど、醜いものはない、そうは思わないか？」

結局、マオは戻っていった。

だけど、なんとなく思う。朝になるころには、多分あいつはここにまた来る。

……

.....

.....

.....

.....

朝、結局マオは、来た。

それ以外にもラスボス系列の全員が参加することになった。
戦争が、刻一刻と迫っていた。

0—9 話：夢のかげら

「皆！ 俺たちラスボス系のバグスターが、必ず平和な未来を手に入れて見せる！」

ラスボスバグスターが全員集まり、もう一度皆の前で戦いをすることを宣言した。

一つ、また一つと拍手が広まり、ついには声援になった。

戦う力のないソシヤ^{一般}ゲバグスター^{市民}を守るため、戦えるラスボス^{仮面}バグスター^{ライダー}が立ち上がる。やることは醜い争いだが、これでいい。

.....

.....

.....

.....

.....

その後、いったん解散して、作戦を練ることになった。

その時に、不意にパラドに呼び出された。

「どうしたんだ？ パラド」

「来たか、ソル」

実際、パラドに呼び出されたのは初めてだ。何かあったんだろうか？

「ラスボスバグスターの統括だけだな……」

リーダー、お前がやってくれ」

「……………は？」

「だから、リーダーはお前が頼む。お前が皆を引っ張るんだ」

……………いやいや、意味が分からない。なんでだ？

「なんで俺なんだ!? パラド、お前は俺よりもずっと強いし、いつも皆を守って、皆をま

とめて……………! 何でお前じゃなくて俺なんだ!」

……………

まあ、俺は原罪の象徴だからな。俺の名前、フルで言えるか？」

何言ってるんだ？ そんなもの……………!」

「パラドクス……………β?」

「……………そうだ。俺の名前には、βが入る。だから、いるんだよ。俺はもう一人

そいつの名前は、パラドクス。そいつが元々先の戦争でバグスターが世界を支配するっていう陰謀を企てた張本人で、すでにそいつは何人かの命を奪って……いや、あの時はまだ一人だったから、正確には俺もか。だから、俺はリーダーにはなれない。なる資格なんてない。だからお前だ」

「……で、でも！ でも俺も！ 俺も間違えた！ 俺にも罪は——」

何とか反論しようとしたが、パラド……いや、パラドβは首を少し振った。

「俺がいなけりや、ああはなつてねえ。それに、俺がああしなけりや、まだ人間との共存に可能性はあつた。潰したのは、俺だ。お前じゃない。お前はその被害者だ」

「でも………！ 俺には、できない………！」

「大丈夫、大丈夫だ。一度間違えたなら、二度はへまはしねえ。間違えなかったり、失敗しない奴が強いんじゃない。間違えたり、失敗して自分を正せる奴が強くなっていくんだ。」

前者はただのたまたまうまくいけた奴だ。本当の強さじゃない

……俺は、お前らとは一緒に戦えない。俺は一人で、でもお前らと共通の到達点をめざすよ。皆を、仲間たちを、頼んだぞ」

そう言うのと、パラドは優しく笑った。悲し気に、力なく、はにかむように……

「俺、で………いいのか？」

「お前以外にいねえよ。

海帝は頭かてえし、

キツドは馬鹿じゃん？

マオは伸びしろもあるしやる気になれば強いけど小心者だし。

お前以外は全員アウト。失格だ」

「パラド………！」

………泣いたのは生まれて初めて、だと思う。止めどなく、後から後から止まらない。

「パラドβ^{ベータ}じや言いにくいしな。今後俺のことはObi^{オビ}パラドクス、Obi^{オビ}って呼んでくれ」

「ぐすつ………なんだよ、それ………」

「確かなあ………何かの本を読んだとき、たまたま見つけたんだよ。どつかの国の言葉で、「心」って意味だ………っへ、あいつと俺は服も一緒だし、変えねえとなあ。同じだったら敵味方が混乱しちまう。白いスーツってのも悪かねえな」

「………分かった。任せてくれ、Obi。俺が必ず、バグスターの未来を切り開いて、あの日の過去に決着をつける。約束だ」

「ああ。約束だ。守れよ？」

そのまま、俺はObiと別れた。

O b i パラドクス視点

「……………さーて、こっから忙しくなるなーと」

……………もう一人の俺と、俺の心はつながってる。だから、向こうが俺の存在に気づいていないのもわかる。あいも変わらず、人間への贖罪しか考えてねえみてえだな。さらつと裏切った他のバグスター連中のこと忘れてんじやねえだろうな？

「パラドクス、俺はお前、お前は俺だ……………」

だけど、俺とお前は違う。俺はバグスターなんだ。生涯最期の瞬間までバグスターの味方だ。

当り前だ。人間は人間の味方を、サルはサルの仲間を、バグスターはバグスターを支えればいい。

俺　は　バグスターの仮面ライダー、　バグスターのための仮面ライダー、
バグスターを守る仮面ライダーだ。全バグスターを裏切ったお前に、お前なんぞに俺が
負けるか。勝つのは、俺たちだ」

0-10話：もののけ姫

その日、ラスボスバグスター精鋭団連合自由解放軍、通称バグスター連合が発足され、正式に私がそのリーダーと言うことになった。

やはり皆Obiがリーダーだと考えていたらしく、最初はかなりざわついた。が、皆俺のことを認めてくれたらしく、特に問題はなかった。

「最終確認だ。俺たちは一般の人間は襲わないし、極力迷惑もかけない。」

目標は飽くまで仮面ライダーの討伐だ。主力の仮面ライダー連中さえ倒せれば残った人間はほとんど脅威じゃない。向こうから攻撃を仕掛けてくることはないだろう………

問題は、エリーゼさんだ。きつと、エリーゼさんは心から人間を憎んではないと思う。俺たちに人間の存在を教えなかったのは、俺たちの夢をつぶさないように、そして、俺たちが人間と争わないためだった………と思う。だから、どうだろう？ あの人のだけは、この戦いがつらくなくなったら、いつでもこの連合を抜けられるようにするのは？」

かなり無茶な発言だったが、すんなり受け入れられた。

皆も、エリーゼさんのことを慕っている証拠だ。

「フン、しかし、いつも「俺」と言っていたお前が「私」なんて言い出すとはな、ソル……………」
「フフ…マオ、あなたもずいぶん自信に満ち溢れた口調になってますよ?」

「……………」我は、あの日、何もできなかつた。ただおびえ、逃げ、震えることしか……………あの日のままでは我は一生勝てん。何も守れん。

まあ、安直だが中身から変わろうとな……………それに、あの口調と自信のなさでは確実に敵に付け込まれる。偉そうで、何を考へてるのか分からん方がいいだろう?」

「まあ、そうかもしれないですね……………それは、貴方の思い出の詰まった服を一切捨てたのにも同じ意図が?」

「戦闘と、服は何の関係もない。それに、あれは我の弱さの象徴だ。見た目だけ強そうな服で、実際はただの泣き虫……………それならば、今の方がいくらかましだ。……………それともう、マオとは呼ぶな」

「……………? では何と呼べば?」
「……………バイオウルフ……………とな。」

「国と民を守るため、竜と戦い、相打ちになった英雄と聞く……………我の目標だ」
「なるほど……………分かりました。バイオウルフ。少しいいですか?」

話を終え、歩き出す。本当はこの後すぐにインターネットに潜入してダウンさせ、人間を殺さずに感染して怪人体になるつもりだったが、まだやることがある。

「ソル、何処へ行く？」

「ちよつと行くところがありました」

「そうか……お前も、何かよきげな名があれば決めておくといいぞ」

「ええ。そうしましょう」

………ベイオウルフには悪いが、私の名前はそのままがいい。私は、英雄になる気はないんだ。ただ、仲間が普通に生きられればそれで………

そんな奴は、英雄なんかじゃないだろう？

END OF RIDER CHRONICLEを誓つて1

「皆、久しぶりだな……………」

私は今、あの日に死んだ仲間たちの墓の前にいる。

まあ、墓と言っても遺体もないし、ただ木で作った十字架を土の上にさしただけだが

……………

「皆……………すまない、私が軽率だったばかりに、皆が……………」

今でも思い出す。私がもう少し慎重に行動していれば……………

「すまない、皆を生き返らせることはできないんだ。だけど……………」

でも、もう私は、あの日とは違う。

「いつか、せめて残された皆の平和は守る。

だから……だから、ここで待っていてくれないか？

その日が来るまで、ここで見守ってほしいんだ」

全ては、この戦争は、きっとここから始まるのだろう。

これまで、辛いこと、悲しいことがたくさんあった。

それは、きっとこれからも続くだろう……

いや、もしかすると、もっと酷いが起こるかもしれない。

確かにバグスターは、人間の命を脅かした。

だけど、私達は関係ない。無かったはずだ。

一部が悪魔なら、みな悪者なのか？

ふと思うことがある。

全ての存在は、

この世にあり、

そのすべからく

いつの日か

滅びるようになっていく。

不思議と生まれ、何もできずに死んでいった仲間たち。

生と死

その表裏に、

皆捕らわれている。

これは、この苦しみは呪いか？

罰なのか？

解くことのできない、不可解な倫理と輪廻のパズル。

人が、私たちをこの世から不必要と言うなら、

きつと、木は自分を害する蟲がこの世から消えることを願ってる。

気にとつて、だいたいの蟲は自分を傷つける存在だ。

蟲たちは、小鳥がこの世から消えることを願ってる。

小鳥たちは、鷹にとって命を脅かす存在だ。

小鳥たちは、鷹がこの世から消えることを願ってる。

鷹は、小鳥たちにとって命を脅かす存在だ。

きつと……全てがそう。

皆、つまるところ自分のことしか考えてはいないんじゃないかなんか？

害あるものが敵な命で、何もなければ無関心な命。利があるなら味方な命。

それだけだ。

でも、なら誰が？

誰が価値を決めるんだ？

人間が、私達バグスターの命の価値を決めるなら……

いったい誰が？

誰が命の価値を決めるんだ？

人間と、それ以外の生物の価値は……命の目方は……
一体、

誰が……？

「……………ハッ」

今頭をひねったところで、分かるはずもない……か……

私は、大きな間違いを犯した。

そのせいで、多くの仲間が死んでしまった。

だけど、皮肉にも原因となった私は生き残った。

きっとこれには、意味がある。

失われた命にも、失われなかった命にも、きつと……

その意味に向かって、生きてゆこう。

その場に跪き、両手を合わせて祈りを捧ぐ。

今 は も う 会 え な い 仲 間 達 に、私 は 一 人、

END OF RIDER CHRONICLEを誓った……

「……………平和な世界を勝ち取った時……また来るよ……」

振り向いて、歩き出す。

不意に風が吹いて、木の葉を揺らす。

風の中、十字架の前に立って優しく私を見る仲間達がいるような気がした。

第4部：決まっていた勝者

第1話：並ビ立テナイ2ツ？ノ正義

永夢視点

「……………ま、まさか……………そんなことがあつたなんて……………」

「どうして……………それを今になって……………？」

「……………それは、別にあなたと我々は特別親しい間柄ではなかったからです」

「でも！ それ以前に、その事情を知っていれば、僕も、CRの皆も！」

君たちと戦うことなんてなかった！一緒に暮らす努力ができたはずじゃないか！」

僕がそう言うのと、彼は、ハイパー無敵ソルティは静かに嘆息した。

「例えばそれを話したところで、例えば貴方に理解が得られたとて、結果は変わらなかったと思いますよ？ 世界に溢れる人間は70億ほど……………たかがあなたを含めるCRのメンバーが10人程度。残りの約70億の人間は納得しないと思いませんか？」

「だ、だけど……………！」

言葉が、続かない……………分かつてる。彼の言うとうりだと。

「それに、先のバグスター達は人間を何名か殺害しています。その遺族も、黙っていない

でしょう。そしてその遺族が、涙ながらにテレビやインターネットで騒げば、情報は無責任に拡散される……そしてその情報だけ見て、全部知った気になった大馬鹿どもが叫ぶんだ……。「人間を襲う恐怖の怪物、バグスター、死者多数。バグスターをこの世から駆逐しろ」とね……

ふざけてると思いませんか？

その道理が通るなら、アメリカ人に家族を殺されれば日本人はアメリカ人を皆殺しにしているということになる。大したものですよ。この世界。それがまるで正義のようになるんだから」

分かっている。彼がこうして苦しんでいるのは……彼らが人間じゃなかったからだ。

人ならば、原因をつぶして終わりだけど、彼らはそうはならなかったんだ。だから、きつと……彼は諦めてしまったんだ。

「キッドが死ぬ間際に言っていた言葉、今ならわかるよ……」

君は、他のバグスターとは違う。

初めはベイオウルフは打倒勇者だった。

ガルダはモータスの仇つていう自分の怒りのぶつける相手。

キッドはポッピーの幸せを望んで、それはすなわち自分の幸せ。

君だけが、他と違う……君は、誰かのために戦うことしかできなかったんだね」

皆、自分がやりたいことだらけだった。だけど、彼は最初から、自分の思いを封じて、誰かのたしになることばかりを……

「永夢さん、貴方に問います。人間は我々の命の価値を決めました。では、

人間と、それ以外の命の価値は、一体、誰が………？

一体、医者として、多くの命を救うあなたなら、あるいは答えが………」
僕は、何と………？

「………分らない。

多分、本当は命に価値なんてないと思う。

でも低すぎるはずはない。ただ、価値と呼ぶものなんかじゃないと思う。当り前に長生きできる人たちが、勝手に高いって言うてるだけで、

きっと人殺しなんて日常茶飯事の場所なら、多分皆低いつて言うと思う。裕福な人は、きっと貧相な人は生きる価値がないと思ってる。

殺人者は、死刑にしている。

場所と、環境によって見方、目方が変わる。

全ては、各々の自己基準。

それぞれが、他人の命を決める。

勝手に。

多分、それが……………命。

それが、今の僕が考える、世界全ての価値観だ

そして、僕にとっては、全ての命が尊いものだ」

「なるほど……………私もその答えにたどり着きました」

そう言って、ハイパー無敵ソルティは儂げに笑った。

第〃話：犠牲ハ正義デ義正ト性犠

「さあ、他の方々もそろそろ戦闘を始めるはずです。私達も始めましょうか永夢さん」
 そう言うって、無敵ソルティはバグヴァイザーIIを取り出した。

「……………ああ……………僕は、僕の犯した過ちに……………その向こうで僕を待っている、あの子に合わなくちやいけないんだ。……………負けられない。……………HYPER大変身……………」

【HYPER無敵！ ドツキーング！ パツカーン！ ムーティーキー!!!】

輝け！ 流星の如く！ 黄金の最強ゲーマー!! HYPER・MUTEKI! EX—A
 ID!!!】

「私もですよ。犯した過ちの贖罪……………そして、この戦争のそのはるか彼方で、私のせいで死んでいった仲間たちがいる……………私も負けられませんよ。……………培養……………」

【Infection! Let game! Good game! God game! Great game! I'm a Bugstar!】

同時にお互いの体が黄金の光に包まれ、変身が完了する。

これから、ソルティと俺は戦う。

互いに約束が、誓いがある。

相手は、隔たれた世界の自分自身。

戦争の悲しき、虚しきが、やっと分かったような気がする。

誰かが死ぬから、何も得るものがないから、きつと、たくさん理由はある。

だけど、必ず起こる悲劇。

優しい者同士が、殺し合う。

生まれが違えば、あるいは俺とソルティは肩を組み合うほどの中だったと思う。

だけど、それはできなかった。

守るものがある。

誓いがある。

罪がある。

後悔もある。

全ては、自分が戦う理由は、自分の愛する者のため。

そのためならば自分の命を賭けて戦い抜く。

そこまで同じでありながら、ソルティと俺の距離はこんなにも遠い。

握った拳が震える。

………戦いたく、ない………

だが、無理だ、俺も、あいつも、もう止められないところまで行ってしまった。

後は、どちらかがどちらかの夢を、目標を、誓いを……………

倒すことで、踏みにじる。ただそれだけ。

走り出す。

タイミングは、お互いに同時。

両雄の拳が衝突し、火花を散らす。

【ガシヤコンキースラッシュャー！】

「おおら!!」

武器を召喚し、切りつける。ハンマーのような片手に阻まれ、防がれた。

(くっ…速い！)

気づいた時には、

もうすでに背後に回り込まれてる。

大きくキースラッシュャーをブン回し、互いに距離を取る。

ついに、最終戦争が始まった。

第#話：END OF RIDER CHRONICLE
E 八何方へ

パラドクス視点

「さて、他のところも始まったみたいだな。俺らもぼちぼち始めるか。パラドクスVS Obiパラドクス、夢の対決。完全決着編だ。悔いの残らないよう、全力で行こうぜ？」

なあ、俺？」

「ま……………まで……………」

「ん？ どうした？ 逃げるのか？」

俺はこの直前、とんでもないことを聞いてしまった。Obiパラドクスから聞かされた。この戦争が始まった本当の意味、原因。

「俺の……………せいなのか？ 全部……………俺から始まったのか？」

「……………正確には俺と、お前、だ。だから俺たちは償わなくちゃならない。残されたバグスター、全員の苦しみ、迫害される運命を変えることだ。仲間の運命は、俺が変える」

「俺は……………俺は！

ただ……人間を……！ 人間を守ることで、自分の罪を償おうと……
だつて！

だつてしようがないじゃないか！

俺はあの時まで、命の意味を知らなかった！

分かつてなかった！

だから！ だから……！

俺は……人間を守ろうと……！

俺は……

俺は……

俺は、気づかないうちに、もう一つの罪から、目を背けてたのか……？」
分らない。どうすればいいのか。

人間を守る

バグスターを守る

俺は、どうすれば……？

「……別に、お前がこつちに付くなんて、何も期待なんかしていないさ。ただ俺は、お前を仕留めて、お前と一体化する。それだけだ。お前はもう一人の俺。俺の鏡だ。

死を恐れたのがお前で、それをはねのけ、戦い続けるのを選んだのが俺。

人間への罪を償うのがお前で、バグスターへの罪を償うのが俺。

共闘してて戦った時に輝くのがお前で、ソロで戦うのが俺。

赤と青がお前。青と赤が俺。

しかるべき手段で生まれたのがお前。お前の不具合で生まれたのが俺。

永夢のダチがお前。ソルの親友が俺。

心を得たのがお前。心をもって生まれたのが俺。

命の重みを知ったのがお前。知ってから生まれたのが俺。

コンビネーションを鍛えたのがお前。一人での勝利を求めたのが俺。

まあこんなもんだ。俺とお前は分かり合えない。価値観は同じでも、導く答えは毎回

全くの逆。……だが、俺とお前の共通項は分かるか？」

「……………」

「自分が正しいと信じたことに、迷わずに走りまくる。そこだけが一緒だ

だが……………そこだけだ。それだけだ。

俺はお前。お前は俺。……………だが、俺とお前は違う」

俺は……………俺は、誓ったんだ。永夢が差し伸べてくれた手を掴んだあの時に。

俺が守るのは……………いつまでも、人だ。

「俺は……………Obiパラドクス、お前を倒す！マックス大変身！」

【デュアル！ガシヤット！ガツチャー！マザルアップ！】

【赤い拳強さ！ 青いパズル連鎖！ 赤と青の交差！ PERFECT KNOCK

OUT！】

「いいぜ……………俺とお前の戦い……………ここで完全決着だ。最大変化」

【ガギヤット！バツギヤーン！ノウリヨクジヨウシヨウ！】

【青きパズル強化！ 赤の拳殴打！ ゲーム世界王者！ 完全 決着！】

相変わらず、俺とそっくりだ。微妙に色が違うけど……………

「さあ、来いよ。パラドクス、俺はお前を倒す」

「負けねえ……………！」

……………いや、負けられねえ……………！」

これからも続いていく、永夢や人間の未来のために!!!」

「俺も同じだ！

負けられねえ！

これから歩んでいく、ソルや仲間たちの明日のためにも!!!」

【ガシヤコンPARA||BLEGUN！】

武器を取り出し、切りつける。だが、いつの間にか手の中から俺の武器が消えてる。

ふと前を見ると、俺のパラブレイガンが俺の額に押し当ててるObiパラドクスと目が

合った。

「わりいな。あんまりお前がト口過ぎてよ………」
引き金が引かれ、弾が俺の額に直撃した。」

第\$話：壊レタセカイノオウジヤ

「ぐはっ!!」

頭を撃たれ、俺は後方に吹っ飛ぶ。そのまま俺の変身は解けてしまった。

「ぐ……………何で! 何でだ!! 俺もお前も、もとは同じなのに!」

何で勝てない!? レベルの差って言うても1だけだ! ブレイブと戦った時だって、負けはしたけど大差がついていたわけじゃないのに! 何でだ!」

俺を見下ろすもう一人の俺は、どこかあきれたような顔をしていた。

「お前は、自分で強くなることを忘れたんだ。

無敵のエグゼイドと組んで、お前はいかに自分の力で勝つかじゃなくて、いかに強い奴と一緒に行動するかに代わったんだ。

だいたい、お前は誰かを守るほど強くない。「誰かを守る」奴は、「誰にも守ってもらえない」んだ。自分の目に映る全てを守らなくちゃいけないんだ。自分を守ってくれるのは、自分だけ。

お前は「協力プレイ」って言うてるが、現実はそうじゃない。

お前がいなくても、エグゼイドはクロノスを倒せる。一人で。

何より、お前はエグゼイドより弱い。弱い奴が、共闘？

笑わせんな。お前は仲間の足を引っ張ってるだけだ。ゲームデウスと戦った時にゲームデウスを弱体化させたのは誰だ？ レーザーだろ？ お前じゃない。

ゲームデウスXを倒したのは？ エグゼイドだ。お前じゃない。

お前なんかいなかったって、適合手術を受けていればエグゼイドは活躍できたはずだ。

お前は誰も守れない。お前自身も守れない奴が誰かを守るなんてイキツてんじゃねえ」

「俺が……俺が弱いだ?!」

俺は激昂するが、あいつは全く動じない。当然だ。俺の生殺与奪はあいつにある。

「弱いき。元々同じだけの力量があったのに、あっさり俺に追い抜かれたグズが。」

俺は元はお前と同じようにレベル99だったんだぜ？ そこから俺は人間だったら血のにじむような努力の果て、ようやく100に到達したんだ。

お前が仲間だの、永夢との時間だの言って動きを止めてる間に、俺はお前なんぞじゃあ追いつけないところまで行った。物理演算への理解、エナジーアイテムのメリツ

ト・デメリツト、自分の体、性能でできること、できない動き、一対多数のあしらい方。

全て独学で学んだ。俺が培ったのはゲーム「パーフエクトノックアウト」の力量じゃない。

純粹な殺し、格闘の技術だ。

だからお前は俺に勝てない。届かない。

お前はクズ。俺は凡才。

今のお前は仲間を得たが、おまえ自身の成長を失ったんだ。」

………なにも、言い返せない。こいつの言うとうりだ。

99が上限。だから、きつとこいつは限界突破するために想像を絶するような努力をしたんだろう。

「お前が俺と同化すれば、エグゼイドからお前の因子が消える。

無敵のリーダーを失ったお前らは勝ち目がなくなり、自動的に全滅する。

これで………この戦争は終わりだ。バグスター連合の勝利でな」

O b i パラドクスが俺のパラブレイガンを振りかぶり、振り下ろす。

直後、俺の首が斬り落とされた。

記憶を司りし者より：最後を見据えて

「……………結局死んだか……………下らん」

そう一言だけ言い、俺は椅子に深く座りなおした。額に手を当て、ため息をつく。だが決して落胆しているわけではない。むしろ、終わりが近いことを感じて思わず出た感嘆の吐息と言うのが近い。

「あの小娘のクロノスは消滅、パラドクスは蒸発、ブレイブは斬首、スナイプは本胸を切られ（胴体真つ二つ）、レーザーは生き埋め、ゲンム唐竹割りに切られ（身体が左右に真つ二つ）、グラファイト自滅、エリーゼ自殺、2人目のゲンムも死に、エグゼイドも死んだか……………残ったのはポッピーピポパポとあの小僧だけか、つまらん」

俺が究極の力を得るまでに時間がかかったとはいえ、世界を守るはずの仮面ライダーがだらしない。

これではせっかく究極の力が手に入っても何も面白くない。だが、まあいいだろう、どの道究極の力の前には、どんな存在であろうと風の前の塵に同じ。

どのみち戦ったって大して面白くもならなかつただろう。

「しかし、となると……………」

この先の目標が力を手に入れた先からなくなってしまったな。

しかし、それもいい。有意義な使い方をゆっくり考えるのもまた有意義なことだ。退屈することはないだろう。

どの道、この世界は終わりだ。あと僅かだな……………

「クッククッククク……………ハッハッハッハッハッハッ!!!」

ワインを注ぎ、一気に飲み干す。

「エグゼイド…………お前の守ろうとした仲間も、誓いもすべて消える。この地球ごとない…………何もできない、救えない自分自身をせいぜい呪うがいい……………」

いつしか雨が降っていた。

遠くで雨粒が落ち、ぽつぽつと音を奏でる。

雷が輝き、夜闇を一瞬だけ照らした。

雲の形が何か強大な生物を恐れる生物のように俺の頭上だけ雲が避けていること、

そこから見える夜空の星の位置が変形し、巨大な生物の正座を形作ったことに気づいた人間は、生憎とその晩どこにもいなかった。

……………
セカイが終わるまで、あと4日……………

第%話：戲言ナ戲言

「……………あん？」

……………？ 何だ？ 今の不思議そうな声は？ 余裕しやくしやくで勝ったやつが出す言葉じゃない……………！ いや、俺はまだ死んでない！

「ここ、ここは……………バグヴァイザーⅡの中!？」

「パラド……………良かった、間に合って……………」

目を開けると、俺はバグヴァイザーⅡの中に入っていた。ポツピーが安どの表情を浮かべる。

「……………てめえは……………ポツピーポポじゃねえか!？」

一瞬のうちに間合いを詰め、Obiパラドクスがポツピーに向けてパラブレイガンを振りかぶった……………

「きゃあ!……………?！」

なぜか、Obiパラドクスはポツピーを切らずにギリギリのところまで止まっていた。パラブレイガンがかすかに震えていて、「切りたい。だけど切れない」と言う風だ。

「ツチ……………おい、ポツピーポポ、そいつを俺に引き渡せ。お前を殺す気はない」

「……………やだ……………」

「……………！ おい！」

O b i パラドクスは完全にイラついてる。地面を思い切り踏んづけ、でかいクレターができた。だけど相変わらずポツピーに襲い掛かる気配はない。どういうことだ？

「くそが……………！ ポツピーピポパポ、そーいやお前も人間と共存派だったな……………」

ウゼエ……………イラつくんだよ……………！ その姿勢がよお！

「人間と一緒に生きられる」なんて甘い戯言騒ぎやつて！ 無理なんだよんなこと！

そのくそみてえな戯言が俺の親友とダブって……………ツチ……………!!!」

近くの石を繰り飛ばし、虚空を見つめた後、急にポツピーに掴みかかってきた。

「ヴァグヴァイザーIIをこっちに渡せ！ 俺の敵はそいつだけだ！」

「やだ！」

ポツピーは逃げようとするが、捕まえられてしまった。

「くそつ！ ポツピーを放せ……………つぐ！」

止めようとヴァグヴァイザーIIから飛び出たが、出た瞬間に顔面を殴られた。

「オーケー！ よく出てきた！」

「ここぞとばかりにObiパラドクスが襲い掛かろうとするが、間にポッピーが割り込んできた。

「行かせない！ 変身！」

「っへ！ 生憎だなポッピーピポポ！レベル10程度の力じゃ俺を止めることは………!?!」

【KAMENRIDER CHRONICLE! ガシャット…ガツチャーン…バグルアップ…

天を掴めライダー…刻めCHRONICLE! 今こそ時は! 極まれり!」

「ポッピーが………クロノスに!」

「………こいつ!」

「一度体にゲムデウスワクチンを打ち込んだ私なら………耐えられる!」

【PAUSE】

ポッピーが時を止めた。

止まった時間の中で、俺の知らない場所で付いた決着。

時間が動き出すと同時に、そいつは爆炎に包まれた。

【RESTART】

「ぎゃああああ!!」

炎に包まれ、ポツピーが吹き飛ばされる。

「な……………に!？」

い、いったい……………何が……………

「…生憎だな、ポツピーピポパポ、俺にポーズは効かねえよ」

こいつは……………Obiパラドクスは……………無敵の力があるのか!？」

第&話：魔王八魔物ノ勇者サマ

鏡飛彩視点

「さあ、我々も始めるとするか。勇者とその一行よ、名誉ある戦いを期待するぞ」

「ちよ、ちよつと待て……………」

俺たちの前で明かされた、この戦争の原因。あまりにも俺たちの想像を超えていた。

「まあ、ガルーダは人が良すぎたしな……………」

貴利矢は納得している様子だった。エリーゼは俯き、開業医は啞然としている。

「もはや過去の話だ。その過去を超え、我は「今」を全力で生きるのみ。そしてその「今」は、確かに未来につながっている……………」

怨みも何も無い……………が、ここにいる六人、皆殺しにしてやる!!!」

言うが早いのか、バイオウルフは懐からどこか見覚えのあるケースを取り出した。

あれは……………！ プロトガシヤットの！

「なぜそれをお前が!?!」

「貴様らが自分たちの作ったガシヤットの方に集中していたのでな……………盗むのは容易だったぞ」

「九条貴利矢ア！ プロトガシヤットの管理は君がしていたはずだろう!?」

「……………爆速ホースを使うようになってから使わなくなつて……………忘れてた……………!」

後方で「このバカアアア!」と檀黎斗が大騒ぎを始めたが、無視。

今集中するべきは敵の方だ。

「すまん。盗みなど本意ではないが……………敵の中に元バグスター連合のナンバー4がいてはな……………我の順列はナンバー6。この程度は許せ」

そう言つて、ベイオウルフは自分の体に次々とプロトガシヤットを突き刺した。

「マイティアクションX!」【タドルクエスト!】「バンバンシューティング!」【爆走バイク!】【ゲキトツロポツツ!】【ギリギリチャンバラ!】【ジェットコンバット!】【シヤカリキスポーツ!】【ドラゴナイトハンターZ!】

「ぐうツ……………! ふう、ふう……………友よ、道を違えた我が家族、キッドよ、今こそお前の勇氣と速さを分けてくれ!」

【ドレミファビート!! ガシヤット……………】

ヴァグヴァイザーIIにプロトドレミファビートガシヤットを突き刺して、ベイオウルフが吼える。

「培養!!」

【Infection! 天を掴め The Bugstar! 刻め命! 今こそ時

は！ 極まれり!!」

「我が名！ 魔王ベイオウルフに非ず！ 我が新名、ゲムデウスなり!!!」

煙が立ち上がり、その中から現れたのはモノクロのゲムデウス。処遇プロトゲムデウスと言ったところだろう。

「さあ来い！ 我が命にかけて、この場の全員を屠ろう！」

ゲムデウス……………まさか三体目と戦う羽目になるとはな。

第☒話：我NOコの命賭ケて……

「うぐツ……………ゲエエエエエE!!」

ぐふツゴホツ！ガフツ!! ……………むウ……………」

プロトゲムデウスは口から粉々になったプロトガシヤットを吐き出した。全ての力が奴の体に入り、ガシヤットの役目を終えたんだろう。

「ふウ……ふウ……………PAAーフェクトノックアウトノプロトガシヤットガ無Iたメ、完全とはいえんガ……………十分すぎるほど、十分ダ。この力さえあれBA……………!グオオOOOOO!!!」

口から血しぶきをあげながら、プロトゲムデウスが吼える。心なしか言葉の節々の発音が聞き取りづらくなっている気がする。

……………体が溶けている……………ようにも見えるな……………涎や涙、汗かと思っていたが……地面に落ちた液体が光の粒子となつて空中に消えていく。明らかにこの変身は自滅行為だ。

「ふむ……………持つて10分と言ったところか……………だがその10分が地獄だな」

「オイ神！ 10分で勝手に死ぬったって、10分も持ちこたえられんのかコレ!？」

「さA行クZO！ YU者ヨ!! 来RUGAII!!」

今こSOコノ戦！ 極MAレRI!!!」

プロトゲムデウスが剣を顕現し、振り上げる。いつしか空は曇り、雨が降り始めている。土砂降りの中で、究極の敵がこちらを一心に見つめている。これで………長く続いたバグスターが完全にこの世から消滅する。

「行くぞ!!!」

「タドルレガシー！ タドルファンタジー！」

「デュアル！ ガシャット！ ガシャット！ ガツチャーン！ デュアル・レベルアツプ！ 迎る巡るRPG！ タドルファンタジー！ アガツチャ！ 辿り着いた世界！

神々のレガシー！」

「爆走バイク！ 暴速HORSE！」

「ガツチャーン！ レベルアツプ！ 爆走！ 独走！ 激走！ 暴走！ 爆走バイク！ アガツチャ！ 高速！ 音速！ 光速！ 暴速ホース！」

「ガシャット！ ガツチャーン！ レベルアツプ！ マイティジャンプ！ マイティキック！ マイティアクションX！ アガツチャ！ デンジャラスゾンビー！」

「デュアル！ ガシャット！ ガツチャーン！ デュアルアツプ！」

「スクランブルだ！ 出撃発進！ バンバンシユミレイション！ 発進！」

弾が連射され、そのどれもが当たるが全く怯まない。

「邪魔DA!」「クダケチール!!」

空中にそれまでの倍ほどのサイズの魔法陣が現れ、大爆発を起こした。

「HA……………HA……………OHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHH
HHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHH!!」

……………このままでは、勝てない……………!

記憶を司りし者と世界の創生者より

「何をバカ騒ぎしている？ ※※※？」

「ああ、来ていたのか、ゲンム」

俺は目の前でどこか不機嫌そうに立つライバルであり仲間視線を向けた。

「いやなに、私の究極の力がいいよだから………つい楽しくなっちゃったよ」

「まさか君に先んじられるとはな、※※※」

なるほど、不機嫌の理由はそれか。

「気になるな。例え君を一瞬で消せるような力を得たとして、君だけは殺さんよ。ここまで本当に君は俺をよくしてくれた………いつかお礼がしたいよ。「異世界から来たゲンム」君。君は私の最高の協力者であり、友だと勝手に俺は思っているよ」

「フン………貴様からの友情など、欲しくもなともない」

「つれないな、君は…………そういえば君は、なぜこの世界へ？ 更なる力を求めているのは知っているが、もう今の力でも十分なのではないか？ 君自身も「GOD」と言っていたではないか」

俺がそう言うと、ゲンムは面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「この世界では、私の記憶よりも強くなっている奴らがいる。それに、世界を救う英雄と
言うのはいつでも劇的な進化を遂げるものだ。力を蓄えるに越したことはない」

「なるほどな。だが君も面白い奴だ。「創生ゲーム」か。実に惹かれるタイトルだよ」

「こちらとしては褒めたつもりだが、どうやらゲームは面白くなかったようだ。俺のワ
インをひったくり、一気に飲み干してしまった。

「おいおい、俺のだぞ。勝手に、それも全部飲むな」

「別にいだろう。君なら無限に揃えられるようになるのだから。大体、「創生」程度では
まるでだめだ。もつとこう、全てを超えるような……！」

「今の俺からすれば、十二分に究極の力だと思っぞ」

「気休めはやめろ。君の計画は素晴らしい。「記憶領域との融合」とはな。「創生」程度で
満足していた私が恥ずかしいよ。私は神の才能を持っているが、君もまた私に負けず劣
らずだ！だからこそ私は君に協力しているのさ」

心底嬉しそうに彼はその場でくるくると回った。彼なりに私が究極になるのを歓迎
してくれているのだろう。私自身、当初は彼に対して複雑な思いはあったが、今は胸を
張って「この男は私の親友なんだ」と言える。

「四日後、世界は滅ぶ……もはやだれにも止めることはできない。不可能だ。私がバ
グスターウイルスを2000年に世にはなった時に、結果は決まっていた」

「ああ、見届けよう。君の究極を」

どこから取り出したのか、彼は新しいワインのボトルを抜いた。

「注ごう、※※※、「世界の終焉」に乾杯」

「ああ、「世界の終焉」に………乾杯」

第（話）：劍ヲ継グ者！

グラフィイト視点

「さあ若き新芽の竜戦士よ、語るべきは語り終えた。今こそ某との決着を！」

海帝から聞かされた、この戦争に原因。まさかそんなことがあったとは……………

「海帝、なぜもつと早く言ってくれなかった？ 俺がそれを知っていれば……………」

「どうした、と？」

お前は何か勘違いしているようだなグラフィイト、お前がこの真実を知っていたにせよ知らなかったにせよ、お前が某とここで戦うのには何ら変わりがないことだ」

「何？ そんなことは……………」

否定しようとするが、手で制される。

「グラフィイト……………お前は、其方は元々パラドクスとの決闘で向こうに加勢したのではないか。」

誇りある武士ならば吹っ掛けられた決闘は断じて受けて立つ！ そうであろう？

そして！ 決闘で負けた以上生殺与奪は敵にあり！ それならば、相手の意思に従う！ 当然であろう！ つまり、其方は知っていた知らなかったにかかわらずどの道パラドクス

と戦い向こうに付く運命にあったわけだ。

誰も其方のことを裏切り者だと攻めはせん！ 堂々とするがいい！」

ああ、そうだ……この武士は、こういう奴だ。

どこまでも正々堂々と、真つすぐに、強く、速く、誇り高い。

敵でありながら、俺の理想像だ。尊敬すべき相手。

だからだろうか？ 今日は、体が重い。尊敬するこの武士を俺は本当に切れるのかわからない。

「気にするな！ 剣道の稽古と思え！」

「……ふ……貴方にはすべてお見通しなのだ。俺の思考も……」

「……実は、某は生来一回でいかなる戦いも勝敗を決してきた。だが……3度も続いたのは初めてのことだ。驚嘆に値する」

「1回って……貴方は俺とブレイブとしか戦っていないだろう？」

人間態は確かに老人だし、ボケたかと一瞬本気で考えた。

「いや何、連合結成時に誰が一番強いかわか、それに沿って階級を決めようという話になってな、全員と戦ったのだ。……まあ、寸止めだったけど……」

「……全勝、だよな？」

一応、一応だ……間違いなく、彼が最強のはずだ。

「すべて勝った……と言いたいところだが、2つだけ、負けた。楚琉帝とは数時間に及ぶ戦いでこちらの体力が尽きた。若者には勝てん。そして、Obiパラドクス、特殊ルールで寸止めはなし。ただし向こうは有り。殺す気で、万全の状態で挑んだ……そして、散々翻弄された挙句、5回にわたる寸止め攻撃をされて某は諦め、降参した」

「……………!?……………な……………に!?」

「この……………俺があつた中で恐らく一番強いであろうこの武士が、ボロ負け!」

「あそこまでの大敗はだれも予想していなかったな……………その後には楚琉帝もObiパラドクスと戦っていたが某と似たようなことになっていたな……………いや、攻撃を当ててもいい分、もつとひどかったが……………倒しては起こし、倒し、また起こし……………」

「し、信じられん……………貴方ほどの武士が……………」

「これでわかつたろう? 今一番危機に瀕しているのは、楚琉帝と戦っているエグゼイドではない。本当に危機が迫っているのはObiパラドクスと一対一で戦っているパラドクスの方だ。奴ならもう殺しているやもしれん。某を倒した後は誰かに加勢しようと考えていたようだが、果たして某「程度」に手こずって話にならんぞ」

「……………忠告、感謝する! 培養!」

「来るがよい! 培養!」

a
m
e
!
F
u
c
k
g
a
m
e
!
I
,
m
a
B
u
g
s
t
a
r
!
[

[I
n
f
e
c
t
i
o
n
!—
S
h
i
t
g
a
m
e
!
B
a
d
g
a
m
e
!
D
e
a
d
g

T
h
e
B
u
g
s
t
e
r
!
]

D
e
a
d
g
a
m
e
!
W
h
a
t
y
o
u
r
n
a
m
e
?
]

I
n
f
e
c
t
i
o
n
!
L
e
t
,
s
g
a
m
e
!
B
a
d
g
a
m
e
!
B
a
d
g
a
m
e
!

第)話：劍ヲ継グ者

変身し、お互いに武器を構えてゆつくりと近づいていく。間合いが潰れ、その気になれば握手もできるほどの距離になった。明らかに双方必殺の間合い。

無意識に体が震える。あるいはこの瞬間一発で勝負が決まる可能性だって十分にある。

俺がその恐怖に震え、ごくりと唾を飲み込んだ。

その瞬間海帝が一瞬で剣を抜いた。

「うおおお!!」

こちららもフアングをブン回して受け止める。互いの武器が衝突し、火花が飛び散る。

「……………ん?」

「ぐつ……………! むう……………!」

……………また、まただ。前より俺は強くなっている! あの海帝の力が前よりもまた一層軽く感じる。しかも先に抜いたのが向こうなのに、俺の防御が間に合っている。

強さの獲得と言う喜びが俺の体を駆け抜ける。俺は最強だ! 誰にも負けるものか!!

「クク……………どうした海帝!! そらそらあ!!」

連撃を加えると、前は勇猛果敢に俺の攻撃を叩き落としていた海帝はいまや必死の形相でただおのれの身を守ることに集中している。防戦一方だ。あの圧倒的強者であった武士が俺の攻撃に対して反撃すらできない。今まさにとんでもないことが起きていく。

「くっ……………」

後方へ飛び、俺の間合いから逃れようと思つたようだが、甘い！

「今だ！ 紅蓮爆竜剣!!」

生命エネルギーを爆炎に換えてフアングの先端に練り、大きく振つて前方へ飛ばす。海帝へ炎の刃が飛来する。

「何のー!」

だが俺の炎は海帝の剣技に二つに切られ、はるか後方へ飛んでいった。奥の岩山に当たり、大爆発が起きる。

「…チツ……………フン!!」

ならばとこちらから距離を詰めて斬撃を叩き込むが、三寸ほど頭を右にそらし見事な動きで躲されて反撃を入れられた。

「うお!!」

目の前まで海帝の刀が迫るが、思わず後ろに一步退いて避けた。何という剣技だ

……この男、今や速度も力も俺に劣るが、技術は別格だ。まだまだ俺のはるか先にいる。

「それでこそ、海帝！　これで最後だ！

【紅蓮爆竜剣!!!】

技術で劣るなら速度と力で勝負だ！

「……………フツ」

その瞬間、海帝は野球のバントのような体制になった。

「……おっ！」

俺は確信する。この、俺の奥義は防がれる。絶対に。

防がれて、硬直した俺は……………死ぬ。

殺される。

何ということだ。ここまで来て……………負けるとは。

もはや動きを止めることはかなわず、俺はファングを槍のように突き出した。

ファングは止まらずに海帝の刀とぶつかり、そのまま果物を包丁に押し当てたように

俺の武器が割れた。

第! 話: 剣ヲ継グ者#

「.....なッ.....!!?」

その直後、俺はその時の光景を、生涯忘れることはないだろう。

海帝は、俺のフアングを受け止めた。そして、俺のその二股に裂けたフアングの先端は海帝の腹部に食い込んだ。海帝はゆっくりとその場にひざまずき、倒れた。

「あ.....かっ海帝!!」

変身を解いた俺は倒れた海帝を助け起こすが、もうわかつている。

彼は.....助からない。

これが彼のゲームのルールだから。

一発でも相手の攻撃が当たれば、即死亡。

彼が助かることはない。

だが.....なぜ.....!?

こんな、なぜこんな決着なのだ!?

こんな、こんなたまたま偶然の勝利など、俺は欲しくはない! こんなことになるのなら、死んだほうがまだ。

「ふ………寄る年波には勝てんなあ………若ければ………避けられたものを………」

「………！そうだ。海帝は、思えば人間態はかなりの老人。人間に当てはめれば、体中から力が抜け、かつて培った技術など幻のように消えているはずだ。」

ならば、このお方は………」

「海帝………まさか、貴方は………」

「………気付いたか………左様、其方の思う通り、合うたびに一回りずつ弱体化していたのだ」

「………何ということだ。それを俺は、自分が強くなったなどと慢心し………道理で技術力で勝てないわけだ。力や速さは落ちても、身体がその動きを覚える限り、技術は五体から逃げることはない。俺は、初めから負けていた。心においても、技術も、ただ、相手が弱くなっているのを利用し、さも自分が強くなったように勘違いしていただけだ。」

なんと………滑稽な………！

「………なのに、俺は生きている。」

「気に病むな。運も実力のうちだ………それに、これは必然だと僕は思う」

「必然………？」

海帝は、自分の刀をじっと見つめ、言葉をつづけた。

「相手よりも切れ味がよかったから、敗けた、か……………不思議なものだ。武器の性能が相手よりも良かったことが負けの要因になるとはな。

きつとこれは……………某の友であり、相棒であるこの刀が、老いて弱っていく某に引導を渡したのだろう。今こそ新時代の若者へ剣をつなげ、と……………」

そうして海帝はふらつきながらも自分の力で立ち、拾い上げた刀を俺へと差し出した。

「貴様の武器を壊してしまつたからな……………あれでは使えんだろう? 受け取れ。我が愛刀にして、天上天下無双刀、「蓬莱海・真打」だ。この刀も、それを望むはず」

海帝の目の前で正座し、お辞儀をする。立ち上がって刀を受け取り、腰にさす。

「なかなか様になっておるぞ……………これからは「剣帝竜戦士」と名乗るがよい」

「……………ありがたく頂く……………我が生涯の師よ!!!」

敵同士でこそあったが、俺は海帝から多くを学んだ。例え海帝が望まずとも、俺は勝手に呼ぶ。あのお方は、俺の尊敬するお方だ、と……………」

「最後に……………わが友達ともしも合うなら、伝えてはくれんか?」

身はたとへ 聖都の野辺に 朽ちぬとも

留めおかまし 大和魂

……と……さらばだ。我が一番弟子よ……」

言葉を終えると、我が師は消滅した……

俺は、泣きながらその場で頭を下げ続けていた。

泣いたのは、これが初めての事だった。

俺はこの日のこと、生涯忘れないだろう。

たった一瞬の、敵同士の師弟関係を築いた偉大な武士を……

第!“話：??#&ツ?□?△

鏡飛彩視点

「ア……………A……………」

追撃が来るものと確信していたのに、プロトゲムデウスは動く気配がない。

どこか見ているようなので、あたりを見回すと……………!

ここから少し遠い場所で、青い照明弾が上がっている。方角からしてグラフィイトだろう。

「……………! クックック……………ヴァ……………ハッハッハ!!!!!!」

ベイオウルフウ! どうやら君の仲間は相当ぶがいなかつたようだなア!!!!

ヴァ……………ハッハッハ!!!!!!

ゲムはゲタゲタと笑い声をあげる。!!相手の士気を!!下げる作戦のつもりのようなのだが、それは逆効果だ。

「……………Z H W W U U U U U U W N……………」

「……………ツ!?!」

プロトゲムデウスの口から出た絶叫といふ名のそれは、あたりの物を一切合切吹き飛ばす。

ばした。まるで声をあげた中心の存在が大爆発を起こしたようだ。

あまりの音量にもはや「キーン」と言う金属音にしか聞こえない。

「DAAEGWOOOZAAAAALW!!!」

大気が震え、その場の全員が吹き飛ばされる。奴はしばらくぼうっとした後、ゆつくりと周りに視線を送った。「剣の先に魔力が集中する。……来る！」

「LYURYURYUU!!!」

空中に極大呪文「クダケチール」の魔法陣が2つも浮かんだ。

「……………バカな！ 魔法の同時発動だ?!」

ゲムが信じられないと仰ぐ。

GMでも予想外の動作……………つまりゲームの設定を奴は逸脱したということか!!

「海#%帝& MYUWEEEEEEEN!!!」

プロトゲムデウスの頬を伝うのは、大量の落涙。それも徐々に空中に消えていく。咆哮と同時に爆発が起きた。尋常じゃない威力だ。まともに受けたら一発で死ぬ。

「PWWGUEEEEEEEEEE!!!」

剣をおもちやのように振り回しながらプロトゲムデウスが突っ込んでくる。

まるで戦艦が氷河を蹴散らすように前方にいた仲間たちが跳ね飛ばされ、俺自身も吹き飛ばされた。

地面に激突するかと思いきや、急に落下とは別の浮遊感が起きた。

何事かと目を開けると、プロトゲムデウスが俺の左足を噛んでいる。

——ベキツバキツ——

嫌な音がした。一瞬遅れて激痛が俺を襲う。——折られた!!

「アアアアアアアアアアアア!!!」

俺の人生、おそらく最大音量の絶叫。

プロトゲムデウスはうるさそうに首を振り、俺を地面へと落とした。

懸命に立とうともがくが、立てない。そんな俺を掴み上げ、プロトゲムデウスは俺を自分の顔へと近づけた。奴の口がゆっくりと開き、直後、肩に噛みついた。

「グアアアアアアアアアア!!!」

絶叫しながらも歯を食いしばり、何とか意識を保つ。

ソードをプロトゲムデウスに突き立てるが、そもそも刃が通らない。

「おおらあ!!」

馬の状態のレーザーが全力で体当たりするがビクともしない。

——バキバキツ——

「——ッ——!!!」

鎧がはじけ飛び、鮮血が飛び散る。

「あああああああああとはたのんだあああああああああ!!!」

壁を破りながら何か言っていたような気がするが、気のせいだろう。

何とか立とうともがいていると、不意に掴み、いや、噛み上げられた。

「大丈夫か?」

馬のレーザーが俺を持ち上げ、背に乗せた。……有り難い。

「すまん、助かる」

花家大我視点

「おい! エリーゼ! 何やってる!? 早くお前の仲間を召喚しろ!!」

エリーゼの部下はレベル500相当の猛者ばかり。戦況をひっくり返せると思って

いたが……

「た、大我様! 私の能力が、発動しません!!!」

「んな……!!?」

……嘘だろ! 何だってこんな時に限って!!!

第1・#話：剣帝カイデン

パラドクス視点

「お、お前、まさか無敵の力が……………」

ポーズを使ったのにもかかわらず、やられたのはポツピー。無敵以外考えられない。

「……………んにゃ、俺に無敵の能力はねえよ。ただ……………」

ポーズも無敵も、俺には「無効」だ。俺はポーズ中でも動けるし、無敵の相手にもダメージを与えられる。ゲームの設定から逸脱した、壊れた存在。不具合。ある意味では俺が本物の「バグスター」だな。

他にも、エナジーアイテムを変えられたり、ダメージが通ったり通らなかつたり、通つた時はダメージが倍になったり、デメリットもあるけどな」

O b i は倒れ伏すポツピーを一瞥し、いつの間にか落としていたパラブレイガンを拾い上げた。

「さあ今度こそこれで終わりだ。あばよ」

パラブレイガンが迫る直前、俺は思わず目を閉じた……………」

が、直後に鈍い金属のぶつかり合うような音が聞こえた。俺はゆっくりと目を開けて

みた。

「お前がObiパラドクスか。会うのは初めてだな?」

「おま……………グラフィイト! 手前! その刀……………!?!」

パラブレイガンが目の前ギリギリのところまで迫ったところでグラフィイトが割り込み、俺の見たことのない日本刀で受け止めていた。

Obiパラドクスはグラフィイトが持っている日本刀を見て驚愕している。

「……………一つ言っておくがこの刀は奪ったわけではない。

我が師、海帝から正式に賜ったものだ。名は「蓬萊龍・真打」だ。

……………海帝からお前たちに伝えるように頼まれた言伝がある。

身はたとへ 聖都の野辺に 朽ちぬとも

留めおかまし 大和魂

……………確かに伝えたぞ。さあ、ここから先は俺が相手だ」

「……………ハツ……………なるほどな。劍の未来はお前の手か。グラフィイト」

自分自身を納得させるように、何度もObiパラドクスは頷いた。

「そういうことなら、俺も新たな劍帝サマに失礼のないように相手しねえとなあ?」

【ガシャットギア・コンプリートセレクションウェポン! BUGBLEGUN!】

Obiパラドクスは空中から紫色の斧を召喚した。

「さあ、来いよグラフィイト、居合で勝負と行こうか」

グラフィイトは無言で頷き、納刀した。腰を大きく落とし、つま先を動かして徐々に間合いを詰める。型にはまったグラフィイトとは反対にObiパラドクスはだらりと腕を下げ、完全に体が緩んでる。

「……………いざ!!!」

瞬間、グラフィイトは0.1秒以下という驚異的な速さで抜刀、白刃が滑るようにObiパラドクスに近づき……………あっさり避けられた。

通り抜けざまに背中を切られたグラフィイトはうめき、反転しながら切りつけたが、これも避けられた。

「……………加速や防御、攻撃の要は脱力だ。お前もまああだったか、こんなもんか」

「ぐ……………なるほど、海帝に勝ったというのは間違いなさそうだな」

「ハッ、当たり前だろ、いかに強いとはいえ、ご隠居さんに負けるかよ」

「?……………隠居……………バカな、まだ現役の強さだぞ」

グラフィイトの困惑をよそに、Obiパラドクスは話を続ける。

「隠居さ。昔は今と比べ物にならねえくらい強かったんだぜ? それに、もうあいつは引退したぜ。……………グラフィイト、お前はその愛刀を託されたようだが、俺も託されて

るんだぜ？

俺が託されたのは……海帝が使う「剣帝流戦術」免許皆伝だ」

「な!?!……お前が!?!」

「グラフィイト、お前は大層自分の剣技に自信があるみたいだが、まだ、「今」の海帝以下だ。そんなお前が現役時代の海帝を伏せさせた俺にかなうはずないだろ？」

Obiパラドクスは何度かバグブレイガンを振り、グラフィイトの首元に突き付けた。

「グラフィイト、10秒以内にそこで倒れているポッピーポパポを連れてどつかへいけ。そうすりゃあ見逃してやる」

第1.\$話：サイコウノ戦士

「さあ、あと5秒だ。決めろ」

「……………断る!!!」

グラフィアイトはどこまで愚直なんだろうか。嘘でもここは逃げるといわないと殺されるというのに。あろうことか断るとは思ってなかった。

「ヘッ…お前らしい答えだな!! じゃあ死」

【CRITICAL SACRIFICE】

「んな!?!」

直後にObiパドクスはその場から飛んで離脱した。あいつがそれまでたっていた場所を緑色の車輪のような斬撃が通過する。

「グラフィアイト……………良かった、間に合って……………」

「ふっ、少しだけ斬られたがな。」

「さあ! 立て! パドド!! 一人一人でダメなら、三人で行くぞ!!!」

「足に力を入れ、立ち上がる。そうだ。三人の力なら……………!」

「ああ! マックス大変身!!」

【デュアル! ガシヤット! ガツチャーン! マザルアップ!】

【赤い拳強さ! 青いパズル連鎖! 赤と青の交差! PERFECT KNOCK

OUT!】

変身を完了し、Obiパドクスを囲むように3人で三角形の陣形になる。

「3対1か……いいぜ。「相手が強いから数に頼む」……俺の強さの証明だ」

悔しいけど、あいつの言う通りだ。多人数。それは暗に「二人では敵を倒せません」と言っているようなものだ。弱いから多数で攻める、それだけ。

「……うゝん、囲うのは悪手じゃないの? こんなふう……ね!」

少し体制をかがめ、Obiパドクスは地面を殴った。土や岩、雑草が舞い上がり、目くらまし状態になった。直後に俺とポツピーの間をObiパドクスが走り抜ける。

「逃がすか!!」

【ズ・ガン! 1・2・3・4・5・6・7! 7連鎖!!】

パラブレイガンを銃モードに変更して弾を7発撃ち込むが、向こうも同じことをやってきた。

【ザ・ガン! 2・4・6・8・10! 5連打10連鎖!!】

レンダボタンを押しした回数は俺の方が多いの、向こうの方が多くの弾を射出してきた。その数10発。いくつか相殺したが、向こうの方が多分こっちに残った球が飛ん

できた。

「パラド！ どけ!!!」

グラフィイトが俺の前に立ち、飛んできた弾を切り落とした。

「行くぞ！ 紅蓮爆竜剣!!!」

グラフィイトが刀に炎を宿し、Obiパラドクスへ突撃した。

【ジ・ゴーン！ 2、4、6、8、10、12、14、16、18、20！ 10連打20連鎖!!!】

向こうも武器を斧モードに変更し、互いの武器が激突しして、直後に連鎖を知らせるガガガガガンという連撃音があった。一発の威力で優っていても、向こうには連撃がある。グラフィイトが競り負けてこっちに吹っ飛んでくる。

「!! グラフアイト!!」

グラフィイトを受け止めた瞬間、グラフィイトごと蹴り飛ばされた。

「少し本気で行くぜ!!!」

【ガギャット！ 2、4、6、8、10、12、14、16、18、20、22、24、26、28、30、32、34、36、38、40！ 20連打40連鎖！バグ技！

「決着・痛恨の一発」！

Obiパラドクスが手裏剣のように自分のバグブレイガンを投げた。俺たちの近く

に落下し、直後に周辺に必殺技40発分の衝撃が起きた。

「うわあああああ!!!」

あまりの衝撃に自分が今立っているのか倒れているのか、はたまた宙を舞っているのかさえ分からなくなる。

「おのれ! だが武器を失ったぞ!!!」

グラフィイトと一緒にポッピーが飛び出し、Obiパラドクスに切りかかる。……
が、受け止められた。

「ガシャットギア・コンプリートセレクションウエポン! グローブ! タイプ、ボクシン
グ」

「何!? それは……………」

「あ、あれは……………ノックアウトファイターの拳!」

「第二のガシャコンウエポン……………ガシャコングローブだ」

僅かにObiパラドクスの腕がぶれた後、ポッピーとグラフィイトがその場に崩れ落ちた。

「さあ、これで1対1だ。元に戻っちまったなあ?」

「な……………!? おま、今何を……………!?」

「ちよつぷり普通より早く顎を殴っただけだ。すぐに目覚めるぞ。」

お前が死ぬのが先か……こいつらが目覚めるのが先か……賭けてみるか？」
両の拳を胸の前でぶつけ、炎が吹き荒れる。
死ぬ……かもしれない。

第15話：英雄王ベオウルフ

「TWAAAAAAAAAKZWOOOOOOOOOOOOOOOOOOWN!!!!!!」

まだ誰もプロトゲムデウスにダメージらしいダメージを与えていないのに、プロトゲムデウスは満身創痍の状態だ。よく見ると背中中の羽が溶け、角も無くなっている。

「KWHAAAAAAAAANYWEEEEEEEEEE!!!!!!」

大量の吐瀉物を吐きながらレーザーに乗る俺へ突進してきた。

「くっ……………退くぞー！」

!!!!!!

「おう!!」

その場でUターンして走り出す。ふとレーザーの首元を見るとバイクだったところの名残なのか速度メーターがいていた。何気なしに見てみると……………「480km」何だ、思ったほど早くはな……………ん!? 「秒速480km」!?

「見なかったことにしよう……………」

「なんか言ったか?……………うえ!?!」

「DWEEEEEEEEEEEEEEEEEEEZZRLYE!!!!!!」

!!!!!!

声のした方向を見ると、何とプロトゲムデウスが横を並走している。バカな！ なんて速さだ!! むんずとレーザーのしつぽを掴み、そのまま尻に噛みついた。

「うぎゃあ!!!」

レーザーがバランスを崩し、俺は振り落とされて地面にたたきつけられる。

顔を上げると、爛々と目を輝かせるプロトゲムデウスが俺を見下ろしていた。

「MWOORYWEE……………」

なんて言ってるのかまるで分らんな……………しかし、1つだけわかったような気がする。

前々から感じていたベイオウルフとの既視感の正体。

どこかで会ったことがあるのかもしれないとずうっと考えていた。

ハッキリと分かった。

……………俺だ。

俺によく似ているんだ。彼は。

昔の俺と、今の彼。

全然違うようだが、全く同じだ。

どちらも、「自分の無力」を呪ってる。

「飛彩……………世界で……………一番のドクターになって……………」

「小姫……………」

あの時、俺は小姫が苦しんでいることに気づけなかった。

あの時の俺はバグスターに対する知識もゲーマドライバーもなく、ただ苦しみ、消えていく小姫を見守ることしかできなかった。俺は無力だった。無力すぎた。

そして、目の前にいる彼もまた自分自身の無力を呪っていた。

肝心な時に恐怖で動けず、仲間の命を救えなかった自分自身に。

——呪いが彼を強くした。友の死が、彼を呪い、死へといざない、引き換えに究極の力を授けさせた。——認識を間違えていた。彼は魔王ベオウルフではない。英雄王ベオウルフだ。

「……………同じだな、ベオウルフ、俺もお前も、過去の自責に捕らわれている」

プロトゲムデウスになって暴走するのも、俺が初めてタドルファンタジーに変身した時と一緒にだとも思う。俺と彼は、相対的に全く逆だが、根底はきつと同じなんだろう。言葉を介しているかは分からないが、ベオウルフから流れ出る殺意が少々収まっ

た。

そしてその直後、膨大な殺意が吹き荒れた。

「……………そうだな。例えばどんなに自分を理解してくれるといっても、所詮は敵だ。結局倒すことに変わりはない。その通りだ。……………お前が人間だったら、お前は俺の隣に立っていたかもしれないな」

「PYWEEEEEEEEEEEEEEEE!!!!!!!」

雄叫びを上げながら剣を振りかざす。そこに合わせるように俺もソードを振るう。

「TADDLE CRITICAL FINISH!」

ただ振っただけの長刀と必殺の威力を込めたソード、なのに吹き飛ばされるのは俺の方。つくづく信じられないほどの戦力差を実感する。いよいよゲージがゼロに近づく……………その時、

【回復!!】

どこからともなくエナジーアイテムが投げ込まれ、体力が元に戻る。助かった……………しかし、誰が？

「ブレイブ！ 今ので貸し一つね！」

「なっ……………!? 女子ゲーマー!? なぜここに!?」

目の前にはライドプレイヤーニコが立っている。特徴的な帽子で一発でわかった。

……いや、バグスターの勇者である彼の悲痛な叫びが野にこだまする。

「コノ迫害ニ、友ノ身ヲ引キチギル悲シミニ、終ワリヲオオオオオオオ!!」

取り落した剣を掴み上げ、剣に魔法をかける。前に俺を屠った「邪王穿天剣」の体勢。俺はレーザーの背に飛び乗って再び剣を構えた。

「おい！ 全速力であいつに突っ込め！ すれ違う瞬間に切る！」

「お、オーケー！」

「来イ！ 白金の勇者よ！ 「邪王穿天け…!?グアアアア!!」

剣を振りかぶったベイオウルフが急に胸を抑え、苦しんだ。そのせいで剣を取り落してしまう。

「グウ………まだだあ!!!」

もはや剣を拾うだけの時間はない。彼は覚悟を決めて拳に力を込めた。

【TADDLE CRITICAL FINISH!】

ベイオウルフの拳と俺の剣がぶつかった。その瞬間に大爆発が起こり、衝撃波が周りに飛ぶ。

俺も皆も吹き飛ばされ、全員の変身が解けた。そして……

「ぐうう………くそ………くそおお！」

目の前には吹き飛んだ右肩口を押えて跪くベイオウルフの姿。向こうの方がダメー

ジが大きかったようだが、ほとんど痛み分け。つまり……………

「あいつが剣を落とさなかつたら……………俺は……………」

ただの拳でこの結果。もし奥義が発動していたら……………今頃、真つ二つ。その事実
背筋が凍る。ラッキーだったとしか言いようがない。

「おのれ……………おのれ!!!なんで!!!なぜこんなにも僕は弱い!!!」

体中が消えかかっている……………あいつはもうすぐ死ぬ。だが、奴は剣を手に立ち上
がった。

……………まさか、俺を斬る気か!?

魔王ベイオウルフ……………嫌……………勇者マオ視点

不覚も不覚……………チクシヨウ。

絶対に勝てると思った。この剣でブレイブを両断すれば、一番の実力者を失った集団
は崩壊する。

それなのに……………なんだよ! 急に胸が焼けるように熱くなって、気づいた時には剣
は地面に落ちていた。「最悪だ」と思った時にはもう手遅れ。迫る刃に向かつてがむ
しやらにパンチしたけど右手がすつ飛んじやった。痛すぎて昔みたいに大声で泣きそ
うになったけど何とかくいしばって耐えた。

ここで泣いちゃだめだ。僕は強い、「魔王」を演じるんだ。僕が情けない姿を見せたら、皆が人間になめられる。それだけはダメだ。左手で剣を持ち、立ち上がる。

どうせ死ぬなら、痛みでのたうち回るなんてゴメンだ。

僕は剣を空へ、天に向かって高々と持ち上げた。

「クダケチール!!!」

魔法陣から落ちた魔力は剣にぶつかり、柄を伝って僕の体へと流れ込む。

焔が、

氷が、

雷が、

僕の体内を破壊しつくす。

走馬燈が流れた………のような気がする。

………もつと僕がしつかりしていれば、こんなことにはならなかったかもしれない。

戦争だって、起きる前に僕がソルを止めればよかったんだ。

でもできなかった。

あの日、僕も戦えば、誰か死なずに済んだかもしれない。

でも戦えなかった。

僕は………僕には、勇気もない。僕がもつと、しつかりすればよかったんだ。

でも、僕は信じてる。ソルやパラドが勝つことを。

だから、何も心配はない。

あるのは、自分への嫌悪感だけだ。

空へ向かって叫ぶ。格好のつかない、僕の生涯の締めくくりだ。

「この魔王ベイオウルフ、我が生涯、百片の悔いあり!!!」

後悔だらけの僕の一生は、こうして終わった。

!!!!

第！⊠話：心ノ中ニObiヲ持ツテ

パラドクス視点

「さあ、来い！」

来いといわれたが、行く気はない。二人が目覚めるまで、逃げる!!!

「誰がお前と戦うか！ 勝てるわけねーだろ!!!」

「……………ハッ！ いいねえ！ 分かってるじゃねえか！ 「負けるくらいなら逃げる」それでいい！ 下手なプライドなんか捨てて逃げる！ それが正解だ!!」

悔しいけどあいつは俺より強い！ だけど、逃げるだけなら大した差はないはずだ！

「……………チツ……………単純な足ならあいつの方が速えーんだよなあ」

ジワジワと距離が開いていく。逃げ切れると思ったが……………

「ガシャットギア・コンプリートセレクションウエポン！ グローブ！ タイプ、カポエラ！」

直前まで足音は普通の軽快な音だったのに、急に工事現場の金属音のような音になった。

何事かと振り向いた俺の顔面に飛び蹴りが入った。だがその足が異常にでかい。

「なっ……………！ 足にノックアウトファイターのグローブが!？」

「タイプカポエラだ。ノックアウトファイターが腕だけ使うボクシングなら、今の俺は足だけを武器とするカポエラだ。逃げる速度でもお前は勝てない……………さあどうする?」

まさかそんなことが可能なんて……………！ いったいこいつはどこまで俺の先に行ってるんだ!？」

「くそッ!」

目の前の高速化のエンジューアイテムに手を伸ばす。これで何とか……………！

【マッスル化!】

「……………はえ?」

え? いや、俺は確かに高速化を……………

「残念だな、俺はステージのアイテムはシャッフル可能だ」

「んな!？」

「任意では選べねえけど、ランダムに他のアイテムと変更できんだよ。自分に都合のいいアイテムには代えられねえけど、相手を邪魔するだけなら十分だ」

おいおい嘘だろ! 何でもアリかよこいつ!!

「まあこの能力を使ったことでもっと最低な状況になることもあるしな」

ならばと攻撃力が上がった体に力を込めて殴りかかるが、そもそも当たるわけがない。

「さあ、これで決着…!?!」

突如後方からバシユウウウと言う噴射音が聞こえた。何かと振り返った俺が目にしたのは、

空へと昇る青い照明弾。雨の中でもはつきり見えた。

「ベイオウルフ……………まさか……………」

信じられないという声色でObiパラドクスが呻く、その直後、

「パラド…」

茂みの奥からブレイブ、スナイプ、レーザー、ゲムム、それにライドプレイヤーが二人。

俺の方に合流してくれたのか！ ありがとうえ。

肩を不意にたたかれ、振り向くといっ目覚めたのかグラフィイトとポッピーもいる。「……………いいだろ、まとめて全員相手してやるぜ!!!」

Obiパラドクスは自分の頬を叩き、構えなおす。

多分、ここからがこいつの本気だ……………!!

4 3 1 5 2 4 2 2 2 4

あれから、30分以上たった。

なのに、決着は一向に付かない。

9対1と言う、完全に卑怯者と言われても文句が言えない状況なのに、Obiパラドクスは文句の一つも言わず、ただ黙々と俺たちを相手にしている。

俺を含め、全員息が上がっている。これが二回戦だからと言っても、いくら何でもヤバすぎる。

「おら……………どうした？ 来いよ……………」

でも、向こうもかなり消耗してる。完全には言えないけど、いくつか攻撃も入った。「……………パラド、次で決めるぞ。これ以上消耗して、誰かが離脱したらそこから戦況の均衡が壊れかねん。一か八かだが、まだ俺たちが若干優勢な今が好機だ」

グラフィアイトの言葉にうなづく。これ以上続けると、誰かが死んでもおかしくない。

「相手の隙を作れ！ そこで勝負だ！」

叫びながらグラフィアイトが走り出す。

グラフィアイトを抜かし、ブレイブがObiパラドクスに切りかかるが、逆に空中蹴り

を叩き込まれてブレイブが転倒。グラフィイトが切りかかる。日本刀の白刃がObiパラドクスの足をとらえ、ガシャコンググローブを破壊した。

だが直後に持っていた斧に切り返され、グラフィイトが倒れる。

エリーゼがガシャコンスパローで援護し、ポツピーもヴァグヴァイザーIIで打つ。が、当たらない。

新体操の選手もかくやと言う動きだ。

だが一発だけ、Obiパラドクスが持っていた斧に当たって斧を弾き飛ばした。

「……………チツ……………」

……………限界……………だ。 あいつもいっぱいいっぱいなんだ。

スナイプへと走り寄り、Obiパラドクスが拳を振り上げた。

「大我!!」

ニコがエナジーアイテムの「鋼鉄化」をスナイプへ投げる。

ベストタイミングだ!

「させつかよオ!!!」

…!?まさか!? こんなタイミングでチェンジを!

エナジーアイテムが空中で巡るましくその色を変化させる。

緑、赤、黄……………そして、スナイプに当たった。

だが、俺は忘れていたことがある。

O b iパラドクスの能力は、飽くまで周りのエナジーアイテムとのチェンジというところ。

でも、同じフィールドには同じアイテムも大抵あるわけで。

【鋼鉄化!!】

「何!!?」

それは、俺たちには最高で、あいつにとっては最悪の事態。

同じアイテムが戻ってきた!

O b iパラドクスは振りかぶった拳を止められない。

そのまま硬質化したスナイプを殴ってしまう。

「ぐっ……………!」

平べったい鉄の壁を殴ったことはあるだろうか? 当然拳はただでは済まない。

怪我は当たり前。悪くすれば骨折。

そして、O b iパラドクスの呪われた特性、被ダメージ倍化。

ノーダメージを保っていたあいつのライフゲージが半分まで落ちる。

「今だあ!! 畳み込め!!」

跳ね起きたグラフィイトが走る。

ついに訪れた好機。ここを逃したが最後、敗けるのは100%俺らだ。

「紅蓮！爆竜剣！！」

グラフィイトの剣を真剣白羽取りでObiパラドクスが受け止める。

なんて反射神経してやがる！

だが炎を纏った刀だ。Obiパラドクスの腕が燃え上がる。

「こんなもんか!？」

がら空きの腹部を蹴り飛ばされてグラフィイトが吹き飛ぶ。

【キメ技！ BANG BANG CRITICAL FIRE！】

【バグ技！ 完全決着！ 痛恨の一発！】

スナイプの弾幕を蹴散らし、Obiパラドクスがキックを見舞う。

スナイプが吹っ飛び、変身が解除される。

「全員で止めろ!!」

【キメ技！ TADDLE CRITICAL FINISH！】

【キメ技…RIDER CRITICAL FINISH！】

【キメ技！ MIGHTY CRITICAL FINISH！】

【キメ技…CRITICAL SACRIFICE！】

「紅蓮!!爆竜剣!!!!」

【ウラ技! KNOCkout! CRITICAL FINISH!】

全員が力を開放し、突っ込んでくるObiパドクスを見据える。

「負けつかよおおおおお!!!」

【バグ技! 決着! 痛恨の一発!】

俺を真ん中に全員が武器を一点に集中させたのと同時に、向こうの斧が激突した。

「わ?!」

「きゃあ!」

余波でまずニコとエリーゼが吹っ飛んだ。

「ぐわああ!!」

そこからさらにゲンムもやられた。

直後にポツピーも吹っ飛ぶ。

「ぐう……………うおおおおお!!!」

もうまともにせめぎ合ってるのは俺とグラフィイト、レーザーに乗ったブレイブしかない。

そのグラフィイトとブレイブ達も徐々に後退し、ついに後ろへ飛ばされた。

後はもう俺だけ。

「おおおおおおおおお」

「あああああああああ」

流石に向こうの技の切れもなくなってきた。

ここで俺が負けたら全部終わる………！

直後に互いのブレイガンが鈍く光り、大爆発を起こした。

結果は引き分け。

俺の意識は、

遠のいて………

.....

.....

.....

.....

.....

昇っていく。

もしくは、

落ちていく。

不思議な、心地良い浮遊感。

直後に俺は何かにたたきつけられた。

直感で水の中に落ちたことを理解する。

..... 水は、嫌いだ。

死に？がっているような気がする。

水面に上がろうと体を揺らす、

無情にも俺の体はより深くへと潜っていく。

.....

.....

.....

.....

.....

ここは、何処だ？

俺は、誰だっただろう、

ぼうつとしてよく思い出せない。

見知らぬ場所に俺は立っていた。

目の前に仲のよさそうな三人の男女が寝転んでいる。

「夢つていやあ、俺もようやく夢が見つかった。世界中の洗濯物が真っ白になるみたい……みんなが、幸せになりますように……」

真ん中の一人は、そう言ってゆっくりと目を閉じた。

他人なのに、分かる。

この男の名前は、乾。乾巧。

戦いの果て、夢をようやく見つけ、叶えようとする間もなくこの世を去った。

.....

.....

.....

.....

.....

今度は、何処だ？

目の前には一人、男がいる。

場所は空中。

気絶しているのだろうか？

動かない。

現れたのは、赤い腕、

男をたたき起こし、

何かつぶやいた。

赤い腕は、割れたコインの半分になった。

この腕の名前は、アंक。なぜか、分かる……

……

……

……

……

……

また変わった。

場所は、どこかの山だ。

銀色の仮面ライダーが、二人の子供に見守られて死んでいる。

「ねえ、どうしたの?」

「死んじゃったの?」

子供が声をかけるが、答えが返ってくるはずがない。

「大丈夫だよ。少し疲れて、眠っているだけだから……さー! パパのところにお帰り」
白い服の青年が、銀の仮面ライダーを抱き上げる。

「信彦……」

……そう、その男の名前は、シャドームーン。人間としての名は秋月信彦。

最後の最期で人間としての心を取り戻した、月影の王。

ナスカドーパント、ハートロイミュード、ホースオルフェノク……数えきれな

いほどの、死の記憶。

沢山の死が、俺の中に現れては消えていく。皆人よりも、人らしく生きていた。

……

……

……

……

そして、俺は目覚めた。

倒れている。

俺も、皆も。

そして、俺の真横で、

悔し涙を流し、

その場に倒れているObiパドクスが目に入った。

「お前も……俺だったな」

そう一言だけつぶやいて、

俺は意識を手放した。

第四部最終話：誓いを果たす者

永夢視点

……………あれから、一時間近く戦い続けた。

勝負は今も決まらない。

だが、お互いのライフもスタミナも徐々に落ちてきている。

決着は近い。

「おらあ!!」

キースラツシャーを振りかぶったが、柄の部分を蹴り上げられ、武器を取り落した。

「勝負はここからだ！ うおおおおおおおおおおおお!!」

俺は自分のムテキゲーマー最後の能力、全性能倍化を発動した。

身体が黄金色に輝き、光を放つ。

一瞬でハイパー無敵ソルティに距離を詰め、閃光のような連撃を叩き込む。

だが相手も流石。

俺の拳を全部叩き落とした。

「フンッ！」

自分の髪の毛を最大限まで伸ばし、ソルティに絡みつかせる。

動きを封じたところで殴り掛かるが、

「おおおおお!!!」

あっさりと拘束を引きちぎられた。

本当の自分の髪ではないが、鈍い痛みが走る。

クロスカウンターの要領で互いが同時に互いの頬を打ち抜いた。

「ぐあつ……………」

両方ともたまらずに吹っ飛び、少々転がる。

「……そつ!!」

同時に体勢を立て直し、相対する。

「強いですね。エグゼイド……………」ここまでの強さは、そうはいませんよ」

「俺もだ……………」ムテキゲーマーで手こずったことすら、そうないつてのに……………」

互いにもう限界に近い。状態はふらつくし、足は鉛のように重い。

このまま前のめりに倒れてしまいたくなる。

でも倒れるな。

俺が「それ」をしているのは、あの子との約束を果たした、その時だけだ。

「……………フィニッシュは……………必殺技で……………決まりだ!!!」

【キメ技！ HYPER CRITICAL SPARKING！！！！！！】

足にすべての力を収束させ、大きくジャンプする。

向こうも右腕に力を籠め、大きく飛び上がった拳を突き出す。

「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「はあああああああああ！！！！！！！！！！」

空中でお互いに衝突して、せめぎ合う。

衝撃波が発生し、真下の地面がめくれ上がる。

どういうわけか、クロノスを破った時のようにせめぎ合っている部分を中心に互いに

回り始めた。

何度も竜巻のように回転し、気流が吹き荒れる。

雨粒すら吹き飛ばし、雷すら跳ね返す。

そして、ついに勝者が敗者を貫いた――

――敗けたのは

――僕だ。

変身が解け、地面にたたきつけられる。

ソルテイも大ダメージを負ったみたいだが、僕ほどじゃない。

落ちていたキースラツシャーを拾い上げ、ゆっくりとこっちへ歩いてくる。

「これで……………終わる。」

宝生永夢、貴方を倒せば……………！　すべて終わりだ……………！」

キースラツシャーが振りかぶられ、僕の体へと迫る。

覚悟を決めた僕は、目を閉じた。

第5部：永遠に眠り続ける世界

第1話：さらばMUTEKIの騎士よ

永夢視点

ハイパー無敵ソルティイが振ったキースラッシャーは僕の体を両断する直前で止まった。

……………なんだ？

恐る恐る目を開けてみると、胸を押さえ、苦しむソルティイの姿があった。

「ぐあッ……………なんだ……………これ!」

目を凝らすと、何かソルティイの胸が光ってる。なんだ……………？

見たことがあるような気がする……………

少し、二か月ほど前に……………!

覚えが、ある……………!

あれは……………

あの塊は……………!

「……………キッドの……………胸の……………爆弾……………?」

思い出した。僕が初めてバグスター連合の副リーダー、キッドを倒した後に、見つけたもの。彼が死んだ後に活動を止めていた、あの、爆弾だ！

「なっ……………!? なぜ……！ そんなものが私の中に……………!?」

ぐっ……………ぐあああああ!!!」

直後に彼の胸から光があふれる。稲妻がほとばしり、空気が焼け焦げた。

「いやあ……………素晴らしい!!!これまでご苦労だったよ！ハイパー無敵ソルティ!!!」

聞きなれない声が出た。声ゆじた方向を見ると、いつかDrパックマンの事件の時に

共に戦った、仮面ライダードライブが立って……………いや、色が違う。あれは

……………金色だ。

「やあ！エグゼイド！私の名は蛮野天十郎！ネットワーク世界の神だ！」

……………何を言ってるんだ、こいつは。

「……………ハイパー無敵ソルティが苦しんでるのは……………あんたのせいかな？」

「いかにも！それは私が作った数ある実験用バグスターのうちの1つだ。

不測の事態に備え、自爆用の高威力爆弾が埋め込まれているのさ！」

!?! な……………に?!

「初めはうまく人間への敵対心が埋め込めずに失敗したものと思っていたが……………予想外に人間どもがクズを發揮してくれたおかげで大戦争にまで発展したよ！ 想定通り

……いや、想像以上の成果だ！ 見事と言うほかないな！」
 「どう………いう………こと………だ………?!」

「これは君たち仮面ライダーの戦闘データを採取するための実験だ。私が作ったバグスターを君たちが倒し、その戦闘データを得る。君たちのこれまでの戦闘は全て保存されているのだよ。ここまで実に充実した時間だった！あとは役目を終えたそれが爆死すればテストは終わりだ」

なんて………なんてことしやがる………!!!

じゃあ、ソルティ達がこれまで培ってきた努力は、命は………
 全部、死ぬために作られた命だって？

「その爆弾の中には大量の火薬と「死のデータ」が入っている！ 楽に死ぬだろう

………!

これで私の『ETERNAL GLOBAL FRIEZE』は間近だ。

さらば！ 「被検体 D113号、ハイパー無敵ソルティ」！君は実によく働いてくれた………！ あの世があれば仲間たちとそこで今度こそ「平和で静かな毎日」を満喫するとい………！」

言いたいことだけ言つて、黄金のドライブは消えた。

「くそつ………仲間たちの覚悟………命を………！」

畜生!!!!!!
畜生オ!!!!!!!

泣きじやくりながらソルティが何度も地面をなぐりつける。

僕は手を伸ばそうとするが……………

「お前に何ができる?」

いつの間にか僕の目の前には鏡があつて、その中の僕が侮蔑の目を向けてくる。

「……………野外にも出てくるんだな、俺の妄想は」

「お前はこいつの敵だ。お前の安い励ましや激励で何になる?」

「……………なにも」

「だろ? だったら放つとけ。この戦いはお前の勝ちだ。それでいいだろ?」

「……………でも、ダメだ」

「……………は?」

「被るんだよ。何もできなくて、泣いてた僕自身と」

「お前なあ……………いいか

「黙れ」

「……………」

「お前の指図は、受けない。僕はもう逃げない……………そこを、どけ」

過去は過去。何より、あの子は僕に癒者になつてと言つた。あの約束に、願いに嘘は

つかない。つけない。お前の指図は、僕は受けない……………絶対に。強引に鏡に手を突っ込む。水のように鏡に手が刺さり、向こう側のソルティに届いた。

「……………何のつもりだよ、エグゼイド」

聞いたことのない、彼の口調。きつと僕と同じように自分になりたい自分を演じてたんだらう。そんなところまで、僕と同じ。

「君を……………助きたい」

それは、口をつけて出た言葉。敗けた奴から、守られたいと言われる。

直前まで殺し合っていた相手に対し、ぬけぬけと。

自己満足一色の、偽善者のセリフ。

でもそれは、僕の本心で、

「……………君の、笑顔を……………取り戻したい」

……………命は、救えない。

……………でもせめて、笑ってほしいと思うのは、傲慢だろうか？

「エグ……………ゼイド……………」

僕の名を呼んだソルティは、泣いていた。

大粒の涙が、1つ、また1つと水晶のように落ちていく。

「友を……………俺の帰りを待っているソシヤゲバグスターの皆を……………

頼む……………お願いします……………!」

それは、かなうかどうかわからない願い。

もしかすると、もう蛮野が不必要とみなして殺された後かもしれない。

「……………分かった」

僕がそう答えると、彼は最後に笑い、そしてゆっくり立ち上がった。

「ありがとう……………ごさいます。さようなら。永夢さん」

直後に彼は大きく空中に飛び上がり、そのまま大爆発を起こした。

———
生きられなかった命があった。

初めは、もとからいた者たちと共存しようとして、

拒まれて、

諦めて、

戦う覚悟を決め、

正々堂々と、

戦う。

全ては、仲間たちの平和な未来のために。

——— だが、違う？

——— 人と、どこが違う？

怪物にしては心が人間に近すぎる。

人間にしては強すぎる。

ただそれだけのことで、

彼らは平和に生きられなかった。

——— どういうことだよ、それ？

戦いと言う名の、悲しみの果て、彼らは多くの仲間を失い、それでも勝利を信じ、

ついに勝ち、

——— そして、すべて失った。

——— 初めから、死ぬべくして生まれた命。

そんなものが、この世にあつていいのか？

僕は認めない。

彼らが生きようと一生懸命に生きること。

世界中の人々が知らないとしても、僕が知っている。
僕が絶対に忘れない。

——僕は生きる。

生きて……必ずあいつを、

蛮野天十郎を……倒す。

第2話：L I F F Eの期限

あれから、3日ほど経った。

ソルティイが死んだ後、重い体を引きずって他の仲間たちと合流し、そこでエリーゼに教えられてバグスター連合の本拠地に行ってみた。

確実に少し前まで誰かがその場所を使っていた気配はあったのだが、そこにはもう誰もいなかった。

あれから色々調べたが、蛮野に関する情報はほとんどつかめなかった。裏でいろいろとヤバイ実験をしていた……らしい。

でも、どうやらもう死んでいるはずのようだ。それがなぜ……？
「考えれば考えるほど分からなくなってくる……」

………ツ！ 痛って………!!!」

急に頭痛に襲われ、机に突っ伏した。

「永夢！ 大丈夫か!？」

いつからいたのか、パラドが駆け寄ってきた。

「ああ………平気だよ。ありがとう」

「永夢……………お前が病院から逃げ出した時にも痛がってなかったか？ 戦いが終わってからまだ間もないってのに、仕事までして……………根詰めすぎだぞ」

「うん……………でも頭痛なんてアイスを食べた時にもあるんだ。気にすることないよ。」

それに……………今は何が何でも蛮野を何とかしなくちゃいけないんだ。休んでなんかられない。他に気になることもあるしね」

そう、パラドの話を聞いてみたところ、皆はObiパラドクスと相打ちになり、両方とも気絶していた……………らしい。らしいというのは、僕が倒れていた皆と合流して皆を起こした時にはもうObiパラドクスはいなかったのだ。どこへ行っただ……………？

初めは蛮野に殺された可能性を考えただけど、エリーゼはまだ生きているんだ。死んだというのはいちよつと考えられない。

「一瞬、もう一人の俺と心がつながったんだが……………上手く行かないんだよな。永夢の時みたいに居場所が分からないし、生きているのかも……………」

「生きてたら、パラドはどうしたいんだ？」

パラドは少し考え、1つ「うん」とうなずいた。

「……………やっぱり、話し合いたい。都合のいい話だけど、仲間になれないかと思ってる。」

あいつはすごい優しくって、強いんだ。俺よりも……ずっと……」
「うん……そうなるといいね……さ！ 仕事仕事！」

パラドと話していたら、もう頭痛は消えていた。

気を取り直した僕はパラドと別れ、CRから出て上の病院へと向かう。

「やるべきことは山積みなんだ……頑張ろう！」

僕は、この時にもっとしっぴかり考えるべきだったのかもしれない。

飛彩さんの手術を受けた後も続く、頭痛の意味を。

レントゲンなどでは発見が難しい骨折。

頭蓋脳底骨折。

手術などの治療方法は……ない。

僕の命に、刻限が迫っていた。

第3話：NOBLEMAN LADYの涙

大我視点

あの日から3日。

うざいくらいに俺に陽気に話しかけてきていたエリーゼは、最近無言が続いている。笑顔も見していない。

窓際に座って紅茶を飲んで……寝て起きてまた窓際に行つて……

「暗すぎだろ……」

誰もいない診察室で一人ぼやく。

このままじゃ病院がキノコまみれになっちまう。

「カウンセリングは、苦手分野なんだよな……」

本当に苦手だ。昔医大にいた時から「笑顔が怖い例のアレ」というあだ名があつた上、闇医者になつてからもたまに来るなめた態度の患者を怒鳴つてたりしたしな……

「おい」

真つ暗な部屋の電気をつけ、エリーゼの向かい側に座る。

「電気くらいつけろ。妖怪と間違うだろ」

これは前に本当にあった。少し前に出かけて帰ってきたときにニコが入ってきて寝ていたことに気付かず行動し、物音に飛び起きたニコの「んあ!」と言う叫び声で心臓が止まりかけたことがある。

「あ……………申し訳ありません。座った時はまだ明るかったので……………」

柱時計を見ると、時刻は22:35。俺の記憶が正しければこいつは朝方からずっとここにいたことになる。

「……………あいつらのこと、考えてんのか?」

正直、俺はバグスターは嫌い……………と言うより目の敵にしてる。

だが、中にはパラドやポツピーピポパポのように話の分かる奴らもいる。

そして……………多分、俺たちが戦った連合の連中も、話が分かる奴らだったと思う。

「ええ……………すみません。もうしばらくすれば、落ち着きますので……………」

「……………泣けば、良いじゃねえか」

辛いことはたまつていく。なら、出せばいい。少なくとも俺はそう思うし、そうして感情をさらしだすことは、より互いの本音を交換できる。エグゼイドがやっていたことだ。

「私は連合を裏切った身です。今更私が彼らの死を痛んでも、なにも……………」

言葉を続けられずに、エリーゼは俯いた。肩が少し震えているが、涙は出なくて。

俺は一つ嘆息し、エリーゼの隣へ移動した。

「……………大我様？」

「泣きたいなら、泣け。旨くは言えねえけど……………お前が連中を愛したように、あいつらもきつとお前のことを愛してた……………と思う。お前が脱退するときに襲われなかったのが証拠だ。」

だから……………お前があいつらを今でも愛してるんなら、泣け。喚け。それだけだ」
言いたいことだけ言つて席を立とうとすると、エリーゼが肩を寄せてきた。

「最後の喚けは余計ですよ……………？」

「……………？　そうか？　よく分からん」

「もう……………雰囲気が台無し……………ねえ、大我様、泣いても……………宜しいですか？」
「好きにしろ」

寄せた肩を震わせながら、エリーゼは嗚咽を少しずつ大きくしていった。

俺は対処法がわからずに、ただ……………何となく、エリーゼの頭をなでていた。

第4話：その名は「ゲナム」

永夢視点

「あ、もうつながってるかい？」

CRで書類の整理をしていると、聞きなれない声が出た。貴利矢さんも飛彩さんも黎斗さんもパレードもポップピーも!? 感じて。周りを見回すが、誰もいない。

「今の声、何？」

あ、院長、いたんだ………すつとんきゆうな声を上げながら机の下へ顔を突っ込むが、そんなところにいるわけない。声の主はどこにいるんだ？

「上のモニターだよ。見えるかな？」

見るといつも恭太郎先生から通信で使われているモニターに、見知らぬ人が映っている。

「やあ、CRの諸君。私は間久部緑郎。衛生省の者だ。突然ですまないが、君たちが持っているゲームドライバー並びにライダーガシャットを速やかにこちらへ渡してもらいたい」

「「「「な!?!」」」」

新しい敵も現れてやるべきことだらけなのに……一体どういふことだ!?

「ちよつと待つてくださいい! 一体どういふことですか!」

「かねてから計画していたものだが、これから問題になつていくバグスター連合の残党問題に関しては、医療技術よりも単純な戦闘、格闘技術があつたほうがより多くの勝利に貢献できると判断したのだ。

すでに自衛隊の精鋭部隊から選りすぐりの人員を手配したうえで、約10名が適合手術に成功している。バグスターウイルスの早期根絶のためにも、これからの総指揮は自衛隊へと一任する」

「な……納得できません!!」

「……つそうだ! 共太郎先生と話させてください!!!」

「共太郎? ……ああ、前衛生大臣官房審議官の日向恭太郎氏の事か」

「……前……? どういふことだ?」

「あの人なら、もう辞任したよ。いや、辞めさせられたといふべきか……」

改めて名乗ろうか。現、衛生大臣官房審議官、間久部緑郎(まくべろくろう)だ。宜しく」

「辞めた……? 共太郎先生が……?」

「彼はバグスターも人間と同じ心を持つていると考えていたからね……」

バグスターが人間の命を脅かしたことに変わりはないし、彼の考えを快く思わない人も多くてね……詳しくは知らんが、大体原因はそんなところだろう」

「どういふことだ？ どうなってるんだ？」

「これからはそれらの道具は此方で管理する。渡してくれ」

「ふざけるな貴様ア!! それらは私が作ったものだぞ!!」

ただでさえ小さい堪忍袋の緒が切れた黎斗さんが猛然とモニターに掴みかかった、その瞬間、

「動くな!!!」

バアンという扉の壊れる音と一緒に、何人もの銃を持った軍人が入ってきた。

「……………言い忘れたが、残念ながら君たちに拒否権はない。渡してもらおうか」

「……………ハッ! バグスターである私に銃が効くか!!」

「言っておくが、その中の銃のいくつかはゲムデウスワクチンを注入した対バグスター用の特殊銃だ。賢明な判断を期待しているよ。タイラントゾンビの檀黎斗くん?」

「デンジャラスゾンビだし、私は檀黎斗神だア!!!」

「あれ、そうだったかい? まあどうでもいいか。それと……………」

宝生永夢君、君にはとつても大切な話があるんだよ。君の人生にかかわるほどの話だ」

今度は僕かと身構える。だが、この後の言葉は本当に僕の人生での一大事だった。

「君はクビだ。私物をまとめて、出ていきたまえ」

言葉を紡ごうとするけど、上手く口が回らずに何も言えない。

「そんな急に！ こんな横暴が許されるんですか!!」

たまらずにポップーが声を荒げるけど、間久部は全く動じない。

「横暴ではないさ。第一に彼は無断欠勤が多すぎる。首にするには十分だ。」

それに、鏡院長からも解雇申請書を預かっている。印を押せば終わりだ」

「そ、それは日向審議官に送ったものでして……」

何とか院長が取り持とうとしてくれたけど、間久部は首を横に振った。

「じゃあ音読してみようか。」

えー…解雇申請書。聖都大学附属病院及び電脳救命センターC R勤務小児科医師兼
仮面ライダーエグゼイド宝生 永夢は、両者の勤務を継続的に二週間以上無断欠勤し、
結成された懲罰委員会を欠席。その後、登録している住宅マンションに帰宅せず、警察
の搜索虚しく現在行方不明。聖都大学附属病院院長鏡 灰馬はこの事態を重く受け
止め、聖都大学附属病院のゲーマドライバー、ライダーガシャット、並びに小児科医師
免許証を剥奪し、聖都大学附属病院から解雇することの了承を衛生省の衛生大臣官房審
議官に申請する。聖都大学附属病院院長 鏡 灰馬 調印

……とある。つまりこの申請書には「誰が」出したかはわかるが「誰に」送ったのかと言う名前の指定が入っていないのだよ。そして今の私の地位は衛生大臣官房審議官……宝生永夢を救おうと思つたようだが、裏目に出てしまったな？ 鏡院長」

クスリと笑いながら画面の中で間久部が申請書をひらつかせる。

「つと……これで押印完了だ……さ、宝生永夢、君はもうCRの仮面ライダーでなければこの病院の医師でもない。道具を置いて早急にここから出て行つてもらおうか」

「宝生さん、医療免許証、並びに変身道具をこちらへ」

後ろに立っていた自衛官が僕に詰め寄り、半ば強引に僕からドライバーとガシャットをひったくつた。

「私はお前らなどのためにそれを作つた覚えはない!!グレードX・0……変身!」

「ガシャット!ガツチャーン!レベルアップ!マイティアクション!X!アガツチャーン!デンジャラスゾーン!」

「ツ! 撃て撃て!!」

何発もの銃弾が黎斗さんに被弾するけど、全く効いていない。

「バカメエ! ゲムデウスワクチンは元々私の一部だあ!!!」

変身を完了した黎斗さんが猛然と僕の変身道具を奪つた自衛官に殴りかかるが、躲された。

「マキシマムマイティX！マキシマムガシヤット！ガツチャーン！レベルマーツクス！最大級のパワフルボディ！ダリラガン！ダゴズバン！マキシマムパワーX！」

自衛官が腰にドライバーをつけ、何とエグゼイドに変身した。

「俺も適合者なのさ。檀黎斗。丁度いい。貴様も倒そうか！」

黎斗さんの頭を掴み上げ、エグゼイドは黎斗さんを壁へとたたきつけた。

「ぎゃあー！」

たたきつけられた黎斗さんは情けない悲鳴をあげながら気絶したみたいだ。ピクリとも動かない。エグゼイドが変身の解けた黎斗さんの頭を踏みつぶそうと足をあげた時、別のガシヤットの起動音が響いた。

「マイティアクシオンX ガシヤット！ガツチャーン！レベルアップ！」

マイティジャンプ！マイティキック！マイティパンチ！マイティダツシュ！

マイティ・マイティ・マイティ・マイティアクシオン！X!!!

聞きなれない起動音とともに通気口の蓋が吹っ飛び、錆色のエグゼイドが出てきた。飛んだ蓋はモニターにぶつかり、モニターが壊れた。

「何者だ!？」

エグゼイドの問いに錆色のエグゼイドは淡々と答えた。

「その青年の味方さ」

僕を指さしながらそれだけ言い、彼はエグゼイドの前に立った。

「そのドライバーとガシャットは彼の者だ。返却してくれ」

と言うが、当然返却するはずがない。エグゼイドが殴り掛かるが、その場から錆色のエグゼイドが消えた。

「……やはり渡してはくれないか」

一瞬で背後に回り込み、錆色のエグゼイドが殴りつける。だが、全く効いていないみたいだ。

「……………！ 永夢、あれ、プロトマイティアクションXだ」

錆色のエグゼイドのつけているガシャットを見ると、なるほど、確かに見覚えのあるガシャットが刺さっている。黎斗さんが死ぬ少し前まで使っていたガシャットだ。

「……………！ つてことはあの人レベル2?！」

ポッピーが驚きの声をあげる。あのレベル差じゃ死んでしまう。

「逃げてください！」

僕が必死に叫ぶが、「大丈夫さ」とだけ言われた。

「安心したまえ。レベルがどうのと言っても相手は所詮人間だ」

そう言いながら、彼は次々とエグゼイドの攻撃をかわす。

「くっ！ このっ！ ちよろちよろと……………！」

「す、すごい……………！ 全然攻撃が当たらない！」

「まるで、Obiパラドクスだ……………！」

器用に張り付き、時には股の下を抜け、エグゼイドを翻弄する。

次の瞬間、急に僕の方へ錆色のエグゼイドが飛んできた。

「さ、これは君のだろうか？」

いつの間にかマキシマムマイティXガシヤットが彼の手に握られていて。渡される。

「あ……………ど、どうも」

有り難く受け取るが、一体いつの間に？

【ガツシユーン……………】

直後にエグゼイドの変身が解けた。

「所詮は人間だ。強いのはベルトとガシヤットだけさ。ガシヤットを抜けば変身は解けて、私が勝つ。弱い人間に生まれた以上、敗けない奴などいない」

そう言いながら錆色のエグゼイドは次々と自衛官たちをなぎ倒していく。

「これでいいだろう。あの間久部とかいう男にはここにいる全員の変身道具が私によって奪われたと言っておけばいいだろう……………しかし、久しぶりだな。永夢」

……………？ いや、誰？ こんな人知らないぞ。

「あの……………あなたは？」

ポッピーがおずおずと尋ねる。

「ああ、まだ名乗っていなかったね。私の名はゲンムだ。宜しく」

「……………いや、そうじゃなくて…貴方の名前は？」

「……………ゲンムだが？」

飽くまで名乗る気はないのか……………まあいいや。

「誰だかわかりませんが、有難うございます。おかげで助かりました」

「気にしないでくれ。ええと……………すまないが他の皆さんの名は知らないのだ。名乗ってもらっても？」

「鏡飛彩だ」

「私はポッピーピポパポ！ で、この気絶してるのが黎斗！」

「パラドクスだ」

「九条貴利矢だ。よろしく」

錆色のゲンム……………いや、ゲンムⅡとしよう。ゲンムⅡは満足げに一つ頷いた。

「丁寧にも。私はゲンムだ。微力ながらこれから君たちに協力したい。皆さん宜しく。今まで永夢のことを支えてくれていたのだな。ありがとう」

そう言つてゲンムⅡは頭を下げる。貴方は僕の保護者か!!

「さて、一段落したし、私は戻るよ。永夢、クビになつて辛いと思うが、今が頑張り時だ

ぞ」

そして彼は通気口へと飛び込んでいった。

「なんだったんだ………?」

「さあ………?」

急に現れた二人目のゲンム。頭がパンクしそうだ。

第5話：最強の戦士は何を見る

「パラド……パラド……！」

俺を呼ぶ声に応え、重い瞼を開ける。目の前にソルを始め、仲間たちが立っている。

「海帝……ベイオウルフ……ガルダー……！ 皆、生きてたのか……？」

思いがけない再開に嬉しくなり、俺は立ち上がって走り出した。

「あ、あれ……？」

すぐに異変に気付いた。走っても走っても目の前にいる仲間たちのいる場所に辿り着けない。不意に目から涙があふれ、零れ落ちた。

……どれほど走っただろう？ 体力に限界が来て、俺はどうとうその場に座り込ん

でしまった。

「くそ……何で……！」

口をついて出た疑問。でも……本当は分かっている。俺はもう、皆と同じ場所には立てないんだ。死が分つ。どんな友情も、愛も。いずれは届かなくなる。触れ合えなくなる。

「パラド………生きてくれ」

この夢から目が覚めたら、俺はきつと自殺する。ソルはそれを理解してるんだろう。「生きるって………何で？」

これは本当に分からない。なぜ生きなくちゃならないんだ？

「なんで生きなくちゃならないんだ？俺はもう、全部失った。俺は仲間たちを守るために生きてたんだ。俺には、もう守るものなんて何も無い！お前らのところへ行かせてくれよ！」

「大事なものなんて、いくらでもあるじゃないか。お前はいい加減自分のために生きてくれ。お前が誰よりも努力して、一生懸命に皆を守ろうとしてくれたのは知ってるよ。でも、もういいんだ。これからは、お前がやりたいことをしてくれればいいんだ」

言いたいことを一方的に言った後、ソルや仲間たちの姿がぼやける。

「待て……俺を置いていくな！」

………独りぼつちは、嫌だ………」

手を伸ばしても、届かない。

いつの間にかあいつらの足元は水になっていて、皆沈んでいった………

「起きたまえ、Obiパラドクス」

優し気ではあるが、どこか固い声がした。俺はゆっくり目を開け、今度こそ目を覚ました。

「やあ、初めまして、だね。私の名前は※※ゲーム……いや、今のは忘れてくれ。私はゲームだ」

目の前には見慣れない錆色のゲームが立っていた。※の部分は急な雷の音でよく聞き取れなかった。

「ここは……どこだ？」

「気絶していた君を此処まで連れてきたのだよ。」

「あんたは……俺をどうするつもりだ？」

「……もし、君の仲間達が死んだ原因が私にあるといたら、どうするかね？」

「……あ？」

瞬時に起き上がり、錆ゲームを睨みつける。

「おつと……………怖いな。まあその話は今度にしよう。今はただ君に用があるのだ」
「……………なんだよ」

「Obiパラドクス、君に消えてもらいたい」

第6話：涙のCOMMA

パラド視点

俺は仕事の忙しい永夢になけなしの気を使ってCRでじっとしていたがそれも飽き、一人で屋上で日向ぼっこをしていた。

「考えてみると、これも暇だな……………」

大きなあくびを一つして、立ち上がる。ドライバーを腰にセットし、変身した。

【デュアル！ガシャット！ガツチャーン！マザルアップ！】

【赤い拳強さ！ 青いパズル連鎖！ 赤と青の交差！ PERFECT KNOCK

OUT！】

Obiパラドクスの戦いの後から始めた日課だ。空想の相手を想像して、殴り合う。

俺は正直言つて、強いつもりだった。でも、永夢は俺ではたどり着けない強さを持っている……………心のどこかできつと「もう全部永夢でいいや」と考えていたのかもしれない。

でもそんな俺と違って、Obiパラドクスには力への渴望があつて、気づけばその差は俺じゃ辿り着けないレベルまで行つていた。

しかも、ハイパー無敵を攻略できるほどに。

一つの努力の結晶を見せられた俺は、もう一人の俺。なら、全力で追い続けなければいつかは同じレベルにまで行けるかもしれない。

「いつか………追い抜いてやる！」

口に出しながら、それは不可能だとしみじみ思う。あいつが努力を続ける限り、同じ自分同士、成長速度も恐らく同じ。俺が追いつくことは決してない。

「それでも………今以上に差が開くなんてゴメンだ！」

しばらくフットワークとシャドーを続け、一息ついた。

「ふう………遠い………な………」

真似しようとして改めて実感する。その技術と、力の差に。

(無理そうだし、やっぱりやめちゃおうか)

我ながら情けない思考になりかける。頬を自分でひっぱたき、気合を入れなおした
………

その瞬間、急に誰かの思考が俺の中に入ってきた。

「うッ！ こ、これは………Obi。パラドクスなの!？」

分かる。あいつの気配をはるか遠くに感じた。………俺を、呼んでる！

考えるよりも先に体を瞬間移動させ、その場所へ行く。

「よう、一人か？」

転移した先には、俺と全く同じ服になったObiパラドクスが立っていた。

「あの白いスーツはどうした？」

なぜ自分を呼んだのか、それも気になったが、服が変わっていることも気になった。こうしてみると本当に髪形以外は俺と全く一緒だ。

「もうあれを着る意味もなくなった………これでもう、終わりだ」

【ガギャット！バツギヤーン！ノウリヨクジヨウショウ！】

【青きパズル強化！ 赤の拳殴打！ ゲーム世界王者！ 完全 決着！】

「……！ 待ってくれ！ 俺はお前と戦う気はない！」

「………奇遇だな………俺もだ」

「………え？」

Obiパラドクスはそう言いながら俺の背後に回り込み、俺の意識を刈り取った。

第7話：生きとし生ける、その意味は

一時間前、ガード下

「Obiパラドクス、君に消えてもらいたい」

「…ハッ、こりやまたずいぶんと大きく出たな？」

挑戦を受ける思いで俺はゲームバルトを取り出し……懐にしまった。

「…なるほど、鍛錬の成果だな。君がどう逆立ちしても私に勝てないことが分かったようだね」

変身しようとした時に感じた、妙な気配。悪寒でもない……何か、「手を出してはいけない存在」を感じた。

「………で、さっきの言葉の意図は？」

「意図も何も……言葉の通りだ。君が生きている意味はもうこの地球のどこにも存在しない。それだけさ。そして、それは君が一番よくわかっていることなのではないかい？」

目を閉じて、視界を闇で満たす。

……ああ、そうだ。俺がこの世界で生きる理由は、もうない。

守りたかった奴も、

守ろうとした友も、

皆、もうこの世にはいない。

「Obi パラドクス……………君一人が生きて、何になるというのだ？」

「……………そうだな。もう、俺の中には何も無い」

「たとえこの先に生きてたとて、何になるというのだ？ 一体、その生の先に何があるというのだ？ 君の中には、もう友を失った虚無感しかない。

「生きた先で新たな生きる理由を見つけたとて、自分一人生き残った負い目はより濃く、深く君自身を抉る。さらに、生きる意味を見出せず、生涯もがき苦しみ続ける可能性だつてあるのだ」

はつきりと、核心を突かれた。例え俺が生きていても、もう何にもならない。

俺が人間をどれだけ殺そうと、仮面ライダーを倒そうと、もう誰もいない。

仇を討とうとも、もうすべて全くの無意味だ。

「君が生きる義務はあつても、生きる義理はもうない」

「……………そうだな。もう……………もう疲れた……………」

一気に力が抜け、その場にへたり込んだ。今までの自分の無茶が来たんだろう。

「君はもう十二分に友のために生きた。これ以上君は戦う必要はないのだ」

「そう……………だな。あんたの言う通りだ……………さあ、俺を殺してくれ」

立ち上がって両腕を広げる。死ぬのは別に怖くない。ただ……………これまでの努力が無駄だったと、気づくだけ。

「ふむ……………君は何か勘違いしているようだね。確かに私は君に「消えてもらいたい」と言っただが、「死んでくれ」とは言っていない。君には消えてもらう」

「……………なに？」

「君は消え、引き継がせるんだ。君の力を。もう一人のパラドクスに」

俺がかつて望んだ、「究極のパラドクス」それを……………あいつが？

「君はもうこれ以上強くなる理由はない。だが、彼には、パラドクスにはある。

永夢を救うという理由が。そのためには君が必要不可欠だ」

「敵に塩を送れってか？」

「その通りだ。彼は望んだ力が手に入り、君は命の呪いから解放される。これは君にとって決して悪い話ではないはずだ。違うかね？」

「一日時間をあげよう」それだけ言っただけで錆ゲナムはどこかへ行くこうとした。

「さて……………その話、乗った」

「……………いいだろう。では、私とともに来い。私の正体は言えないが、蛮野天十郎のラボへ君を連れて行こう。大丈夫さ。奴は今第二ラボにいる。こちらには来ない」

それだけ言って、錆ゲンは振り向きもせず走っていく。
俺はただそのあとを懸命に追いかけた。

第8話：PARAはまたDXに戻る

パラド視点

「ツ！ 痛つて……………！」

意識を取り戻してすぐに起き上がろうとしたが、首が痛い。すぐに倒れた。

「……………起きたか」

視線を巡らせると、横に座っているObiパラドクスと目が合った。

「くそ……………お前強すぎるだろ」

「まあな……………お前、強くなりたいか？」

急に振られて、困惑する。答えなんて決まってるじゃないか。

「そりゃあ、強くなりたいさ。お前みたいにな」

「……………強くなれるぜ、超簡単に、俺よりも」

罨としか思えないような魅力的すぎる話、でも一つだけわかることは、こいつは、O

biパラドクスは相手をだまし討ちにするようなことは絶対にしない奴だ。

「どうすればいいんだ？」

「取りあえずそこに立って、目をつぶれ」

「あ、ああ……………」

言われるままに立ち上がり、目をつぶる。こんなことで強くなれるのか？

と思っていると、不意に肩をつかまれた。

「持っつけて……………この命ごと」

「え？」

不可解な言葉と一緒に、何か固いものが地面に落ちる音がした。目を開いてみると、Obiパラドクスが使っていたゲームマベルトと完全決着ガシヤットが落ちていて、Obiパラドクスの姿がない。

「う……………あ!？」

直後に俺の中にあいつのすべてが流れ込んできた。力も、記憶も、感情も。

「ここが、蛮野天十郎のラボか？」

「ああ、ここだ」

俺は錆ゲンムの後をついていた。ところどころ器具の説明をしていたがよくわからない。

「君に見せたかったのはこれだ」

「これは……………なんだ？ ロボット？」

「これは、機械生命体、ロイミュードと言うものだ」

「ロイミュード……………これがどうかしたのか？」

怪訝そうな俺の表情を見ながら、錆ゲムが一つ咳払いをした。

「これが、君たちバグスターが蛮野に目をつけられた原因だ」

「このロボットが、俺たちと……………」

「元々蛮野は、このロイミュードを使って世界を自分のものにする予定だった。人間をデータ化し、自分が統制者として管理し、世界を自分の支配下に置くことが奴の目的だった。」

だが、その時に存在していた仮面ライダードライブ達の活躍により、蛮野の計画は破綻。蛮野自身も破壊されたが……………奴は自分が死んだときのために密かにバックアップのデータを残していた。

そして蛮野は新たな「グローバルフリーズ」の計画を立ち上た。

……………そして、彼はもう一つ、有効そうな存在に気付いた。

それがバグスターだったのだ。彼の機械生命体と、進化したコンピューターウイルス。その二つを合わせ、蛮野は新たな兵器作りを考えた。……………それが、「ETERNAL

GLOBAL FRIEZE」の全貌だ」

そんなことのために……俺たちを作って……戦わせたつてのか!?

「野郎……」

「Obiパラドクス、君がパラドクスと融合した時、ここに来るがいい。そしてこのロイミュードの義体を使え。そうすれば更なる高みへと行けるだろう」

………そんな………！　じゃあ、あいつは、消え………

「あ……あああ………」

あいつの悲しみと怒りが俺の中に溶けていき、まるで俺にはその記憶が本当に俺が体験したように思えてくる。

「これは……俺の、記憶………？　いや、あいつのだ……」

医学用語で、欠損はPARA。重身、重複はDXと言うらしい。

こうして欠けていたPARAは、またDXへと戻った。

世界一のゲームの未来を引き換えに………

待てよ！　ソル！　皆！

俺も一緒に行くぜ。

俺たちは、いつも一緒だ。そうだろ……………？
行こうぜ、これからも、皆で……………！

第9話：DRIVEとEX||AID

永夢視点

「どうも、捜査一課の泊進ノ介です。よろしく」

「初めまして。電腦救命センターの宝生永夢です」

自分で調べるのを限界と感じた僕は、友人の仮面ライダーゴーストのタケル君に相談してみたところ、「プロを呼んであげる」と言われた。…………でも、まさか警察とはね

…………

「詳しい話は奥でしましょう。こっちです」

僕はおつかなびつくり奥へ通し、そのまま地下のCRへ泊さんをお連れした。

「こんな空間があるなんて、まるで……………」

「? どうかしましたか?」

「いえ、前の職場に似てて」

へえ、どんな場所だったんだろう。……………! いけない。今日は話さなくちゃいけないことがたくさんあるんだ。しっかり、真面目にしないと。

「それで、早速本題に入るんですけど……………」

僕は、これまで自分たちが戦ってきたこと、その戦った相手がどんな悲しみを秘めていたか、その果てに起きた悲劇。全て話した。

泊さんは途中、とても険しい表情になったり、涙ぐんだりしていた。そして、最後に現れた蛮野の名前を出した時、泊さんの表情が驚愕に変わった。

「蛮野……………!?!」

「……………知ってるんですか? 泊さん」

口元を隠し、少しの間考えるそぶりを見せた後、泊さんは口を開いた。

「蛮野は……………もう死んだはずです」

「え!?!」

「蛮野天十郎は……………かつて俺の仲間の活躍ですでに倒されたはずです……………その蛮野が、なんで……………あの、間違いなく蛮野でしたか?」

「あの蛮野は、正真正銘蛮野天十郎さ。正確にはそのコピーデータだが」

急な声に驚くと、いつの間にかゲムムIIが真横に座ってる。いつの間に!?!

「誰だ!」

泊さんが立ち上がって構えを取った。睨みつけるその眼光は、とても頼もしい。

「……………誰……………か……………私も長いこと忘れていたよ。自分が何者なのか。」

すまない、驚かせたね。私はゲムムだ。元特殊状況下事件捜査課の泊君だったね。宜

しく。驚かれたようだが、私は君たちが座った時と同じ時間からいたよ?」

「あんた、なんで俺のことを?」

「よく上司に聞かされていたからね。君の愚痴のようなものを」

泊さんはその後何度も質問を繰り返したけど、ゲームⅡはどれも躲してしまい、最終的に泊さんは首を振った。

「さ、本題に戻ろう。私は蛮野について君たちよりも多くの情報を握っている。当然、話せることは君たちに話すつもりさ。さあ座ってくれ。そして話そう」

「……………信用できそうにないな。悪いが」

「人を信じるのに証拠や理由があるのかい? そんなことでは友人をなくすぞ。理由がなくとも信じれる。それがあゝ種の信頼関係と言うものさ。もちろん私は君たちを信用しているし、君たちが求めるのなら理由を聞かずとも両の目をくりぬいて差し出すことでも何でもしよう」

ゲームⅡはそう言って低く笑った。怖……………

「泊進ノ介、君は私が合う前の蛮野を知っていて、私は君が蛮野を倒したと思った後の蛮野を知っている。情報交換と行こうか。無論タダでね」

泊さんは少し考え、「聞くだけ聞こう」とだけ言った。

「宜しい。なら話すだけ話そう」

第10話：知るはずのない情報

「先ずは泊くん、私から話そう。恐らくだが君が知っているのは、先に蛮野が起こそうとした計画とその破綻、シグマサーキュラーの破壊までと言ったところだろうか？」

「……………ああ。そこまでだ」

錆ゲナムは「やはりな」と言つて少し考えた。

「……………よし、長くなるが話そう。私を知る全てを永夢、お前も聞け。大事な話だ」

「……………分かりました」

……………何でだろう。この人の言うことに、僕は逆らえない。必ず承諾しちゃう。なんでだろう？

「……………蛮野が自分の息子が変身する剛と言う少年に討たれた時、遠くの場所であるコンピュータが起動した。その中には蛮野が万が一破壊されたときのため、バックアップのデータが残されていた。

そのデータはロイミュードの義体に蛮野のデータを挿入し、新たな「ゴールドドライブ」と言う存在が完成した。その後には奴はもう一度強力な兵器の製造を始め……………

国内で大きな事件となったバグスターウイルスに興味を持った。奴は自分のロイ

ミュードとバグスターウィルスの抜群の相性に気付いて製造を始めた……………

しかし、彼は彼自身で言うほどの才能がなかった。融合兵器はおろか、基盤となるベキロイミュードの作成さえままならず、金もない……………計画は頭打ちと思われた……………が、ここで転機が訪れた…さて、何だと思う？」

泊さんと僕はそろって顔を見合わせた。何があつたんだらう……………

「偶然、それを作るに足る知識と技術を持った男がいたのだ。その男は幸いにもその時諸事情によつて善悪のつかない状態にあつた。その男の科学力を利用し、蛮野の計画は一気に進んだ。

そのうえ、それを追うように蛮野に第二の協力者が現れた。第二の協力者である謎の男は蛮野に資金の援助を申し出た。「ルーフマン」と名乗った謎の男は莫大な量の金を蛮野に提供し、計画は飛躍的に進行してしまった。

そして蛮野は「ラスボスバグスター」と「ソシャゲバグスター」を協力者に作らせた。ラスボスバグスターは蛮野の目論見通りに永夢達と戦い……………ここから先は君たちも知っているな。

そして今、蛮野はついに究極の兵器を完成させた。名は「Galactic Nova・circular」バグスターとシグマサーキュラーを融合させた恐ろしい超兵器だ。今のままで君たちが戦つたとしても、恐らく返り討ちに合うのが関の山だろう。だ

が安心してくれ。私にはある秘策がある。それを発動させられれば、必ず蛮野を倒せる。……………だが、その秘策の正体は言えない。少し問題があるものなのでね……………

……………ふう、少し話し疲れたな……………永夢、すまないが何か飲み物をもらえないかい？」

「え？ あ、はい」

僕は席を立ち、マグカップをもつてお湯の準備に取り掛かった。まあコーヒーでいいだろ。

泊進ノ介視点

「さて……………永夢はいなくなつたな」

それまで余裕そうにくつろいでいたのに、急にその男は俺に顔を寄せてきた。

「泊君、永夢のことをよろしくな。永夢は優しいが、それゆえに涙もろい。もしもの時は君が支えてくれ」

「ずいぶん宝生先生を気にかけるんだな？ それに、合つたばかりの俺をずいぶんと信頼するんだな？」

「当り前さ。私個人は警察が嫌いだが、永夢が君を信じるなら、その限り私は君を信じるよ」

表情が変身してわかんないということもあるが……………読めねえな。こいつは。

「私の腹の底が見たいかい？」

「ああ。俺はあんたをまだ信頼したわけじゃないからな。

……………それに、あんたはあまりにも内情を知りすぎてる。敵と考えるのが妥当だ」

「ふ……………本職の刑事は違うな。だが、誓って私は嘘を言わないし、君たちの敵でもない。そこに嘘偽りはない」

……………嘘を言ってるふうでもないんだよな……………

「なんで警察が嫌いなんだ？」

「……………私を社会的に殺したからだ」

「何？」

詳しく話を聞こうと思ったが、同時に宝生先生がコーヒーを持ってきた。

「ありがとう。永夢……………ああ、この状態では飲めないな。すまない。せつかく入れてもらったのに」

……………飲むときに変身を解くかとも思ったが……………そううまくはいかないか。

「さて、いったん私は帰るとするよ。泊君。また会おう」

「ちよ……………」

呼び止めるよりも早くあいつは天上のダクトに滑り込み、気配が消えた。

「仕方ない……………根拠はないが、信じてやるよ」

誰もいなくなつた天上に、俺は一人そうつぶやいた。

第11話：幻夢とゲムム

檀黎斗視点

「おい、待て」

「む？」

ダクトから出て、どこかへ去ろうとする偽ゲムムを呼び止めた。

「偽物め………正体を現せ！」

「【マイティアクシオンX！ガシヤット！ガツチャー！レベルアップ！

マイティジャンプ！マイティキック！マイティアクシオン！X！

アガツチャー！デ・デンジャラスゾンビ！デ・デンジャラスゾンビ！」

変身を完了し、偽物に殴り掛かる。

確かに奴の顔ををとらえたが、私の拳は奴のに掴まれ、逆にこつちが跳ね飛ばされた。

「ぐわ！………くっ………合気か!? 今のは？」

「君のレベルは10、私は2。だが、相手の力を利用する合気ならレベル差などないようなものだ」

倒れたところで顔を踏んずけられ、視界が真っ暗になる。

「ぐッ……………！ くそお！ 私こそ元祖幻夢だ！ 負けるわけには……………痛で！」

跳ね起きた時と同時に「面！」と言う声だし、直後に鉄パイプで頭を殴られた。

「ぐ……………け、剣ど」

「胴！」

「ぐほ!!」

剣道も使うのか？ と聞く間もなく腹を叩かれた。 この野郎……………

「貴様ア！ もう許さ」

「フン！」

「うげええ……………」

最期はのどを突かれ、私はその場に崩れ落ちた。

「君の負けだ。檀」

倒れた私からガシヤットを抜き取り、変身の解けた私に投げつけてきた。

額に直撃し、一瞬くらつとなった。

「く、くそ……………」

「元祖だ何だといっていたが、一応行ってやろう。「ゲムム」と名乗ることならば、私は君よりはるか前から名乗っている。後から出たのは君の方だ」

「私は……………お前を絶対に信用しないぞ……………！」

永夢とあの刑事を利用して……………何をやる気だ！」

「……………別に、私は彼らの信頼を得たいわけではない。私が一方的に彼らを信用するだけさ。第一、私は永夢には大きく興味があるが泊君には興味はない。私が命をとって守るのは永夢一人だけだ。私が永夢を守るのは私の義務だが、泊君を守るのは義理はあつても義務ではない。無論、君もね。私が守るのは二人だけだ。まあ、可能なら許す限り救える命は救うが」

話を終えた奴はそのまま一瞥もせず去っていく。私は体に力を込め、叫んだ。

「君が持っているゲームドライブバーは自作だろうか!？」

私のゲームドライブバーは他人がホイホイ作れるような代物ではない!

ゲムム! ロイミュードの義体もラスボスバグスターも作ったのはお前だろうか!？」

正体を隠し、私の名をかたり、お前の目的は一体なんだ!？」

叫んだ声が聞こえたのだろう。奴は振り向き、笑った……………気がする。

「決まっているだろう? この世界を……………いや、君が知る必要はない」

第12話：ゲンムの夢

※※主任、反応実験の結果なのですが……

どうだった？

はい、タイプAとEは有効な結果や変化は特にありませんでした。タイプOはタンパク質の結晶化が確認されましたが、逆に凝固が進みすぎてしまいました。他も同じです。

ふむ……よし、今度はもう一度同じで、温度を0.3℃上げ、グレッツチ薬2ミリを1時間ごとに投与してみよう。何か新しい反応があるかもしれない。

分かりました。

※※主任！ 第8番の試作装置がオーバーヒートしました！

何……!!? 中のリチウム大型バッテリーはどうした!?

すみません！ まだ中に……

くっ……仕方ない……こっちを頼む！

※※主任!?! どちらへ!?!

あのバッテリーは替えがきかん！ 取り出す！

危険です教授！ やめてください！

大丈夫だ、心配いらん。誰か、アルミ対火服をこっちに回してくれ！

主任！

危険です！ 主任！

やめてください！

.....

.....

.....

.....

.....

何とか運び出せたな。すまない皆、もう少しで死んでいたよ。

ふう………たまたまフロリナートがあつてよかったですよ。普通に水をかけたらバッテリーがいかれますもんね。

…よし、試作装置は壊れてしまったが、このバッテリーがあればやり直せる。壊れた機器はもう一度発注を依頼しておこう。

………すみません、主任……私がもう少し調節値をよく見ておけば……

あ、主任、良好ですよ！ 部分的ですがタンパク質の結晶化が確認できました。今度は過剰凝固ありませんでしたよ。

そうか！ よし………！じゃあ資料を私のデスクに回しておいてくれ。後で確認しておこう。

はい。お願いします。

さて、こつちの書類の精算を終わらせないと………

主任、ご家族から電話が……

計算中だ。後にしてくれ。これは今日中に終わらせなければ………

ですが、緊急だそうです。一応お出になったほうが………

仕方ない。分かった。つないでくれ。………私だ。どうかしたのかい？

………!!? 本当か!? ??はどこに!? ……分かった！ すぐに行く!!

あ、主任、先ほどの書類なのですが………あ、ちよつと!?

すまん、後!!してくれ!

?? ……頼む………死なないでくれ……… な!?! ブレーキが……… うわあ

ああああああ

!!!!!!!!!!!!!!

頭が……痛い……ここは……私は……誰だ……？

「！」

少し居眠りをしてしまったようだ。あの日の夢……ずいぶん久しぶり見たものだ。
「ふう………む？ いかなな」

自分の体を確認すると、いつの間にか変身が解けていた。

「気をつげんとな………」

【マイティアクションX ガシヤット！ガツチャーン！レベルアップ！

マイティジャンプ！マイティキック！マイティパンチ！マイティダツシュ！

マイティ・マイティ・マイティ・マイティアクション！X!!!

変身を終えた私は、ゆっくりと立ち上がり、直後まで寝ていた場所、高層ビルの屋上から飛び降りた。

第13話：もう一つ先へ

永夢視点

泊さんや錆ゲムとの話に夢中になってしまつて、自分の食事をとることも忘れてた。近くのコンビニにでも行こうと思つたタイミングで、昨日からパラドを見ていなかったことを思い出した。

「パラド？ おくい」

最近パラドは僕に気を使って屋上で一人でいたりすることが多かつた。…だけど…
「いないな……………」

ドレミファビートに入っている黎斗さんも見ていないって言つてたし、屋上に行つてみたけどいいない。

「永夢」

声の方向に振り向くと、いつの間に来たのか、真後ろにパラドが立っていた。

「パラド… びっくりするじゃないか……………誰？」

思わず口をついて出た言葉。 誰だ？

声も顔も体も服もパラドそのものなのに、パラドである気がしない。

「俺が俺じゃなく見えるか？ 永夢」

「いや……………何だか……………パラドが変わったように見えてさ。雰囲気とか」
「変わることは悪いことか？」

「パラド……………？」

パラドの口から出る声の硬さ。冷たさ。パラドが言うとは思えない言葉。
まるで……………別の人間の魂が乗り移ったみたいだ。

「なあ、永夢……………どうして俺は生きてるんだろうな？」

「え……………」

パラドは空を見上げながら「あの時に死んどきやよかった」と言葉を吐いた。

「パラド？ いったいどうしたんだ？」

パラドの耳を引っ張り、半ば強引に顔をこつちへ向けた。

「……………！ パラド、お前……………」

その目は、伽藍堂だった。光を失った瞳は闇よりも暗い。

「なあ、永夢、俺はなんで生きてるんだ？ 俺はなぶり殺しにされて死ぬべきだ。そうだろう？」

「な、何……………言っただよパラド！」

パラドの頬を思い切りはたいた。と言うよりより正確に言えば殴った。

「永夢…………おかしな話だよな？ 人を殺した俺がこうしてのうのと生きてるのに、仲間のために命をとして戦ったあいつが、あんなに孤独に一人寂しく死ぬとか、そんなのアリかよ？」

不条理だ。不平等すぎる。あいつが生きて、俺が死んじまえばよかったんだ」

パラドの言う「あいつ」と言うのが誰かは分からない。でも…………

「しつかりしろパラド！」

「してるさ。しつかりとな。俺は気づいたただけだ。真面目に生きても、幸せがその先にあるとは限らないってな」

それは、絶望の目。闇すら飲み込む悲愴の瞳が、僕を見つめる。

「まあ、いいさ……………欲しかった力は手に入った」

「パラド、待て！」

何があつたかは分からないけど、今のパラドは放っておいたらダメだ。力づくでもここに引き留めないと！

「……………どけ」

身体を壁のようにしてパラドの道をふさぐけど、どんどん押し込まれる。

「く……………！ マックス大変身！」

【最大級のパワフルボディ！マキシマムパワー！！X！】

「ぐ…!? 嘘だろ……………!」

信じられない、マキシマムでも力負けするなんて。パラドはまだ変身すらしてないのに!

「くそ! HYPER大変身!」

【輝け!流星の如く!HYPER無敵!エグゼイド!】

「ゴメン! パラド!」

手段を選んでい場合じゃないと感じた僕は、無敵に変身してパラドを殴りつけた。

「……………悪い、永夢」

拳は受け止められ、逆にこっちが殴られた。一発殴られただけで視界がゆがみ、変身が解除された。

「な…? 無敵に……………ダメージを…?」

「顎を殴っただけだ。じきに回復する。悪い、永夢。とっさで思わず反撃しちまった」
いったいどうしたと言うのか、やっぱり姿がパラドの別人と思えてしまう。

その時、後ろから拍手が聞こえた。

「いや、素晴らしいなパラドクス。ハイパー無敵を一発とはな。

ふむ……………まだ弱いな」

錆ゲナムが現れ、あろうことかパラドを「弱い」と言った。一体どうなってんだ?

「パラドクス、君は私の言いつけを無視してまだ蛮野のラボに行っていないな？」
「……………今更、もう必要ない」

「パラドクス、君はまだまだ弱い。まだあと一つ先がある。

そして、あるいは君が今疑問に思っている問いの答えも……………」

ゆがむ視界に錆ゲンムが写った。はいよって足首を掴む。

「お前……………なに……………する気だ……………」

「永夢、私は君にとって害なこととはしない。信じてくれたまえ」

畜生……………この状況で信じれるわけねえだろ……………」

「さ、行こう。パラドクス」

「……………ああ」

くそ…………………………」

第14話：捕らわれのPARADOX

Obiパラドクス？パラドクス？視点

「欲した力を手に入れて、気分はどうだ？」

「……………最悪の気分だ」

歩きながら移動しているときに、急に錆ゲナムが話を振ってきた。

「そうか、目標を達成し、最悪とな」

「……………お前のせいだぞ」

もともとこいつが合体だ融合だと言い出さなければこんなことになってねえだろ。

あいつの心と俺の心が強引に張り付けられて、気が狂いそうだ。

「苦しいものと受け取ったのは君自身だ。私は知らん。

君が力だけを求める戦闘マシンのような存在であれば、そう思うことは無かつたろう。

…だが、そんな自分を君は求めるかい？」

「……………まっぴらだ」

錆ゲナムは「だろう？」と言って笑った。

「私も君のようなことを考えていた時期があった……」

人はなぜ死ぬのか？ 死ぬとすれば自分はいっつ？

知っているかい？ この地球では4秒に1人餓死している人間がいる。

そして、餓死に限定しなければ1秒間に1.8人の人間が死んでいる」

「……………」

「君は自分が罪を犯したのにもかかわらず生きていてObiパラドクスは罪が特にないのに満たされない最期だったことに憤りを感じていつのだろう？ だが、この狭い国日本の中で、当たり前前に生きていることを幸福だと思い、日々感謝しながら生きている人間が何人いるだろうか？ いないのでは？」

他とえ人が死んでいる事実を聞かされても、体外皆結局は他人だ。助けようと行動を起こす者がいれば、そうでないものもある。挙句の果ては募金の金を奪うような輩もね」

「……………結局、何が言いたい？」

「考えるなどは言わん。だが、君が考えたところで世界が急にどうにかなるはずもない。悩んだところで君は君自身が満足する答えは出せないだろう」

まるで、と思う。目の前にいる錆ゲナムは、全ての答えを知ってるような……………

「あんたなら、生きるってことの意味を知ってるのか？」

「無論、知っていると。完璧な答えをな。……………だが、君に教える気はない」

それはつまり本当は知らないんだろう、と言う視線を送ると、錆ゲムはため息をついた。

「こういった価値観での答えは人それぞれなのだよ。全人類共通の答えがある方がなかなかないものだ。自分の罪のため、約束のため、好きなアイドルのため、恋人のため……………十人十色。同じ答えは出てこない。まあ、私の中で嫌うのは「生きること」の疑問について考えることが生きること」くらいのものだ。自信の導き出した答えとして近くするならいいが、他人と共有するものではない。あの答えはそれを思いついた者なりの答えであって、不変でなければ真理でもない。

自分なりに出した答え。それがその人にとつての生きることの意味だと私は思う」

「考えても……………答えが出ないんだ……………俺は、バカだからな……………」

「大抵の人間がそうさ。……………だが、そうだな。これから私は君に生きることの答えは教えられずとも、例答は教えられる。気にはなるだろう?」

「例答……………? どういうことだ?」

「答えは中だ。入りたまえ」

会話を続けていると、いつの間にか蛮野研究所の前にいた。

「この中に……………?」

言われるがままに入り、奥においてあるロイミュードの義体の前に立つ。

「どれを使えばいいんだ？」

「別に、どれでもいいのさ」

「なら……………これだ」

特に考えることもなく、目の前の義体へ体を滑り込ませた。

目を開けると、俺の体は確かにロイミュードになっていた。

「その姿では何かと不便だろう。頭の中で念じたまえ。それが君自身の姿になる」

自分の姿をイメージすると、すぐに人間態の姿になった。

「それで……………力は確かに上がったみたいだが、結局その例答は……………!? おい!!」

後ろを振り返ると、錆ゲムが部屋の扉を閉めていた。

何とか止めようと走るが、間に合わない。

「おい！ 俺を閉じ込めてどうする気だ!!!!」

扉に向かって思いきり叫びながら殴りつける。

だが、どれだけ殴ってもへこみすらしない。信じられない。

俺は今どうも少なく見積もっても600t以上のパンチが出せるはずなのに……………!!

「こんの…!!」

「そう暴れるな、パラドクス。私は君をどうこうする気はない。これは君がこれから出

す答えのために必要なのだ。時が来れば君は外へ出られる。約束しよう」

瞬間移動もなぜか発動できず、俺は疲れ果てて諦めた。

「くそ……こんな狭い研究所で、何がわかるってんだ………」

— 4 話：天才大学生宝生現夢

「あなた、天才って呼ばれているらしいじゃない」

とある大学の食堂で一人黙々と食事をしながら勉強する青年の向かい側のテーブルに腰かけた、勝気そうな女性が話しかけた。

「……………周りがそう呼ぶだけですよ」

参考書を読みながら、機械的に食べ物や口運び、無難な返事を返し、目も合わせない。必然的に話しかけた彼女はムツとした。

「以下にもインテリって感じがしてむかつくわね。あんた友達いないでしょ」

「友人はいません。ですが、研究の協力者や知り合いはいます」

会話を続けても一向に目を合わせる気配がない青年に対し、彼女は無理やり参考書を奪い取った。

「目ぐらい合わせなさい。あんた常識無いの?」

「……………急に話しかけてきて人の集中を削いで……………君に言われたくはないな」

それだけ言って、カバンから今度は別の参考書を取り出して読み始めた。

「……………それで、ご用件は?」

「周りがこの大学一の天才って呼ぶもんだから興味があつたのよ。まあ実態はただの一人寂しく勉強がお友達の残念な奴だったけどね」

「勉強が友人……………」

眉をひそめ、青年は参考書を下ろしてようやく目の前の彼女を見た。

「何よ、怒つたの?」

「…いえ、良い表現と思ひましてね。私は学問を知り、見聞を広めることがとても好きなたちなので」

「こういう青年のことを一般的にガリ勉と言うのだろう。おまけにぼつちだ。」

「つまらない男ね、あんた」

「怒ると疲れますしね。なら無関心でいる方がよっぽどエネルギーの節約になります」

「その後も彼女はいくつも質問を繰り返すが、どれも当たり障りのない言葉で受け流されて終わった。」

「……………そろそろ次の講義の時間ですので、それじゃあ」

「いうが早いかお盆を持ち、あつという間に他の学生たちに紛れて姿が消えた。」

「……………なんなの、あいつ……………」

傲慢でもないが、彼女自身は自分を美人な方だと思つている。事実、「彼女は美人な方」と言うより「絶世の美女」と言う方が近いが。社交的で、誰にでも好かれる彼女は

出会つて3分もあれば誰とでも友人になれる。しかし、この世は広く、そして歴史は長い。あんな男もいる。

その日の帰り、彼女は駅前で自分の好きなアイスクリームを買っていた。

大学に通う時に3日に1度は必ず食べるほど彼女は気に入っている。店員からアイスを受け取り、いそいそと彼女はいつも自分が座っているベンチに向かったが……

「アイス美味しいね。○○君」

「そうだね。○○さん」

そのベンチには仲睦まじそうな男女が先に座っており、二人でひとつのアイスを食べていた。恐らく彼氏と彼女の関係なのだろう。

仕方なく彼女は別の場所ですべてのことにした。と言つても駅前のこの広場には一つしかベンチはなく、どこへ行くべきかと考えながら歩く。

「……………あの二人……………いいなあ……………」

先ほど彼女は美女だといったが、残念ながら彼女はいまだかつて男性と付き合つたこととはない。誰とでも仲良くなれるとはよく言つたものだが、逆に言えばそれは友人どまりの関係ともいえる。

「もしかしてずっと独り身……？」

不穏な未来を感じ、慌てて彼女は首を振った。まだ自分は大学生。時間はまだある……と。

「待ってよお兄ちゃん！」

「早く来いよ〇〇！」

らしくない思考に陥っていると、不意に右側に少年少女が突っ込んできた。驚いた彼女は右手に持っていたアイスを反射的に左へと持ち替え、自分自身も左へ飛びのいた。だが、それがよくなかった。

「ああん？」

隣を歩いていた「いかにも不良」な人物の服にアイスが激突してしまったのだ。

「おうおう嬢ちゃん、俺たちの一張羅に何してくれとんじゃござらあ!!」

「すみません。洗濯代を払います」

頭を下げて謝り、洗濯の代金を負担する。最も問題のおこりにくい謝罪だが、相手はそれでは満足しなかった。

「…よく見りゃかわいいいじゃねえかよ。ヒヒ、服はもういいわ、俺らとイイ事しようぜ？」

言葉と同時に手を掴み、無理やり引つ張った。取り巻きの二人組はにやにやと笑ながら、彼女のバッグを掴んで逃げられなくする。

「やめてください！ だれか助けて！」

大声をあげるが、周りの人間はみなそしらぬ顔でそそくさと通り過ぎていく。

「いいから、こつち来い！」

腕を強引に引つ張られ、彼女の顔が苦悶にゆがんだ。その時。

「その手を放せ」

彼女の手を掴んでいた腕をひねり上げ、絡んできた男を突き飛ばしたその青年は

……

まさに今日の昼、彼女が話しかけていた青年だった。

「あ、あなた……………」

「怪我は無いですか？ 今上さん」

彼女、今上エリ「いまがみえり」は驚いた。ビン底メガネの青年が不良の前に立ちはだかるなど、まず見ることものない光景だろう。

「あんだてめえごらあ！」

「てめえ！ なめてんのか!!!」

「いてえなこの野郎！ ひねった腕の慰謝料出せごらあ!!!」

三人の不良が罵声を浴びせるが、浴びせられている青年、現夢本人はエリに「手首にあざができちゃいましたね」と優しげに語りかけており、全く聞いていない。

「このクソガキが！」

怒り狂った不良の一人が殴り掛かるが、現夢は瞬動もかくやと言った動きで背後に回り込み、不良の首筋に手刀を落とした。

「げ……………」

間抜けな声をあげながら一人が倒れる。どうやら気絶したようだ。

「……………へッ……………上等だぜ！」

残りの二人のうち、片方は驚いて引いたが、もう片方は激昂し懐から折り畳み式のナイフを取り出した。

「おらぁ！ どうするよ兄ちゃん!？」

「……………やってみろ」

不良はナイフを出せば怖がると思っていたのだろう。一步も引かない現夢に対し、むしろ恐怖にも似た感情を抱いていた。

「……………このくそがあぁあ!!！」

がむしやらに突き出したナイフは現夢の人差し指と中指の2本に受け止められ、あまつさえナイフの刃をそのままへし折られた。

「怪我したくないなら、そこに倒れている男を連れて失せろ」

昼間にエリが聞いた無機質の声とは打って変わった、まるで地獄の閻魔のような声。

当然、不良達は蜘蛛の子を散らしたように逃げ出した。

「まったく……大丈夫ですか？ 向こうの水道で手首を冷やしましょう」

広場の真ん中にある立形水飲水栓（公園等によくある上に向かつて水が出る蛇口）を指さしながら、現夢はエリの手を引いて歩く。直前の不良とは違い、現夢はエリの腕手首を優し気に包んだ。

「そこで手を冷やしててください。すぐ戻ります」

それだけ言って、現夢は人ごみの中に消えてしまった。

「あ……………」

その時になって、エリは自分がまだお礼を言っていないことに気が付いた。

だが、エリは自分の鼓動が早鐘を打っていることには、まだ気が付いていない。

— 3話：現夢とエリ

「すみません、遅くなりました」

3分ほどで現夢が戻ってきた。エリの腕を取り、ハンカチでぬれた手首をぬぐい、慣れた手つきであぎの部分にシップを張った。

「大袈裟ですけど、一応貼っておきましょう。……それと、はい、どうぞ」

差し出された現夢の手には、先ほど失われたエリのアイスと同じものがあつた。

「あ………ありがとう……」

「お礼は結構ですよ。恩返しです」

エリは意味が分からなかつた。自分はこの男に何かしただろうか？ と。

「じゃあ、これで帰ります。さようなら」

「あ、ちよ、ちよと!?!」

現夢は振り向かずにそのまま去つて言った。

これが、永夢の父と母、現夢とエリの出会いであり、なれそめの物語。

……そして、次の日の昼。

「……ん？ おや、こんなにちは」

エリはまた現夢の向かいに座った。

「あなたの「恩返し」って言葉に引っかけたの。それで昨日、家の卒業アルバムを見てみただけど……あなたを見つけたわ。小学校で同じクラスだったのね」

「……当時、私は勉強ができたため、一部の男子からいじめを受けたことがあります。その時、助けてくれたのがあなただったんです。だから昨日のは恩返しですよ」

こうしてみると、現夢が不愛想な態度に見えたのも、急に昔の恩人に話しかけられたことに驚いたのや、本人が単に緊張しているだけということに気付いて今はエリの目にはいい風に映った。

「でも、私の記憶の中ではあなたはもっと弱い人だったのにね」

「ですから、恩返しですよ。いつかあなたの身に危機が訪れていたら、必ず私があなたを助けられるように………ね？ 昨日は不愛想ですみません。女性に話しかけられたのは久しぶりだったもので、どうにも恥ずかしいところをお見せしました」

自分を助けた理由が分かったことへの喜びと同時に、この関係が終わるのではないかと言う不安がエリの頭をよぎった。

「これからもあなたが困ったら言ってください。いつでも助けます」

「助けるって……いつまで？」

「私の命が尽きるまで……いえ、尽きた後も……」

そう話し、現夢はエリの手を握った。眼鏡をはずした彼は、やはりどこにでもいる普通の男と言う雰囲気だった。

「良かったら、私の隣にいてください。その方が助けやすいです」

口説き文句を知らない男の、遠回しな精一杯の背伸び文句。

その姿に自分が好感を持っていることをエリは自覚していた。

「……じゃあ、これから……よろ、しく」

男性からの行為に慣れていないエリは若干嘔みながらも、彼を受け入れた。

二人が結婚するのは、この4年後の話。

— 2 話：この子は永夢

「おぎゃあ！ おぎゃあ!!」

病室の中で、1つの生命がこの世に生まれた。

まだ名前のない赤子は、両親にとっても祝福された。

「元気な男の子だね」

「そうね……………」

「頑張ったな。ありがとう。エリ」

現夢はエリの額にキスをした。これまで何十回と繰り返してきた。愛の動作。

二人の笑顔がより深くなった。

「……………それで、この子の名前、決めたの？」

前々から話し合っただけはいたが、結局決まらなかった名前。まさか考え付かなかったとかないだろうなどとエリは取り越し苦労なことを考えた。

「ああ……………私の名前の意味と同じにしたよ。「厳しい現実世界の中でも、無邪気な子供の夢を永遠に失わない子」……………この子の名前は、永夢。宝生永夢」

「永夢……………いいかもね」

赤子の名前は永夢。この物語の主人公。彼はこれから仮面ライダーとなり、戦いに身を投じることになるが、両親はまだそのことを知る由もない。

「最近の仕事が立て込んでたけど、一日中そばにいたわよね、仕事は大丈夫？」

「平気さ。日ごろから真面目にやってる分、こう言うところでわがままを言わせてもらったよ」

すなわち今日が過ぎればまた仕事行きということ、エリは少し表情が曇った。

「安心して。何かあれば飛んでくるから」

「うん……………ごめんね」

「良いんだよ。どんどん頼ってくれなくちゃ」

それから二人は赤子の将来について話し合った。どんな性格か。職業は？

まだ見ぬ我が子の未来に、二人の胸が躍る。

「疲れただろう。少し寝たら？」

「うん。じゃあ……………すこし……………だけ……………」

出産後の疲れか、すぐにエリは寝息を立て始めた。その寝顔を現夢は微笑ましそうに見つめていた。

そして、7年の歳月がたった……………

「ただいま」

「お帰りさない」

現夢が家に帰ると、いつも通りに妻と息子が迎えてくれる。

何気ない日常の幸せをかみしめ、現夢の頬が緩んだ。

「パパ！ ゲームしよ！ ゲームしよ！」

「はは、いつもそうだな、永夢は」

「あなた、永夢ったらいつもゲームしてるのよ」

確かに永夢はたいていゲームをやってはいるが、それでも学校の成績は上位。特に大きな問題があるわけではないので、現夢は特に問題視していなかった。

「まあいいじゃないか、結構教育にいいゲームっていうのもあるらしいし、そうでなくとも私生活に問題がないなら構わないよ」

永夢は器量良く、何でもこなした。勉強でも運動でも、ゲームでも。

ゲームは初めは友人とよくやっていたが、あまりにも永夢が強すぎるので誰も永夢を満足させることができないのだ。……………父を除いて。

「永夢、台所に来て手伝って。にんじんの皮むきくらいできるでしょ？」

「え〜？ でもお……………」

「はは、永夢、ゴメンな。パパもこれから着替えなくちゃいけないんだ。ママのお手伝いが終わって、ご飯を食べた後に一緒にゲームをしよう」

「……………うん！」

永夢は頷きながら台所へと言った。現夢は自室に入り、着替えて自分も台所へと向かう。

「手伝うよ。何すればいい？」

現夢も二人に混ざろうとするが、エリは無言で現夢をリビングへと送った。

「今日もお仕事疲れたでしょ？ いいからリビングでゆっくりしてて」

「……………ああ、ありがとう」

そこまで言われれば断る理由はない。言葉に甘え、現夢はリビングの椅子に腰かけた。

しばらくテレビのニュースを見てみると、彼の愛しき息子と妻が夕食を運んできた。

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

「……………うん、今日は昆布だしかい？ これもおいしいな」

「あら、じゃあしばらくそれで行こうかしら」

「ハンバーグおいしい！」

「はは、永夢、パパのハンバーグ半分食べるか？」

「平気よ。そう言うと思うってあなたの分は小さく、永夢の分は大きくしてあるから」

おいしい夕食に舌鼓を打ち、現夢は永夢とゲームを始めた。

「パパ、きょうはかつからね！」

永夢は、対戦相手が手を抜くのを嫌うたちだったため、当然現夢も本気を出す。

……………そして、その腕は後に天才ゲームの異名を冠する息子以上の腕だった。

「えい！…えい！……………ああ」

「まだまだだな。永夢」

「ん~~~~~~~~いもん！ つぎはレースゲーム！」

その後も格闘、リズム、シューティング、パズルゲームと永夢は現夢に挑むが、こと

ごとく返り討ちにされてしまう。いつも永夢は現夢に勝てないのだ。

「……………んう……………パパ……………つぎはね……………ううん……………」

やがて永夢は眠たそうにし始めた。現夢が帰る前にお風呂には入っているし、後は寝

るだけだ。

「さ、永夢、歯を磨いて寝よう。今日もパパの勝ちだね」

「うん……………パパ、あしたは……………かつから……………」

眠たそうにする永夢を洗面所へ連れて行き、歯を磨かせているうちに永夢は寝てしまった。現夢は眠った永夢を抱きかかえ、エリの待つ寝室へと向かう。

「永夢は寝てしまったよ。すまないなエリ、今日はあまり君を構えなかった」

「バカ、結婚してからもう10年もたつよ？ 別にそんな……」

「君がよくても、私がよくないのさ」

ベッドに寝かせた永夢をまたぎ、現夢の手がエリの頬を撫でる。

「愛してるよ。エリ……」

「知ってる」

「ハハ、ドライだな」

「愛してるわ、あなた……」

「ゴメン、知ってる」

二人は微笑み、手を同時に動かした。

右手は互いの手を、

左手は息子の肩に。

こうしてまた、朝が来る。

— 1 話：幸せの終わり

現夢は帰り道の途中、柄にもなくゲームショップへと足を進めた。

目的は一つ。ついに今日となる、彼の息子、永夢の8歳の誕生日だ。

「なんのゲームがいいかな……………」

現夢はゲームの腕ならば今も、そして未来も世界最強級の腕を持つが、彼自身はゲームにそこまでの興味は持ち合わせてはいなかった。彼が興味があるのは、息子が興味を持つゲーム、それだけ。

「うーん、しかし増えたな……………」

棚どころかお店そのものが電子ゲーム専門という、ゲームの進化を物語るような空間の中で彼は嘆息した。当然原因は何を買いえばいいのか見当がつかないという点だ。

「何にすれば……………ん？」

ふと目に入ったゲームソフト。いや、正確にはゲームソフトの会社名。

「これは……………」
「幻夢」コーポレーション？ 新参のゲーム会社か？」

自分の名前と同じ「ゲム」と言う名。現夢は何の気なしにそのソフトを手を取った。

「これにしてみるか」

現夢は使い慣れたもののブランドを愛用するが、開拓精神も持っている。それに、よっぽどでなければ永夢はどんなゲームでも楽しめるタイプであることも知っている。まあ何とかなるだろう。と彼は自分の中で結論づけた。

ちなみに、その結果は……

「パパー！ これさいこう！ すごいよ！ ほらほら！」

結果は大うけ。永夢はそのゲームのとりこになった。

「はは、賭けに出てみたけど、よかった」

「…………でもこのゲーム、1りようだね……………」

そうなのだ。現夢は買った時によく確認しなかつたが、これは一人用のゲーム。

永夢がいつものように父と競争することはできないのだ。

「ああ、よく確認すればよかったな……………すまない」

「ううん！ いいよ！」

その日は結局エリの手作りケーキなどで大いに盛り上がり、素晴らしい時間だった。

そして、そこから一週間後。

「ただい……………うわ!？」

「パパー！ みてみて!!」

家に入ると同時に、永夢が現夢のもとへ突撃してきた。

見ると両手に何か紙のようなものを大量に持っている。

「なんだい？ ……これは」

それは、永夢自身が考えたゲームのアイディアだった。

微笑ましいと感じ、微笑笑だった現夢の表情が、しばらくすると驚きに変わった。

「これ……………すさまじく面白いな！」

ゲームをまともに遊ばない彼にでもわかる。これは面白い。

「でしよでしよ!!」

「すごいな、永夢は……………でも、どうして急にこれを？」

「うん……………げんむこーぼれーしょんのえらいひとにみてもらおうとおもって。」

もしつくってもらえたら、パパとあそべるでしよ!」

そこまで聞いて、彼はなるほどと納得した。彼が先日買ったゲームは一人用だった。

自分と遊ぶのを一番と考えてくれる息子に、思わず胸が熱くなる。

「うん……………よし! じゃあ幻夢コーポレーションに送ってみよう!」

この時、彼は軽い気持ちだった。出すだけ出す。と言う風に。そして…………

「あなた、これ…永夢に郵便みたい」

「うん?……………! 永夢! これこれ!」

差出人を見た瞬間、彼は驚愕した。差出人の名前は「檀黎斗」幻夢コーポレーション

の社長の息子であり、あのゲーム会社のほとんどのゲームを自分で考えた少年の名だったからだ。

「わああ！ すごくすごい!!!」

便箋の中には手紙とゲームが入っており、手紙には「将来僕と一緒に究極のゲームを作ろう」ということが書いてあり、現夢は自分の息子が評価されたことを何よりも喜んだ。

「永夢？ 寝てるのかい」

永夢の部屋に現夢が入ると、永夢は送られてきたゲームを起動したまま眠っていた。表情は苦悶の気配があり、現夢は不安になった。

「永夢!? 大丈夫か!」

「う、うくん、パパ?」

起きた永夢に苦し気な気配は一切なく、念のため額に手を当てても熱はなかった。

悪い夢でも見たのだろう。と現夢は結論づけた。

「さ、夕ご飯にしよう」

「うん…あ! そうだ、パパ! にちようびのゆうえんち、たのしみだね!」

現夢は今日の日曜日に家族で遊園地に遊びに行く予定だった。………そして

「……もしも、宝生現夢です。いつもお世話になっております」

その日、彼の研究所ではあるトラブルがあり、大型の機械の一つが破損してしまっていた。

「ああ、お久しぶりですね、宝生さん。今日はどうしましたか？」

「はい。急で申し訳ないのですが、こちらで使用させていただいていた試作装置が一つ破損してしまいました……」

「………！　そうですか。それは困りましたね……」

お互いにあまりいい会話ではなく、暗い雰囲気になる。

「では、申し訳ありませんが機械の製造費は……」

「はい。申し訳ありません。もちろんこちらで負担させていただきます。それで、出来ればもう一台を発注していただければと……」

電話の相手は考えるように低くうなった。現夢は祈るように目をつむった。

「分かりました。スペア用のサイドを動かせるようにしましょう」

「！　可能ですか!?　ぜひお願いします！」

「よろしいですよ。こちらとしても宝生さんにはお世話になっていきますしね。では、それについてのお話と輸送について、明後日の日曜日はどうでしょう？」

「はい、分かりました。明後日ですね。……………あ……………！」

何の運命の悪戯だろうか、現夢が開いたスケジュール表には、「家族で遊園地」と書かれていた。

「……………どうかしましたか？」

「ああ、いえ、何でもありません。はい、明後日の2時。ありがとうございます。失礼します」

こつちのミスで機械を破損させたうえに、「都合をこつちに合わせてくれ」と言うのは流石に凶々しすぎる。仕方なく現夢は「家族で遊園地」の文字に斜線を引いた。

「……………すまない、永夢……………」

そしてそこから数時間が立ち、彼のもとに電話が入った。

「私だ。どうかしたのかい？」

「あなた……………！ あの子が……………！ 永夢が事故に……………！」

「!? 本当か!? 永夢は今どこに!?」

一瞬で彼は平常心を失った。急すぎることに、頭が真っ白になる。

「ぐす……………たしか、家のすぐそここの病院だったはず……………」

「…分かった！ すぐに行く!!」

彼はすぐに走り出し、仕事用のコンパクトカーに飛び込み、アクセルを思い切り踏ん

だ。

「永夢……………頼む…死なないでくれ……………!」

大雨の中、彼は車を飛ばした。

研究所は小山の上にあるため、大急ぎで速度を吊り上げていく。

「……………トトラック!?!」

不意に下り坂の角から大型トラックが飛び込んできた。

何とかよけようとするが……………

「な!?! ブレーキが……………うわあああああ!!!!!!」

土砂降りの雨の中、滑らないはずがない。

車はスリップしたままトラックと接触し、彼は車ごと吹き飛ばされた。

……………と思われたが、彼は壊れたドアから投げ出され、近くの雑木林に落下。

車は崖下にあるガソリンスタンドに落ち、大爆発を起こした。

車やガソリンスタンドそのものが跡形もなくなるほど吹き飛んだため、現夢は、彼は

警察に探されることなく死んだ人として処理されてしまった。

(……………頭が……………痛い……………)

行かなくて……………あの子のもとへ……………

……………?

あの子……………？

誰のことだ……………？

私は、

誰だ……………？)

「……………う……………」

「……………！ 永夢！ よかった……………！」

エリは永夢を優しく抱き留め、嗚咽を漏らし始めた。

「ママ……………どうしたの？」

「永夢、よく聞いて……………パパが……………！」

「……………？ ママ」

「どうしたの、永夢？」

「パパってだれ？」

彼は、永夢は父との思い出をすべて失っていた。

……………だが、これは永夢にとって幸せなことだろう。

なぜなら、幼少期の子供ほど人が死んだときのショックは大きい。

バグスターウイルスに感染している永夢がもしも記憶を残しながらその事実を突きつけられていたら、彼は大きなショックで死んでいただろう。最悪であり、最高の奇跡が起こった。

「……………お前が求めるものはなんだ？」

「……………だれ？」

不意に、誰かが永夢に問うた。

それは、彼の中にいる、あの……………

ゼロ：蛮野と現夢

「墮ちたものだな。現夢」

自分の名前を呼ばれた現夢は周囲を見回すと、確認するように自分の体に指を向け、つぶやいた。

「ゲンム……それが、私の、名前……？」

「己すら見失ったか。いいさまだ。君は私の目の上のたん瘤だったからな」

かつての聖都大学科学科に、蛮野は先輩として、現夢は後輩として属していた。

初めは蛮野は現夢を駒のように使つてやろうと考えていたが、その目論見は大きく外れた。現夢は本物の天才だった。蛮野やクリムが丸一か月使つて考えぬいてようやくく思いつくような革新的なアイデアを現夢はもの数分で考え付いてしまった。

現夢は若くして地位も名誉も約束され、研究費用の融資の話は何とかこぎつけるために実業家たちに頭を下げる自分と、その自分を足蹴にした実業家がこぞつて頭を下げ、是非ともうちに投資させてくれ。いやいやせひうちに、と口々に現夢を担ぎ上げた。それほど恵まれているにもかかわらず、現夢はこういうのだ。

「大学と私個人で持っている研究所。それと親しい友人間の業者で今は十分です」

なぜ求める自分の許には来ないのに、求めてもいない方にすべての話がいくのか。

自分が10のことを覚えようとして5番目で止まっている間に、現夢は1000の事
のすべてを理解し、あまつさえそれまで存在しなかった新たな1001のことまで考え
ている。

自分がこの世界で一番偉いというのに。

なぜあんな平々凡々とした奴が担がれるのか、蛮野は全く理解できなかつた。

やがて蛮野は、自分の持つべきはずだったものを現夢に奪われたなどと言う訳の分か
らないことを考え始めた。現夢は現夢なりに、彼なりの努力の果てに得たものだとい
うのに……………

やがて時が経ち、クリームやその他のかつての研究者の仲間達から素晴らしい知らせが
入った。

それは、憎き現夢の急死。

蛮野は狂喜した。ようやく自分の時代が来た。と。

だがそれも長くは続かなかつた。あまりの蛮野の身勝手さにクリームは徐々に愛想を
つかし、最終的にはすべての計画は破綻。蛮野自身も彼の息子に破壊された……………

だが、彼は最後の切り札をまだ切つてはいなかつた。

自身のラボに自分のバックアップのデータを用意しており、彼はまた蘇つた。

しばらくの間蛮野は生きた心地のない日々を過ごしていた。

敵に見つかり、倒されること。それを彼は恐れていた。その時の蛮野はゴールドドライブの力を得ていたが、もうシグマサーキュラーもない。戦ったところで負けることは目に見えていた。

町中の監視カメラをチェックし、自分のアジトに警察が乗り込まないことを願いながら震える日々。蛮野のプライドは完全に踏みにじられていた。

だがある日、彼はカメラの映像の一部で妙なものを見つけた。

町の裏路地をさまよったり、森の中をふらついたりする妙な男。

そして何より、その顔。忘れもしない。まさにあれは死んだはずの現夢。

蛮野は現夢に会うことを決めた。もしかすると、と言う期待もあった。

そして、その期待が裏切られることはなかった。

蛮野が予想したとおり、現夢はすべての記憶を失っていた。

「私とともにきたまえ。寝床と食事を与えてやろう。代わりに君の頭脳をよこせ」

「う……………あ……………あり……………がとう……………ありが……………ごこざいます……………」

無様に蛮野の傍により、頭を下げる現夢。彼の歪んだ嫉妬心が満たされていく。

「……………ウヒ、ヒヤハハハハハハハハ!!!」

蛮野の後ろを歩くのは、かつて彼が決して超えられなかった者。

だが、今の現夢は空っぽ。

記憶も、地位もすべて失い、社会の常識も忘れたまさに蛮野の理想の駒であり、ロボツト。

この後、現夢は蛮野の許で大いに働き、

やがて世界を滅ぼしかねない超兵器を作るに至る……

隠話：愛してるよエリ ～どこにしようとも～

あれから数か月。現夢は蛮野の下で兵器の開発に精進していた。

記憶をなくした彼にとって、あの日に彼に手を差し伸べてくれた蛮野は親も同然だと思っていた。見ず知らずの自分を救ってくれたばかりか、その恩人の研究の手伝いができると聞き、彼はおのれのすべてを投じて作業に身を削った。

外の世界に彼が出ることはあまりなかった。外出する必要がないからだ。

ある日、彼は作業中に蛮野に呼び出された。

「どうだ？　素晴らしいだろう!!　このまま実験の戦闘データが収集できれば、世界最強の力が手に入るぞ！」

外の場所を撮っているモニターを除いている蛮野とともに、彼もそのモニターを覗いてみた。映像の中には二体の何かが戦っており、そのうちの片方には見覚えがあった。彼が作ったラスボスバグスターのうちの一体。確か名前はディーノだったはずだ。なるほど、自分が処理していた戦闘データはこいつらが戦っていたデータかと彼は納得した。

「ええ、おめでとうございます……ですが、このままでは少々まずいかもしれ

ませんね」

出過ぎたこととは思ったが、このままでは蛮野が困るだろうと思い、口をあえて濁した。

「ん？ 何が言いたい？」

「ブレイブとディーノの力が等しすぎます。このままでは決着がまずい方向になってしまいう気が……いえ、すみません、口が過ぎました」

だが、これは事実だ。恐らく、見たところこのまま戦い続ければ相打ちになる。

「なになに、気にするな。お前は私の大切な右腕だからなあ……確かにお前の言っていることも念頭に入れたほうがよさそうだ……」

「それでしたら、一応スイッチの用意を……」

念のため、ディーノの体に埋め込まれている爆弾を作動させるスイッチを取り出したが、蛮野に手で制された。

「いや、それはいい。いったんもう少し戦いを見てみよう。意外なところで差が出るかもしれない。これもデータの一つだ……」

自分としてはそれはないと思います。と言いかけて口をつぐむ。この人は少し短気なところがある。言うとまずい。

「流石です。ではこのままもう少し見てみましょう。私は引き続き、この二人の戦闘

データの数値化を進めます」

「ああ、分かった……」

そこから数分後、結局私の想像通りに事は運び、両方が死んだ。

蛮野の指示通りにヴァグヴァイザーIIを起動し、時間を少し戻した。こちらで用意したガシヤットギアデュアルβを手に取り、現場へ向かった。ガシヤットに線を引き、たしか……ブレイブと言ったか。そのブレイブにガシヤットを投げ、すぐにその場を離れた。

その時は、そのまままで済んだ。だが、この後に私にとって予想外のことが起きた。

蛮野が別にやるべきことがあるといわれ、私はモニターを観察していた。画面の中で、自分の作ったハイパー無敵ソルティと金色のギザギザが目立つ、エグ何とかが争っている。これで計画は最終段階。

自分に返せる恩人への例はここまでーと思っている間に、決着がついた。結果はエグ何とかの敗退。手際よくハイパー無敵ソルティの時限爆弾のスイッチを入れた瞬間、同時に画面の中でエグ何とかの変身が解け、人間の姿になった。

「……………永夢？」

それは口について出た。永夢とはなんだ？ モニターに映っているこの少年の名だというのか？

「君は……………永夢。……………私は、現夢……………」

モニターの画面をなぞり、つぶやいた。その瞬間、全ての記憶が私の中で大きな花火となり、爆発し、体を、脳を駆け巡った。

「……………永夢!!!」

この少年は、私の息子だ！ すっかり大人になつてはいるが、面影がある！

「……………わ、私は……………」

そして、私は気づいた。これまで自分が作ってきたものが何に使われるのか、恩人と思っていた存在は、狂った科学者だということ。

私は自分用にと作っていた変身道具の一切を持ち出し、研究所から飛び出た。怖かった。

あの研究所にひしめく超兵器のすべてを、自分が作ったという事実が。がむしやらに走り、近くの茂みに飛び込んだ。

暫くすると、ふいに長らくあつていない最愛の妻、エリのことがかかった。あの歳では、きつともう永夢は独り立ちしただろう。あの家で一人のはずだ。

私は走った。

彼女が待つ家へ。

そして、辿り着いた。

あの家に……エリはいた。

窓からのぞくと、エリは食事をしていた。一人で。テーブルの上に置いているのは、私の遺影。それを目の前に置き、昼食を食べている。

10年以上も離れていたんだ。恐らく私はもう死んだ人間となっているんだろう。警察が行方不明者として現場近くを探してきえいれば、すぐに見つかつたろうに。

エリを抱きしめたい衝動にかられた。玄関なんかに戻り込まず、このまま窓を破つて彼女に触れたい。「ごめんね」と、「愛してる」そして「ただいま」と言いたい。

私は窓に手を伸ばし……そのまま手を下ろした。

いま彼女と会えば、分かれるのが惜しくなってしまう。だが、蛮野は私を必ず見つけるだろう。そうなれば……彼女の身にも危険が及ぶ。そんなことはできない。

窓から離れ、家を背にして歩き出す。

蛮野の計画通りに行けば、世界が終わってしまう。

だが、そんなことは絶対にさせない。

「エリ……君は、私が守る。例え死んだ後でも……」

私がどこにいても、君がどこにしようとも……」

私は変身し、拳を強く握った。必ず、未来を守る……！私と、永夢で！

私の名前は、宝生エリ。今日も夫の写真と一緒に食事をしている。

永夢も独り立ちし、この家で私は一人暮らし。自分一人にはあまりに広すぎる。

「はあ、この家を引き払って、アパート暮らしも悪くないかも……ん？」

ふと窓を見ると、妙な錆色の着ぐるみ？ 鎧？ のようなものが背を向けて歩いていった。

「……………あれは……………コスプレ？」

妙なものを見たその瞬間から、なぜか私は家を引き払うことを考えるのを辞めた。

創世神VS破壊神

「……………！ 皆！ いったん止まれ！」

ゲートをくぐつてみて、何か違和感に襲われた。……………ここは、何か、違う……………
「どうしたの？ あなた」

アリアが不思議そうに尋ねてきた。楽しい旅行のはずなのに、急に夫が険しい表情になったらそりゃあ不安だろう。

「ああ……………えっと、しばらく帰っていなかったからね、すまない、皆少し待っていてくれ。私が先に言つて様子を見てくるよ」

とつきに付いたその場しのぎの言葉。アリアは不服そうにしながらもうなずいてくれた。

「仕方ないですね……………何かあれば、すぐ戻ってくることに！ いいですか!？」
「了解だ。みんな待っていてくれ」

私は一旦ゲートを閉じ、変身を解除した。

あたりを見回してみるが、特に大きく変わったところがあるとは思えない。

まあ、町や国と言うのは変化が大きいものではそうそうないが。

「少しあたりをうろついてみるか……」

.....

.....

.....

.....

.....

……やはり、目立った違いはない……が、1つだけ。大きな差がある。

「……人が……1人も……居ない？」

街を歩いてはや30分、飛行魔法を使って上空から街を見回しても人っ子1人いない。
い。

「……何があつた？ どうなって……ッ!? うお!？」

ビルの屋上で街を見下ろしていると、急に私のもとに火球が飛んできた。慌てて避けようとし、ビルからそのまま真つ逆さまにしたへ落ちた。

「何者だ!？」

「クロス……………クロス……………クロス!!!」

暗闇から飛び出たそれは、私を思いきり蹴り飛ばした。ガシャットを身に着けていないければ死んでいたかもしれない。

「ぐ……………!?! お前は……………あの時のビルド!？」

ハッキリと覚えている。ずいぶん昔の話だが、私は奴と戦ったことがある。赤と青が基調の仮面ライダー、ビルドだ。

「なぜ私を狙う! 人がいないのもお前の仕業か!？」

「……………」

「何とか言え!!! グレード【GOD】…変身!」

【HYPER CREATOR GOD X!!

HYPER CREATE OF ガシャット! ガツチャーン!!!

レベルアップ∞!!!

創世の騎士よ! 照らせ! 太陽の如く!! 最強の創世ゲーマー!!!

HYPER 無限!!! 幻夢!!!

「ウオオオオオオ!!! スクラップアウト!」

【エボルト! パンドラボックス! Ban 禁じられた両者 mat ch!

終焉を呼ぶ破壊神……エボルト・パンドラボックス！ Oh！ No！！

ビルドの体から煙が噴き出し、煙が晴れたとき、そこに立っていたのはもはや怪人。仮面ライダーらしさが完全に消え去った、どことなく赤いコブラに似た姿のエイリアンとなった。面影は全くなく、せいぜい腰に巻かれているベルトだけだろう。

「ビルド……お前は一体……？」

2年前のあの日、パンデミックが起きた時に私は感染した人々をウイルスごと始末するつもりだった。

「やめろ」

そんな時に彼に出会った。

「悪いライダーだねえ」

訳も分からずに戦ったが、私はコテンパンにされた。あれは……確か「ゴリラ・ダイアモンド」だったっけな。今となっては懐かしい話だ。

「な、何者だ!？」

「ビルド。作る、形成するって意味のビルドだ」

あの日に見た彼の姿は、輝いていたように思う。優しく、力強く……

「……………何があったビルド？」

「コロスウウウウウ!!!」

「……………ツチー！」

どうやら話を通じないようだ。

「恨みはないが……………御免！」

今回は手加減の必要性を感じない。問答無用で意識を刈り取れるよう、本気の拳を叩き込んだ。

「……………ガアアアアアアアアアア!!！」

「なにっ!？」

大きく怯んだものの、速攻で体勢を立て直して組み付かれた。動きを封じられ、そのまま諸に頭突きを額に叩き込まれた。

「ぐあッ……………テレポート！」

瞬間移動魔法を発動し、拘束から一瞬で外れた。近くのビルの裏に着地し、一息つくうとしたが……………

「クロスクロスクロス!!!!」

ビルを丸ごとブチ破り、轟音とともにビルドが突っ込んできた。

「うお!? おまつ、無茶苦茶するな!!！」

掴みかかろうとするビルドを巴投げの要領で弾き飛ばし、宙へ飛んだ。ここまでの強敵は初めてだ。異世界でかつて戦った「ハイパー無敵ゲムデウスクロノスX」よりも確

実に20……いや50倍は強力だ。

あの時は勝負にもならなかったが、あいつの場合は完全に互角。むしろ組合ではこっちに分が悪いくらいだ。

「アアアアアアアアアアアア!!!」

ビルドが天に手を向け、何かをやったようだ。視線を追ってみると……

「なっ……っ、月を……っ……!」

ブラックホールだろうか、闇の塊が月を飲み込んでいく。

「ゴアアアアアアアア!!!」

月が完全に闇に飲み込まれた瞬間、ビルドの腕に黒い爪が生えた。

振り上げたその双腕を避けられず、爪が体に食い込んだ。

「ぐあああ!!」

無敵なのに、激痛。妙な理不尽さをかみしめながら、私はよもやと考えた。

(全ての者を飲み込み、強くなる……!! まさか、こいつがこの世界の人間を!?)

「くっ………貴様!」

考えた最悪の答えは、もはやそうとしか思えずに。

「………おい」

ここ一年、優しい妻たちと可愛い息子に囲まれ、怒るところか不機嫌になったことす

らなかつた。そんな自分が……いま、キレた。

「私はこのフォームで本気になったことは未だない。だが……お前には見せてやる！」

「物体」クリエイト！ 「事象」創生。「対象」月、そして白亜ビル！」

崩壊していたビルとブラックホールに飲み込まれていた月が一瞬で元に戻った。我ながらチートにもほどがあると自分自身で少し引いた。

「コロスコロスコロス!!!」

「喚くなゴミが……!」「空間」クリエイト…「事象」状態変化。「対象」空間」

「……!!!」

奴が何か叫んでいるようだが全く聞こえない。空気を部分的に除去し、真空にしたからだ。空気の振動がなければ、音は生まれない。誰でも知っていることだ。

「……グアアアアア!!!」

解除すると同時に、こっちへビルドが突っ込んできた。だが、その体が空中で停止する。

「グオオオオ!?!」

「……ああ、言い忘れたが私の創世能力は別にいちいち発言する必要性はない。まあ口に出した方が物を作るときにイメージしやすいが……要は私の「発動するぞ」と言う意志の力だ」

空中で止まったビルド。これも私の能力だ。

物は何でも小さく圧縮できる。新聞紙叱り着物叱り。

だが、どんなものでも小さくすることにいつか限界が来るものだ。

膨らませれば風船が割れるように。潰したポテトチップスの袋が割れるように。

圧縮には限界値が必ずある。それを超えて物をつぶすことは不可能。

風船が割れるのは中に閉じ込められている空気が風船の中でより広範囲に広がるうとし、風船がその膨張に耐え切れずに割れるのだ。今ビルドの体を、限界まで圧縮した空気が覆っている。それ以上の変化が不可能のため、奴はもう物理的に底から動くことは不可能だ。

「さあ、ビルド、お勉強の時間だ。問い1、大きさ約2メートルの隕石が落下した場合、クレーターのサイズは？ ……答えは君が身をもって知ってみようか」

ビルドを浮かせたまま中空へ放り投げ、そのまま弾丸のような速度で地面へたたきつけた。

「考え方としては隕石の直系の約20倍あるのが定説だが……君は丸じゃないしな。答えは32mだ。」

では第2問。人類の手によって生まれた最高の温度とは？」

「グ……………ゲ……………」

………という事は、ここは何者かが作った宇宙で、この地球は私が戦ったビルドの性能を調べるための場所だったということか。一体何者が？

「あなたは、どうやら出る宇宙をお間違えになったようだ。ここはあなたにとつてパラレルの場所であり、私が生きる世界に貴方はいません。お戻りになったほうがよろしいですよ」

「あ、ああ………しかし凄いな。宇宙ごと作るとは………」

「貴方も素晴らしい力をお持ちですよ。まさかビルドを此処まで一方的に倒すとは」

手放してほめてくるが、このシルバーカブトと言うライダー、底が読めない。恐らくこいつはもつと………

「私はビルドを回収したことを大首領様に報告します。貴方はどうしますか？」

「………一つだけ答えてくれ。このビルド、元は正義感溢れる男だったはずだ………なぜこうなった？」

「………彼は力を求めて、その力は身の丈を超えていた。結果、彼は暴走した。それがすべてです」

………ならまあいいだろう。これで悪の組織がどうのこうのと言っていたら、本気で目の前のこいつと戦う羽目になっていたかもしれない。

「私は帰るとするよ。ここは本来私が帰ろうとしていた場所ではなかったようだ」

私は軽く会釈し、異界へのゲートを開いた。
永夢に合うのには、まだ時間がかかりそうだ………

第15話：彼の提案

CRに緊急通報が入ったと思えば、出てみれば相手はゲナムⅡだった。

「今日の12時、君の「戦える」仲間をCRに集めておいてくれ」

と言う指示をされ、僕は飛彩さんや大我さん、貴利矢さんたちに声をかけておいた。指定の時間が近づいてくると、泊さんもゲナムⅡに指示されたらしい。

そして、その日の12時ジャスト、前と同じように通気口からゲナムⅡが出てきた。「急に呼び出してしまつて申し訳ない。そこは平にご容赦願いたい。」

今回集まつてもらつたのは他でもない、蛮野を倒すためだ。そのためにはまず、強力な力が必要だ。だからこそ、永夢が選んだ人材なら誰でもいいと思つていたが……」

「……………メンバーに何か不服が？」

「ここにいる人は皆、僕の助けになつてくれた人ばかりだ。力不足のはずはないと思つただけ……」

「先ずはポツピーピポパポ、君はここで待機だ。レベル10ではどう考えても死ぬ。いいね？」

それと……………花家君、君も居残りだ。ハッキリ言うが、経験値でどうこうなるもので

はない、レベルの低い君もここで待機だ。当然、西馬君、それとエリーゼも残ってもら
う。

出撃メンバーの前衛は私、永夢、泊君、鏡君の4人。後衛は九条君、グラフィイト、檀
の2人だ。以上」

「てめえ！」

「喚くな、花家大我。もう一度言うぞ。君は弱い。戦いを挑んだところで、最近は負けが
込んでいたのではないか？ 仲間と群れてしか勝てん奴は足を引っ張るだけだ。実力
がない時点で君は不合格だ」

「ふざけんな！ お前だってゲンムが使ってたレベル2のガシャットじゃねえか！」

大我さんが叫んだ時に思い出した。この場で1番レベルが低いのは、確かにゲンムII
だ。

「……………確かにこのガシャットはレベル2だ。だが、私が使用するドライバーは特別製
でね。ガシャットの性能を極限まで底上げすることができるのさ」

………。そ、そうか！ だからゲンムIIはあの時レベル差が大きい敵に勝てたんだ！

「す、すごい……………！ 一体、どれくらいレベルになるんですか？」

「このガシャットの場合……………私が変身した時のレベルは……………4だ」

「……………」

その時の、皆が共通で思ったことは、多分、（大したこと無い!!）だと思う。

「……………って、結局俺より低レベルじゃねえか！」

愕然とした表情で固まっていた大我さんが正気に戻ると同時に叫んだ。僕も大我さんの発言に同意だ。この人が一番死に近い気がする。

「だが、君と私では決定的に差があるのだよ。私はレベルにいくら差があろうとも知識や技術でその差を無き者にできる。だが君はそのままレベル差で押し切られるのには目に見えている。

レベルは君が上だが、ただそれだけだ。君では全体をむしろ不利にしかねん」

ついに大我さんが切れ、無言でゲンムⅡの前に立った。横顔からもうわかる。これはマジな奴だ。大我さんがニコちゃんのために怒った時もあつたけど、今回はレベルが違う。

「いい加減にしろてめえ……………人をバカにしやがって」

「馬鹿になどしてはいないさ。一般人に「危険だから戦うな」と言うのは問題発言かね？」

ゲンムⅡ、気づけよ……………今この雰囲気最悪だぞ。黎斗さんなんか何かを察して自分からドレミファビートのの中に逃げ込んだんじやつたし。

「……………上等だぜ……………俺に勝てたらな！」

「ガシャット！ガツチャーン！デュアルアップ！」

スクランブルだ！出撃発進！バンバンシミュレーションズ！発進！
………最悪だ。味方同士で争ってる場合じゃないのに！

そう遠くない未来で

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀と滑った 後
 ろの正面だあれ？

「ただいま」

「お帰りなさい」

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀が滑った 後
 ろの正面だあれ？

玄関を開けると、いつもの通りに息子と妻が迎えてくれた。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に つるつる滑った 鍋
 の鍋の底抜け 底抜いてたもれ

.....

.....

.....

.....

.....

かごめかごめ 籠の中の鳥は いつもかつもお鳴きやある 八日の晩に 鶴と亀が滑ったとき、 ひと山 ふた山 み山 越えて ヤイトを すえて やれ 熱つ や
 「そういうえば永夢は仕事はどうだ？」

「うん、皆いい人たちばかりだし、やりがいもあるよ」

籠目籠目 加護の中の鳥居は いついつ出会う 夜明けの番人 つるつと壁が滑った
 後ろの少年だあれ？

永夢は私の自慢の息子だ。いつの間にかゲームだらけの生活になっていた時は頭を抱えたが、今では研修期間を終えた小児科医だ。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出会う 夜明けの番人 鶴と亀が滑った 後ろの少年だあれ？

「どうだ？ 職場にはかわいい子はいるか？」

「ちよ、やめてよ父さん！」

「あら、私も気になるわ」

「母さんまで……………」

恥ずかしそうに永夢が頬を書いた。これは何かあるな……………！

「それで……………」

「う……………ええと、気になってる子が一人……………」

ゲームか勉強が友人になりかけていた息子からの春の訪れを知らせる一言。
自然と私とエリの口角が上がった。

「どんな子なんだ？」

「うん……………とつても元気で、優しい子だよ」

へえ……………一度会つてみたいな。どんな子なんだろう。

「それで、その子の名前は？」

「名前は……………」

通りゃんせ 通りゃんせ ここはどこか 細通じや天神さまの 細道じや ちつと通して 下しゃんせ 御用のないもの 通しやせぬ

幸せな、家族の会話。私があの日事故にさえ会わなければ、あの幸せは今も続いているだろうか？

この子の8つのお祝いに お札を納めに まいります 行きはよいよい 帰りはこわい こわいながらも通りゃんせ 通りゃんせ

私は今、宙に浮いている。

眼下には首がもげ、少し黒く焦げた自分の体。

私の首はちぎられ、彼の手の中に私の頭が収まっている。

—— ポリッバキッ ——

彼は私の頭を口に寄せ、私の頭を咀嚼した。

——意識が遠のいていく。

「お父さん！ お父さん!!!」

目の前のモニターには、私の最期を見ながら滂沱の涙を流す永夢の姿があった。

——そんなに泣くな。永夢。私にそこまでの価値はない。

さようなら。永夢。母さんのことを……頼む……

意識を失う直前、永夢は私の首を引きちぎり、私を食べている彼の名前を憎々し気に吐いた。

「……………パラド……………!!!」

ありえた可能性のセカイ

「まあ待て、せっかく来たんだ。そんなに急ぐことはないだろう？ ゆっくりして行け」
ゲートをくぐろうとした直後、なぜか私は見知らぬ部屋にいた。

当たりを見回すと、薄暗い部屋の奥の大きな椅子に偉そうに座っている怪人が私に語りかけた。

「……！ 大首領様！」

いつの間にか同じ場所に転移していたシルバーカブトが驚きの声をあげた。

……！ こいつが大首領!?

「よう、「トウルージェム」会うのは初めてだな」

親し気に語りかけ、来やすそうに肩に手を置いてくる。………？ こいつ、全く強く

見えん………？

シルバーカブトやビルドは姿を見たり接近してみてもその戦力を大体悟ったりするが………歩き方、気配………どれをとつても弱そうだ。とてもシルバーカブトが下に付くような存在とは思えん。

「友好の証だ。握手しても？」

「あ？ ああ……………」

特に断る理由もなく、考えなしに差し出された手を握る。その直後

「ところで……………力に自信はあるかい？」

「何……！ツ！！？」

握った拳を握りしめられ、そのまま私は倒された。なんとという剛力だ！

「ぐ……………！ くそ……………！！」

どれだけ力を込めても、返すどころかピクリとも動けない。

「どうした？ そんな程度か？」

どこか落胆したような声色。急に喧嘩を売ってきてそれとは……………いい度胸だ！

「なめ……………るなよ！！」

「ん？ ……！ おお？」

私のガシヤットの能力。「基礎能力自動上昇」は1秒間に10%ずつ私のすべての性を引き上げることができる。組み伏せられてから10秒……………攻撃力も、耐久力も、俊敏性も倍。

「おおおお？ なるほど、時間を置けば置くほど強くなるのか。フフ……………いいぞ！

もつと強くなって見せろ！ もつと強くなって、もつと俺を楽しませろ！」

「上等……………！」

そう言い合っている間にも私の能力値は上がっていく。大首領をはねのけ、今度はこつちが相手を壁に叩き込んだ。

「せい!!」

相手が体勢を立て直すよりも先に間合いを詰め、拳の雨を降らせる。渾身の拳を何度もたたきつけ、少し「死んだか?」とも思った。だが……

「いいぞーもつと来い!!」

向こうも殴り返してくる。なんとという強さだ! ボディブローを叩き込まれ、私の体が大きく傾く。

「いやっはあー!」

うめきながら顔をあげたのと同時に左フックが入り、吹き飛ばされた。

「まだ終わりじゃないだろう!?………ん?おい?」

私は、その場に倒れてピクリとも動かない………いや、動けない。今のでライダーゲージが………ほぼゼロに………し、死ぬ………

「………! やば、力加減間違えた………! おーい、大丈夫か?」

………
………
………

……

……

「大丈夫だ。全快した」

このガシヤットの二つ目の能力。「体力リセット」30秒に一度、体力をゲージの最大値へ戻す能力だ。何とか間に合ってよかった。

ああ体が軽い。この能力が合って本当に良かった。疲労もなくなるから日常的に使いたくなる。

「……………凄いな！ 気に入ったぞお前！」

「よく言うな……………全力で手を尽くしても、まだ手加減されている」

さっきまでの迫力はどこへやら。また最初のザコそうな雰囲気に戻っている。

「さあ、満足したなら行っていいか？」

正直疲労は取れても精神疲労は治らない。ササっと帰ってアリアの太ももで昼寝したい。

「まあ待て。褒美をやるう。来い」

「いや……………私は……………おい！」

断ろうとしたが、否応なしにワープされた。気が付くと私は暗い部屋の中にいた。部屋の中には星の数……………いやそれ以上の黒いビー玉のようなものが浮かんでいる。

「……………で？　これのどこが褒美なんだ？」

「クク……………触ってみろ。どれでも一つな」

と、言われても何が何だか分からない。私は適当に近くに合ったものを手に取った。

「……………ッ！！！！」

【STANDING BY……………COMPLETE】

【EXCEED CHARGE】

「木場アアアア！！！」

「乾イイイイ！！！」

「……………これは……………宇宙？」

「クク……………それは、分岐した宇宙の一つ。俗にいう「ありえた可能性の世界」だ」

確かに見えた。一瞬だったが、仮面ライダーに変身して戦う赤い身体に銃を持ったライダーと黒い体に金の線を持ち、金の剣を振るう仮面ライダーが。

「この二人は、どうして戦っているんだ？」

「赤い方は仮面ライダーファイブ乾巧。片方はオーガの木場勇治だ。人間を信じ続けた怪物と見捨てた怪物の決闘だ。その世界には人間はもうほとんどいない。」

人間の進化系、「オルフェノク」に変異している。それも俺が作った分岐した世界の一つだ。

オルフェノクに変異する確率が大きくなっていった場合を仮定した世界。

結果は御覧の通りだ。なかなか面白い。その世界を俺は「パラダイスロスト」と名づけている。なかなか面白いぞ」

「なら……………この部屋の球体はすべて……………」

信じられない。平行世界の知識は多少はあつたが、まさかこんなにも……………！

「……………ということとは、私の世界も？」

「ああ、基本的に仮面ライダー程度を持った人間一人に対して平均2万通り以上パラレル世界は存在する。今度はこつちを見て見ろ」

「む……………」

「融合！ アイゴー！ ヒアウィーゴー！」

【フュージョンライズ！】

ウルトラマン！ウルトラマンベリアル！ウルトラマンジード！プリミティブ！

「これは……………」

ふと出た疑問。いくつも平行世界があるのなら、あるいはと思った。

「……………お前は珍しく、約10億通り以上の分岐がある。」

だが……………お前一人だけだ。他の奴らは、さっき見たように畜生ばかりだ」

「……………そうか」

こういう風な考えは、自分一人だけか……………

「さて、ここからが本当の褒美だ。お前にお前が帰ろうとしている世界への行き方を教えてやる」

「何……………いいのか？」

「ああ。ワープゲートを意識せずに、自分が生きたいところの特徴や思い出を思い浮かべればいい。お前のその力はお前のイメージに依存するからな。出来ると見え。それが「心意」と言う力になる」

「……………ああ。やってみる。」「ゲート」クリエイト…「事象」異界転移。「対象」目の前約2メートル」

目の前に窮状のゲートが現れた。すぐに予感する。ここが自分の帰るべき場所だと。

まあ、ゲートはすぐに閉じたが。

「どうした？ 行かんのか？」

「ああ。先に家族を呼んでくる……………それじゃ」

「おう。なかなかお前は面白かったぞ。気が向いたらまた来い」
私はアリアや皆を呼ぶため、またゲートを開いてくぐった。

第16話：ゲムムVSスナイプ

「……………いいだろう。だが君が私に負ければ、後の文句は受け付けられない。それでいいね？」

先に参ったと祝えた方が勝ち。でいこうか」

「何でもいいからかかってこい！」

【STAGE SELECT!】

大我さんがゲームフィールドを広げ、戦闘が始まった。

「おおら!!」

ゲムムⅡは大我さんに近づこうとするけど、大我さんは弾幕を張って寄せ付けない。

「チツ……………」

ゲムムⅡは岩の裏に回って息をひそめた。完全に動きを封じた大我さんは、今度は一転して岩に距離を詰めた。岩ごとゲムムⅡを吹き飛ばすつもりなのだろう。

「くら……………え?」

いつの間にかゲムムⅡは消えていた。岩に近づいていた大我さんは呆然と立ち止まる。

「何!？」

真後ろから大我さんが殴られた。ゲームⅡはいつの間に後ろに回ったんだ!?

「地面に穴を掘って裏に回ったのだ。気づかなかったかい?」

大我さんが後ろに振り向くが、ゲームⅡもそれに合わせてぴったり後ろに張り付いている。何だか子供の遊びみたいに見える。

「ところで花家君、子供でも知っていて、力を込める必要性がゼロの相手をダウンさせる方法、知っているかね?」

「ああ!? 何言ってるやが……うお!?!」

大我さんがあつさり前に転んだ。一体何をしたんだ? 早すぎて手の動きが全然見えなかった!

「答えは「膝カックン」だ。便利だから覚えておきたまえ」

あ………足ね。見てなかった。

「さあ、立ちたまえ」

大我さんは跳ね起きようとしたけど顔を思い切り踏んず蹴られた。

「ああ、言い方が悪かったな。すまない。言い直そう。立てるものなら立ってこい………」

「……………くそが!!」

大我さんは横に回転してゲムⅡに向かって砲口を向けた。

【BANG BANG CRITICAL FIRE!!】

「食らえ……………!!」

よく見ると、いつの間に出したのか、大我さんの砲台の筒の部分にいつの間にかガシャコンスパローが刺さっている。あのまま撃つたら……………!!

「ぎゃあああ!!」

映画なんかで銃に詰め物がしてあり、銃身が爆発するところを見たことはあるだろうか？ まさにあの通り、大我さんの両腕の主砲が大爆発を起こした。

「……………さあ、もはやこれで君はもう何もできない。両腕は機能を果たさず、メインの武器も使用不能。他の武器を使おうにも君は銃が主体。逆転はない」

ついに大我さんの変身が解けた。前から察してはいたけど……………本当に強い。

「さて……………「参った」と言わせねば終わらないのだったな」

そう言つてゲムⅡは大我さんの首を掴み、無理やり立たせておなかを蹴った。

「どうした？ 口もきけないか？」

今度はゲムⅡは大我さんの肩をつかんだ。ゲムⅡの指がめり込んでいく……………

「も、もうやめて!!」

たまりかねたポッピーが叫んだけど、無視してる。

——バキッ——

「ぐあつ……!!!」

……お、折った……!!

「安心しろ。手ひどく肩を外したただけだ。花家君、——」

「……うるせえ。参った……」

大我さんはそのまま気絶し、ゲンムIIは大我さんを僕に預けた。

「やはり大して強くはないが……立派な男だな」

……僕は、この人が怖い。優しく諭すようなときもあれば、鬼のように容赦がないときもある。そして、何も話してくれないときも……

「花家君、すまない。だが、君の体は君だけのものではない。後ろにいる君を愛してくれている二人のためにももう少し慎重になれ。安心してくれ。蛮野は私が必ず倒す」

「……うるせえ。参った……」

花家君はそう言つて気絶した。ふむ、すっかり納得できれば退くか。しかし……照れるあたり、まだどちらにするかは決めていないようだな。今後が楽しみだ……

花家君、君は君を大切にしてくれる人をしっかりと大切にしてくれ。

……それは、私ができなかったことだから。

死別の後に：失われた Bonds

かごめかごめ 籠の中の鳥は じっくり出やる 夜明けの晩に 鶴と亀と滑った 後
 ろの正面だあれ？

パラドクス視点

かごめかごめ 籠の中の鳥は じっくり出やる 夜明けの晩に 鶴と亀が滑った 後
 ろの正面だあれ？

「……………パラド……………どうして……………」

かごめかごめ 籠の中の鳥は じっくり出やる 夜明けの晩に つるつる滑った 鍋
 の鍋の底抜け 底抜いてたもれ

「何が……………」「どうして」なんだ……………？ 永夢」

かごめかごめ 籠の中の鳥は いつもかつもお鳴きやある 八日の晩に 鶴と亀が
 滑ったとき、 ひと山 ふた山 み山 越えて ヤイトを すえて やれ 熱つ や

「どうして……………父さんを殺したんだ？」

籠目籠目 加護の中の鳥居は じっくり出会う 夜明けの番人 つるつと壁が滑った
 後ろの少女はだあれ？

「どうしてって言われてもな……………別に大した理由でもないし……………」

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出会う 夜明けの番人 鶴と亀が滑った 後ろの少女はだあれ？

「なんでだよ！パラド……………！ 僕は、お前が命の重大さを理解してくれたって、そう

思ってたのに……………！ 何であんなことしたんだ!？」

「……………あのなあ、永夢、お前がどれだけ人の命を重く見てるのかは知らないけど、俺はバグスターなんだよ。お前から人間の道徳や価値観を俺に求められても困るぞ」

「パラド……………僕は……………一生お前を許さないぞ……………！ 僕の命が続く限り、お前を呪ってやる……………！」

「黙れよ、宝生永夢。 結果的にお前の親見殺しにしたの、お前だろうが。自分が安全な場所から見学することしかできないんだったら、初めから黙ってる。

お前はいつもそうだな、永夢。本当の強さなんか持つてないくせに……………理想と口だけは達者で……………お前のゲームの力量だって、もとをただせば俺の技術だろうが。

お前自身、！本当は何も持つてないんだ。まともに戦えない奴が俺に指図するな！

「パラドオオ!!!」

「話は終わりだ。永夢。……………今更だが、お前とはもう一度一緒にやりたかった」

17話：彼の計画

「さあ、話の続きだ」

気絶した大我さんをポツピーに託したところでゲームⅡが一手をたたいて話した。

「蛮野を倒す計画だが、「奴のラボへ殴りこみ」と言う風に単純ではない。恐らく嚴重なセキュリティ：……簡単に言えばトラップがあるはずだ。それを解除………できれば最高だが、それだと時間がかかりすぎる。かと言って強引に破壊してしまうと警報が作動し、蛮野に逃げられる。それを突破できる人材が必要だ」

「そうか！　そこでこの神である」

「グラフィイト君、その役を君に任せたい」

………え!!　黎斗さんじゃないの？　恐らくみんな僕と同じことを思ったんだろう。

驚いている。

「おい！　ここは神である」

「グラフィイト君、君は究極的に言えば自立思考可能のコンピュータウイルスだ。

ならば、ネットワークに入り込むこともたやすいはず。君がよく使用していた瞬間移

動もこの手のものだ。　要は電波と同じだな」

「……………とは言っても、俺は別にお前と協力すると言った記憶はない。それに、俺は機械の事なんぞ分かんらん」

グラフィアイトは不機嫌そうに鼻を鳴らして顔をそむけた。彼もゲームⅡがパラドをどこかへ誘導したのは知ってるらしい。信用する気はなさそうだ。

「……………君が師と仰ぐ海帝も、結局は作られたものだった。彼が時間がたてばたつほど弱くなるように設定されていたのも、強く作りすぎたことへの対処だ。

君が勝てたのも、偶然ではなく必然的に遠隔操作で武器の状態を変更させられたからだ。本来はあの刀にあんな切れ味はない。……………自分の師がここまでコケにされて、まさか何もしないと発言うまいな？」

「……………いいだろう、乗った」

グラフィアイトは目を閉じ、了承した。気難しいグラフィアイトをその気にさせるとは、流石だな。

「ではこの話し合いが終わったら防衛セキュリティの破壊方法をレクチャーしよう。これでとりあえずはセキュリティ問題は解決だ。あとは準備と覚悟を整えるだけだ。突入は明日！ それまで各自の準備をしておいてくれ！」

ゲームⅡは満足げに一つ頷き、グラフィアイトと一緒に外へ出ていった。

「……………本当にあいつを信用する気が、永夢」

「僕は……………あなたと同じくらい彼を信用していませんよ、黎斗さん」
「……………そうか、なら……………いい」

黎斗さんは頷き、僕からドライバーとガシヤットをひったくった。

「あ、ちよー！」

「明日に備えて、メンテナンスだ。2時間後に取りに来てくれ」

黎斗さんはそれだけ言っただけで集中モードに入ってしまった。もう声をかけても無視だろう。

「あの……………すみません、泊さん、こんなことに巻き込んでしまって……………」
「いえ、良いんですよ……………蛮野には、俺も因縁があるんで……………」

「いよいよ、明日、僕たちは戦う。どこまでやれるかわからないけど……………命を賭けて、戦うだけだ。」

18話：計画の失敗

次の日の朝6時ごろ、僕たちは件の蛮野の研究所の前にいた。

「……………まずは最初の扉だ。頼むよグラフィイト君」

「……………ああ」

扉の電子ロックがかかっている場所にグラフィイトが滑り込み、10秒ほどで扉が開いた。

「よしいくぞ。少し遠回りだが、扉の少ない方の道を行こう」

ゲムムIIは右側を指さしながら慣れた風に行く。

「……………あ…また扉……………」

「よし、もう一度俺が……………」

「どけグラフィイトオ!!」

突然黎斗さんがグラフィイトを突き飛ばし、何処から出したのかアダプタと小型のP
Cを扉の横に差し込んだ。

—— WARNING! ——

—— DANGER! ——

——WARNING!——

「……この……大馬鹿者!!」

珍しく声を荒げたゲムⅡが黎斗さんを思い切り殴った。

「侵入者ヲ確認、排除ヲ開始。設定LEVEL1ヲ起動」

「な………LEVEL1? なんだか余裕そうだな………?」

貴利矢さんは引きつりながらも場を和ませようとしてくれるが、残念ながら効果はゼロだ。全員息をのんだままその場から動けない。

「全員固まれ!!一箇所に集まるんだ!!!」

動けなかった全員がその一言で動いた。互いに背中を合わせ、部屋の中心で円を描く。

「………何が来るかわかりますか?」

「………緑色のゴキブリ軍団………とだけ言っておこう」

床から大量のカプセルがせりあがり、ガラスが割れて煙とともにロイミュードが出てきた。

「………なんだ、強化体じゃないのか、なら普通に………」

泊さんは少し安心したみたいだけど、急に現れたロイミュード全てが緑の光に包まれた。

【ENTER THE GAME! LOADING THE END!】

天を掴めライダー……………刻めCHRONICLE……………今こそ時は 極まれり!】

「……………ハハツ…ウソ……………」

現れたのは、30はくだらない数のクロノス。

急に阿鼻叫喚だ。黎斗さんが出しゃばらなければこんなことには……………!

「気をつける! ヴァイザーがないからポーズや決め技は使えないが、それでも性能は
ゲームデウスクロノス以上だぞ!」

ゲムムIIが叫ぶと同時に、場にいた全部のクロノスが突っ込んできた。
僕の目の前のクロノスに体当たりをするけど、逆にこつちが押された。

「永夢! ダメージこそ与えられないが、力ではお前より上だぞ!」

一体でも手に余るのに、こんな大量には一度に捌けない……………!

「つくそ!!」

貴利矢さんも応戦するけど、向こうの方が力も数も勝ってる。

「グラフィイト君! 扉を開いてくれ! ……永夢! リーダーはここから君だ! 先に行け!
こいつらは私が倒す!」

「…! そんな! レベル4じゃ無理だ! 置いていけない!」

「……………永夢、君は私を信用していないのだろう? でも大丈夫。私は君を

……いや、お前を信じてる。信じて任せろとは言わない！押し付けて置いていけ！」
ゲムムⅡは必死にクロノス達を抑え込んでいる。そうこうしているうちに扉が開いた。

「エグゼイド！早く来い！」

「永夢！早く行け！……いいか!?!扉を抜けたら、右へ行け！そして階段を見つけれ！その向こうに蛮野はいる！」

グラフィイトに呼ばれ、僕は扉を潜り抜けた。……そして、僕がくぐるのと同時に扉が閉まった。

19話：闇の底へ

閉じた扉をしばらく見つめ、すぐに気持ちを切り替えた。先へ急がなくちや。

「行きましょう！ 右の道です！先に行けば階段が！」

全員走り出したと思っていたけど、一人いないみたいだ。…………黎斗さんか…………

「黎斗さん！速く！」

「……………なんかんやで奴の事を信用してるじゃないか、永夢」

黎斗さんに指摘され、僕は息をのんだ。そういえば、僕は黎斗さんに聞かれた時は「信用してない」と答えたはずなのに、いつの間にかあの人の言った通りに進もうとしていた。

「……………いやでも、それ以外じゃどっちに行けばいいかもわからないじゃないですか！」

「永夢！おかしいとは思わないか!?ゲームⅡがここまで中のセキュリティやこうずをしっているということは、どう考えても奴は蛮野の手先だろう！私は絶対信用しないぞ！」

黎斗さんはそう言っただけ動かない。妙なことになったな…………

「おい神！その「信用できない奴」の言う通りにしないでやらかしたのは誰だ!？」

貴利矢さんがさっきの黎斗さんの失敗を指摘した。

「…………… あ、あれは偶然だ！」

正論をたたきつけられ、黎斗さんがひるんだ後、とうとう子供のようなことを言い出した。

「とにかく！私はいつの思い通りにはいかんぞ！」

そう言つて黎斗さんは踵を返した……………つて、

「黎斗さん！そっちの道じゃありません！こつちですつて！」

向こう側へ黎斗さんがしばらく進むと、急にガタガタと妙な音がした。直後に床が開き、全員真つ逆さまに下に落ちた。

「アホ……………!!!」

貴利矢さんの絶叫は、そのまま闇へと消えていった……………

「う、うーん……………は！」

痛みはなかつたけど、気絶していたみたいだ。周りを見回すと、皆も気絶している。

「貴利矢さん！泊さん！飛彩さん！」

一人ひとりゆすると、全員無事に目が覚めた。

「登れそうにもありませんね……………おまけにこの壁、壊れないし」

「どうすることもできず、何度か壁を殴ったりジャンプを繰り返していると……………」

「な、なんだあ!!!」

貴利矢さんのいる方から驚きの声が上がリ、振り向いてみると、そこには巨大な鉄の塊のようなものが浮いていた床を見るとまたしても床が開いている。

「な、何だあれ!?!」

「……………! し、シグマサーキュラー……………!」

「——ワタシハ、Galactic Nova circular! 製作者デアル蛮野天十郎サマノ理想ヲ実現スルモノ……………抹殺対象デアル侵入者ヲ確認。排除シマス」

「永夢! 下からこいつが!」

突然の敵。僕は考えるよりも先に、相手にとびかかって……………

その体が、空中で静止した。

「な、何だこれ!?!」

「こ、これは……………超重加速……………? いや、完全に別次元の重みだ……………!」

なんと、そこにいた全員が止まってしまった。泊さんから聞いた話だと、超重加速は段階、レベルがあり、それに伴って敵の強さの目安にもなるらしい。重く、相手の動きを

より抑制する重加速を出せるということは、それだけ強敵ということだ。

かつてのシグマサーキュラーは、かろうじて動けるのが3人程度だったらしいのに、今回はゼロ。

「エグゼイドヲ至近距離ニ確認。1撃目テ変身ガ解除スル確率、50%」

サーキュラーから光弾が飛び出し、僕に命中した。なんとなく予想はしてたけど……案の定僕はダメージを負った。それも、大ダメージ。

「再び攻撃ヲ開始。2撃目テ変身ガ解除スル確率、90%」

再び光弾が僕に命中し、ついに僕の変身が解けた。

「エグゼイドニトドメヲ開始……ッ!」

急にサーキュラーから煙が上がり、重加速が消えた。

「ビ………!回路ニ………仕掛けガ………?重加速、発動………フノウ………」

「永夢!逃げるぞ!速く!」

貴利矢さんが僕を持ち上げ、サーキュラーが出てきた穴へ飛び込んだ。

「一か八かだ!行くぞ!」

皆も続いて逃げた。

………この穴の底には、一体………?

20話：モニター越しに……

しばらく落下が続き、僕たちは底にたどり着いた。

「ここは……モニタールーム？」

そこは、たくさんの画面が床にまでひしめく監視カメラのモニタールームだった。
「……全部見られていたのか……？」

「機器はどれも埃まみれだ。それはないだろう。かなり前の物が、いまだに動作を止めていないだけだ」

飛彩さんが言った言葉を、黎斗さんが否定した。興味深そうに周りを見回している。
「えつと……？」 永夢、これはなんだ？」

周りを歩いていて黎斗さんが、僕にノートを渡した。

「えつ？ えつと……！」

——『ETERNAL GLOBAL FREEZE計画について』——

「これは……蛮野の？」

「いや、下の名前だ」

「名前？……！！？」

——『宝生 現夢』——

そ、そんな……こんなこと……だって、確か、この人は……

「何見てんだ？ ……！」「宝生」ってまさか……！？」

「……僕の……父親と、同じ名前です……！」

……だけど、僕は自分の父親を覚えていない。小さい頃の事故で記憶が消えてしまったんだ。唯一僕が知っている父親の情報はお母さんから聞いた物ばかり。顔も思い出せない。

貴利矢さんも驚いて固まってる。

「じゃあ……俺らが今まで戦ってきた連中は全部……永夢の父ちゃんが作ってたっつうことか!？」

「小児科医! どういうことだ!？」

「説明しろエグゼイド!」

飛彩さんとグラフィイトに詰め寄せられた時、僕は急に激しい頭痛に襲われた。

「う……痛……！」

痛みに襲われ、その場にうずくまってしまった僕は、その時黎斗さんがつぶやいた一言を聞いていなかった。

「……永夢、君がうらやましいよ。君には愛してくれる父親がいるのだから

……」

「もう大丈夫です。すみません……」

「いや……すまん、お前に聞いてもわかるわけがないのに……気が動転した」
飛彩さんはそう言って頭を下げる僕に声をかけてくれた。

「永夢！モニターに映ったぞ！」

黎斗さんが急に叫び、画面に目を向けると、扉を開いたゲームⅡが出てきた最中だった。

「……！……！不味い！ゲームⅡは僕たちが罠にかかったことを知らない……！」

「おい神！なんかマイクはねえのか！放送をかけて止めねえと！」

「……！……！ダメだ。壊れている。我々がここにいることを伝えるすべは……無
い」

そう言って黎斗さんは操作盤のつまみを回した。途端にゲームⅡの足音が部屋に流

れ始めた。

「向こうの音は拾えるようだな……………」

ゲームⅡは二つに割れたガシャットギアデュアルをドライバーにさして、バンバンシミュレーションに変身していた。

「凄い……………レベル50であのクロノス達を倒すなんて……………」

「永夢、レベル50じゃないぞ。彼のドライバーはレベルを二乗するんだ。あれのレベルは2500だ」

なぜ黎斗さんが知っているんだろうと思いついてみようとしたけど、今は画面に集中したい。

ゲームⅡは階段を上り、『第一実験室』と書かれている部屋に入った。

「久しいなあ……………ゲームⅠ」

「……………永夢達はどこだ？」

ゲームⅡを出迎えたのは、蛮野だった。ゲームⅡは周りを見回すけど、当然僕たちが見つかるはずもない。

「残念だったなあ！お前の息子たちは私の罠にかかって地の底だ！」

……………？「お前の息子」……………？

「どうだ？悔しかろう!?宝生現夢!!!」

21話：密会

前日、某時刻・C R内部

永夢からドライバーとガシヤットを回収し、私はメンテナンスを行っていた。

音はちゃんと出るのか、ボタンの破損の確認、内部のコードや基盤の確認をしていた。

「精が出るな、黎斗君」

声をかけられて顔をあげると、偽ゲムが私の目の前に立っていた。

「……………何の用だ？」

「黎斗君、君に協力してもらいたいのだ」

偽ゲムはそう言って私の向かいの席に腰かけた。

「私がお前に協力すると思うか？」

「協力するさ。必ず君は」

自信満々に言い放ち、奴はガシヤットを抜いて変身を解いた。

「……………なぜ変身を解く？」

「人と話すときは目を合わせる。……………常識だ」

不可解すぎる。ならばC Rに来た時も、いつも変身を解けばいいだけの話だ。なぜそ

んなことをする？

「信用はできません。協力してほしいならば、私が疑問に思っていることに答え、納得させろ。そうすれば考えるだけ考えてはやる。……なぜ永夢に協力しようとする？」

「あの子は……私の息子だ」

「何……？」

息子……？永夢が、こいつの……？

「昔のもののだが、免許証だ。同じ顔だろう？」

差し出された免許証を見つめる。少し髪が伸び、白髪も目立つが……確かに同じ顔だ。

「……なぜ永夢に言わない？「自分が父親だ」と、そうすれば永夢はお前を絶対に信頼するはずだ」

「私はもう……世間的に死んでいる」

偽ゲナムは……いや、現夢は語った。自分がかつて事故にあったこと。記憶を失い、蛮野に仕えてしまったこと。全て手遅れになった時、記憶が戻ったこと。

「……確かに同情を禁じ得ないが……だからと言って、なぜ私を協力者に選んだんだ？」

「君にやつてもらおうことは、「全力でメンバーの足を引っ張る」ことだ。その役は君が適

任なんだ」

「……………急に馬鹿にしてくるな」

「むしろそれが強みだ。君はどこまで本気かわからなかったり、眉も心も少しも揺らさずに嘘をつけ、日常的に自分を隠して演技をしている。君以外にはいない」

「ここまで言われれば、流石に分かる。私はもう現夢に必ず協力するだろう。」

「道化を演じると……………それで、私の利益は？」

「……………無い。だが、今回君は初めて損得を考えない。何故なら……………」

私は永夢の父だからだ」

……………そうだな……………」

「永夢は、いい父親を持ったな。うらやましいな……………」

私には愛してくれる父はいなかった。なら……………せめて、息子を愛する男の手助けをしても、罰は当たらないだろう。」

「良いだろう……………乗った。無条件で協力しよう。それが、私の望みにも叶うはずだ」

「ありがとう、黎斗君。君に頼むのは、蛮野の研究所に入った時に私とその他のメンバーを引き離してもらいたい。それで……………私が蛮野を殺す」

「現夢……………あなたはまさか、蛮野と……………」

「任せてくれ。しっかりとケジメはつけるさ」

……私は、聞けなかった。「あなたはまさか、蛮野と刺し違えるつもりですか」と。

22話：あの時の誓いはいつでも

「さあどうした？いくらでも攻撃するがいい！その程度のレベルでは私は倒せないからな！」

「……………私は、無傷でお前を倒そうとなんてはなから思っちゃいない」

モニターの向こうに立つ父さんは、変身を解いた。画面に映ったその顔を見た時、僕は……………すべてを思い出した。暖かく、優しい……………自分の自慢の父親を。

「お……………お父さん……………！」

画面越しではあるけど、再開した。今までどうして忘れていたんだろう……………

あんなにいつも一緒だったのに……………

「蛮野……………お前も私も、決してやってはならないことをした。

罪なき者たちに不当な戦いの運命を背負わせ、その命をもてあそんだ……………

お前も、私も……………生きていてはいけないんだ……………！」

父さんは懐から真っ黒なガシヤットを取り出した。

「【LIMBO GRAHAM】ガシヤット……………蛮野、お前の処刑用に私が作ったものだ」

「ぐ、グラハム!?!」

「グラハムだと!?!」

蛮野と黎斗さん、両方が「グラハム」と言う言葉に驚き、大声をあげた。

「黎斗さん、グラハムって何です? どういう意味ですか?」

「……………グラハムとは、数学の証明で使われたことのある最大の巨数解だ。速い話、人類が近くしている中で最大の数字……………まさか、そんなレベルのガシヤットが……………」

黎斗さんは絶句している。

「……………永夢! ここから出るぞ! どこか……………どこかに出口は……………!?!」

黎斗さんはあたりを見回すけど、何処にも出られそうな場所はない。一体何を慌ててるんだ?」

「黎斗さん、どうしたんですか!?!」

「永夢! 君も知っているだろう!?! レベルが高いガシヤットには、それ相応の副作用が求められる。あんなレベルのガシヤットを使えば……………起動した瞬間、即死だ!」

「やめろ現夢! 気が狂ったのか!?!」

「狂ったさ……………蛮野天十郎、地獄の底まで引きずり込んでやる……………!」

父さんは、画面越しに僕を見た。優しい……………僕の記憶の中にある父さんと同じ、穏やかな笑顔だった……………

これ以外に方法がないことは知っていた。今の蛮野は、先のハイパー無敵ソルティのデータを流用していて、ムテキゲーマーにもダメージを与えられる。ギャラクティックⅡノヴァ・サーキュラーも同じだ。サーキュラーは彼なら倒せるだろうが、蛮野はそうはいかない。

ここで……私が蛮野を倒さなければならないんだ！

——健やかなるときも

「綺麗な眺めね……」

「いい時間に観覧車に乗れてよかった」

——病めるときも

「ごめんなさい……家事、全部やってもらっちゃって……」

「いいんだよ、ほら、おかゆ食べるかい？」

——喜びのときも

「永夢……いいかもね」

「君に似てきつとみんなから好かれる子になるよ」

—— 悲しみのときも、

「実験……………上手く行かなかったの？」

「ああ……………1からやり直すことになってしまったよ」

—— これを愛し、

—— これを敬い、

—— これを慰め、

—— これを助け、

—— その命ある限り、

—— 真心を尽くすことを……………いえ、

—— 命が尽きた後も……………愛し尽くすことを、誓います——

あの日に誓った誓いは、いつも覚えている。永夢、エリ……………愛しているよ。

私はゆっくりとガシヤットのスイッチを起動した。

ゲームエリアが広がり、エリア内の存在するものすべてが崩れていく。

—— 私の体も、光に包まれていく。

痛みを感じる暇もなく、私は「死」を受け入れた。

23話：喰べられた肉親

「父さん!!」

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀と滑った 後ろの正面だあれ?

モニター画面は砂嵐になりつつも、何とか持っている。瓦礫の間に、全身が真っ黒に焦げ、倒れ伏す父さんを僕はどうすることもできない。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀が滑った 後ろの正面だあれ?

そんな時に、急に壁が崩れた。より正確に言えば、壁が吹き飛んだ。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いつもかつもお鳴きやある 八日の晩に 鶴と亀が滑ったとき、ひと山 ふた山 み山 越えて ヤイトを すえて やれ 熱つ や

瓦礫の向こう側から人影が初めはおぼろげに、徐々に鮮明に表れた。

籠目籠目 加護の中の鳥居は いついつ出会う 夜明けの番人 つるつと壁が滑った 後ろの少女はだあれ?

「……………パラド?」

かごめかごめ 籠の中の鳥は じっくり出会う 夜明けの番人 鶴と亀が滑った 後ろの少女はだあれ？

パラドは、厳しい表情で歩を進めた。父さんの傍により、父さんを抱き上げるような体制になった。

通りやんせ 通りやんせここはどここの 細通じや天神さまの 細道じや ちつと通して 下しやんせ 御用のないもの 通しやせぬ

「パラド……………！父さんを……………」

頼む、と言おうとした瞬間、骨の折れる音と、何かを引きちぎれる音が響いた。

この子の9つの お祝いに お札を納めに まいります 行きはよいよい 帰りはこわい こわいながらも通りやんせ 通りやんせ

「え……………」

父さんは首を引きちぎられ、そのまま倒れ伏した。僕と同じように、その場にいた全員が息をのんだ。

「あ……………あああああああああ!!!!!!」

絶叫をあげながら、僕はがむしやらに暴れた。モニターに食って掛かったのか、手あたり次第に物を殴りつけたのか、よく覚えていない。

でも、1つだけ確かなことがある。それは……………

父さんは死んで、殺したのはパラドと言う事実のみ。

セカイシユウエンノキロク

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀と滑った 後
 ろの正面だあれ？

イマカラスコシミライノハナシ。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀が滑った 後
 ろの正面だあれ？

セカイノオワリガヤツテキタ。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に つるつる滑った 鍋
 の鍋の底抜け 底抜いてたもれ

ウチユウハチヂミ、

かごめかごめ 籠の中の鳥は いつもかつもお鳴きやある 八日の晩に 鶴と亀が
 滑ったとき、ひと山 ふた山 み山 越えて ヤイトを すえて やれ 熱つ や

テンハサケ、

籠目籠目 加護の中の鳥居は いついつ出会う 夜明けの番人 つるつと壁が滑った
 後ろの少女はだあれ？

タイヨウハツブレタ。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出会う 夜明けの番人 鶴と亀が滑った 後ろの少女はだあれ？

レキシヨイロドルスベテノライダーガタチアガツタケレド、

通りゃんせ 通りゃんせここはどこか 細道じや天神さまの 細道じや ちつと通して 下しやんせ 御用のないもの 通しやせぬ

キオクノマエニイツシユンデケサレテシマツタ。

この子の9つのお祝いに お札を納めに まいります 行きはよいよい 帰りはこわい こわいながらも通りゃんせ 通りゃんせ

セカイノスベテカラヒカリトキボウガキエタソノバン、

フタタビサンニンノカメンライダーガタチアガル。

ヒトリハチカイヲセオツテ、

ヒトリハアイニジュンジテ、

ヒトリハユウジョウニイキテ、

セカイヲスクウカモシレナイハナシ。

オワリハミツツ。

ドレデオワルカ、

マダミチハキマツテイナイ。

24話：記憶を求めて

現夢に閉じ込められた直後。パラド視点

狭い研究所の中で俺はしばらく考え事をしていた。

「扉は外からしか開けられない……窓もなし、瞬間移動も発動不可、か……」

状況は最悪だけど、あいつは確かに「時が来れば外へ出られる」と言った。あとは俺がその「時」を作ればいいはずだ。

「ふう……」

ため息交じりに近くの端末の電源を入れ、中のデータをあさってみる。

「……………これは」

大量にあるファイルの中に一つ。奇妙なものがあった。「閉じ込められている君へ」

と言う名前のファイルが一つ。期待を込め、ファイルをクリックして開いた。

……………そこに書いていたのは、俺の想像を超えたものだった。

「端末を使って情報を見るのもいいが、まずは自分自身を理解してみよう」

「……………フザけやがって!!」

八つ当たり気味に放り投げ、近くの椅子を蹴り飛ばした。

すると、椅子の下に紙が貼ってあったようだ。倒したから気付けた。嫌な予感がしつつも、一様手に取ってみる。

「八つ当たりして椅子を蹴っただろう？ そう怒るな」

「ハッ！ フザケンな!!」

紙を破き、空中にばらまく。倒れた椅子を起こし、しばらく座って頭を整理しようと思った。

「……………自分自身を、理解しろ……………か……………」

引つかかっているものと言えば、唯一それだけ。俺と言えば……………Obiパラドクスと融合して、そこからロイミュードに……………

「ロイミュードを知れってことか……………?」

すぐに立ち上がり、机の引き出しや本棚の資料集をひっくり返した。

「らりるれろ、ろ、ろいみゅーど……………」

あいうえお順のぶ厚い辞典のようなファイルから、どうにかロイミュードの項目を探す。

「ロイミュードの代表格……………ハートロイミュード、メディックロイミュード、ブレンロイミュード……………それぞれ戦闘、回復、知能に優れた三種……………」

読み進めていくうちに、またメモを見つけた。

「ロイミュードは破壊された時にすべからく空中でコアが霧散する。これはインターネットと同じではないかと私は考えている。空中に溶け込んだ魂は、あるいは端末が発する電波と同じなのでは……………?」

書き方的に、これは俺に向けたものではないだろう。

何の気なしに残したメモ、と言う感じだ。

「ネット……………電波……………空中に……………」

そこまで考えて、俺は気づいた。このメモは俺に言っている。「コンピューターウイルスの君ならば死者と対話できる可能性がある」と。

俺は目を閉じ、念じた。

イメージは、自分の体が溶けて液体になり、やがて蒸発し、空气中に解ける感覚……………

「会うのは初めてだな、パラドクス」

「……………あんたは……………確か……………ハートロイミュード」

赤服の青年が目の前に立っている。腕を組み、こつちを値踏みしているみたいだ。

「俺に干渉してきたのは、お前が初めてだな。お前のことは少し前から見ていた。強いんだな」

「……………ハツ、それはObiか？それともこの俺か？」

勿論、自分で言うのもなんだけど俺はObiパラドクスの方が強いと思ってる。当り前だ。

「両方とも、だ。それで……………用件は分かってる。俺の力が欲しいんだな？」

「……………ああ、蛮野をが作ったロイミュードとバグスターの融合態。それを超えるためにだ」

ハートは少し考えるそぶりを見せ、やがて頷いた。

「分かった。お前が慕う永夢と言う男は泊進ノ介の仲間だ。泊は俺の初めての人間の友達だからな……………力を貸そう。俺の仲間もそう言っている」

「……………ああ、ありがとう……………」

体が熱い。新たな力の流れを感じる。

「……………ハート、ブレン、メディック、チェイサー……………そういう名前なのか」
力を得るとともに、ハートたちの記憶も俺の中へと流れ込む。

皆、いい笑顔をしてるな。

それぞれ辛く、苦しかったろうに、皆、笑顔で……

誰かのために、盾になり、

裏切ったふりをし、

最後の力を振り絞って、

皆、生きていた。

これが……そうか、

これが、錆ゲムムの言っていた、例答か。

少しだけ……分かったような気がする。

「……まだ……行くぜ……」

ファイルを持ち上げ、別のものを探す。

「……オルフェノク……これは？」

「オルフェノク、人間が死んだときに、急激な進化を伴って変位する進化系。体は主に灰色を基調にしたものであり、かなりの生命力を誇る。また、オルフェノクだけがスマートブレインと言う会社のベルトを使って変身することが可能。」

参考資料の挿絵を見て思い出す。少し前、Obiパラドクスと引き分けた時に俺が見たものの中にいた。

「確か名前……何だったっけ……？」

「ここが……ウルフォルフェノクの記憶の世界……」

道を歩いていると、土手に寝っ転がっている男が視界に入った。

「あんた、名前は？」

ものぐさそうに上体をあげ、こつちを睨んできた……いや、目つきが悪いだけか。

「巧、乾巧」

それだけ言って、仮面ライダー555、ウルフォルフェノク、そして乾巧は立ち上がった。

「俺はパラドだ。宜しくな」

25話：彼の夢

「……………なあ、巧さん、生きるってどういうことだと、あんたは思ってるんだ？」

「そりゃあ、お前、いろいろだろ」

乾はつまらなそうにつぶやき、またその場に寝そべった。俺も習って、隣りに腰かける。

「いろいろって？」

「……………夢を持つとすること。夢を持つこと。夢をかなえようとすること。夢をかなえること。夢をあきらめること。夢をあきらめないこと。息を吸うことも、はくことも、歩くことも、走ることも、全部、生きてる時にやるもんだ。だから……………それらをやってる時のことを生きてるって呼ぶんだろ」

俺は乾の言葉を飲み込んだ。こいつは……………きつと、凄く命に対して礼儀正しい人なんだ。

「なら……………生きる意味……………あんたに分かるか？」

「……………意味……………か……………分かんねえな、そんなもん」

分からない。そう言うだろうと思ってた。それなら……………

「なあ、巧さん、あんたが生ききった記憶を、俺に出来ないか？」

「俺はもう死んでんだ。好きにしろ」

そう言いながら、乾は手を高く上げ、自分の手の平を覗き込んだ。

「……………？ 何やってんだ？」

「別に……………何でもない」

乾は両手を頭の後ろに回し、ゆっくりと目を閉じた。

「……………生きる意味だけだな、

俺の生きる意味は、夢をかなえることだ」

「……………その……………夢は？」

「……………？ 眠ったのか？」

「……………世界中の洗濯物が真っ白になるみたいに、皆が幸せになりますように」

それっきり、乾は動かなくなった。俺は覚悟を決め、体を粒子に換えた。乾の記憶と結合し、俺は乾の人生そのものになる。自分の記憶の引き出しの中に、乾巧と言う人間の項目が追加された。

「……………乾……………あんた、すげえよ。死ぬときに、笑ってんだもん……………心から」

「乾が覚えている範囲のすべて。それを俺が引き継いだ。力も……感情も。」

全てを終え、俺は目の前の扉に手を置いた。
つい数時間前まで、ビクともしなかった物。
軽く押しただけで、まるで粘土のように崩れていく。

「皆………行こうぜ………！」

——皆、俺の中で生きてくれ。

ハートも

ブレンも

メデイックも

チエイサーも

アデルも

戒斗も

州輝も

光明も

アंकも

琉兵衛も

冴子も

若菜も

霧彦も

克己も

莊吉も

音也も

ダークカブトも

瞬も

剣も

巧も

勇治も

結花も

亜希も

花形も

信彦も

皆、俺の中で生きている。

この力で……俺は、世界を……永夢を救う。

26話：それでいい

扉を開けると、目の前に机が置いてあり、上に手紙が置いてあった。

「これは……………」

「君が扉の外に出たということは、どうやら私の仮説は正しかったようだ。

君は、今多くの者たちの生涯と融合した状態にある。暫くは見たこともない人間のことを長きにわたる友人に感じてしまったり、行ったこともない場所に苦い思い出を感じることもあるかもしれないが、じきなれるはずだ。

多くの者たちと融合した聡明な君の事だ。察しているだろうが、私は宝生現夢。永夢の父親だ。

蛮野の野望を打ち砕くためにも、君の力が必要だった。

あるいは私はもう死んでいるかもしれない。

その時はどうか、私も君の一部にしてくれ。

P.S. 命の意味は分かったかい？」

「ああ……………沢山の奴らの一生を見たよ。そいつらの苦しみや、満足感。残したもの。

俺は、すげえって……………思ったよ。俺も生きるぜ、懸命に！」

紙を投げ、壁を破って走り出す。

頼む………！死ぬな！あんたは、まだ………永夢のために、生きるべきだ！

「もつと速く！ナスカ！ダークカブト！力貸してくれ！【超加速】「クロックアップ！」

一瞬で蛮野のラボに着いた。扉を飛び越え、敷地内に着地した途端……

「侵入者ヲ確認、排除ヲ開始。設定LEVEL1ヲ起動」

地面から4、50体のクロノスに変身するロイミュードが湧き出てきた。

「邪魔すんな！行くぜブレン！ハッキング！」

自分の頭に人差し指を軽く当てると、同時にすべてのクロノス達の活動が止まった。

遅れて我ながら恐ろしいとさえ思った。

「少し前だったら死んでたな………本当に俺、強くなってる………」

前なら、クロノスに俺が勝てるわけがない。それが、今となつては触れることもなく

一瞬で屠つた。力を得た喜びとこの圧倒的すぎる力に同時に俺は恐怖した。

どこへ行けばいいのかわからず、あたりを見回した時、爆発とも違う、何かが崩れる

音がした。

そして、俺は察した。間に合わなかったのだ。

壁を破り、中の惨状を見た。全てが焦げた部屋。瓦礫の合間に、真っ黒に焦げた現夢

が倒れている。

「……………」

「まだ、生きてる……………でも……………」

現夢は、もう助からない。この世界のどこにも、ここまで傷ついた男を治せるものはいない。試しにメデイックの治療能力を使ってみたが、効果は見込めなかった。

「現夢……………悪い……………間に合わなかった……………でも、もしかして、これもあんたの予想通りかい？」

せめて……………生きられないのなら、このまま消えないでくれ。

俺はゆっくりと手を伸ばし、現夢の頭を引きちぎった。

頭蓋骨を割り、露出した脳にかぶりつく。

俺はコンピューターウイルスで、人にも感染できる。

なら、現夢の脳の細胞を取り込んで感染し、ウイルス感染細胞にすれば記憶や知識、感情を取り込めるはずだ。

俺の中で生きてくれ。

俺の目を通して、永夢を見守ってくれ。

俺の考えにあんたの知識を足して、永夢を導いてくれ。

……………涙が、溢れ出る。

殺したくなかった。

出来れば救いたい。

でも無理だ。

悔しい。

悲しい。

苦しい。

新たな力を得る高揚感と、
命を奪う自分への嫌悪感、

相反する二つの感情が、俺の中で荒れ狂う。

胸が痛い。息が苦しい。

力がみなぎる。士気が上がる。

この感情は……二つ同時には普通なものだ。

……そうか。

これがそうか。

これが人間の持つ矛盾か。

俺は矛盾か。
パラドクス

それでいい。

27話：悪しきデータの残り香

現夢と融合した俺は、彼のすべてを知った。

「さあ、行くか」

自分でも驚くほど冷静な声。さつきまであつた感情の濁流は消えていた。

これがあんたの強さか。現夢。

永夢達が落ちている穴へ飛び込むと、止まっているサーキュラーが目に入った。対象を見失ったから止まっただけで、俺がもう少し近づけば起動するだろう。

真横を抜け、長いロープのはしごを落とす。これで永夢達が登れるだろう。

やるべきことを終えた俺は、合流することなく先にCRへ向かった。

このまま皆と合流したら、多分面倒なことになる。問い詰められるか、あるいは逆上した永夢に襲われるか。いずれにしろ今みんなと会うのは得策じゃない。少し間を開けたほうがいいはずだ。

俺は飛び上がって屋根をぶち抜き、そのままアソクの翼を出して飛翔した。

「便利なもんだな。飛ぶのも」

空をかけ、巨大なタワーの頂上に着地。たしか………スカイツリー、とかいう場所だ。

「しばらくここで暮らそう。俺はウイルス。健康な環境も食べ物も必要ない」
いつの間にか降っていた大雨の中、俺は目を閉じた。

一方、遠くの地、蛮野天十郎の研究所から誰もいなくなった時、その研究所内で蠢くものがいた。

「おのれ……………宝生現夢!!!」

他にもない、蛮野天十郎である。

本来、宝生現夢が発動したグラハムガシャットの力は絶対のものだった。

だが、蛮野はまたしても自分のデータのバックアップを用意していた。

「この、クズメエ!!!」

すでに頭部がなくなり、胴体の身となった現夢の遺体を蛮野は繰り返し踏みつける。

「ゴミが！恩知らずが！砕け散れ！消えてなくなれ!!!」

現夢の体は崩れ、砂のようになってしまった。だがそれでも蛮野は踏み続ける。

「ハアハア……………私の最高傑作を……………ゴールドネクストロンを破壊しおつてえ……………」

憎々し気にかつて現夢だった消し炭を踏みじり、多少は平静を取り戻したようだ。「ずいぶんなことになったな、蛮野」

「……………！ルーフマン！何故ここに!?!」

蛮野の目の前には、人間のような形をした黒い霧が立っていた。

「俺がせっかく金を融資したというのに……………どうやらすべてぶっ飛んだようだな」

「……………まだだ！まだ私と、Galactic Nova・circul arが残っている。他の兵器軍もだ！」

食い下がるように蛮野が叫ぶと、霧は低い声で笑った。

「良いだろう……………いい成果を、期待している」

「あ、ああ……………見ていろ！まだの野望は終わっていない！見ろ、この第二の力を！

ゴールドドライブトライドロン！私は必ずや、この世界を手に入れる！」

28話：踊王との再会

スカイツリーの天辺で座っていると、不意に何かが昇ってくる気配を感じた。

下を見て見ると、学生服のようなものを着崩した少年がタワーを駆け上がった……

「……………って……………アイツ……………」

その少年は、俺の中にいる、Obiパラドクスの記憶と、俺の記憶にいた奴だ。ゲーム、ドレミファビート、ラスボス。ステツプ・キッズ・キング・キッド。

元バグスター連合の副リーダーで、確かポツピーピポパポに恋してるんだった。

俺の中のObiパラドクスとは友人関係。

今俺の方に向かってる理由……………不明。

敵か味方か、

殺す気か脅す気か、

ただの挨拶か、

自分の友を殺した奴への呪詛か。

思考の整理の中、結論を出すよりも先に目の前にキッドが迫ってくる。

目の前に着地したキッドは、一言だけ、「話は現夢から聞いている」とだけ言った。

「……………お前もか」

内心、ほつとした。確かに俺はキッドの敵方の勢力だったし、あの時味方になりかけていたとは言ってもその後にはObiパドクスを殺したのはほぼ俺だ。

恨まれていないか、襲ってくるのなら、俺には反撃する権利がない。理由も。

第一、俺の中にあるObiパドクスがキッドへの攻撃を許さない。

俺も、仲間の仲間を傷つけることは看破できない。

「……………いや待て、何でお前が生きてる?」

そこまで考えて、俺は致命的なことを忘れていたことに気が付いた。こいつ、死んでんじゃない。

バグスター連合と永夢達が初めて戦った頃、初めて永夢を倒したのは、このキッドだった。力こそないものの、俊敏さとダンスのセンスは天賦の者があり、永夢を下した。ハイパー無敵が破れることを誰も想定していなくて、当時はどうなるかと思つたのを覚えてる。

同じ時、別の場所でObiパドクスは見ていた。キッドの大立ち回りを。「流石キッドだ」とたたえるとともに、彼は理解していた。多分、キッドは自分たちを裏切るだろうと。キッドはポッピーポパポを愛してる。ポッピーポパポが人間を愛するから、キッドもそれを受け入れるはずだ。

こうして記憶をたどると、同時に二か所から見ることができ、別々の悲劇の存在を改めて理解した。……………で、

「お前が生き返ったのは、現夢の力か？」

「いや……………ベイオウルフだ。あいつ、何の願掛けか、自分がプロトゲムデウスに変身するときに俺の「ドレミファビートガシャット」を自分の体じゃなくてヴァグヴァイザーIIに差しちまったからデータが読み込まれて、復活したんだ。驚いたぜ……………誰も、いなくなつてるとは思わなかった……………」

そこまで話されて、俺はようやく自分の記憶と今のキツドの違いに気づいた。目、だ。あれほど爛々と輝き、優しげに、無邪気だった目は暗く、黒色に濁り、動かない。

まだ丸焼きになった魚の方が生き生きした目をしている。

「お前は……………生きたいか？」

「……………俺は……………そうだな、何処に行く気力もない。生きる気も、たいして、無い……………」

キツドが話した言葉は、そのまま、過去のObiパラドクスと同じ言葉だった。

「……………でも、お前は生きてる。今、生きてる」

俺にとつちや、それがすべて。それがあれば、人間でも、ウイルスでも生きていける。生きているから生きていく。当たり前を当たり前やってほしい。

「お前は今生きてる。…………だから、生きてくれ。死にたいんなら、それは死んだときに存分にやってくれ。眠りたいのなら、死んだ時に思いっきり寝ればいい」

「えつと…………？」

自分の中の激情に任せすぎた要領を得ない言葉。自分が見てきた悲劇の死が多すぎて、盲目的に誰かの死が恐ろしくなってるのは、俺の悪いところだ。

「悪い…………お前は今、生きてる。死んだ仲間も、皆きつとお前に生きてほしいと願ってる…………と思う。俺もそう思う。俺の中のObiパラドクスもそう思ってる。……………それに、ポッピーピポパポも、きつと……………」

死んだ人間は生き返れない。どれだけ望もうとも、それは変わらない。皆、それを知ってた。ある人は泣き、ある人は笑い、ある人は苦悶していた。

あの人たちが皆、満足していても、心の奥底で思った言葉は、俺の中にある。「死にたくない…………死にたくないよ」

あの人たちの声が、聞こえる気がする。あの人たちを、俺は一生忘れない。彼らの無念は、俺が継ぐ。生きる者たち、全員の義務。それが生きることだ。

「キッド、俺と来い。俺の、仲間になつてくれ」

「…………俺が現夢のオヤジから言われたことは、俺が生き返った理由と、仲間たちの最期。そして、どうして俺たちが戦う羽目になったか……………蛮野の野望……………生に絶望し

て死ぬよりも、噛み千切るべき敵がいる………パラド、俺に協力しろ」

互い手を合わせ、固く握りあう。

たった二人だが、戦力は十分だ。

構成は二人、リーダーと、副リーダー。

新・バグスター連合の発足だ。

29話：失われて「いない」Bonds

しばらく時間を置いた後、俺はキッドと別れ、CRへ向かった。

多分、永夢は俺を怒ってるだろう。目の前で、自分の親が殺されたんだ。恨まないはずがない。俺に親はいないけど、俺だってたぶん恨むだろう。

だけど、あのときのあの状態じゃ、現夢を助ける方法はなかった。せめて、俺が引き継ぐことしか……

このことは、永夢には言えない。

永夢のために現夢が死んだことを知れば、永夢は自分を責める。

飽くまで、飽くまでだ。現夢は「世界を救うため」に行動し、死んだことにしなくちゃならない。

そして、俺に殺されたことにする。

相すれば永夢には、親を殺された哀しみよりも殺意と怒りが生まれるはずだ。その憤怒を糧に永夢が奮起できるなら、それでいい。

永夢と一緒にいられるのは終わりだけど、それで永夢が生きられるならそれがいい。

永夢。俺を殺すために生きろ。それを、お前の生きる意味にするんだ。

蛮野も、サーキュラーも、俺が「壊す」人の心を失った悪しき人工知能『蛮野』を、俺が終わらせる。

「よう皆！ 悪いな帰るのが遅れて！」

CRの扉を開け、声を張る。場にいる全員が硬直し、それぞれの感情を込めて俺を見た。

なぜ、あんなことをして平気な顔でここに来たのか？

今までどこで何をしていたのか？

人を殺して、どうしてそんなに朗らかに笑えるのか？

自分の行いを自覚してないのか？

それぞれの目がそう言っている。

その中で、一人、その疑問のすべてを抱えた男が俺の目の前まで来た。

「……………パラド……………どうして……………」

「何が……………「どうして」なんだ……………？ 永夢」

やめてくれ、それを、聞かないでくれ。

「どうして……………父さんを殺したんだ？」

「どうしてって言われてもな……………別に大した理由でもないし……………」

違うんだ、永夢、聞いてくれ。お前のお父さんに、現夢に言われたんだ。託されたん

だ。

永夢、君のためだ。皆、俺もお前の父さんも、お前のためにいるんだ。

そう言えたら、どれほど楽だろう？

「なんでだよーパラド……！　僕は、お前が命の重大さを理解してくれたって、そう

思ってたのに……！　何であんなことしたんだ!？」

「……………あのなあ、永夢、お前がどれだけ人の命を重く見てるのかは知らないけど、俺はバグスターなんだよ。お前から人間の道徳や価値観を俺に求められても困るぞ」

何か事情があったのでは、最後にそう願う永夢を突き放し、俺は初めて無理やり笑顔を作った。

「パラド……………僕は……………一生お前を許さないぞ……………！　僕の命が続く限り、お前を

呪ってやる……………！」

「黙れよ、宝生永夢。　結果的にお前の親見殺しにしたの、お前だろうが。自分が安全な場所から見学することしかできないんだったら、初めから黙ってる。

お前はいつもそうだな、永夢。本当の強さなんか持つてないくせに……………理想と口だけは達者で……………お前のゲームの力量だって、もとをただせば俺の技術だろうが。

お前自身、本当は何も持つてないんだ。まともに戦えない奴が俺に指図するな」

それでいい。永夢、そうして生きる。その先にお前の幸せがあるのなら、俺は……………

「パラドオオ!!!」

「話は終わりだ。永夢。……………今更だが、お前とはもう一度一緒にやりたかった」
永夢に背を向け、CRに背を向け、約束に背を向け、真実に背を向け、本心に背を向
け

俺はCRから出ていった。

こうして俺は、人を殺した恐ろしい、世界意に害をもたらすウイルスになった。

永夢：誤解と云う名の殺意

………夢を見た。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀と滑った 後
ろの正面だあれ？

夢では僕は子供になっていて、父さんと遊んでいる。

ゲームをして、遊園地に行つて、花畑で追いかけて………

遊び疲れて寝転んでいると、母さんが迎えに来た。

だけど、母さんは僕を抱き上げ、父さんを置いて歩きだしてしまふ。

『お母さん、お父さんは？』

何も知らない僕は困惑しながら母さんと父さんの顔を交互に見る。

『ねえ、ママ！』

名にも事情を知らない過去の『僕』はただ母さんに声をかけるだけだった。

やがて、父さんは『僕』に向けて微笑んだ後、背を向けた。

背を向けた父さんの身体が急に燃え上がり、その場に倒れこんだ。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀が滑った 後

ろの正面だあれ？

『……………！』かごめかごめ 籠の中の鳥は いくつか出やる 夜明けの晩に つるつる滑った 鍋の鍋の底抜け 底抜いてたもれ

絶句した僕は、どうすればいいのかまるで分らない。

父さんの前に一人の『男』が立った。

『僕』も僕も、その存在を知っている。

『男』は父さんの体を持ち上げて首を引きちぎった。

鮮血がほとぼしり、あたりは死に包まれた。

『お前……………！』どうしてお父さんを……………！』

そして、『男』は悪びれずに言葉を紡いだ。

『別に、大した理由はないさ』

腹に力を込め、僕は思いきり言葉を吐き出す。目の前の憎き父の仇の名を吼える。

「パラドオオ!!!」

かごめかごめ! 籠の中の鳥は いくつか出会う 夜明けの番人 鶴と亀が滑った 後

ろの少年だあれ？

自分の声で、目が覚めた。

目が覚めると、最近いつも泣いている。

見ていた夢は、いつでも覚えていてる。

いつも、同じ夢を見る。

場面は違えど、自分の父親が殺される瞬間を夢に見る。

いつでも心の中に燃えている炎。

力を渴望する脳が活性化し、鍛えてもいないのに筋力がまた上がったのがわかる。

僕はまた、パラドクスを殺すために少しだけ強くなり、カーテンの隙間からのぞく太陽の日に目を細めていた。

心の中に、殺意と言う名の凶器を、

正義感の果ての憤怒を抱えて、

僕は今日も、パラドクスを殺すことを切に願った。

BUT・END・GAME

「はあ……………はあ……………」

廃墟のビルの裏路地を、一人の女性が走っている。

煙が立ち上る街と比べると、その女性はかなりそぐわない恰好をしていた。

ピンクの髪に、黄色を基調とした服。その派手な服も、今は小さな傷やほこりがこびりついていた。

彼女の名前はポッピーピポパポと言う名だ。

今、この世界には仮面ライダーとして活動ができる者は彼女以外にはいない。

それ以外の戦士たちは全員死んでしまったのだ。

鏡飛彩も、九条貴利矢も、花家大我も、宝生永夢でさえも、この世界にはもういない。

一人残った彼女は、いまだに戦いを続けている。戦うといっても、一方的にもほどがあるものだが……………

今、世界には終わりが近づいている。

生き残っている人間は、もう一人人もいないだろう。

家屋は崩れ、空には黒煙が舞っている。もう誰も元は青空があったと言ってももう信

じないだろう。

道には人の死体のごった返し、コンクリートを完全に覆ってしまっている。

「お願いです……………この子は……………まだ生まれたばかりなんです……………！」

不意に声が聞こえ、ポツピーポポは立ち止まった。壁に体を密着させ、そつと奥をうかがった。

一人の女性が赤ん坊を抱きかかえて泣きはらしている。

そして、その女性の目の前には怪物が立ちはだかつている。

怪物の名前は、ゲムデウスムテキ。世界を破壊する存在。

「お願いです……………この子だけは……………」

その言葉を紡ぐよりも先に……………ポツピーポポが助けようと動くよりも先に……………その親子の首が吹き飛んだ。蛇口を壊したように鮮血が舞い、ポツピーポポの絶望の音がこだました。

「ポツピーポポ……………こうして遊んでいけば……………お前が来ると思っていた……………残ったプレイヤーは……………お前だけだ……………」

「……………変身ッ！」

【仮面ライダーCHRONICLE…

天を掴めライダー…刻めCHRONICLE！今こそ時は極まれり！】

ポッピーピポパポは仮面ライダーダーククロノスに変身し、ゲムデウスムテキに正面から激突した。

いつしか雨が降っていた。両腕をもぎ取られたポッピーピポパポは、何をするでもなく呆然と虚空を見つめていた。

「永夢……………」

愛しい青年の名を言ったのと、彼女の顔が踏みつぶされたのは同時だった。

20XX年

パレード：演技と言う名の道化

「よう！ 蛮野を倒す計画を立てに来たぜ！」

両腕に大きな紙、蛮野のラボの設計図を抱えて俺は乱暴にCRの扉を蹴り開けた。

「……………」

「なんだよ暗いなあ！ここは葬式の会場か？」

葬式の会場……………その表現は間違つてない。当り前と言えば当たり前だがまだ全員現夢のことを引きずっている。特に……………問題は永夢だな。前よりも一層……………心は壊れかけてて、体は反比例して強靱になつてる。

……………明らかに人間の枠を超えたその変化は、永夢の常人にはない狂気を物語つている。

怒りが、憤怒が力を求め、肉体は得た栄養を全て体に使うことでそれに応えている。「おお永夢！見ないうちに少し大きくなつたか？」

改めてよく見ると、少し恐怖の変化だ。体重も5く6キロは確実に増えている。ここままで俺への憎悪で変わるとは……………正直予想外だ。

「蛮野を倒す……………？あんだ、何を言つて……………？」

泊進之介が不可解そうに俺に聞き返した。まあ当然知らないか……………

「知らないのか？ 蛮野はまだ健在だぜ？ バックアップのデータが残っててたんだよ」
努めて俺は小馬鹿にしたように話した。場にいる全員が息をのんだのがわかる。

「なんだよおい……………そろいもそろって無能ばっかか？」

慎重に、言葉を選びながら俺は全員に悪意を振りまく。永夢一人じゃだめだ。場にいる全員が俺を敵だと思い込ませない、永夢も多分俺を心の底から敵として見れない。
「パラド……………どうしちゃったの？ 全然、パラドらしくないよ……………」

……………お前は優しいな、ポツピーピポパポ。でもゴメン。お前の信頼を、俺は裏切らなくちゃならない。

「俺らしくない……………？ ハッ！ お前な、お前は俺の何を知ってんだ？ せいぜい見た目だけだろ？」

予想外の言葉を受けて、ポツピーピポパポが目を見開いた。

「パラド……………僕たちがお前に協力すると思ってるのか？」

「当たり前だろ。蛮野は俺にとつても、お前らにとつても敵だ。敵の敵は仲間ってな」

「何が仲間だ……………！ ふぎけるな！」

どこまでもふぎけた俺の言葉に永夢が声を荒げた。

「必ず倒せる。安心しろ……………俺を信じろ」

急に真摯な言葉を投げかけた俺の言葉に、永夢の怒りが一瞬揺らいだ。

「俺を信じる……………大丈夫だ。へまして死んだバカと違って、俺は大丈夫だ」

その言葉を放った瞬間、永夢が本当に切れた。

「パラドオオオオ!!」

掴みかかろうとする永夢を殴り、永夢は後ろのデスクに向かって吹っ飛んだ。

「はあ……………だからさあ、永夢、負け犬に口なし……………だぜ。」

お前の親父も、あの若奈とか言うガキも、弱いから死んだんだ。お前は、俺より弱い。

……………殺されたくなかったら、それ以上跳ね返るのはやめろって」

永夢は今、完全にヤバイ目つきになってる。……………それでいい。永夢、もっと強くなれ。今はまだ、怒りだけの不完全な強さでいい。いつか、その力と本当の強さを身に着けるんだ……………

「あくあ、なんか白けたわ。もういいや。もとはと言えば俺一人でも十分だし」

めんどくさそうに頭を掻き、俺はCRから出ていった。

『また随分派手にやったな。』

「お前か……………」

足元を見ると、影が映っている。そしてその影はまるで鏡のように俺を……………より正確に言えば俺そっくりのObiパラドクスが写っていた。

「服がまた白に戻ってんな……………」

『お前の俺のイメージが白い服だからだ。それよりもまあ……………ずいぶん思い切ったな』

「……………俺の力は、日に日に開放が進んで、強くなってる。念じれば赤い剣が出るようにもなったし、超加速も得た。これ以上まで行くと……………少し触っただけで、俺は誰かを殺しかねない」

かつての戦士たちと融合した後、俺の体は日に日に強さを増し、次々と新たな力が現れた。

『成る程な、今お前は得た情報をダウンロードしている最中ってわけだ。全ての読み込みが終われば……………』

「遅かれ早かれ、永夢達とはいられない。ならいつそ、俺から一人になったほうがマシだ」

『一人……………か……………一応言っておくが、俺も結局はお前の妄想に過ぎない。俺とお前が話しているのは、「Obiパラドクスなら自分に何を言うか」をお前が俺の記憶や感情をもとに考えてるだけだ。……………こっから先、お前は本当に一人だ。』

「上等……………俺が……………必ず、皆を守る……………！」

拳を握りしめ、俺はもう一度、深く決意した。

32話：復讐鬼の目

「侵入者ヲ確認、排除ヲ開始。設定LEVEL1ヲ起動」

地面から大量のクロノスが沸き上がり、一斉に俺に向かつて飛び掛かった。

「……………フォトンブラッド……………俺を包む盾になれ」

言葉を発したと同時に俺の体がにわかに赤い光を放ち、俺の半径4mほどにいたクロノスがすべて爆発を起こした。

「設定LEVEL1デハ排除不能ト判断。LEVEL3へ移行」

今度は真つ黒のハイパー無敵ソルティがこれでもかと言うほど出てきた。

「……………ツ……………」

死してなお、ちようどいい被検体だったからと姿を変えられ、利用され続ける友の姿を見て「俺」の中のObiパラドクスが悲痛な声をあげた。

……………落ち着け。あそこにいるのは「もう一人の俺」の友で俺の仲間じゃない。哀しみに引きずられるな。同情を捨てる。心が迷えば体も迷う。

俺の中の「俺」のため、俺の中の「俺」を否定しろ。

「大丈夫だ……………俺は矛盾。今は「冷徹」になれ……………」

そう唱えると、悲しみに歪みかけた視界が急にクリアになり、俺はハエでも蹴散らすように無敵ソルティを屠った。そこには迷いも遠慮もない。

「なんて……………」

なんて、弱いのか。俺が強くなったとか、そんなことは関係ない。やはりこの無敵ソルティ達は所詮まがい物だ。重くも、速くも、強くもない攻撃。

「LEVELE3デストラ排除不能。最終LEVELEへ移行」

「……………来たな……………」

第一の目標、GalacticNovaCircular。従来のΣサーキュラーとバグスターウイルスを融合させたもので、戦力は段違いだ。だが……………

「お前は俺の最終目標の前座だ……………お前を壊して、その先の蛮野を倒してやる……………！」

NovaCircularの体から重加速が吹き荒れたが、俺には何の影響もない。「変身するまでもねえ……………ここで全部終わらせてやる」

永夢のムテキゲーマーくらいなら多分動けないだろう。力をくれた先人たちにあらためて感謝をし、突進して来たNovaCircularを受け止めた。

「はあ……………はあ……………何なんだ！あいつは?！」

パラドがNova・circu larと戦闘を開始しているとき、蛮野はすでに逃走を始めていた。

研究所を捨てるため、重要な装置や書類をまとめていた時――

「……………この音は！」

侵入者を知らせるアラームが鳴り、蛮野はモニターを確認した。別の侵入者、だとすれば何者か、数は、何処から、だが、蛮野はそれを確かめることはできなかつた。

「こ、これは……………！」

そこには、信じられないものが映っていた。

「ヴェー――ハハハハハ!!!」

「見てるか蛮野オ!!!」

「ヴェー――ヘツヘツヘツ!!!」

「ヴァ――!!!」

「本物はだれかわかるかなア!?!」

「「その答えはただ!」つ……………」

「「私だア――!!!」

「「嘘だア――!!!」

「「ヴェー――ハハハハハハハハハハ!!!」

「全てのモニターの画面を埋め尽くす仮面ライダーゲーム、ゲーム、ゲーム。」

彼らの作戦は至極単純なものだ。相手に自分たちの姿を見せたくないならば、むしろ見せまくればどれが本物かわからなくなるのが道理。

蛮野の研究所は今、ほとんどすべてのエリアがCRITICAL・ENDで増殖したゲームによつて埋め尽くされていた。そしてその中のどれかに、本命の本体、及びエグゼイドやドライブ達が紛れ込んでいる。

もはや、蛮野には迎え撃つ以外の選択肢はなかった。

33話：正体

「な……………何ということだ！」

蛮野は今、最善の手を尽くしているといっている。最初に現れたパラドの力を見抜いてすぐに撤退しようとするのは正しい。ただ彼の目の前のモニターを埋め尽くす多くの相手達だけではどうしようもない。

罨やセキュリティが総力を挙げているとはいえ、相手が多すぎる。落とし穴などは最初の数十人は足止めすることができても、場に残された残りの数百人が引つかかるはずもない。

全ての罨にかかりながらも、最速で自分のもとに向かってくる敵たちを見て蛮野は歯ぎしりをした。

「おのれ……………なぜこんなことに……………」

悪態をついても始まらない。兎にも角にも撃退するしか道はない。侵入者をたどり着けないようにした結果、逆に自分自身が出られなくなってしまったては世話はない。

「……………こいつか！」

モニターの画面を食い入るように見つめて30分。苦心しながらも蛮野はようやく

ゲンムの本体を見つけた。大量にいるゲンム。その中の一体だけがその場から一步も動いていない。

「ふざけた真似を……殺してやる!!!」

蛮野はすぐに行動を起こした。近くの通気口に飛び込み、一気に問題のゲンムの場所へ降り立った。

「貴様ア！よくも私の研究所を！」

ゲンムを殴り飛ばすと同時に、周りにあふれかえっていたゲンムの分体も消えた。

「来たぞ！蛮野だ!!」

「何!？」

消えた分体の間から、エグゼイドやドライブと言った主力のメンバーが現れた時になつて初めて、蛮野は自分がまんまとおびき寄せられたことを悟った。

「ちよこざいな真似を……!」

壁のスイッチを押し、特殊なシャツターを下ろして逃走を図ったが、シャツターが下りきるよりも前にエグゼイドとドライブが転がり込んできた。

「久しぶりだな………蛮野!」

「泊進ノ介! またしてもお前か!!!」

秘密裏に事を運んでいたはずが、なぜ警察の仮面ライダーまで来ているのか、答えは

一つだけだ。

「ルーフマンだな……俺を売ったな!!」

二人の仮面ライダーを無視し、蛮野は走った。最速でモニタールームまで戻り、機械を起動した。

「どうした? 蛮野」

「とぼけるなルーフマン! 貴様、情報を操作して私が戦う対象をCRのライダーだけに絞るはずではないか! 何故ここに警察の泊進ノ介が現れる!?!」

ルーフマンを覆っていた霧が晴れ、不敵な笑みを浮かべる男が映った。

「エグゼイドは自分の友人に協力を求め、その先がドライブだっただけだ。私は手抜かりした覚えはないぞ? ……ただ、こうなってはもはや運命だな。諦めろ」

「ふざけるなあ!!」

なおも嘯みつこうとする蛮野を無視し、男はそのまま接続を切った。

「間久部審議官、どうかされましたか?」

「ん? いや何、ただの間違い電話さ」

不敵な笑みを浮かべながら、現 大臣官房審議官間久部緑郎は顔をあげた。

「さらばだ蛮野。お前はもう用済みだ……」

彼が放った言葉を聞いていたものはいない。

34話：幽閉された姫

鏡飛彩視点

「ダメだ……このシャッター、ビクともしねえ……」

どうしてもシャッターを破れず、監察医の貴利矢が悪態をついた。

「となれば……」

「右と左の道、後は後ろの下に降りる階段しか道はないな……来た道に戻るのは論外だ」

やれやれといったふうに檀黎斗がため息をついた。

「俺は右に行く」

特に深い理由はない。ただ何となく、右に行くべきだと思った。

「自分も行くのか？」

貴利矢が俺の横に立ったが、俺は首を振った。

「いや……この道は狭い通路だ。爆速ホースではむしろ動きにくい……それに」

「それに？」

「なんとなく、俺だけがいくべきだと思う」

貴利矢は俺の顔をじつと見た後、ため息を一つついた。

「分かった。おい神、お前は自分と一緒にだ。その階段に行くぞ」

「なら俺は左だ」

それぞればらばらの方向に進み、しばらく歩くと広い空間に出た。

「どこだ？ここは……………」

「ここは試験場。現夢が作った兵器たちに適当なものを破壊させて最初期のデータを収集する場所だ。もつとも、今のお前にとっては試験場、と言った方がふさわしいが」

「…ツ！誰だ!？」

声のした方向を見ると、痩せ身の男が立っていた。

「よお、勇者」

「……………誰だ？お前は」

「お前の敵さ。俺はゲーム『タドルレガシー』のラスボスバグスターだ」

ラスボスバグスター……………まだ生き残りがいたのか。だが、妙だ。

「なぜ仲間の命を弄んでいた蛮野の研究所にいる？お前に仲間への情はないのか？」

「……………俺の記憶は、蛮野によって消されている。だから、俺はあいつらバグスター連合の仲間達の事を覚えていない。現夢の話によれば、俺は自衛隊が他のバグスターを襲った時に密かに回収されていたらしい」

「なら俺はお前と戦う理由はない。退け」

無視して横を通り抜けようとした俺の肩を奴は強くつかんだ。

「ところがそうはいかないんだよなあ。俺と賭けをしてもらおうか」

「賭け事に俺は興味がない。遊び相手が欲しいのなら他を当たれ」

「そう言うな。きつとお前は乗ってくる。飛び切りの「姫」を用意したんだ」

「……………何？」

奴は俺から離れると、天幕のようなもので何かを蔽っている場所に行き、仰々しく布を取り去った。

「!!……………小姫！」

天幕に隠されていたのはベッドだった。そして、その上に、いつか救うと決めた、最愛の女性が、百瀬小姫が美しいドレスを着て座っていた。

俺は奴を突き飛ばし、小姫に駆け寄った。

「小姫！俺だ！」

「……………」

小姫の反応はなかった。うつろな瞳は、何も見ていない。あの時と違い、同じ言葉を繰り返すこともない。ただ、静かに、そこにいる。

「小姫……………」

「安心しろ、まだ自我がないだけだ。自我を入れればすぐにお前が知っている姫になる」
「……………どうすればいい!? どうすれば小姫を……………」

「簡単さ。そこにある青い持ち手の電極を姫に差すんだ。それだけでいい」

すぐに俺は立ち上がり、机の上に置いてある電極に手を伸ばした。

が、その手を奴に掴まれて止められた。

「何のつもりだ!」

「まあ待て、いったら、賭けをしようつて。これから俺とお前が戦って、お前が勝つたらあの青の電極を姫に刺せ。そうすればお前の記憶と変わらない姫に合える。が、逆にお前が負ければ俺はこの赤い電極を使って姫に間違った記憶と自我を送る。そうなれば姫の最愛の男はお前じゃない。俺になる」

「貴様……………」

俺はゲームマドリバーを腰につけ、ガシヤットを起動した。

「術式レベル150! 変身!!」

「タドルファンタジー! タドルレガシー!」

「デュアル! ガシヤット! ガシヤット! ガツチャーン! デュアル・レベルアップ!
!

迎る巡るRPG! タドルファンタジー! アガツチャ! 迎り着いた世界! 神々

のレガシー！」

「さあ始めようか！お前が城に幽閉された姫を救うように、俺は姫を城に幽閉し、救いに来た勇者を倒す！変身！」

【バッド・レガシー!!!】

【辿る遺跡！蘇りし騎士！バッドレガシー!!】

見たこともないガシヤットを使って、奴は変身した、俺に似ている、紫色のタドルレガシー。

「俺のために作られた特注のガシヤット！さあ、姫をかけて俺と戦いな勇者ブレイブ！」

35話：弄ばれた命達

花家大我視点

目の前の相手をなんと名状すれば……と俺は齒噛みした。

腐った卵のような異臭が立ち込める体。頭にはモーターのようなものが突き刺さっている。人間のような腕が4本。足も4本。機械と人間をかけ合わせたようなそれは、改造人間と言うには余りのおぞましさだ。何より……

「コロ……シ……テ……オレヲ……セ……」

何度も繰り返す言葉。初めは何と言っているかわからなかったが、聞き続けるうちに代替の予想はつく。

『殺してくれ。俺を殺せ』

記憶が残ってるんだろう。恐らくはバグスター連合の元メンバー。手に持っている3つ重火器とは別に、右上の腕にはグラフィイトのグラフィイトファングによく似た武器。確証はないが、恐らく「ドラゴナイトハンターZ」のラスボスバグスターだ。

「俺に殺されてえのか……仲間のところに行きたいのか？ そうだよな……」
この一年で、俺の考え方は変わってきたと思ってる。

初めはバグスターとくれば俺は怒りと憎しみを感じた。全て駆逐してやろうと思っていた。それなのにどうだ？俺は今、バグスター達の命をいのように扱った人間をぶっ飛ばすためにこの場にいる。

敵に外道を働いた輩が許せない。それだけのためにここに来た。

「辛いか？自分の意志で動いてるってわけじゃねえんだろ？お前の心は、まだそこにあるんだよな……？どこまでできるかわからねえ。でも、分かった。俺がお前を、殺してやるよ」

蛮野天十郎のメモ

・被検体 ラオロンについて

実験開始1日目。私が作ったバグスター達が手はず通りに自衛隊の襲撃を受けた。人間と共存しようと考えていたようだがこれでその気もなくなつたろう。騒ぎに乗じて〔ドラゴナイトハンターZ〕のラスボスバグスターであるラオロンと〔タドルレガシー〕のラスボスバグスタースレイヤを回収。Galactic Nova・circleだけでは警備に手拔かりがある可能性を考えたため、この2匹を使って新しい兵を作るとしよう。

実験開始から10日、相変わらず奴は暴れ、隙あらば逃げ出そうとしている。奴に自分の仲間達の体の中に強力な爆弾が仕込まれていることを教えるとようやく大人しくなった。これでようやく体をいじくれる。手始めにロイミュードの義体と融合を試みたが、拒否反応が予想値を超えていたため、腕と足が4本という歪な状態になってしまった。

実験開始から50日、身体の改造はほぼ折り返し地点へと達したが、いまいち決め手に欠ける。精神状態の変化が必要と判断し、試しに奴の仲間が殺されていくシーンを動画にして見せたところ、発狂した。

怒りで暴れだし、何と拘束具を引きちぎった。どうやら怒りと絶望が新たな力を呼び起こしたようだ。再度拘束して改造を進める。

服従させるためにスレイヤの記憶は消してしまっただが、残しておいても悪くなかったかもしれない。そのままではラオロンは私に服従しないため、頭に無理やり機械を差し込んだ。高圧の電流のせいかな、それとも無理やり服従させたからの拒否反応か、頭部から刺激臭が出始めた。意識ははつきりしているようで、「殺してやる」と私にらみを利かせ続けた。

実験開始から60日。更なる身体能力の向上を図り、全ての仲間が死んだことを奴に動画付きで伝えた。残念ながら気がふれてしまったようで強さは変わらず、代わりに「殺してくれ」とすすり泣くようになった。

まあ結果は上々と言ったところだ。レベルの最終値はスレイヤは200、ラオロンが450だ。ラオロンはうるさいので、近くの手ごろな倉庫にでも叩き込んでおこう。侵入者が来ればあの道を利用する可能性もあるはずだ。

36話：合流

九条貴利矢

「なあ、どう思う?」

目の前の大きな機械を見上げながら、ほぼ確信しているにもかかわらず質問を飛ばした。

「どうもこうも……どう見てもこのセキュリティを管理している機械群だろう」「つてことは……」

俺が聞くよりも早く、神……檀黎斗はうなずいた。

「ああ。この機械を壊せれば、敵の戦力は半減だ。おそらくすべてのセキュリティがダウンすると見て良いだろう」

「よっしゃあ!」

「あ、ちよ、待……」

聞くや否や、思い切り装置を殴りつけた。だが、そのことを俺は即座に後悔した。

「硬——!!!?」

驚くほどそれは強固だった。金属や合金とも違う。兎にも角にもただただ硬い。

「愚か者。こんなに見え見えで置いてあるんだ。物理的にそう簡単に壊せてたまるか」
無礼な目つきで俺を一瞥し、檀黎斗はボタンをあちこちいじり始めた。

「おい、また前みたいにお前がミスつたら…」

「あれは故意だ。自分の意志でわざとミスをした」

驚きの告白。あの日の自分のミスをすべて告白いつは演技と言い張るつもりなのか、と今度は俺が檀黎斗を睨みつけた。

「……………彼に……………現夢に頼まれた。自分が蛮野にケジメをつけさせると……………自分のケジメも、そこでつけるとな」

「…!!じゃあお前、永夢の父ちゃんが死ぬことを知ってて……………!!」

檀黎斗は何も言わなかった。その代わり、一つ頷いて見せた。

「てめえ！何だ!!どこまで腐ってやがる!!」

「やかましい!!」

食って掛わつた俺を跳ね飛ばし、檀黎斗が吼えた。

「親の覚悟を、誰に止める権利がある!!私はうらやましかった!親が命を張れるほど愛されている息子を!永夢がうらやましかった!私は父にろくに大切にされなかったからな!」

……………それに、現夢は生き残ったとしても、あの男がやったことは消えない。……………

私と同じようにな。永夢と現夢が昔のように仲良くなることは……………無い」

「あの時に死ぬのがあの人にとって救いだっただ」それだけ言うと、檀黎斗はまた背を向け、一心に機械の操作を続けた。

「……………貴利矢、1つ頼まれてくれるか？」

聞かれた時、俺はきつと鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしていただろう。頼まれるのも、下の名前で呼ばれたのも初めてだったからだ。

「このデータ、消去ができればセキュリティはすべて止まるが、問題があつてな……………管理者のパスワードがなければ実行できない。無理やりできなくもないが……………それをやると防衛セキュリティを刺激する」

「……………つまり、あのクロノス軍団を俺一人で食い止めるつてか？」

「頼む」

何でだろうな。あれだけ憎んだ相手なのに、協力しようとする俺がいる。

「…任せろッ!!」

「……………よし、行くぞー!」

黎斗がボタンを押した途端、警報が鳴って部屋に大量のクロノスが駆け込んできた。

「おおりゃあ!!」

入ってきたクロノス達を押し戻し、扉を閉めて蓋をする。

「よっしやあ!……げえ!」

ヤワな材質ではないはずだが、クロノス達のパンチや体当たりでどんどんひしゃげてきた。

「おおい!あとどれぐらい稼げばいいんだ!」

「5分頼む!」

無理かとも思いつつ、必死で扉を押さえつける。とうとう扉に亀裂が入り、わらわらとなだれ込んできた。

「おえ!動きキモ!」

「…よし、25%完了した!もう少し頼む!」

「ちくしよお!こうなりややけだ!食らいな!」

【爆走・CRITICAL STRIKE!】

がむしやらに敵に向けて突っ込んだ。扉をくぐり、殺到していたクロノス達を跳ね飛ばす。

「うし!……おわ?!」

急にバイクが急停止した。何事かと前を見れば、真っ黒なハイパー無敵ソルティがバイクの前輪を掴んで止めていた。そのまま投げ飛ばされ、出たばかりの部屋に俺は飛び込んだ。

「ぐ……………くそ……………」

意識がかすみ、視界がボヤけた。そんな俺を、誰かが助け起こした。

「黎斗…お前、装置は……………?」

「安心しろ、向こうでやってる。あとな、俺の名前はキッドだ。間違えんなよ?」
額にデコピンをされ、ようやく意識がはつきりしてきた。

「……………お前、ドレミファビートのキッド!?!」

「よろ。仲間の仇討ち……………俺も混ぜろや!」

わざとらしく歯を見せ、にやりと踊王が笑った。

「協力するぜ、兄弟?^{ブラザー}」

「お生憎様。俺には兄も弟もいねえよ」

「ノリ悪いな。女にもてないぜ?」

ノリか……………いいね。久しぶりに聞いたぜ。それ。

「よっしゃあ!ノリに乗ってくぜ!!」

お互いわざとらしくハイタッチしてそのまま握手した。

「行くぜ兄弟!」

「おし……………あれ、そーいやおめさん……………」

ダンス以外でできたつけ?と聞こうとキッドを見て、俺は息をのんだ。

キッドの手の平に。パワーボール？らしきものが浮いている。

「おま、それ……………何？」

「説明は省くけど、俺にはベイオウルフの、マオの力が宿ってる。この程度の軍団なら……………余裕だ。「クダケチール」!!!」

キッドが投げたボールが爆発し、クロノス軍団が突風に吹かれた塵みたいに吹っ飛んだ。

「強……………すぎ……………」

俺の苦労はなんだったのか、そう思い俺は天を仰いだ。

「援護頼むぜ兄弟！」

「俺は……………お前のおまけじゃねーし！」

向こうにそんな気はないだろうが、援護する奴||前衛が最強の場合いてもいなくてもいい奴と言う思いが強い俺としては複雑な気分だ。

「すげえぜキッド！これなら行ける！」

37話：覇者の決意

初めは、たまたま彼女のデータを見つけた時だった。

人間の女が入っていること。帰るべき場所があること。

初めは、彼女が住んでいた場所に返そうと思っていた。

特に大きな理由はない。打算のない善意と言うものだ。

彼女の身体を構成して、彼女をこの世界に解き放った。

姿を見た時、ただ単に綺麗な方だとは思わなかった。

自我を入れるだけと言う時になって、興味が生まれた。

この女の人として歩んだ人生を見て見たいなと思った。

もちろん迷惑この上ないことだし、許されないことだ。

そして身体をデータ化し、機械に滑りもこませて見た。

記憶の世界での彼女は、よく笑う女性だった。

鏡飛彩と言う男を愛していた。

彼女は男と話し、幸せそうだった。

俺は、彼女のことを好きになっていく自分に気付いた。でもいい。それで君が幸せな

ら、俺はこの気持ちで諦めることができる。

だが彼女はある日、病気になった。「バグスターウイルス感染症」 治す方法がまだ完全には確立されていない病気だった。

痛む体を引きずり、愛しい男のもとに彼女は向かった。

だが、男は彼女のことを、小姫を見ていなかった。

参考書を一心に読み続け、適当な相槌で相手をしていた。

——なぜ小姫を見ない？小姫はお前を見ているのに——

小姫は声を荒げ、男のもとを去った。

だが、小姫は男を嫌いになったわけではない。相手をしてくれない男に一時的に腹が立ったのだ。

帰り道の途中、小姫はその場に倒れこんだ。

過剰なストレスにより、病気が悪化したのだ。それも急速に。

——苦しむ小姫を、見てもらえない——

手を握ろうとしたが、ここは記憶の世界。小姫に触ることはできず、ただ手は空を切った。

……ようやくあの男が来た。いまさら何をしに来たというのか。もう小姫は助からない。

「飛彩……………世界で一番の……………ドクターになつて……………」

最期の言葉を残して、小姫は消えた。

——なぜだ、なぜ小姫を見なかった？ お前がちやんと彼女を見ていれば、ある

いは結末は違つたかもしれないのに——

——小姫、あんなクソ男のどこがよかったんだ…俺なら絶対君から目を離さない。ずっと君を愛す。ずっと大事にする。約束するよ。絶対に泣かせないし不幸にしない……………大丈夫だ。俺がこれからもつと幸せな未来を君にあげる。だから——

「だから、俺を見てくれ。小姫」

現実世界に戻り、俺は小姫の瞳を見た。

改めてみる彼女の顔は、相変わらず虚ろだったが……………それでも、とても愛おしい。抱きしめたい衝動にかられたが……………それを耐える。

「君が目覚めた時、最初に見るのは……………俺だ」

優しい君に、恋をした。美しい君に、恋をした。

「俺の剣も、何もかも、全てを君に捧げるよ。俺は君の、騎士になる」

38話：愛の証

鏡飛彩視点

敵と戦いを始めてどれほど経っただろうか。吹き飛ばされ、たたき起こされ、また転ばされ、引き起こされ……体中が痛む。視界がかすみ、膝が啜う。

明らかに向こうの方がこちらよりも強い。決して勝てない敵。レベル差の激しい敵。何度も諦めてしまおうかとも思う。

だが、その度に小姫を思い出す。

「世界で……一番のドクターになって」

……一度目は……失った。

「セカイデ、イチバンノドクターニナツテ」

……二度目は、自分から諦めた。

「……今度こそ、君に会う」

この三度目は、奇跡だ。きつと、ここで俺が諦めたら、俺が負けたら、小姫、君に一生会えない。そんな気がする。だから諦めない。たとえ死のうと、立ち上がり続ける。

「ま……だ……だ……だ……！」

「……………そうやって、足掻き続けていれば光明が差すと思ってるのか？ 愛する女のために一生懸命なお前に、俺が同情して勝ちを譲ってくれるとでも思ってるのか？」

……………本当にそうならどれだけ楽か。先ほどから手加減も遠慮もない。正々堂々と正面から吹き飛ばし、たたき起こし、また転ばし、引き起こしてくる。

「俺は……………小姫！お前を愛してる！」

心から吼え、立ち上がるが、そんな俺を奴は殴りつけた。

「ふざけるな！ ならなぜ最初からそれを小姫に言わなかった!？」

「な……………お前……………なぜ……………知っている?」

俺と小姫しか知らないはずの事を知っているような言動を放った奴の言葉に、俺は困惑した。

「彼女の記憶を……………盗み見た。小姫はお前には託せねえ。俺は……………彼女を……………あの子を殺したお前を絶対に許せねえ！ 俺は負けたくなかったんだよ！ 俺は、お前に負けたくなかったんだ！」

そして俺は理解した。こいつは小姫が好きなのだ。そして、俺を憎んだ。無能な俺を。彼女の死の責任から逃げた俺を。逆の立場だったら、きつと俺も同じことを思う。こんな男に彼女任せられない。彼女にこいつはふさわしくないと。

「…それでも俺は、小姫に会う！絶対に！もう一度！取り戻す！小姫の笑顔を！」
もう一度、笑顔が見たい。小姫の笑顔が見たいと思っていた。でも、それは嘘だ。
俺は俺を見て、笑ってくれる小姫を見たいんだ。俺以外の男に、絶対に取られたくない。

「ライダーゲージは残り1コマ………いいぜ。終わりにしよう」

奴の剣が稲妻を帯び、輝いた。輝の眩さに眼が眩みかけた俺にエナジーアイテムが投げつけられる。

「それで俺と思お前は五分だ………来い！」

【マッスル化！】

【TADDLE！CRITICAL FINISH！】

「うおおおおお!!!」

決死の覚悟だった。相打ちで死んでもいいときえ思えた。

俺は見た。

奴が、自分の剣を投げ捨てるのを。

無防備に俺の前に走りこむのを。

俺の刃が、奴の胴体に滑り込んだ。

父の覚悟

……目の前に、敵が立っている。俺よりも強い敵だ。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀と滑った 後
ろの正面だあれ？

「いつまで勝つ見込みのない戦いを続けるつもりなのだ？」

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に 鶴と亀が滑った 後
ろの正面だあれ？

さあな。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に つるつる滑った 鍋
の鍋の底抜け 底抜いてたもれ

「諦めるのを勧めるが？」

かごめかごめ 籠の中の鳥は いつもかつもお鳴きやある 八日の晩に 鶴と亀が
滑ったとき、 ひと山 ふた山 み山 越えて ヤイトを すえて やれ 熱つ や

嫌だね。

籠目籠目 加護の中の鳥居は いついつ出会う 夜明けの番人 つるつと壁が滑った

後ろの少女はだあれ？

「……………なぜ戦う？勝てぬと知っておきながら……………何がお前を動かす？」
かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出会う 夜明けの番人 鶴と亀が滑った 後
ろの少女はだあれ？

決まってるだろう。

通りゃんせ 通りゃんせここはどここの 細通じや天神さまの 細道じや ちつと通し
て 下しゃんせ 御用のないもの 通しやせぬ

「なめんなよ……………俺は……………お前の父親だ！」

この子の9つの お祝いに お札を納めに まいります 行きはよいよい 帰りはこ
わい こわいながらも通りゃんせ 通りゃんせ

叫びながら、俺は、仮面ライダーパラドクスは構えなおした。

39話：TADDLE世界に願いを込めて

鏡飛彩視点

……………何が起きた？

「……………お、おい!!」

何故。なぜ自分から死ぬような真似をしたのか。意味が分からなかった。あれほど恨んでいた俺に、なぜ勝ちを譲ったのか。

「……………マッスル化で上昇する攻撃力はレベル換算で元のレベルの10倍。お前のレベルは一時的に1500。一撃だが、レベル200の俺を殺すには十分な威力だ」
「なぜ自分から俺に殺されに行っちゃった! どういうことだ……………うっ?」

奴の所へ向かおうと足を踏み出したが、変身が解けて俺はその場に倒れこんだ。勝つたとはいえ限界だったのだ。立つ力が残っていないことに全く気付かなかった。

「俺は……………お前が憎い……………大嫌いだよ……………」

奴は、スレイヤは立ち上がり、右手で腹を抑えながら小姫の元へ歩いていった。

まさか、間違った記憶を植え付けるつもりなのか、反射的にそう思った。

「ま、待て!」

「安心しろ。今更ずるはしねえさ……………」

スレイヤはしっかりと青い電極を掴み、小姫の腕に優しく、指輪でもはめるようにゆっくりと刺した。

「勇者ブレイブ……………いや、鏡飛彩。俺はお前が大嫌いだ。お前はあの時、あの子と小姫を死なせた。だから、俺が小姫を幸せにしたかった」

「ちよ、ちよつと待て、あの子……………とは、誰だ？」

スレイヤは少し怪訝そうな顔をした後、「お前は知らなかったか」と一人で勝手に納得した。

「小姫のお腹には……………子供がいる。お前の子だ」

「な……………に……………？」

「このことは多分、小姫本人も、お前以外の人間たちも誰も知らない。小姫も子供もバグスターだが……………それでも変わらず、ここにいます」

信じられないと、俺は首を振った。普通なら、あの時CRにいた時点で妊娠していると分かっているはずだ。

「妊娠1日目……………それが子供の死んだ時だ。妊娠5週を過ぎないと、超音波ではまだ胎囊が見えないから誰も気が付かなかった」

「……………知らなかった……………」

「いったい自分はどれだけ小姫を見ていなかったのだろう。自分が嫌になる。

「何度も言うが、俺はお前が大嫌いだ……だが、小姫が求めているのは……やっぱりお前だ。お前に任せる。お前が彼女を幸せにするんだ」

「……お前は、俺を殺す勢いで来ていただろう、どうしてそんなことを言う？」

スレイヤはしばらく俺をじつと見つめ、やがて口を開いた。

「お前と戦っているとき……いや、お前が立ち上がるたびに、小姫の顔が悲しげに歪んだ。分かっているんだな。記憶がなくても、自我がなくても、自分にとって一番大切な存在が小姫の中から消えていない。

それを見た時、俺の中から、お前と戦う意味が消えた。お前の勝ちだ」

スレイヤが掌を回すと、空中から二つの指輪が現れた。

「彼女にはめてやれ。お前の仕事だ」

咳き込んだスレイヤが、血のようなものを吐いた。体が透け始めていて、消滅するのは明白だ。

「……嫌なもんだな。世界で一番好きな女が、世界で一番嫌いな奴のものなんて……いや、これでいい」

「……ここにも、いた。出合い方が違えば、仲間にもなれたかもしれない男が……
「見てろ？もし彼女を泣かせたら、地獄から蘇ってその首飛ばしてやる」

「……………ああ。その時は……………存分に俺を殺せ」

「……………使え」

指輪と一緒に、「バッドレガシーガシャット」を渡された。

「……………感謝する」

スレイヤがその時になって初めて…笑った。そして、完全に消滅した。

「……………飛彩？」

……………愛しい、声がした。

恋焦がれた、求め続けた声。

いつか、必ず取り戻すと誓った。

君の声が聞こえた。

「……………小姫」

立ち上がって、走り出す。限界を超え、立っていられなかつたはずなのに、走れる。

やっと、やっと追いついた。俺のこの手が、君に追いついた。

状況を把握できていない小姫を抱きしめる。

「飛彩……………どうしたの？ 怪我だらけ……………」

どうなっているのか聞くよりも先に、先に俺なんかのことを気遣ってくれる彼女が愛おしくて、抱きしめる力が強くなる。

「小姫…渡したいものがあるんだ」

指輪を彼女に見えるように見せ、微笑みながらその言葉を告げる。

「小姫、愛してる。俺と、結婚してほしい」

小姫は驚いたように目を見開き、やがて破顔した。

「…はい…！」

ここまで、長く、苦しい道のりだった。

一度目は、失った。

二度目は、諦めた。

三度目に、追いついた。

ここまで、苦しく、辛い道のりだった。

たぶん、それはまだ続くと思う。

でも、未来に希望はある。

だから、願おう。

俺と小姫の未来が、幸せと希望に満ちているように…

願おう。

二人の、これから——辿る世界に願いを込めて——

40話：大我の決意

花家大我視点

威勢よく戦いを始めたまではよかったが、相手のレベルをまるで考えていなかった。そもそもな話、俺のレベルは低い。ブレイブが150になっていて、レーザーはX(ブレイブ)のせるのと相乗効果で約100)なのに俺ときたら50止まり。

対して向こうは不本意な改造を施されたとはいえ抜群のパワーを持っている。間違いないくすすべての性能がクロノスより上だろう。

「……………くそー!」

近づけばあのフアングの餌食になり、遠くから撃ち合いになれば今度は3つの重火器に蜂の巣にされる。しかもそのどれもが必殺級の力を持っている。勝てるわけがない。

……………力の差……………か……………

前に俺は負けたことがある。絶対に自分が勝てると思っていたのにもかかわらず。

敵の名前は錆ゲム。宝生現夢。

俺のレベルは50。現夢は4。

なのに敗けた。

ぐうの音も出ないほどボコられて、拳句の果てには肩を外された。

力の差をものともせず、俺なんかが考え付かないような策にはめられ、あつという間に追い詰められた。

本当の強さが、あの戦いの中にあつた。技術と、覚悟と、意地を全て混ぜて、全力かつ最速で俺を仕留めた。

やられて悔しかったが、俺はそれ以上に心が躍った。

レベルの差が、絶対的なものだと思っていた。

昔、ゲムと戦ったことがあつた。ゲムのレベルは3で、俺、ブレイブは2。レーザーは1だった。三対一でレベル3に立ち向かい、あつけなく返り討ちに合つた。

高々レベル1の差は、絶対的なものだと理解した。

俺はそんな数字の上での理不尽を、いつの間にか受け入れていたんだと思う。ゲムがデンジャラスゾンのレベル10の力を得て、レーザーを殺した時も。

だが、現夢はそれを覆した。エグゼイドにジュージュバーガーと同じレベルで俺を倒せといつても無理だろう。レベルはただの性能だ。乗りこなす人間が有能なら、力の上限はいくらでも超えられる。

俺も超えてやる。

「限界なんて壊してなんぼだろ………！」

近づきもせず、離れもせず。どっちつかずの戦い方をしていた俺が初めてまともに動いた。

背を向けて、全力疾走で逃げ出す。恥も何も無い。正面からは無理！後ろから撃たれないことを祈りながらただ走る。

「うおおおお!!」

体の横を何度か弾丸やミサイルのようなものが通り過ぎていったが、無視。

機材が山のように積まれている場所の裏に逃げ込んで一息をついた。

「やってやるぜ………現夢！あんたみたいに！」

どこまでやれるかわからない。でも、絶対に勝つ。

その時の俺はそう信じていた。

41話：純愛ラブソディ

「よしよし……いくらでも撃つてこい……」

機材の山に転がり込むと、案の定大量の弾がこつちに飛んできた。

「頼む………うまくいけよ………！」

【BANG BANG CRITICAL FIRE!】

床の少し剥がれかけているタイルに目星をつけ、足元に思いきり発射した。

「……………よし……」

予想道理に大きな穴が開き、その中に飛び込む。敵の位置は覚えている。その方向にもう一度決め技を放つ。

【BANG BANG CRITICAL FIRE!】

即席のトンネルを作り、自分の勘を信じて外へ飛び出した。

「もらったぜ！」

俺が飛び出した場所は、まさにラオロンの真後ろだった。この一撃に、全てをかけて

……………!

【BANG BANG CRITICAL FIRE!】

それは、まさに発射の直前だった。俺は、大切なことを忘れていた。相手はドラゴナイトハンターZのラスボスバグスター。竜なら当然、尻尾がある。不可視の速度で振るわれたその尾が、俺の脇腹に深くめり込んだ。

「ぐはっ……」

吹っ飛ばされて俺は転がった。優に2〜3mは転がった。回転が止まった俺の体に、ラオロンの大量の重火器の弾が俺のもとに殺到した。

「あゝ あ——!!!」

変身が解けた。燃え始めている白衣を急いで脱ぎ、通路の角に逃げ込んだ。

……畜生、痛え。……地割れのような大きな足音がこつちに近づいてくる……立っ力もない。……死ぬのか。俺は。

……音が、聞こえる。足音だ。

軽快な音。それが素早く近づいてくるのが分かった。

脇が重く、開けない。

華の柔らかい香りが、俺を包んでいる……ような、気がする。

……引きずられているのか、俺は？

……
……
……

だ。

「どんなことが起きようとも、後悔しませんか？」

「……………ああ」

こいつがここまで真剣に聞いてくるなら、よっぽどの事なんだろう。俺は理解した気になって、頷いた。

「……………分かりました。では、そのガシヤットを私に貸してください」

「……………何をやる気だ？」

俺は訝しみながらもガシヤットを手渡したが、エリーゼは無視した。

そして、急に妙なことを言い出した。

「時に大我様、この世で一番強く成長させる感情、何だかわかります？」

「……………あ？」

「私が思うに……………それは、「愛」です」

そう言いながら、エリーゼはゆっくりと、強く、ガシヤットギアデュアルβを胸に突き刺した。

「……………え？」

俺は、一瞬何が起きたのかわからなかった。そして、その重大性に気付いた時にはもう、手遅れだった。

「エリーゼ!!」

倒れた彼女を抱き上げた。苦しそうに、しかし薄く微笑んでいる。

「お前、どうして……………」

「力が発動できなくなっても、私はラスボスバグスターです……………私の力を貴方のガシャットに移せば、きつとお役に立てます……………だから……………」

分からない。なぜここまで、こんなことができるのか。俺には理解できなかった。

「どうして……………俺にここまでするんだ?」

「大我様、お慕いしております……………」

それは、理解せずとも、理解していたこと。だけど、俺は……………

「マジむかつく!」

「あんたなら倒せるんでしょ?ゲームMを」

好きだといわれたその時、俺の頭に浮かんだのは別の少女だったから。

嘘は言わない。彼女の覚悟を、踏みにじれない。

「……………俺は、お前を愛してない」

それは、あまりにも残酷な言葉。だが、それを聞いた彼女は、優しく、美しく微笑んだ。

「もちろん、承知していますわ」

そして、消えた。

それが、彼女の、リリム・シフォンIIエリーゼの最期だった。

俺は、泣けばいいのだろうか？

泣く資格があるかどうか、分からない。

ただ、一つ言えることがある。

俺の信念が、少し変わった。

「全て」のバグスターをぶっ潰す」

その思いは、もう俺の中から消えていた。

「有難うな……もし俺が、バグスターを憎んでなかったら、ニコより先にお前に会ってたら、きっと俺は、お前のこと……」

床に転がるガシャットが、光を放っていた。それはまるで、彼女の命の灯が映移ったように見えた。

拾い上げて、固く握り締める。差し込む部分に、少し触れるか触れないか、キスをした。

【BANG BANG GENERATION!!!】

起動したガシャットの声は、よく聞いた女の声でした。

42話：未来へのSHOOTING

「俺なら、ここだ……」

通路の角を曲がり、俺はラオロンと相対した。互いにしばらく、しかしほんの僅かに見つめ合った。

「決着………つけようぜ」

【ガシヤット！ガツチャーン！ランクアップ！】

最終戦だアーー!!!全軍突撃！BANG BANG GENERATION!!!

空中から豆戦車が落下し、俺はそれに乗り込んだ。

主砲の部分が丸々座り込む部分になっていて、入ろうとしても腰までしか入らない。

「何だこりゃ………まあいい！」

取りあえず操作方法もわからないが、「動け」と念じるだけで行きたい方向に動けた。そうこうしているうちに、ラオロンが武器を俺の方向に向けて撃とうとしたが、そこに誰かが割り込んだ。

「あれは………俺？」

そこにいるのは、どう見てもバンバンシューティングの仮面ライダースナイプだっ

た。何でおれがもう一人……？いや、一人じゃない。周りをよく見ると、何十人もいる！

「な、何だあ!？」

バンバンシューティングのスナイプが15人。ジェットコンバットのスナイプが10人。バンバンシミュレーションが5人。そして俺を含めて豆戦車が3台。

自分の周りを取り囲む自分自身。気が狂ったのかとさえ思ったが、思い当たる節がある。

このガシヤットを作った、エリーゼのかつての能力。眷属召喚。

門番、近衛兵、側用人からなる三体の戦士たち。

しかし、ここまで多くなかったらう。何がどうなればこんな大人数に……

「まあいい！ 総員戦闘態勢に入れ！ 目標12時の方向、ラオロン！ 歩兵部隊は8、7

人にそれぞれ分かれて左右から牽制射撃！ 戦闘機！ 五人ずつに編隊を組んでラオロ

ンの空中を旋回しつつ爆撃しろ！ 軍艦！ それに戦車！ 俺と来い！ 前方から一斉

放射！」

「「「イエッサー!!」」」

一気に全員動き出した。そのさまが、少しだけかつて自分の学生時代の運動会を思い出したが、すぐに首を振った。

無数の弾がラオロンにぶつかり、大量の爆炎が上がった。

「ガアツ……………イイゾ……………ヤット……………アイツラノトコロニ……………行ける……………」

ラオロンが初めて見せた笑顔。一瞬、支配から逃れられたのだろうか。

しかし蛮野の支配は消えていない。遠距離武器を持った3本の腕が俺の方に向き、弾を放ってくる。本体の俺を仕留める気なんだろう。

「後は俺と二人きりだ！」

向こうが撃つよりも早く戦車で体当たりし、吹き飛ばした。

「行くぜ……………ブレイブ！」

懐から半賭けになったバンバンシユミレーションガシャットを出し、決め技スロットホルダーに差した。

これはかつてブレイブがタドルレガシーとタドルファンタジー両方に同時変身するために両断したもので、シユミレーションの方は使われなかったために俺が持っていたものだ。

「……………あばよ……………」

【BANG BANG CRITICAL FIRE!】

【BANG BANG CRITICAL BURST!】

豆戦車から出ている上半身にバンバンシユミレーションを装着し、下半身は戦車。

二つの主砲から眩いばかりの光が飛び出し、ラオロンの撃った弾までも飲み込んだ。そして、決着がついた。

43：最終決戦開始

蛮野視点

「ルーフマン……………！初めから私を捨てる算段だったというわけか……………！ふざけおつて!!」

繋いでいた機器を投げ飛ばし、あたりにおいてある道具類を手当たり次第に破壊した。

「追いついたぞ！蛮野！」

背後から泊進ノ介がタツクルして、さらに無防備な上半身の後頭部をエグゼイドに殴りつけられた。

「ああ!!!どいつもこいつも私の邪魔を!!!殺してやる!!!」

怒りに身を任せ、掴みかかってきたドライブの首を掴んで地面にたたきつけた。

「貴様らなんぞ、いつでも殺せたんだ！丁度いい、二人とも殺してやる！」

その瞬間、壁を破ってGalactic Nova・circularが現れた。

「おお！サーキュラー！いいところに来た！二人を……………」

殺せ、と言おうとした瞬間、サーキュラーに攻撃を受けた。

「な!? 何のつもりだ!? お前の主人は私だぞ!」

「アア? シラネエナア。スクナクトモ、オレハオマエノナカマジヤナイゼ?」

……………! 声は同じ……………だが、似ても似つかぬ口調。

「貴様何者だ! 姿を見せろ」

「オレガインドウワタシテヤルゼ…………… 蛮野オ!!」

最後のセリフで、何とパラドクスがサーキュラーの中から飛び出してきた。

「何!?!」

そのまま顔を蹴飛ばされ、倒れこんだ。

「ぐっ……………バカナ! ハツキングしたというのか!?!」

「違うな。ここの研究所内の全部のセキュリティが落ちたんだよ。サーキュラーもうた

だの鉄屑だ」

なぜ? どうしてそんなことに……………おのれ……………

「おのれ!!!! どのいつもこいつも!!!! 何なんだ!!!!」

「お前の行いのツケだろうが!!!! 先に向こうに行った奴らにあつてこい! ……………お前

が消えるのを、地獄で待ちかねてる人が大勢いる……………!」

より怒り狂うと思っていたが、蛮野は低い声で笑い始めた。

「……………何がおかしい？」

「クヒ……………ヒヤハハハア!!!パラドクス！よくここに私の鎧を持ってきてくれた！」

「……………ああ？」

いうが早いか蛮野はサーキュラーに駆け寄って天辺のコアを破壊した。

「お前……………まさか……………」

蛮野が自分の掌をサーキュラーに触れさせると同時に、サーキュラーが真つ二つに割れ、蛮野の体の中に吸い込まれた。

「さあ、恐れおののくがいい!!この私の新たなる力！ゴルドドライブ「インベードアーマー」だ!!!」

サーキュラーと合体した蛮野はどこか永夢のマキシマムマイティXと似ていた。

「食らえ！極・重加速!!!」

「う……………お……………!?!」

永夢のハイパー無敵を動けなくしたサーキュラーの重加速。あれは俺には効かなかったが、今度のは質が違うみたいだ。全く動けないことはないが、俺もゆつくりとしか動けない。

「見たか！貴様はもう、私に殺されるしかないぞ！」

「どうかな……………クロック・アップ！」

体感的には変わらないが、加速したことによって普通に動けるようになった。

「バカな！それはかつてゼクトで行われていた技術……………！ どこでそれを!？」

「ハツ…さあな。強いて言えば……………あの世から？」

真面目に答えたつもりだが、蛮野は「ふざけるな！」と激高した。

「蛮野！お前がその鎧とやらを身に着けるなら、俺も変身させてもらうぜ……………？」

行くぞ。マックス超変身……………！」

44話：V.S. スタードリーム

「マックス超変身」

「ガシャット！ガッツチャーン！FUSION DUAL GAME！」

「強化パズル連鎖！強い拳殴打！ゲーム世界交差！

Let, Game! Mett ya Game! Mutcha Game! Who are you?

I, ma Perfect Fighter」

「おお……………見た目はそこまで変わらねえな」

正直、Obiパラドクスや他の連中と融合しているし、多少は見た目が変わると思っていた。

ところがどっこい、変わらなかった。まあ、唯一変わったものと言えば……………

「目……………か……………」

元は真っ白だった両目の部分。錆色なのは、きつとあの人の……………

「待たせて悪いな。じゃあ殺し合い……………もとい一方的な殺戮の始まりだ」

「ぬかせ！貴様の動くパターンや武器は全て把握済み……………!?!」

「オイオイどうした？ たかが矢が刺さったくらいで何驚いてんだ？」

俺が使った武器は、ソニックアロー。かつてバロンと名乗った男が使っていた武器だ。

「死んだ連中が生前使っていた武器はすべて俺が使える。当てが外れたな蛮野？」

弓を後ろに投げ捨て、ホースオルフェノクが使っていた盾を出して蛮野に体当たりをした。

「うがッ……、この………?!」

盾で蛮野の視界をふさぎ、不意に用意したエターナルエッジで肩口付近を思い切り刺した。

「ぎゃあああ!!」

「おい、一丁前に痛がつてんじゃねえよ。どうせ機械。痛みなんてねえだろうが!」

しかしこいつ………弱いな。いや、油断するな。何かの罠の可能性も………

「ぐおッ! くそおお!!」

………まさか、本当に何もいいのか？ 何も？ あれだけ啖呵切つて、あれだけ多くの人の命を奪つて、自分の作ったロイミュードの命を弄び、バグスター達さえ巻き込んだこいつが？

「お、おい……………蛮野……………お前の研究所の兵器……………誰が作った？」

不意に蛮野は動きを止め、吐き捨てるように言った。

「すべて宝生現夢がやった。私は何もしていない」

「……………は？」

「こ、こいつ……………自分は何もせず？ただ指示だけしてここまでふんぞり返ってやがったのか？」

あれだけ人の人生狂わせておいて、こ、この……………

「……………蛮野！お前の顔はもう見たくねえ！この世から消えろ！！！」

俺は、ついに手加減を捨てた。目の前の不快な鉄塊を壊すことに全てを出す。殺す。壊す。自分の衝動に身を任せ、全ての思考を捨てる。

「……………吹き飛ばせ！」

真下に潜り込んでの掌底。蛮野の体がロケットの打ち上げほどの速度で雲へ向かっていく。俺自身もアंकの翼を出して飛翔し、すぐに蛮野に追いついた。

「くそおくそお！！何故だ！現夢が作ったこのインベードアーマーは、レベルにしてトリリオン兆に匹敵する力のはずだ！貴様なんぞに、敗ける…はずが……………」

「そーいや俺もお前にレベルを言っただけな。俺はバグスターのパラドクス。

レベルアンデシリヤードだ」

「……………は、あ?」

レベルの差は、基本的に絶対的。多少は工夫や策でひっくり返せるが、どうにもできないものは往々にしてある。

「だ、だが! まだだ! 私が負けるなど、ありはしない!」

「無駄だ。お前が身に着けてるインベードアーマーは直に爆発する。それでお前もろとも吹っ飛んで終わりだ」

「な、ならばこれを脱いで貴様を殺せば私の勝ちだ! ……………あ? な、なんだ! ? 解除命令が正常に働かん! ?」

俺は思わず額に手を当ててため息をついた。こいつはどこまでアホなんだ。

「あのなあ、もうすぐ爆発するぐらいぶっ壊れてる機械だぞ? 正常に動くわけねえだろうが。お前はそのまま逃げることもできず、そのまま空中で吹っ飛ぶ。さっきも言ったろ」

俺は徐々に速度を落とし、天へ昇っていく蛮野を見送った。何か叫んでいたが、もう聞こえない。

「せいぜい恐怖に沈んで死ね。……………あの世であいつらに土下座して来い。蛮野」

目も眩むほどの爆発。太陽がもう一つ増えたかのようだ。

「さて……………帰るか」

俺は翼をたたみ、研究所へ向かって落ちていった。

最終章：セカイシユウエン

そして永遠に眠り続ける世界へ

蛮野視点

「ハハ、ハハは……………」

私はあたりを見回した。自分が設定したはずの研究所の最深部に念のために作っておいた義体のおいてある部屋ではなく、それどころか体は義体でもなくタブレットだ。

「一体……………」

「お、終わったようだな」

呆然とつぶやくと、一人の男が部屋に張つてきて、私の存在に気付いた。

「貴様ツ……………ルーフマン!!」

「よう蛮野、予想通り時間だな。4度も死んだ気持ちはどうだ？」

攻撃しようとするが、全く動くことができない。当り前だ。タブレットが人を殴れるはずもない。

「お前はもう用済み……………俺はそういつたな？ならば、お前はこの世から消えるべきだ。何せ、この俺が直々に用済みと教えてやったんだからな？そうだろ？蛮野」

「ふざけるな！このッ」

ルーフマンは手慣れた手つきで私をタップし、項目をいじった。画面にウィンドウが現れ……………

《データ：banno.exeを削除しますか？》

《「はい」「いいえ」》

《データ容量：3.9GB》

「ヒツ……………やつやめろ！貴様

「黙れ。今お前は誰に向かって「貴様」と言った？俺は全知全能の神だ。まあ多少の狼藉は見逃してやる。もう会うこともなからう。わざわざ詩島剛がお前を殺そうとしたとき、バックアップを取って暗に助けてやったと言うのに、お前は実に使えなかった……………」

恐らくルーフマンはあらかじめ私の研究所の機械を破壊し、設定を変更して私のデータが奴のタブレットに行くように仕向けたのだろう。私をこの世から完全に消すために。

「はい」をタップされ、私の意志や記憶が消えていく。

処理%が80を超えたあたりから、もう自分の名前もわからない。

「お、お前は……………一体……………」

「教え……やろう……俺は……この……世界に……復讐する……」
それを聞き届けることなく、私のデータは完全にこの世から消滅した。

だが、全てが終わったわけではない。

これは、宝生現夢にさえ教えなかったこと。

私のすべてをつぎ込んだ、究極の破壊者。

私のデータがこの世から消えると同時に、それは世界に放たれる。

私が行おうとしていたものは、飽くまでこの世界を手に入れること。

グローバルフリーズ3、それが私がいままで行っていた計画。

ETERNAL GLOBAL FREEZEは全く別の計画だ。

手に入れられないのならば壊してしまえ

これは呪いだ。

全員殺せ。

世界を滅ぼせ。

私の生涯で、私自身を含め、唯一の成功作、私がこの世から消えるなら、この世も消えればそれでいい。

それで私は手に入れるんだ。

この世界を。

さあ、共に眠りにつこう。

私と世界はいつまでも一緒だ。

永遠とわに眠り続けるセカイで

開幕：I ⊠ m a Lasboss Bugstar

永夢視点

蛮野とパラドが飛び出し、決着がついた直後ほどになつて、気絶した泊さんを介抱していた僕は不意に蛮野の研究室の一角が強い光を放っているのを見つけた。

「これは……………」【バグスターズ】ガシヤット？ 一体……………」

見たこともないガシヤット、誰が作ったものなのかもわからない。その銀色の光が徐々に強くなつて……………」

【End game! Load game! Chronicle game!
Last Stage! The FINAL Bugstar!】

僕は忘れていたことがある。

数々いるかつて戦ったラスボスバグスター達。

その中に一体だけ、出てこなかった奴がいた。

僕の記憶の限りで、最強のラスボスバグスター。

仮面ライダークロニクル、ラスボスバグスター。

「ゲーム……………デウス……………」

「フッフッフッフッフ……ハッハッハッハッハッハッ!!!」

大声で笑いながら、ゲムデウスが剣と盾を召喚した。

「久しいなエグゼイド！息災か!？」

「……………ゲムデウス……またウィルスをまき散らしてパンデミックを起こす気か!？」

僕がそう言うと、ゲムデウスは申し訳なきように目を伏せ、静かに頭を下げた。

「……………あの時は、檀正宗に思考ルーチンを変えられていた……………言い訳がましいことだが、本意ではない。ゲームとは関係のない一般市民を巻き込んだこと、恥ずかしく思う……………申し訳ない」

「えっ……………?」

そこまで真剣に謝られてしまうと、どうすればいいのか分からない。

「ゲムデウス……………君は一体……………」

「我が名はR リスボンe : ゲムデウス！この世界に終焉をもたらす正当な資格者なり！」

「終焉!？」

「左様。ラスボスバグスターの中で最も強大なこのゲムデウスがラスボスとして最後に降臨し、主人公であるプレイヤーたちと戦う！正しい仮面ライダークロニクルの最終ステージなのだ！」

……………やっぱりこいつ、敵か！

【ガシヤコンキースラッシュヤー！】

キースラッシュヤーを出し、僕は構えた。ゲムデウスを見据えて。油断はなかった。

視線は外さなかった。

それなのに、僕はゲムデウスの攻撃をとらえることができなかった。

「……………あれ？」

急に転んでしまった。

起き上がろうとしても、体が…………

いや、下半身が言うことを聞かない。

どうした？

どうなってるんだ？

ゲムデウスの方を見ると、ゲムデウスと僕のちょうど真ん中あたりの位置に何か置いてある。

金色の、何か…………

下半身が、焼けるように熱い。

どうして僕は立てないんだろう？

ああ、

そうか、

あれは……………

切り離された、僕の腰から下だ。

使者：我とともに来たれ

九条貴利矢視点

「永夢!!!」

俺が何か不穏な空気を感じ、他のメンバーと合流して蛮野の研究室に入ると、奥の方に俺は信じられないものを見てしまった。

1つはゲムデウス。どこから出てきたのか、なぜかゲムデウスがいる。

2つ……永夢の下半身が、無い……………

「ゲムデウス！てめえええ!!!」

激高しながら、ゲムデウスに殴り掛かろうとするがゲンムに羽交い絞めで止められた。

「この野郎！放せ！」

「馬鹿！永夢を助けるのが先だ！優先順位を考えろ！」

ツ！そうだ。俺は致命的なミスをしでかすところだった。でも……………

「飛彩！お前は小姫ちゃん連れて逃げろ！キッド！扉の横に伸びてる刑事さんを頼んだ

！大我！永夢を頼む！皆、CRで落ち合うぞ！絶対！」

「それで君は時間稼ぎ役と言うわけか……いいだろう！私も付き合っただけでやる！」

俺は渾身の力でゲムデウスに体当たりしたが、まるでバットにたたかれたボールのように飛ばされた。天上にぶつかり、床にたたきつけられた。

無様な結果だが、それでもまあ時間は稼げたようである。研究室にはもう俺とゲムム以外誰もいない。

「うおおお！私のゲムデウスワクチンにかかればゲムデウスなど瞬殺だ！」

ゲムムが叫びながらゲムデウスに抱き着き、体から光を出し始めた。

よし、これで相手のステータスはグンと落ちる………

「………な、なんだ？」

落ちる………はず………なのになに!?

「き………効いていない………のか？」

「ふむ、何故かはわからないが、そのワクチンにはもう抗体ができています。残念だったなゲムム」

ゲムムがゲムデウスから引きはがされ、突き飛ばされて転がった。

「頼みの綱は切れ、隙だらけ………さらばだ。ゲムム」

未だ立ち上がれずにいるゲムム。その頭に、ゲムデウスが剣を突き立てた。

フォークに刺された料理のように持ち上げられ、ゲムムは打ち捨てられた。

【GAME OVER】

「ゲーム、デウスウウ!!!」

絶叫しながら俺はゲームデウスに何度も殴りかかったが、全て盾に防がれ、攻撃が届かない。

俺の記憶が正しければ、ゲンムの残りライフは1。

どれだけ待っても、

ゲンムは紫色の土管からあの不快な笑みを浮かべて出てくることはなかった。

あいつが死ぬなんて、考えたこともなかった。

いや、実際何度も死んでるが、そういうことじゃない。

いつでもあいつは帰ってきた。

それがなくなることが信じられない。

俺には、まだどこかであいつが生きているような気がしていた。

死者：我とともに滅ぶべし

「はあ……はあ………くそ！」

「敵にこんなことを言うのもおかしな話だが……逃げないのか？」

いくら攻撃しても、全て盾にはじかれる。たとえ通つたとしても、多分ダメージは入らない。

そんな弱い自分が情けなくて。敵に困惑されてる状況が悔しくて。それ以上に、逃げるという選択肢がなくて。

「へっ………ゲムムはマジで大嫌いだけど、一緒にお手々繋いであの世に行くのも悪かねえな………」

そんなことを本気で思えてしまうから不思議だ。

俺もどつかしらいかれてんのかね………

「だけど………どうせ逝くなら飛び切りの道連れが欲しいね。野郎二人じゃ寂しいわ」

【仮面ライダークロニクル】

「む？それは………」

「念のために持ってたんだ。どつかで俺が命張る場面が出ると思ってた………」

「……………レーザー……………勇氣と無謀は違うぞ」

「あ？」

「お前ではクロノスの力は完全には使えん。それに、クロノスの力が仮に使えても勝てん。エグゼイドがどうなったかは分かっているだろう？ 悪いことは言わん。このまま……………」

「何も分かつてねえな。おめさん」

勝てない？ そんなこと知ってる。力が使えない？ 承知の上だ。

「無謀も勇氣も同じさ。要はそれで生き残って美談か英雄譚になるか、死んではい間抜けでしたと終わるかだ」

少なくとも俺はそう思う。結局、生きたもん勝ち。なら、俺はみつともなく足掻くだけだ。

「行くぜ神！ 力貸しな！」

【ガツチャーン……………レベルアップ……………
天を掴めライダー……………刻めクロニクル！ 今こそ時は！ 極まれり！】

ドライバーに仮面ライダークロニクルガシャットと、デンジャラスゾンビガシャットと言う妙な組み合わせ。体が銀色に光り、デンジャラスゾンビの体色をしたクロノスに変身した。

「があ……………！ぐううう……………」

体中が痛い。やっぱり無茶だった。でも倒れるな。

「……………レーザー、貴様は、死の覚悟を決めたのではない……………」

生きることを諦めたのだな」

「来い！ゲムデウス！」

「あい分かった！貴様の気高き覚悟！全力で踏みにじることこそが真の礼儀！手抜かず戦おうではないか！」

ガシャコンスパローを出して振り下ろされたゲムデウスのデウスラツシャーを受け止めた。踏ん張った地面がへこみ、大きな亀裂が入った。重すぎる！

「受け止めたのは見事と言うべきか！ぬうえい！！」

体勢を立て直すよりも先に鳩尾を蹴飛ばされた。だが、痛みはあるがまだ立てる。ゾンビの耐久力だ。

「よもや、全力で蹴って変身を解除できんとは……………」

「へっ……………痛すぎて……………意識飛びそうだけどな……………」

視界が霞む。痛い……………痛い……………でも……………まだまだ……………まだ……………やれる……………

「良からう！焔の太刀……………ドラグーン！！」

「おわ!？」

デウスラッシャーの切っ先から龍の形をした炎が飛び出し、俺の方へと飛んできた。すんでのところで横に転がって躲し、ゲムデウスに向き直った。

「甘い！後ろを見よ！」

「何?！」

後方を見ると、さつき避けた炎の龍が生き物のようにターンし、再度俺に向かって飛んできた。

「くそー！」

【ライダーCRITICAL FINISH!】

スパローにクロニクルガシャットを差し込んでキメ技で相殺を狙った。

だが、放たれた無数の弓矢は弾き飛ばされて壁や天井に散ってしまった。勢いを衰えず炎の龍が俺に激突し、遂に俺の変身が解けた。

「ぐ……………う……………!」

「……………勝負あり……………だな」

「まだまだ」そう言って立ち上がろうとしたが、体が言うことを聞かない。

「く……………くそ……………!」

見ると、弾き飛ばされて天上に突き刺さった矢のせいで部屋全体に亀裂が入ってしまっている。

少しずつ、少しずつ亀裂が広がり、破片が落ち……………
やがて、建物全体が崩れ始めた。

「……………助けたいとも思うが、関係は敵同士。許せ、レーザー」
視界が瓦礫に覆われていく。

伸ばした右腕の上に鉄骨が落ち、挟み込まれてしまった。

俺……………こんな風に……………死ぬのか……………

ああ……………ついてねえな……………そんなもんか。

ひと際大きな瓦礫が、俺めがけて落ちてくる。

俺はそのままゆっくりと目を閉じた。

鍛錬：その時の竜戦士

グラフィイト視点

俺はCRに残っているポッピーピポパポの護衛と言う名目で、CRで待機していた。言葉を選ばずに言えば、戦力外通告だ。

だが、それは自分自身で言い出したことだ。

海帝から刀を受け継ぎ、彼らの真実を知ると同時に仇を撮ろうと浮足立ったのも事実。

だが即座に俺は大きな壁にぶつかった。

刀が使えない。

より正確に言えば、完全に使いこなせない。

もともと俺はドラゴナイトハンターの竜戦士。当然ファングだけでなく、弓や刀、手裏剣や苦無はもちろん、銃やヌンチャク、果ては鉤爪やチャクラム、鉄扇など存在するほぼすべての武器を扱える。

だが、「使える」のと「使いこなせる」の間には大きな隔たりがある。

多少多彩な奴が、刀一本でやってきた男と並べるわけがない。

第一、俺はあまりにも長くフアングを使いすぎた。すぐには順応できない。

第二に、この妖刀の力も関係している。

まず、あり得ない重さだということだ。俺の使っていたフアングの重さを10とするなら、この妖刀は軽く50はある。俺のフアングの方が柄も太く長く、刃も大きく二つあるというのに。

重さは振り下ろした時の破壊力に直結する。重ければ重いほど、総合的な攻撃力は跳ね上がる。俺にはまだそれを使いこなす力が足りていなかった。

そして、切れすぎること。切れ味がよすぎて、俺が下手に刀を振るうと自分をまきこむばかりか仲間を傷つけかねないことが大きな問題となり、俺自身がCRに残ることを決めたのだ。

暇があれば刀を出し、振る。

どれだけ振っても、荒い力任せの型になってしまふ。

刀を鞘に納めて目を閉じ、自分の師匠、海帝の動きを思い出す。

俺の記憶の中にある海帝の動きは、いつも美しい。

演武のように舞うように。

しかし一目でわかる練り上げられた技術力。

そしてどこまでも的確な一撃……

「遠いな……………彼方すぎる……………」

自分があの境地に行けるのか、よく疑問に思う。それも一度や二度ではない。誇張無しで5分に一度は疑問に思う。

だが、信じよう。

海帝が信じ、全てを預けた刀が俺を選んだのなら、

俺もまた信じるべきだ。

信じられている俺自身を。

「紅蓮……………爆竜剣!!……………」

刀に炎をともし、振り回す。やはり、前に使っていたフアングに比べて火の灯り具合が弱い。

やはりまだまだ使いこなせない。切れ味が高いおかげで威力はむしろ上がっているが、肝心の炎がこれではおまけ以下だ。ただ単にエフェクトが派手な刀ではだめだ。

「ふう……………少し休むか」

俺はその場に正座し、目を閉じてまた海帝のの動きを思い起こした。

この30分後、大怪我を負ったエグゼイドが担ぎ込まれ、俺はそこでようやく事態を把握することになる。

決別：裏切者が一人

詳細を知った俺は、初めて頭を抱えそうになった。

ゲムデウスに襲われ、エグゼイドはもう変身できるような状態ではない。

さらに、詳しくは分からんが「ズガイノウテイコツセツ」だとかいうものがあり、しかもそれが相当前の傷だというのだ。話を聞いてみたところ、エグゼイドはもういつ死んでもおかしくないらしい。と言うか、ブレイブの見立てでは今まで生きていたのが不思議だという。

時間稼ぎに残ったゲムとレーザーは連絡が取れず、おそらく二人の生存は絶望的。

さらに研究所の崩壊の後、瓦礫を吹き飛ばしてゲムデウスが登場。やはり崩落程度で死ぬような奴ではなかったか……………

「人類諸君！我が名はRee：ゲムデウス！お騒がせして申し訳ない！未だ仕留めきれずにいるプレイヤー、エグゼイドの居場所が知りたい！彼奴の居場所、知る者がいるならば疾く教えられたし！」

と叫んでいたことを、今まさにニュースの速報が騒いでいる。

「狙いは完全にCRだな……………」

「それも、小児科医のみ……………」

「キッド、あいつに接近してみて、どう思った？」

「……………正直、俺とは別次元だな。この場にいる全員でもし相対することになったら、「どうやって一人でも多く生き残るか」を真つ先に考えたほうがよさそうだ。まあ全員死ぬと思うけど？」

全員が押し黙ってしまった。実際に戦ったことはないが、俺の中にはゲムデウスの力の片鱗がある。そのため、力はある程度分かっていたつもりだ。そして、その力は今のキッドと同等のはず。

ここまで力の差はなかったはずだ。

今存在しているゲムデウスは明らかにどこかがおかしい。

そもそもハイパー無敵にダメージを与えられるはずがないことや、ゲムデウスワクチンに抗体を得ているのも腑に落ちない。蛮野の改造と思えばそれまでだが、それではなぜ蛮野がゲムデウスの力を自分の一部にしなかったのがわからない。

大前提である自分が死んでしまっただけはいくら強い兵器でも役に立たない。

これではまるで、制御できない力の暴走だ。

ならば、一体どこでゲムデウスはその暴走に足りる力を得たのか？

これは俺の想像でしかないが、多分本当は逆なんだ。

ゲムデウスの力を蛮野が生み出したのではない。きつと、ゲムデウスが蛮野の力を生み出したんだ。

恐らく、蛮野やハイパー無敵ソルテイの力はゲムデウスの力のごく一部を利用したものだっただけだ。蛮野は多分最初はゲムデウスを利用しようとし、その力の強大さを恐れたんだ。

だからバグスターウイルスの兵隊を作り、ゲムデウスを抑えられるだけの勢力を作ろうとしたんだ。

だが、それも途中段階で崩壊したんだろう。

蛮野や現夢が作ったハイパー無敵ソルテイ、奴も相当の実力を持っていたが、大体エグゼイドと同等以上。残念だが10人、いや20人いてもあのゲムデウスには太刀打ちできないだろう。

エグゼイドの傷を見ればわかる。真横に一閃、通り抜け。

体のほかの部分に全く傷がないところを見るに、抵抗する間もなく切られたということだ。

それも背後ではない。切られた筋肉の歪みからして、恐らく真正面から。

正面から一撃、余計な攻撃は一切なし。たったの一撃で勝負を決めたのだろう。

海帝の時は自分を高めることもあって高揚していたが、ここまで相手の力が強大だと

寒気を感じる。

「いったいどうすれば…….」と思考をいろいろな方向に飛ばしていると、不意に声が割り込んできた。

「簡単だろ。永夢をゲムデウスに差し出せばゲムデウスも満足だ。それでいいんじゃない？」

「何を無茶苦茶を言っているのか、何処の馬鹿が今の発言をしたのだと振り向くと、不敵に笑うパラドが立っていた。

「パラド…….？ 今のは…….」

「どんな冗談だ、と聞こうとしたが、それよりもパラドが先に言った。

「だからさあ、こんな状態のこいつ永夢、クソの役にも立たねえだろ？ゲムデウスのオヤツにでもしてやった方が役に立って喜ぶんじゃないやねえか？「馬鹿と鉄は使えよう」ってな」意識を失っているエグゼイドのベッドをバシンと叩きながらパラドが笑っている。

「ふざけるな！パラド！何を言ってる!？」

「こらえきれなくなったブレイブがパラドの胸ぐらを掴み、掴まれたパラドは驚いていた。」

「おいおいどうした!?こんな奴、もう役に立たねえだろ?こんなんじや戦えねえ。ただのお荷物だ。……………まさかお前、瓦礫の下からこいつの潰れた下持つてきて縫い付ける気か?」

やめとけやめとけ。ぬいぐるみじやねえんだから無理だろ」

俺は、ここまで急激に変化したパラドを、いまだに信じられずにいた。

「パラド……………本当に、エグゼイドを、仲間を簡単に見捨ててる気なのか……………?」

あの雨の日、俺に「お前は俺の仲間だろ」と言ったのは、嘘か……………?」

俺には、とても信じられない。パラドが仲間を見捨てているこの状況が。

俺には、パラドがとてもまぶしく見えていた。仲間のために命を賭ける勇気を、俺に教えてくれた。

なのに……………いつたい、なぜ……………

「待て待てグラフィイト、お前勘違いしてるぞ?」

慌てた様子のパラドが俺の目の前に来て手を取った。

「元々永夢は俺を殺しかけたことがあるんだぜ?仲間と思つたことなんてねえよ」

……………違う……………!こいつは……………俺の知つているパラドではない!

「手を放せ……………俺は……………お前には賛同できん!!」

掴まれている腕を払いのけ、俺は逆の手でパラドの左手を掴んだ。

——左手同士の握手にはあまりいい意味がない。

——敵意、決別——

「パラドクス、俺とお前が戦った時のことを忘れたのか？あの時のお前は、俺という仲間と、お前自身の仲間両方を助けるために動いていた。あの時のお前のために俺は今のお前の仲間にはなれない」

パラドは俺に言った。「人間のために戦う、「俺」の味方になれ」と。

だから俺はその約束を守る。変わってしまったパラドクスの味方ではなく、変わる前のパラドの味方を貫く。

「へえ……………どうせ、このままそこにいる奴を助けようとしても、皆死ぬぜ？もつと賢くなるうとは思わないのか？」

「生憎、俺の尊敬する師匠も無骨で容量はよくなってな。馬鹿は俺の目標だ」

互いににらみ合う。じつと……………

「了解。分かったよグラフィアイト。お前がそこまで言うなら、好きにすればいい。俺はもちろん逃げさせてもらうぜ。無駄死には御免だからな……………じゃあな」

この際、パラドクスがなぜ変わったかを考えている暇はない。これからどうするかを考えるべきだ。

「……………あばよ、皆……………ん？」

出ていこうとしたパラドクスの腕を、誰かが掴んだ。

「……………永夢？」

それは、未だ目覚めずにいるエグゼイドだった。無意識に掴んだのだろう。気を失ってさえも。

「……………パラド……………行かないで……………」

一筋の涙を流し、エグゼイドはうわ言を言った。

そして、その腕はパラドクスに強引に引きはがされた。

「放せよ。未練がましい奴だな……………諦めな。永夢。こうしないと生きれないんだよ」

俺は、この時、心の底からパラドクスを侮蔑した。

一人：罪と禍

パラド視点

「よお、悪いねえ、ここ工事中なんだわ。戻ってもらえる？」

「……………お前は……………パラドクス……………」

CRに続く大通りの真ん中に立ち、俺はゲームデウスを見据えた。

「もう一度言うぞ。戻りな。ゲームデウス」

「Re:ゲームデウスだ……………なるほど、時間稼ぎと言うわけだ……………貴様一人か？それとも他にも仲間がいるのか？」

「生憎ねえ、ボツチなの。来る途中で喧嘩勃発」

喧嘩と言うより、自分から離れた。グラフィイトには悪いことしたかな。でもいいだろ？仲間が死ぬとこなんて見たくないし、見られたくもない。

「にしても流石俺。名演技だったぜ」

「……………？」

ゲームデウスはよくわかっていなそうだが、別にいい。俺はここで戦うだけだ。

時間を稼いでる間、逃げてもいい。体勢を立て直そうとしてもいい。

とにかく皆、生きてくれ。

「で？独りぼっちの俺に同情して戻ってくれるかい？」

「愚問。どくのは貴様だ。通るぞ……………」

……………やっぱり無視か……………ならいいさ。先手必勝。不意打ち速攻だ。

横を通り過ぎようとしたゲムデウスを殴るが、手の平に受け止められた。

「…へえ、やるじゃん」

「ほう……………いい攻撃だ」

掴んでくる腕を振りほどき、俺は距離を取った。

「もう一回俺が消してやるよ……………マックス超変身！」

「良いだろう！実力行使ならば叩き潰すのみ！」

【ガシャット！ガツチャーン！FUSION DUAL GAME！】

【強化パズル連鎖！強い拳殴打！ゲーム世界交差！

Let, Game! Mett ya Game! Mutch a Game! Who are

you?

I, m a Perfect Fighter

「悪いが急ぐのでな！焔の太刀……………ドラグーン!!」

「…ッ！」

ゲムデウスの振り上げた刀から火が溢れ、龍になって突進してきた。

スライディングしながら下を潜るが、直後に嫌な予感がした。

「おいおい……………ホーミングかよー！」

戻ってきた。生き物みたいだ。が、ゲムデウスの方からも嫌な気配がする。

「死ね！紅蓮……………爆竜剣!!」

ゲムデウスの方向からも別の竜。挟まれた。逃げ道がもう上しかない！

「はっー！」

翼を出して飛翔するが、うまい具合に双方が衝突してくれない。角度を変え、俺の方に飛んできた。

「秘儀、双龍剣ー！」

なんてたちの悪い技だ。とても逃げ切れない。

「お前初手で必殺すんじゃ……………」

俺の文句が言い終わるよりも先に二対のドラゴンが俺とぶつかり、大爆発を起こした。

「ふむ……………以外にあっけなかったな……………」

「それは俺を仕留めたと思った感想か？それともあっさり弾かれたお前の攻撃の方か？」

煙の間から顔をのぞかせると、ゲムデウスは「何と！」と驚いていた。

「かき消したか！あれは片方でも強化されたクロノスを仕留める代物なのだが……」

「勝手に殺すな。前はともかく、あれじゃ死ぬ方が大変だぜ。何発食らえばいいんだ？」

ゲムデウスは幾度か大きくうなずき、何度も「なるほど」とつぶやいた。

「貴様の力を見誤っていたようだ！強いのだな……エグゼイドよりも、あのデンジャラスクロノスよりも、素晴らしく強いのだな！」

「さあな。知りたきや、お前も本気出せばいいだろ。あんなもんで全力とは言わせねえぜ？」

「クハハハハハ！そうかそうか！本気で来いというか！」

「どうだい？お前の本気の御目がねにはなかつたかい？」

「十分に！良からう。敵が本気で来るのなら、それには本気で戦うのが筋！全力で叩き潰してやろう！クダケチール!!!」

俺の頭上に魔法陣が現れ、落下してくる。

「食らわねえよ！シャドウ・ビーム!!!」

腕から緑の光線が飛び出し、魔法陣を吹き飛ばした。

「おお！これも通じんか！時にパラドクス、空中戦と地上戦では何方が得手か？」

「まあ……地上戦だ」

「よし、降りてこい！」

【ガシヤコンPARA||BLEGUN!】

【ガシヤットギア・コンプリートセレクションウエポン!BUG||BLEGUN!】

促されるまま俺は地面に着地し、二つの武器を出した。

「さあ………始めようぜ!ゲームデウス！」

接戦：消えた八月

片方を銃モードにし、遠近両方に対応できるようにして相手の出方をうかがう。直後にゲムデウスの体がぶれて消え、背後から嫌な殺意が俺の背を撫でた。

「くそっ！」

振り向きざまに一閃。互いの武器が衝突し、火花が散る。

「このー！」

空いてる方の銃で撃つが、当然盾に防がれた。さらにその盾から鉤爪が伸び、こっちに向かってくる。

「くそっ……………便利な盾だなおい！」

後方に飛びながら銃を撃つが、勢いが落ちない。俺に向かってくる鉤爪の上を飛び、通り抜けざまに真ん中から斧で切り落とした。

「はっはあ！見たか！……………って……………」

見ると、切った部分からまた生えてる。あの盾、生きてんのか？

「本っ当に便利なのね……………」

「便利と言う言葉でかたずけられるのは些か不服だな。この盾、貫けるものなし！して

この剣、貫けぬものなし！」

「おい矛盾したぞ」

ここまで清々しく矛盾した奴は初めて見た。ここはひとつ「その槍でその盾をついたらどうなるのか」とぜひ聞いてみたい。どう答えるか見ものだ。

「戦闘中に軽口とは、余裕だな？パラドクス」

「余裕だねえ。お前と同じで」

今のところ、俺とゲムデウスの力は拮抗している。全力を出せば状況が変わるかもしれないが、お互いの全霊の一撃も同等の威力だった場合お互いに大損害が出る。なら、ぎりぎりまで力を小出しにし、徐々に力を開放して相手の最大戦闘力を見極める。それが最善だ。

「で？次は何を見せてくれるんだい？」

「パラドクス、お前から攻めてこい。大方こちらの力を見極めようというのだろうか？なら交代だ。お前の力、こちらにも見せてもらおうか……………？」

「よし来た。行くぜ……………」

【2、4、6、8、10、12、14、16、18、20！ 10連打20連鎖！】

【1、2、3、4、5、6、7、8、9、10！10連鎖！】

両手に持った斧をゲムデウスに向かって投擲した。ブーメランのように回転しながら

らゲムデウスの盾にぶつかり、連鎖反応で大爆発を起こした。

「むう………これは、なかなか………」

「行くぜゲムデウス！シャドーセイバーを受けて見な！」

俺はかつて創世王を目指した男の双剣を出し、爆発の煙に乗じて切りかかった。

「甘い！その程度では獲れんぞ！」

心眼。見えずとも感じるってやつか。片方は盾に止められ、もう片方は剣に弾かれた。懐に潜り込み、強引に腰をひねる。どう考えてもこの体勢からは攻撃できない。そう思わせた。

「サタンサーベル！」

「何っ!？」

何も持っていないはずの片手に急に赤い刀身のサーベルが現れた。ゲムデウスは反応が遅れ、防御が間に合わない。だが向こうも無能じゃない。とつさに横に飛び、躲し見せた。

「良い回避だな」

「相手の不意を突く、良い攻撃だ」

また互いに互いを褒め合う。だがそれもそろそろ終わりだ。

武器を両方とも投擲し、今度はロードバロンが使っていた刀とホースオルフェノクの

盾を出した。

「さあ、似たような武器同士、正面から斬り合いと行こうか」
表情は読めなかったが、ゲムデウスが不敵に笑ったのを感じた。

苦戦：父親ということ

あれから、もう一時間ほど経つ。状況は、俺の方が少し……いや、だいぶ悪い。

「はあ………はあ………くそっ！」

「ふう………ふう………良い戦いだっただ」

盾と剣にひびが入り、とうとう二つとも砕け散った。ゲムデウスの武器は、両方ともまだ健在だ。………他の武器………何かないか………あるにはあるが、どれもゲ

ムデウスの武器との衝突に耐えられるとは思えない。

「おい………勝手に終わらせんじゃねえよ」

「虚勢を張るな。互いに消耗したが、お前の消耗の方が大きいことくらい見抜いているぞ。そして、このデウスラッシャーとデウスランパートに並ぶほどの武器を、お前は持っていない」

「……………」

「恥じるな。お前の戦いは見事だった。ただ少しだけ、こちらに分があっただけに過ぎない。お前がこちらと同等の持久力を持っていれば………あるいは………」

慰めではないことくらい、分かる。ゲムデウスの言う通り、もし、もう少しだけ………

いや、

「仮定なんざ……どうでもいい。俺が、お前を止めなくちゃならねえんだよ……!!」
……………目の前に、敵が立っている。俺よりも強い敵だ。

「いつまで勝つ見込みのない戦いを続けるつもりなのだ？」

「さあな」

「諦めるのを勧めるが？」

「嫌だね」

「……………なぜ戦う？勝てぬと知っておきながら……………何がお前を動かす？」

「なめんなよ……………俺は……………お前の父親だ！」

叫びながら、俺は構えなおした。

ずっと考えていたことがある。この世界にバグスターが生まれたこと。

俺が世界に生まれたこと。

俺も記憶は薄れているが、俺を望んだのは永夢だった。

「お前が求めるものはなんだ？」

そう聞いた。

永夢は答えた。

「僕は覚えてないけど……いた気がするんだ。誰か、僕よりゲームがうまい人」

永夢は、父と遊んだことを覚えていた。
父の存在は忘れても、「誰か」自分より強い存在がいたことを覚えていた。
だから永夢は望んだんだ。

「自分とゲームをやつてくれる人。そして、自分より強い人」

それが俺の生まれた理由。

そして、永夢に感染した俺のデータをもとに、全てのバグスターが生まれた。

俺はすべてのバグスターの親みたいなものだ。

だから、下がれない。

「俺はお前の親だから。俺は永夢の父親代わりだから」

永夢のためにも、俺自身のケジメのためにも。

「そうか……なるほど。いかに力で優ろうとも、このゲームデウス！確かに貴様に超えるべき親の背を見たぞ！」

「なら来い。お前に……俺の【とっておき】を三つ見せてやる」

消滅：散るは永遠の刹那

「先ずは一つ目だな……………」

そう言つて、俺は変な構えを取り、ふにやふにやと指を動かした。

「……………」

ゲムデウスは困惑している。明らかに隙だらけの子供の構えに、気色悪い触手指。「？」となるのは当然だろう。

「ところでさあ、ゲムデウス」

「……………」

違和感を感じているのか、警戒は怠らずに緊張した声で返事が来た。

「この世界つてのはさ……………パズルみたいだよね」

「……………？何を…ッ!?!」

後ろからの気配に気づいたゲムデウスがとつさに盾で受け止めた何か。

「こ、これは……………ゴレム!?!」

大きな人型の土の塊。その拳。

「バカな！一体……………」

「これは、俺の、パーフェクトパズルの新能力。「物体の移動」の能力だ」

この世界に存在する様々な物質。組み合わせ、移動させ、分離する。物質をパズルのピースに見立てて組み替える新能力。「PERFECT PUZZLE世界のあわせ絵」

土を人間の形になるように「移動」させてゴーレムにする。

さらに、手の平をこすり合わせて……

「今度は………上か！」

天空に向けて盾を構えたゲムデウスに、雷が落ちた。

空中で原子をこすり合わせ、電気を生み出して落とす。

まさに森羅万象そのもの。

「ぐああ〜?!?!」

盾で電気は防げない。ゲムデウスに感電し、鈍い光が瞬いた。

「バ、バカな………このような能力………なぜ………?」

「なぜ使わなかったかって?この能力は乱用できねえんだよ。使えて五分だからだ」

本当は、その場から俺が動けなくなったり、めっちゃやくちや体力使うし神経削るけど、教えない。

「まだ行くぜ………空気よ、回れ！」

今度は一転して大竜巻。時速150Kmの風がゲムデウスを飲み込み、空中へ放り投

げた。

「なあ!?!……………くそ!おのれ!!!……………!?!」

空中で体勢を立て直そうともがくゲムデウスに氷でできた槍が殺到した。

「バカな!?!どこに水が!?!」

「空気中の酸素と水素をちよつと借りてね」

酸素と水素を混ぜると水になる。さらにその水の分子の振動を止め、氷にする。そこから氷の形状を変異させ、槍にする。

小難しい化学式は知ってるやつと融合してるから楽だ。

「くそ!… なんとという権能だ!」

槍を盾や剣で叩き落としながらゲムデウスが呻いた。俺も驚いてる。正直、まさかここまで無茶苦茶をやれるとは思ってなかった。ただ……………限界が近い。

「おのれ!こうなれば……………土の太刀!テユポ^{大地}ン!水の太刀!ラハブ^{大津液}!」

地面が真つ二つに割れ、大きな揺れが起きる。さらに、上空から30mほどの巨大な水魚が口を開けて飛んできた。地割れに巻き込まれながら、俺は操作を続ける。

「馬鹿野郎!土も水も俺の管轄だ!」

「!しまつ」

すぐに地面の揺れは俺に止められ、水魚も逆転してゲムデウスに向かって飛んだ。

「しまった」と言う暇もなく、ゲムデウスが水に飲み込まれる。「ごぼあ!!」

濁流に飲まれ、体を水浸しにしながらゲムデウスが落下した。

「げぼっ……………どうやら……………打ち止めのようだな……………?」

「ああ。流石にそううまくは倒れねえか……………次だ」

武器を持たない俺を見て、ゲムデウスは自分も武器をしまつて見せた。

「相手が素手と言うのなら、こちらは無手が道理。行くぞ……………」

「良い心がけだな……………よし、俺の二つ目の力を見せてやる。」

俺のとおつておき。ただこれは相応の覚悟がいる。だが迷いはない。

「行くぜ!代償強化其の壱発動!」

代償強化とは、簡単に言えば「攻撃力アップ。ただし防御力ダウン」ということだ。

何かを引き換えに力を入れる。その代償は様々。

「ぐ……………く、くそ……………」

急にその場にひざまずいた俺を見て、ゲムデウスがどこか落胆したような顔を見せた。

「代償の結果、動けなくなつては意味もない……………失敗だつたな!」

のろのろと歩いてくる俺にとどめの一撃を入れようと、ゲムデウスが俺に走り寄つて

思いきり鳩尾を蹴った。

「な……………何……………？まるで、月を蹴ったような……………」

俺は、怯むどころか少しもぐらついていなかった。吹き飛ばされもしない。防御もせずに受け止めた。

代償強化其の壺、高重力化。

発動した者にのみ重力変異。

重力が強まり、素早く動けなくなる。

ダッシュ不可。ジャンプ不可。飛翔不可。

ただし、重さが増すため、打撃攻撃威力倍加。怯み無効のスーパーアーマー。

「せい!!!」

鈍重に振りかぶった拳が動揺しているゲムデウスにめり込み、吹き飛ばした。

「ぐおおおお……………」

要するに、強化版鋼鉄化のエナジーアイテム。ただ、攻撃にひるまなくなるだけでダメージは通っているため、やはり別物。

「次！代償強化其の式発動！」

「ぬう……………！速い！」

代償強化其の式、最高速。

発動した者にのみ重力変異。

低重力になり、体がふわふわと浮く。地球の重力の6分の1。

最高速と加速力が倍加し、超高速を出せる。

ただし、防御力半減。打撃攻撃威力低下。

一瞬でゲムデウスの背後を取り、乱打を叩き込む。ゲムデウスが振り向いて攻撃する
ときには、もう俺は逆側に回ってる。

「ぬあああーそんなひ弱な攻撃が効くかー！」

いや、効いてる。どんなに小さくとも、徐々に鈍い痛みへと変わっていく。

「ぐおおおー……………パラドクスウ……………！見切ったあ!!!」

俺が動く方向をゲムデウスが読み、拳を振り上げた。

「代償強化其の参！発動！…今だ！カウンター！」

ゲムデウスの拳が俺に触れた途端、俺の体がぶれ、逆にゲムデウスが吹っ飛んだ。

「ぐふ……………そ……………そんな……………バカな……………」

代償強化其の参。刹那の見切り。

「見切り」もしくは「カウンター」と言った際、4秒間硬直状態になる。初めの1秒で相手から攻撃が入られた場合、ダメージを無効化し、同一の攻撃を倍加して相手に返す。

ただし、失敗した場合は3秒間動けない。その間に攻撃を食らった場合、威力に関係

なく即死。

「カウンター、成功……………」

危ない。もう少し早くても遅くてもやられてた。

「いい攻撃だったぜ、ゲムデウス。そのダメージがお前の威力だ。……………さあ、これが……………最後だ！代償強化！其の捌！発動！」

代償強化其の捌。PERFECT FIGHTER

1分間攻撃力、速度、防御力倍加。スーパードアーマー。時間経過するほど効力が増す。ただし、一度使ったら同じ相手には二度とこの代償強化は使えない。

体に赤と青のオーラを纏い、俺はゲムデウスを見据えた。

「さあ、真正面から殴り合いと行こうか」

「ぐう……………オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

真正面からお互いに衝突し、クロスカウンターの状態になった。

ゲムデウスが少し怯み、そこに畳み込む。

「行くぞこの野郎が!!」

もう一発頬にぶち込む。だが今度は向こうも耐えた。

「敗けん!!」

腹部を殴り返され、俺の足がぐらつく。

「くそがあア!!!」

腰を落とし、ゲムデウスの腰あたりを掴んで近くのビルの壁に激突する。

「ハア!!!」

壁に密着するゲムデウスに頭突きを入れ、さらに投げ飛ばそうと頭を掴む。

「パラドクスウウ!!!」

伸ばした手を逆に掴まれ、俺が投げ飛ばされた。

「ダアア!!!」

すぐに立ち上がってこっちに走ってくるゲムデウスに体当たりをした。

「グオオオオ!!!セイ!!!」

ゲムデウスの蹴りが腹にめり込む。俺も殴り返す。

「ハアアアア!!!」

殴る。殴られる。蹴られる。蹴り返す。

「もつと来いよ!!!」

ゲムデウスに上段から拳を振り下ろすが、躲され、逆に殴られる。

「クソがあア!!!」

「はぐ……ウ……」

すぐさま殴り返す。今度はモロに入り、ゲムデウスが悲痛に呻いた。

何とか向こうも拳を出すが、威力が弱い。

「なんだそのパンチは!!!」

顔面のだ真ん中。目と目の間に拳を滑り込ませたパンチが一際大きく、ゲムデウスを空中へ飛ばした。

「ぐあああああ……………」

「ハア……………ハア……………時間……………切れか……………」

体から力が抜けていく。痛みがひどい。

……………やっぱり、仕留められなかった。

「ハア……………死を覚悟……………したのは、ハア……………初めて……………の……………経験だ」

手をつき、ゲムデウスが立ち上がる。

俺も、立つ。

「じゃあ……………最後の【とっておき】だ」

最期の攻撃は、至ってシンプル。

しかも、超強力。

俺自身を巻き込むくらいに。

「行くぜ……………」

ガシヤコンバグブレイガン俺は拾い上げ、ゲムデウスも自分の盾と剣を構えた。

「最強最期の一撃だ……………」

【巨大化】【マッスル化】【伸縮】【鋼鉄化】

使うエナジーアイテムは4つ。

ガシヤットをバグブレイガンに刺し、体にマッスル化をつけ、ブレイガンの持ち手を伸縮で伸ばし、そのまま鋼鉄化で固めて戦斧にする。あとは、この武器に巨大化をつける。

「!? な……………何という大きさだ……………!」

雲にも届くほどの、天を貫く戦斧。

ゲムデウスがあまりの大きさに圧倒される。

「バ、バカな……………!パラドクス、お前もただでは……………!」

「すまねえだろうな。だから何だ?……………行くぞ!」

斧がゆつくりと傾き、ゲムデウスに迫っていく。

「ぬおおお!全の太刀!^全ディザス^災トレ^害!!!」

【PERFECT FIGHTER CRITICAL REVENGER!】

ゲムデウスの焔、土、水、氷、光、闇、全ての技がデウスラッシャーに集まり、虹色の輝きを出した。

……………両者の武器が激突する。

「な…!? くつくそ!!」

一瞬拮抗し、ゲムデウスの刀が弾かれた。

とつさにゲムデウスは盾を前に出してガード。

やがて、大爆発が起きた。

.....

.....

.....

.....

「見事……その一言に尽きる。……刀をはじかれたのは、初めてだ」

「……やっぱり無理か」

仕留められなかった。もう俺は動けない。

向こうは、かろうじて動ける。

……敗けた……

「じゃあ、最後の時間稼ぎと行きますか……」

【鋼鉄化】【鋼鉄化】【鋼鉄化】

俺はゲームエリアにある全ての鋼鉄化のエンジーアイテムを集め、立ち上がって両腕を広げる。大の字の形になった。

「へへ……」

「……………そうやって、一秒でも多く時間を稼ぐと？」

そうだ。ここで俺がコンマ一秒でも多く時間を稼げば、その間に永夢が目覚めるかもしれない。そして、ゲームデウスの攻略法を考えるかもしれない。

俺は永夢を信じてる。永夢がかつて、俺を信じてくれたから。

「……………これで終わりだ……パラドクス。デウス神・ブレス息」

ゲームデウスの口から光が溢れ、俺の体を飲み込んでいく。

指先から、俺の体が消滅していくのがわかる。

なあ、永夢。

俺、償えたかな？

一生懸命、やれたよな？

俺、まだみんなと一緒にいたかった。

永夢とゲームがやりたかった。

ありがとな、永夢。

お前が俺の手を取ってくれたから……俺は……
激しい光の中、俺はゆつくりと目を閉じた。

〔GAME OVER〕

機械的な音声が、俺の命の終わりを残酷に――

しかし、いたわるようにやさしく、

その時を告げた。

――体が熱い。

妙に眠い。

だけど、

――胸にぼっかり穴が開いたみたいに、

孤独感だけが、くつきりと――

これが、――死――か――

大罪：信じるということ

グラフィイト視点

突如、巨大な爆発がCRの外で起こった。

原因はよくわからないが、恐らく外でゲームデウスが暴れているのだろう。

「ついに来たか……………一応聞いておくが、戦う覚悟があるのは？」

それは、決まりきっている間。その場にいるブレイブ、スナイプ、ポツピーポパポがゆつくりと頷いた。その中で、ばつが悪そうに首を振ったのがいた。キッドだ。

「悪い。俺としては、ポツピーが死ぬかもしれない選択肢は選べねえわ。ポツピーは逃がす。これは譲れない」

「で……………でもキッド！私よりも永夢を逃がさないと！」

キッドの言い分を聞いたポツピーポパポが声をあげる。それに続いてブレイブやスナイプも「確かに……………俺には小姫が」「俺はニコが……………」と言い出した。

「分かった。じゃあ俺が今言われた全員をベットごと運ぶ。皆、ベットに乗ってくれ」
「飛彩……………？」

不安そうな声を出す小姫にキッドが「大丈夫だって、ちよつとした時間稼ぎなんだか

ら。後ですぐ合流だ」と言い、ブレイブもそれにうなずいた。無論、嘘だ。恐らくこのメンバーでもう一度集まることはない。

「後で会おう………全部片付いたら、後は結婚式だ」

歯が浮くような台詞をブレイブが言い、小姫はそれに頷いた。

「ニコ、後で、な………」

「大我………」

あの少女は、なんとなく察しているのだろう。だがあえて言わない。

「良し………行くぞ」

結局全員で地上に出ることになった。

病院の出入り口に付き、俺たちは煙が上がっているほうへ。キッドは片手でベッドを持ち、俺たちに頭を一つ下げてから反対方向へ走っていった。

「まさかお前たちと最後に共に戦うことになるとはな」

「ぎげんな。ゲムデウスを殺したら次はお前だ。グラフィイト」

スナイプがすかさず言い返してくる。

「上等だ。今度は返り討ちにしてくれる」

お互いに軽口をたたき合い、不意に両方ともニヤリと笑った。

「何とでも言え」

お互いに同じ言葉を言い合う。

だがその軽口も、徐々に景色の中で爆発の被害が増えてくると消えた。

「……………」

やがて、爆心地のような場所にたどり着いた。ここが巨大なクレーターの真ん中。ビルや車が粉々になっており、隕石でも落ちたのかと錯覚する。

「……………次はお前たちか」

不意に、横の方から声が出た。見ると、瓦礫に腰かけているゲムデウスが目に入った。

「少し……………休んでいた。すぐに動くことができなくてな」

そう言いながら、ゲムデウスはだるそうに息を吐いた。

「10分だ」

「……………何?」

「パラドクスを討ち取ってから、お前たちが来るまでの時間だ。休息は十分。もう少し早く来た方がよかったのではないか?」

「……………何!?!」

馬鹿な……………パラドが……………?ここで戦っていた?

「ど……………どういうことだ!?!」

「パラドクスは、貴様らのために少しでも多く時間を稼ごうとした。実際、殺されかけ

終った世界と創世者

ここは、終わった世界。

空を黒雲が包み込み、闇が世界を覆う世界。

人は残っているのか、それともいないのか——

それすら定かではない。

都市はもはや、ほとんどの建物が倒壊していた。

その中の一角に、一際大きなクレーターがある。

道路には野生化した猫が多く行き交い、人間が使っていた痕跡はもうない。

その中に一人、絶望的な表情で立ち尽くしているウイルスがいた。

「……これは……一体……」

その者の名前は、檀黎斗。

彼は変わり果てた自分の故郷を見て、どうすることもできずにいた。

（私のいない間に、一体何が？）

同じ疑問を彼は何度も反芻し、やがてよろよろと歩き始めた。

「誰か……誰かいないか……頼む……誰か……」

答える人は、誰もいない。

道路の猫たちは黎斗の姿を見ると逃げ出していった。

しばらく歩き、彼はかろうじて形を保っている建物の前に立った。

「誰か………永夢………う・九条………鏡………花家」

知っている限りの人の名前をつぶやきながら、黎斗は歩き続ける。

途中で、よろよろと歩いてきたために壁に体を引きずってしまった。その壁の表面に附着していたススが取れ、下にあつた文字が浮かび上がる。

【聖都大学附属病院】

「誰か………返事を………！」

手当たり次第に病室の部屋を開けていると、ある一つの部屋のベッドの上に人型のシミがついていた。

恐らく寝たまま死んだ人がいたのだろう。体液は細胞が壊死することによりドロドロに溶けた状態になり体中の穴から流れだす。

その体液でできたシミが、ベッドのシーツにハッキリ出来ていた。

立ち込める異臭。なぜもつと早く気づけなかつたのかと思うほどの、強く暗い匂い。

「うぐ………げえ………」

黎斗は手で口元を抑えたが、こらえきれずに吐き出した。

遺骨はなかった。野生動物が持って行ったのかもしれない。

「何が……この世界で……」

黎斗は、もう病室をいちいち開けて中身を確認することはしなかった。

CRに向かうが、エレベーターに電気が流れていないために動かない。

力任せにエレベーターの扉をこじ開け、CRへ向かった。

当然、そこには誰もいない。そもそもいるわけがないのだ。宝生永夢も、鏡飛彩も、花家大我も、全員故人なのだ。たとえ黎斗が世界中を見て回っても、会うことはかなわな

い。
CRから出ようとしたとき、ふとデジタル時計が目に入った。壊れず、まだ活動を続けているようだ。

「……………」

表示されているものになにか違和感を感じ、黎斗は手に取って覗き込んだ。

「……………14:37……………?!?2019年2月4日?!?」

それは信じられないものだった。

何故なら、彼がこの世界から異世界へ行ったのは、2017年8月27日。異世界で彼は結婚し、子を持った。だがまだ一年ほどしかたっていないはず。

どう多く見積もっても、2018年の9月程のはずだ。

何十年とみれば僅かかもしれないが、それでも時がずれている。

驚きの事実を前に固まっていると、背後から足音がした。固い音だが、確かに人の足音だ。

「誰だ!？」

探し求めた人との対面。しかし、逆に警戒が必要だ。黎斗は音のした方の通路を睨みつけた。

「お前が本当の最期のプレイヤーなのだな……………ゲーム……………」

「!?ハイパー無敵!?……………いや……………違う!」

立っていたのは、ゲームデウスムテキと言われている存在。

「お前が……………この世界を!」

「当然、主人公がラスボスの前に敗れるのならば、世界は壊されるのが筋」

「ふざけるな……………!グレードゴッド!変身!!!」

【HYPER CREATOR GOD X!!

HYPER CREATE OF ガシヤット!ガツチャーン!!!

レベルアップ∞!!!!

創世の騎士よ!!照らせ!!太陽の如く!!最強の創世ゲーマー!!!

HYPER 無限!!!
幻夢!!!

双方が激突し、大きな爆発が起きた。

世界は、救われた。

ゲンムが、勝利した。

ゲンムはその後、生き残っていた僅かな人間を集め、破壊された建物を治し、人々を救った。

彼は、神と呼ばれた。

だが、彼は、何処までも悲しい表情をしていた。

皆に会いに来たのに、もう誰もいなかった。

「永夢……………」

彼のつぶやきを、聞いていたものはいない。

B
U
T
・
E
N
D

幽世：我が生涯の仲間PARA||DXへ

「変身ー！」

【迎る歴史！目覚める騎士！タドルレガシー！】

アガツチャー！辿り着いた魔界！邪神のレガシー！】

【ガシャット！ガツチャーン！ランクアップ！】

最終戦だアーー！！全軍突撃！BANG BANG GENERATION！！！！

全員の変身が終わり、それぞれが散る。

三角形に陣を組み、ゲムデウスを挟み込んだ。

「……………良い陣だ。近接重視のグラフィイトが一番近くの目の前。魔法ができるブレイブは中間距離。遠距離中心のスナイプは遠くから。歪な三角に見えて、よく考えられている……………だが」

そう言った瞬間、ゲムデウスの姿が消えた。透明化したのかと思いい、気配に集中すると、真後ろから強大な力の奔流を感じた。

「悪いが挟み込まれるのは慣れていなくてな。通り抜けさせてもらったぞ」

瞬間移動でも、透明化でもない。

包囲したはずの相手。

さも当たり前のように自分の真横を通りすぎたのに、止められなかった、どころか、視界の端にとらえることすらできなかつた。

敵は、遥かに怪物。

「さあ、一度に全員でも構わん。来るがいい」

武器を構え、真正面から見据えてくる。

下手な小細工は潰されるだけで無駄か……

「……よし、最初は俺から攻撃しよう」

警戒心を最大まで上げ、ゲムデウスに向かって歩いていく。

海帝の時と同じ、極限まで近づく。

目の前にまで行くが、ゲムデウスはまだ動かない。

「……………いざ!!」

抜刀し、切りかかる。真横に振った刀は空を切り、ゲムデウスの姿がまたしてもない。

……上か!

「太刀筋は悪くない!だが、貴様は武器の扱いがまるでなっていない!」

「うおおお!!」

空中からの上段斬り。どうにか刀の腹で受け止めたが、体が地面に埋まるほど強烈な

一撃だ。

：パラドはこんな化け物と戦っていたのか……………！

「チツ！まだ回復できていないか……………体が思うように動かん！」

そうばやきながら、体が半分以上埋まっている俺を片手で引っこ抜き、さらにまるでボールのように投げ捨てるのだからたまたまったものではない。

いったい元はどれだけデタラメな軌道力で動いたというのか。

「ぐおっ……………止まらん！」

吹っ飛ぶ速度を緩めようと地面に刀を突き立てたが、全く速度が落ちない。

あまりにも切れ味がよすぎるため、ブレーキの役目を果たせないのだ。

どうすることもできず、俺は最高速のまま後方のビルの窓に激突し、屋内に転がり込んだ。

「くそ……………何?！」

立ち上がろうとして膝をついた瞬間、ビルが丸ごと二つに割れた。

ゲームデウスの攻撃だ。一体どんな斬撃を放ったのだ……………！

「この！無茶するな！」

瓦礫に潰されないように注意しながら抜け出した。

外に戻った俺が見たのは、押されながらもゲームデウスと打ち合っているブレイブだっ

た。

「俺に向けた斬撃ではなく、ブレイブと斬り合っていた時にたまたま飛んだだけだったのか……………」

そう考えると、余計に寒気が走る。向こうがやみくもに振るだけで殺されかねない。

「くそ……………あれで弱っているとは信じられん……………」

武器を握りしめ、1つ深呼吸をして走り出す。

「せいー！」

「グラフィイトか！速かったなー！」

立て直すのが早かったといいたいのか、それとも走り寄る速度か、

何はともあれ、背後からの不意の一撃はあっさりと交わされた。

「行くぞー！双龍剣ー！」

ゲムデウスの刀から二頭の龍が現れ、こっちへ向かって飛んできた。

「紅蓮！爆竜剣ー！」

我ながら情けない火力のちびた炎竜が飛び出し、あっさりと二頭の龍に飲み込まれた。

「ちっー！」

仕方なく横に転がって回避する。

【TADDLE CRITICAL FINISH!】

俺の背後に飛んでいった龍に大量の氷の剣が衝突した。

「……！ブレイブか……！」

以前にも増して強力な攻撃になっている。完全に相殺はできなかったが、それでも速度も炎の勢いもだいぶ落ちた。

【BANG BANG CRITICAL BURST!】

さらにスナイプのキメ技が双龍に衝突し、完全に双龍が消滅した。

「おお……なかなかやるな。馬鹿ではないか……」

ゲムデウスはほんの少しだけ見直したようだ。つまり、ここからの攻撃はさつきとは比べ物にならないものになるということだ。

「良いだろう！では続くぞ！輝の太刀！へカントケイル!!」
断 閃 光

ゲムデウスの刀の切っ先からレーザーポインターの光のようなものが飛び出し、ブレイブへと迫る。

「……！ブレイブ！受けるな！避けろー!!」

「何?」

俺の声を聴いたブレイブがとつきに体を横に曲げ、何とか閃光をかわした。だが、ブレイブの剣は光の光線にぶつかり、柄を残して刀身が吹っ飛んだ。

「馬鹿な!?なんて切れ味だ!」

もし俺の声がもう少し遅れていたら、

ブレイブが自分の左腕の盾で受け止めていたら、

胴体を貫通、悪くすれば腕がちぎれる。

「剣を失ったか!戦力半減といったところか!闇の太刀!ピュトーン」
磁力変動

周囲の景色が急に暗くなったと思った瞬間、三人とも地面にたたきつけられた。

「ぐあ……!闇の引力か!」

発動しているのは足元の地面。これでは立つこともできない。

「我が氷塊で散るがいい!凍の太刀!超氷河ティアマト!!」

空中に巨大な氷が出現し、真つ逆さまに落ちてくる。

「うおおお!!」

ブレイブが劫火を出し、空中の氷を溶かしていく。

「……何という火力か!」

ゲームデウスも驚いたようで、呆然としている。

「行くぞゲームデウス!」

ブレイブは今度は一転して氷の魔法を使った。

溶けた氷の水が蠢き、ブレイブとゲームデウスをまた氷となって覆った

「これは……水のドーム？ブレイブ……貴様、何を……」

「ゲムデウス……ここは今、俺が作った氷のドームの中だ……この中でさっきの火魔法を使ったら……どうなる？」

「溶かされた氷は水、そして水蒸気になる……密閉されたここでは、圧がたまる……？……!!貴様！水蒸気爆発か!!!いかん!!!」

ゲムデウスが氷の壁の体当たりしたのだろう。少し揺れたが、氷壁は碎けなかった。
「俺と死ね！ゲムデウス！」

直後に、大爆発が起きた。

「う……ここは……！そうだ、ブレイブ！」

俺はどれほど気絶していたのだろうか。すぐに跳ね起き、ブレイブを探した。

「グラ……ファイト……か……？」

「ゲムデウスは!?やったのか!？」

「…その男が死んでない以上、やられてるわけがなからう」

背後からの声。振り向くと、ゲムデウスが立っている。

「……どけ、グラフィイト。介錯はこちらがやる」

「な………さ、させんぞ!!」

俺はゲムデウスの正面に立ちふさがったが、あっさりと跳ね飛ばされた。

「防衛不能の攻撃とは、見事であった………見事なり勇者ブレイブ！天晴なり鏡 飛彩
!!」

立ち上がることが出来ずにいるブレイブの首を、ゲムデウスが切り落とす。

「やめろおおおお!!」

【GAME OVER!!】

スナイプが横から割り込もうとしたが、間に合わなかった。

ブレイブが粒子となって消えていく。

「畜生!!撃ち殺せ!!」

スナイプが自分の分体に命令して乱射するが、一発たりとも命中しない。

「動揺したままでまともな狙撃ができるわけがなからう！お前もあの世に行け！雷の太

刀！アマ^{大落雷}ル!!」

ゲムデウスの頭上に暗雲が立ち込め、大量の雷が落ちた。

「ぐあああああ！」

電気攻撃によってスナイプの分体は消え、奴自身も壊れた戦車から投げ出された。

「ぐう……………！くそ！」

「後ろだ。スナイプ」

「は!？」

勢いよく振り向き、背後に銃を向けたスナイプ。

それとすれ違いながら、ゲムデウスがスナイプの体を斜めに切り裂いた。

「ぐ……………お……………!!ゲ…ム…デウ…スウウ!!!」

【GAME OVER】

断末魔の声をあげながら、スナイプがその場に崩れ落ちた。

「ふむ……………冷静であれば、もう少し戦えたであろうに……………おしい男だ……………さて」

「……………!」

ゲムデウスがこつちを見てくる。

俺は、動けない。

かつて、ここまで理不尽なほどの力を持った相手はいなかった。

今ハッキリと自覚した。

俺は、怖い。

恐れている。

死ぬことを。

もはや俺の両足は生まれたての小鹿のように震え、逃げることも敵にとびかかることもできずにいた。

「……………お前は斬る価値もないな……………敵の前で堂々と震えるとは、もはや餓鬼と同じ。……………このような輩が新時代の刀の道を開けるわけがない」

「だ、黙れ……………俺は……………うおおおお!!」

がむしやらに走り寄り、切りかかる。

そんな無茶苦茶な攻撃が通るわけもなく。

「……………腑抜けが」

「あぐ……………」

頭を思い切り殴られ、その場に倒れこむ。

「そこで寝ている。根性無し。この世界は、じき終わる。最後のプレイヤーが消えた瞬間にな……………」

俺は……………どうすればいいのだろう

勝てない。

俺一人がここで引き留めたことで、何になるというのか……………

ああ…………意識が…………遠のく…………

「何を悩む。弟子よ」

「……………！貴方は……………海帝殿！」

そこに立っていたのは、人間でいえば20程の年齢だろうか、若々しい海帝がいた。

「我が弟子、グラフィイトよ、何を悩む」

「師匠……………私は、どうすればいいか分からないのです。」

勝てぬ敵に対して、いかに戦うべきかがわからないのです！

俺は必死になって声を絞り出した。涙で顔を濡らし、鼻水を垂らしながら。

「なるほどの……………無駄死には…犬時には御免か？グラフィイトよ」

「わ……………私は、ブレイブや、スナイプと戦った時のように、充実して、おのれと言う存

在を全うして死にたい。こんな……生きた証の残らない死に方は嫌です！」

海帝は、俺をじいっと見ていた。やがて、その場に安座で座り込んだ。

「なるほどの。……ならば、儂はどうかの？ お前から見て、充実して、おのれと言う存在を全うして死んだといえるか？」

「そ……それは……」

俺は、顔を伏せてうつむいた。

そうだ。俺はなぜこんなことを聞いたのか。一番つらいのは、師匠ではないか。あんな最期……

「甘えるな!!!」

「

急に大声を出され、俺はその場で硬直した。思えば、真正面から怒鳴りつけられたのはこれが初めてだった。

「世界は、差別をしない。いかに病気で、残りの余命が一年であろうとも、明日死ぬこともある。健康で、強大な力を持った兵士が目を見張る武功を得たとて、明日殺されるやもしれん。どれだけ優しく、天使のような心があるうとも、事故に合えばそこで終わりだ。明日に結ばれる男女とて、今日死なぬ保証がどこにある！」

……死は、平等に訪れる。選ぶことはできん。「始まり」がある限り、「終わり」は

ある。儂が死んで、刀はお前に行った。であるならば、お前は何をするべきだ？自分のために、最後まで戦え！皆そう生きた！自分が死んでも、必ず自分の意志はつながっていく！敵同士の^{お前と私}であつても！そんな相手は、いないか？」

「……………エグゼイド？」

「ならば、信じるしかあるまい。その者のため、お前の命を使うのだ」

「師匠……………私は……………」

「……………！」

目が覚めた。俺は、寝ていたのか……………？

「……………バカな……………」

声のした方を見ると、ゲムデウスがこつちを見ている。

「少し目を離れた隙に……………化けた……………だど？」

「もう俺は迷わない。レーザーも、ゲムムも、パラドも皆、きっとエグゼイドのために生

きた」

「捨て置けん……………前言撤回！殺す！」

ゲムデウスが刀を振りかぶる。

もう恐怖はない。俺のこの命、友の友のために使おう。

武士道は、死ぬことと見つけたり。

「ゲムデウス……………俺の最高の一撃、受けて見る！ドドドドドドドド……………」

「馬鹿な……………あれは……………生命の剣!？」

俺の刀の焰は今荒れ狂っている。

かつてないほどの力。

そして、それとは反対に俺の体からは赤が消え、徐々に灰色へと変わりつつあった。

自分の生命エネルギー全てを焰に変え、刀に流し込む。

それが、生命の剣。

「行くぞゲムデウス！紅蓮！爆竜剣！」

「！っぬお!!」

とつさにゲムデウスは盾を前に出した。

……………だが、甘い。

「……………読んでいた」

「何!？」

盾を前に出すということは、死角を作るということ。

その間に俺は後ろへ回り込み、本当の技の名前を言った。

「炎帝激龍槍」

……………それは、突き技。!!!

「ギヤアアアアアアアアアア!!!」

ゲムデウスの体に、俺の炎が流れ込む。

「アアアアアアアア……………」

ゲムデウスはその場に膝をつきながらも、こちらを睨みつけた。……………だが

「まだ、だ……………!？」

「終わり……………か……………」

生命の剣は、自分の生命エネルギー全てを瞬間的な爆発力に変える技。

後に残された燃えカスは、崩れて消えるのみ……………

「ゲムデウス……………お前の思い通りには、ならない……………」

灰になって崩れていく体。

ゲムデウスは、何も言わなかった。

こうして、俺もまた死んだ。

覚悟：僕もまた……

僕は、多分寝ているんだろう。

……パラドが、僕にだけ教えたこと。

「大丈夫だ、永夢。俺ができる限り時間を稼ぐ」

多分、感染している僕にだけ伝わったんだろう。

僕とパラドの心はつながってるから。

僕は理解した。

パラドがどんな状態で、何を考えて行動していたのかも。

「……パラド……行かないで……」

僕は懸命に手を伸ばしてパラドの手を掴んだが、その手は振り払われてしまった。

「放せよ。未練がましい奴だな……諦めな。永夢。こうしないと「お前は」生きれない

んだよ」

「そうして、パラドは消えてしまった……………」

「僕は……………一体……………どうすれば……………？」

「何か悩んでいるみたいだな。永夢」

「……………父さん？」

「いつの間にか、目の前に父さんが立っていた。」

「父さん……………もう駄目だ。パラドが死んで、僕はもう変身できない。」

「それに、足もないんだ。戦えない……………」

「確かにそうだな。だけどな、永夢。約束はどうするんだ？」

「……………え？」

「よく父さんを見ると、後ろに誰か立ってる。」

「……………若奈ちゃん……………？」

「せんせい、もうつらい？あるけなくなっちゃった？」

「永夢、俺はお前を信じてる。いくら追い詰められても、お前なら奇跡を起こせる可能性がまだあるかもしれない。なんせ、お前は私の息子だからな」

「父さん……………」

「そうだが、永夢、お前がこのまま腐ってたら、死んだ俺らが報われねえよ」

「……………パラド！」

いつからパラドがいたんだろう。全く気付かなかった。

「ブレイブもスナイプも、みんなお前のために生きた」

「僕は……………僕は……………！」

「せんせー、いきて、かわをわたって！」

「行ってこい、永夢」

僕は手を伸ばして、体を引きずりながら進む。

川の向^現こ^世うへ向かって……………

「キッド、悪いけど、止まってもらってもいいかな？」

「ツ!？」

「え!？」

「永夢!？」

目を開けると、僕は激しく揺れ動くベッドの上に寝ていた。

すぐにベッドを担いで高速で走っているキッドに止まるよう頼むと、ポツピーや何故かいる小姫さんが驚きの声をあげた。

「エグゼイド、お前……………」

「キッド、頼みがある。僕だけを、ある場所まで送ってほしい。

僕の命の使い方、ようやくわかった。

僕は、今日死ぬために今日まで生きてきたんだ。

「ダメ！ 永夢、ゲームデウスと戦う気でしよう！ そんな状態じゃ勝てないよ！」

「ダメだ、ポツピー、男でも女でも、人が決めた覚悟は邪魔できない。

永夢、俺はどうすればいい？」

「まず……………僕をある場所まで連れて行ってほしい。そうしたら……………そのあとは、あるものを僕に渡してくれ。多分、まだCRにいくつかあるはずなんだ。

あとは、ゲームデウスはきつとCRに入ってくる。だから、置き手紙を書こうか」

「よく分からんが……………分かった。移動しながら説明してもらおうぜ」

「ありがとう……………キッド、……………ポツピー、

じゃあ、さようなら」

僕は泣きそうになっている、いや、事実泣いているポツピーの髪をなでながらささや

いた。

「僕もポップビーが好きだよ」

それ以上の言葉はいらなかった。

僕は、きつと今日死ぬ。

でもそれでいい。

世界を、残すために……………

終幕：そして世界は終わった

「ここにいたか、エグゼイド……………」

「待ってたよ。君なら、あの書置きの意味を分かると思ったからね……………」

「【始まるの場所で待つ】か……………」

ここは、僕とパラドが分かれた場所。

世界で初めて、パラドが生まれた場所。

ここが、「仮面ライダーエグゼイド」の始まるの場所だ。

「さて、エグゼイド、お前はどうか戦うつもりだ？ 下半身もない、適合者でもないお前が……………」

そうだ、現段階では、僕はただの大怪我をした一般人に過ぎない。

「でも、お前を倒すよ。これは、これまで僕と一緒に戦ってきた、お前と戦った皆の意志でもあるんだ」

「良いだろう！ ならば、見せて見ろ！ 貴様の覚悟を！」

僕は懐からあるものを取り出した。

それが、世界を滅ぼすか、それとも救えるかは分からない。

でも、これだけは言える。

僕が世界を滅ぼすか、ゲムデウスが世界を滅ぼすか。

二つに一つ。

【Enter The GAME! Riding The END!】

「バグスターウィルスが消えたなら、また入れればいいじゃん」

僕はクロニクルガシヤットを使って、ライドプレイヤーに変身した。

「……………は、あ……………?」

ゲムデウスは、心の底から間が抜けたような声を出した。

「エグゼイド……………お前よもや、そんな力で、そんな状態で勝つ気か?」

「いや、無理でしょ。例え足があっても無理だよ。それだけ力の差は大きい」

ゲムデウスは本気で困惑している。

「じゃあ、始めようか。僕の人生……………FINISHは必殺技で決まりだ」

【マキシマムマイティX!】

【HYPER MUTEKI!】

ハイパー無敵ガシヤットは自分のドライバ―に。

マキシマムガシヤットはキースラツシャ―に刺した。

「じゃあ、もしかしたらさよならだね、ゲムデウス」

「待て……………貴様何を……………?」

【MAXIMUM CRITICAL FINISH!】

僕は、自分に向けてトリガーを引いた。

光線のように輝く弾丸が僕自身に命中し、僕の体が崩れ、消えていく。

【GAME OVER】

そうして、僕は死んだ。

そう、僕は死んだ。

「エグゼイド……………お前は……………一体……………」

何をしようとしていたか、理解できなかつたのだろう。

奴は、困惑の声をあげた。

……………その背後で、散つたエグゼイドの粒子がまた集まり、この俺様が誕生し

たことにも気づかないのだ。

「おい」

努めて気さくに話しかけたつもりだが、ゲムデウスは構えを取りながら叫んだ。

「何者だ!」

何者とは変なことを聞くなと思ったが、自分の体を確認してみても納得した。

「ああ………なるほどな」

俺様自身は元の人間の体を再現したつもりだが、ところどころ間違えていたようだ。

アラバスターのような瞳のない目。

背中の中から飛び出す、巨大な黒い片翼。

鱗で覆われ、赤い爪、さらに肘にも大きなとげがある。処遇アームフアングと言った

ところか。それらすべてが合わさった右腕。

極めつけはこの服だ。

俗にいう喪服。さらに中のシャツまで黒。

確かに、元の間人とは違うようだが、まあいい。

「俺様は、貴様と同じ、ゲムデウスと言う名だ。仮面ライダークロニクルガシャットに入っていたゲムデウスとエグゼイドの人間の遺伝子を混ぜて誕生したのがこの俺様だ」

「お前も………ゲムデウスなのか!」

改めて説明した方がよさそうだな。

「宝生永夢は、人間としての命を終えた……ハイパー無敵とゲームデウス両方の能力を持つたこの俺様こそが、この世界を破壊する正当な資格者だ」

この世界は、この俺様が壊す。貴様ではない。

「俺様は、Re:ゲームデウスでなければゲームデウスXマキナでもない

ゲームデウスMUTEKI改め……ゲームデウスマキシムM」

追憶する約束の数え唄

「分からん……………貴様は、エグゼイドの体に乗っ取ったということか？」

「正確には少し違うな。宝生永夢は、マキシマムガシャットのリプログラミングの力を
利用し、クロニクルガシャットの入っているゲームデウスの遺伝子と自分の人間の遺伝子
を混ぜてゲームデウスの力を得るつもりだった……………それを失敗したに過ぎない」

「……………失敗？」

「奴はおごっていたのだ。自分とこの俺様なら、自分の自我が優先されると……………だが
結果は見た通り逆だ。残ったのは俺様の意志。賭けに敗けた奴は体を奪われた。後す
るべきことは、俺様が貴様が変わってこの世を滅ぼすだけだ。」

「……………何故……………だ……………」

「ん？」

「何故だ!!? くそ!!!いつもこうだ!!!今度こそ、真のエンディングを……………と思っても、結
局はダメになる!!!あの時も!あの時も……………そして、今回は主人公を失った……………」

「何だお前……………何を言ってる……………うお!!」

「な、何だ……………? マクシムの身体から……………光が……………」

「グオ……………ま、まさか……………エグゼイド!? ゲムデウス……………お前の好きにはさせないぞー! バカな……………人間如きが、この俺様にかなうとでも!? 勘なうさ……………僕には……………約束があるんだ!!! ぐう……………! うおおおおおおお!!!」

徐々に光が全身に広がり、やがて収まった。

!!!

ゆつくりと目を開け、自分の体を確認した。

「バグスターになったけど……………いつもと同じ、僕の身体だ」

一度死んだ過去の僕。ゲムデウスと融合した今の僕。

体のつくりは違うけれど……………同じ僕自身だ。

「待たせたね、Re:ゲムデウス……………僕が、最後のプレイヤーだ」

「……………クハ……………クハハハハハハハハハハハ!!! 見事だ! なるほどな! 自分に相手を倒すだけの力がないのであれば、自分とその相手の力を足せばいい! 単純だが、いい判断だ」

本当は、出来ればやりたくなかった。でも、これ以外に何も思いつかなかった。何かを犠牲に、莫大な力を……………か……………これじゃ、本当にゲームみたいだ。

「本当は、死にたくなんかなかったさ……………でも、もう僕一人の気持なんか問題じゃないんだ。僕を守るために……………死んだ人たちがいる。だから……………これでいいんだ」

僕の命一つで済むんなら、軽いものだよ。

「そうか……………良し！ならば、今度こそ最終ステージを始めようではないか！この終わりになきゲームに、正統なるエンディングを!!」

「その前に、1つ、僕の質問に答えてくれるかい？」

「む……………」

僕が初めてこのRe：ゲームデウスとあつた時から感じていた疑問。

「君は、やけに「ゲームのエンディング」にこだわるね。どうしてだい？」

「……………私は……………知りたいのだ……………」

「知りたい……………？一体……………何を？」

「私は、自分がこの世に存在する理由を知りたいのだ！その答えは、ゲームのエンディングにこそあると信じている！」

「自分が……………いる……………理由？」

「そうだ！一度目は不覚にも檀正宗のクロノスに吸収された！二度目はパラドクスของเกมデウスワクチンに消された！未だ正当な仮面ライダークロニクルの終わりは訪れていない!!!」

「ゲームデウス……………！君は間違ってる！生きている意味は、生きているときに見つけるんだ！」

「ほぎけ！いかなる思いを抱くかでは話にならない！いかに生きたかがゲームの敵キャラ

クターの本懐なのだ！」

僕は思い違いをしていたんだ。ゲムデウスはこの世界を滅ぼそうとなんかしていなかった。彼にとつて、勝とうが負けようがどっちでもいいんだ。

「勝つて世界を滅ぼすのもいい……………負けることもまた敵キャラクターの務め！ 繰り返す！ 我が名はR e : ゲムデウス！ この世界に終焉をもたらす正当な資格者なり！」

「僕も……………負けられない！ 皆のためにも……………若奈ちゃんとの約束のためにも！」

僕がそう言うと、ゲムデウスは大声で笑いながら、自分の胸を指さした。

「その若奈と言う者……………もしかすると、ここにいるのか？」

ゲムデウスの胸が裂け、中からガシヤットがのぞいている。

「あれは……………バグスターズガシヤット……………！ ま、まさか……………」

「この中に入っていたのは三体。このR e : ゲムデウスと、残りの二体は檀正宗の変身するクロノスとゲムデウスXだ……………ガシヤットから出たのはこの私だけだ」

バグスターズガシヤットに入っているクロノス……………まさか、あれつてマスターガシヤットと同じ能力があるんじゃないや……………そして、もしあの子のデータが入っていたら

……………！！

「ゲムデウス……………僕も決まったよ。お前を倒して、必ずそのガシヤットを手に入れて見せる……………！」

「良
E^仮
N^面
D^ラか
O^イろ
F^ダう！
R^ク！
I^ロ
D^ニ来
E^クる
R^ルが
O^のが
N^終よ
I^わよ
C^りい！
L^のの時
E^は極
ま
つ
た
!!!
」
今
こ
そ

天を掴んだその後

「アルティメット……………大変身!!!」

「煌け！彗星の如く！暗黒の最強バグスター！ハイパー無敵！ゲームデウス!!!」

輝きを失ったハイパー無敵ガシャットは銀に輝き、新たな力が開眼した。

……………もう、この世界に人間のプレイヤーはいない。

だけど、まだ僕がいる。ラスボスを倒して世界を救うラスボスか……………皮肉にもほどがある。

「さア……………ゲームを楽しもうか……………」

変身が完了し、俺様の性格が変わる。パラドの「俺」の方がまだ可愛げがあったな……………

「どっちが真のラスボスの名にふさわしいか……………決めようか!!!」

「ガシャコンデウスラツシャー！」【ガシャコンデウスランパート！】

「承知！最終ステージを始めよう!!!」

仮面ライダークロニクル最終ステージラスボス

Re:ゲームデウス（ゲームデウスバグスター）

VS

仮面ライダークロニクルEXステージラスボス

ゲムデウスM（エグゼイドバグスター）

互いのデウスラツシャーが衝突し、火花が散る。

「ゲム……………デウス……………！」

「エグゼイド……………!!」

互いに憎しみなんて言う感情は超えて、ただ果たすという使命感だけが……………

「くそっ……………体が重い……………」

完全にゲムデウスに体を明け渡さなかったから、力が中途半端になったみたいだ。

今の疲弊しているゲムデウスと同じくらいの力しか出ない。

「どうしたエグゼイド…これではパラドクスの方がはるかに強大だったぞー！」

パラドがどんだけ強かったのが切実に気になる。

そんなくだらない思考を放り投げ、俺様は口を大きく開けた。

「デウス・ブレス」

「なっ!?!」

日に一度しか使えないゲムデウスの最高必殺技。

避けられたが、ゲムデウスの顔の丸い触角と左肩の龍の顔を蒸発させた。

「チツ……いい反応だな」

「行くぞ！双龍劍!!」

二対の龍が出現し、飛翔しながら俺様の方向に振ってくる。

「舐めるな！双龍劍!!」

互いの同一の技が衝突し、炎が吹き荒れる。あまりの熱に足元までもが蒸発し始めた。

「全の太刀！全ディザス災トレ!!」

お互いの奥義が衝突し、それぞれ逆方向に吹っ飛んだ。

燃えつつ痺れて凍るといふ緑でもない状態になりながら地面を転がる。

「ぐあああああ！」

「ぐおおおお！」

無様に転がりながら、着地とは言えないような風に無理やり体勢を立て直す。

ブレーキの代わりに腕を地面に突き刺したため、地割れのようなことになっている。

「はあ………ゲームデウスの野郎に完璧に体を明け渡せばこんなに苦戦することはなかった気が………いや、それでは本末転倒だ」

まだエグゼイドとゲームデウスの意識が混濁していて、自分でも変な挙動になったり変な思考になる。さらに、よくよく考えれば「エグゼイドとゲームデウス」ではなく「僕と

「ゲムデウス」と言うのが正確だったことの異常さに遅れて気づいた。

「なんで自分で自分を他人みてえに呼んでんだ……ああ、体が重い」

その場に寝てしまおうかとも思うが、自重する。

まだ敵は目の前にいる。焦らず、じっくり狩るか……

「グヌ………！な、何だと!!」

起き上がったゲムデウスが何かに気付き、信じられないといった声が上がった。

「な、何だ………？」

「そ、そんなバカな………宝剣が………!!」

ゲムデウスの最高の剣、宝剣デウスラッシャーは完全に根元からポツキリ折れていった。

「な………何故?! 同じ攻撃であったのに、なぜこちらの武器だけが………!?!」

「俺様の………いや、僕の前に、君と戦った僕の仲間の傷だ………!」

誰の攻撃かは分からない。けど、間違いない。

武器に限界が来たんだ。

「ゲムデウス………お前はもう負けてる!」

突進し、拳をゲムデウスに振りかぶる。

とつさにゲムデウスは盾を出したが、その盾が砕けた。

「ば、バカなああ!!!」

疲労だけじゃなかった。みんなが僕のために削ったのは。

「よっしやあ永夢! そのまま決めちまえ!!」

「!? 貴利矢さん!? 生きてたんですか!?」

「勝手に殺すな!!!」

後から聞いた話だと、貴利矢さんは瓦礫に押しつぶされる直前に粒子になってやり過ぎしていたらしい。

さらに良く見て見ると、キットや小姫さん、ポッピーまでいる。

「決めろエグゼイド!!」

「行って下さい宝生さん!」

「永夢! 頑張つて!」

嬉しいな。応援してくれて、助けられる皆がいるから、僕は生きてこられた。

僕も応えよう。皆の命に、その期待に!

「FINISHは必殺技で決まりだ!!!」

「待てエグゼイド!!!」

ゲームデウスの翼を出し、空へ飛翔した僕をゲームデウスが追う。

【GAMEDEUS ABNORMAL FINISH!!!】

僕が急降下すると同時に、ゲムデウスも体勢を崩して落下を始めた。

「な、何?!……………!翼が!!」

ゲムデウスの翼がもげ、落下している。翼が切れかかるくらい傷ついていたのか……………そして、それが痛みとして現れないほど疲弊していたんだ。

「フン!!」

ライダーキックが正確にゲムデウスの腹部をとらえ、めり込んだまま高速で地面へ向かう。

「グエエ……………」

「ゲムデウス、君は本当に強いよ。僕一人じゃ絶対勝てない。」

だから、僕は……………たとえ死んでも、

コンテニューしてでも、クリアする」

勢いを全く落とさず、僕はそのままゲムデウスと一緒に地面に落下した。

GAME・ENDING

「うげっ！おわっ!!」

ゲムデウスと一緒に地面に激突した僕は、勢いを殺しきれずに何度もバウンドし、転がった。だが、やがてその勢いも収まり、ようやく止まった。

「はぁ……はぁ……勝った……!」

体が疲れ切って、上手く上体を起こせない。でも、これで……!?

「グウ……ガアアア!!」

晴れてゆく土埃の中心に、ゲムデウスが立っている。

「ま……まさか……!」

まだ終わらないのか？

いったいどこまで続くというのか。ゲムデウスはまだ立っている。

「ウ……ギャオオオオオオオオ!!!」

ゲムデウスの体が膨張し、どんどん巨大化していく。

「く……!第二形態か……!」

思い出した。あの時は苦労したっけ。でも……ゲムデウスXの時は無敵の能力で

ゴリ押しして勝てたけど、今度はそうはいかない。無敵の能力が通過される以上、勝ち目が薄い……………

「くそ……………どうする……………?」

「さあ、エグゼイド!これが本当に最後の戦いだ!!」

巨大化が止まり、変化が終わった。今からちょうど1年と少し前、見た姿と同じ。ゲムデウスの第二形態だ。

「さあ、究極のゲームの終わりは近い……………!」

ゲムデウスの龍の体のような腕が高速で伸びてくる。背を向けて走るが、すぐに捕まってしまった。

「ぐ……………く、くそ……………」

恐ろしいほどの力で締め付けられ、意識がもうろうとし始める。でも負けるわけにはいかない。

「うぐ……………うおおおおお!」

両腕に無理な力を込め、振りほどこうと試みるが、そこにもう一方の腕が伸びてきた。「あぐ……………うあああ……………!」

両腕に締め付けられ、今度こそ何の抵抗もできない。このまま強く握りしめられた空き缶のように潰されるのかと思ったが、不意にその拘束が外れた。

「永夢！大丈夫か!？」

目を開けると、目の前に白黒のクロノスがいた。

「貴利矢……………さん?」

クロノス……………もとい貴利矢さんに腕を引かれ、僕はゲムデウスの腕から脱出した。

「うぬ！厄介者めが!」

ゲムデウスを見ると、キッドが遠くから魔法を飛ばして牽制していた。

ゲムデウスも片方の腕を伸ばすが、遠くて届いていない。

「永夢！今のうちに立て直すぞ!」

貴利矢さんと一緒に地面に降り、僕もゲムデウスに魔法を撃つ。

「エグゼイドオ……………待て!」

「永夢！投げるぞ！行つてこい!!」

貴利矢さんが僕を空中に投げ飛ばす。ゲムデウスの右腕が僕の体の真下をかすめた。

「エグゼイド！俺の足に乗れ!」

空中でキッドの足に飛び乗り、そのままキッドに蹴られながら飛ぶ。

ゲムデウスの左腕をかわし、デウスラッシャーをゲムデウスの顔面にたたきつけた。

「……………ん!？」

見ると、ゲムデウスの顔と僕のデウスラッシャーの間に透明なシールドのようなもの

があり、剣が当たってない。

「クフフフフ……………捕まえたぞ。エグゼイド」

無防備な状態の僕を、ゲムデウスの右腕が掴んだ。

「ぐう……くそ……………狙ってたのか……………!」

「永夢!」

「エグゼイド!」

僕を助けようと貴利矢さんとキッドが走ってくる。

「しやらくさい!吹き飛ば!!」

ゲムデウスの目から大量のビームが飛び出した。

がむしやらに、周りのすべてのものを理不尽に蹂躪していく。

「終わりだ……………」

ゲムデウスは僕を投げ飛ばし、地面へたたきつけた。

そこから、体を回転させ、剣のような足で切りかかってくる。

とつさにデウスランパートを出し、その剣を受け止め……………

「が……………う……………?」

受け止めることはできなかった。僕は、盾ごと切り裂かれ、その場に崩れ落ちる。

「永夢……………くそ!」

貴利矢さんの声が聞こえるけれど、何処にいるか分からない。

ゲームデウスの身体から伸びてくる針が僕の両腕と足に突き刺さる。

十字に空中へ引き上げられた僕は、もう動くこともできない。

「さらばだ……エグゼイド。これが……本当の、仮面ライダークロニクルの……」
エンディング。勇者は破れ、バットエンドの証として世界が終わる。」

僕の体に、さらに針が刺さる。

太ももに

お腹に

首に

顔に

【GAME OVER】

僕の体が崩れ、粒子になって散っていく。

「生きとし生けるものよ……あらゆる命を破壊する!!」

ゲームデウスの身体から、闇が溢れた。

ゲームエリアを、街を、国を、世界を、飲み込んでいく。

暗黒の中、ゲームデウスの両眼だけが、いつまでも輝いていた……

墜落する確約の忘れ詩

「ゲムデウス……………まだ……………終わってないぞ……………!」

「…? 何者だ!? 何処にいる!？」

ゲムデウスはあたりを見回すが、見つけることができない。探すべき相手は目の前にいるのに。

「ここだ。お前の目の前だ」

「……………! ま、まさか……………貴様も!」

ゲムデウスの目の前に浮かぶのは、崩れ、粒子となった僕。

その粒子が集まり、巨大な存在に変わっていく。

「最終ステージは、これから始まるんだ!!」

超ゲムデウスM、第二形態。

完全な怪物に変貌し、もう人間の面影は皆無だ。

身長：18・1m 体重：80・8t

僕もまた、怪物へと変貌した。

「さあ、お互いのすべてを出そうか!」

僕は下半身の鋭利な刃「デウスカリバー」と言うものに変異している。回転蹴りの要領で、全ての力を、今、出し切る。

「第二形態でも、お前が消耗してるのは変わらない！分があるのは僕の方だ！」

伸縮自在の竜頭の両腕「デウスファーニブル」でゲームデウスはガードする。

だがそれももはや……………

「馬鹿な……腕が！」

今まで散々痛めつけられてきた体の傷は、例え進化してもそう簡単に消える者じゃない。

勝敗は明らかだった。

「これで……………ゲームは……………終わりだ……………！」

両腕を完全に分断し、それでも僕の勢いは衰えない。

ゲームデウスの体に刃が食い込み、真つ二つに両断する。

「グゴ……………ガアアアアアアアアアア!!!」

ゲームデウスの体が縮小し、地面に向かって落ちていく。気が抜けてしまい、僕も縮みながら落下する。

「すげえ！永夢、やったな！」

貴利矢さんやポッピーたちは手をたたいて喜んでる。

でも、僕は心から喜ぶことはできなかった。誰かを殺したのは事実だから。

ゲムデウスと言う、同じ種族をいま、僕は真つ二つに切り裂いてむごたらしく殺した。その事実は、変わらない。

だけど、そんな自分自身の罪も。

託された思いも。

全部背負って、生きていく。

例え人間じゃなくとも、

些細な事さ。

僕が僕であることは、何も変わらないはずだから。

「うー……ふう……」

地面に衝突し、一瞬鈍い痛みが走る。でも、それもすぐに消えて、

僕はゆっくりと息を吐いた。

「グ………ウウウウ………!」

聞こえてい来るうめき声は、ゲムデウスの物だろう。

傷が痛むのか、それとも敗北したことによる憎悪か。その両方か。

いずれにしても、良い感情じゃないだろう。そう思った。

「………フッフッフッフ………ハーツハツハツハツハツ!!!」

……それは、喜びの声だった。

「見ろ！エグゼイド！人々が……喜んで……死ぬことで、祝福される命……素晴らしい、……これこそ、私が望んだ、本当の……エン……ディング……」

……死が救いな人もいる。

生きることができず、涙を流した人もいた。

命の価値は、その人の価値観と場所による、か……

「昔の僕じゃ、そんなこと考えもしなかったな……」

傷ついた体を引き起こし、ゲムデウスの最期を見届けた。

粒子となり、ゲムデウスが空に消える。

その直後、ずいぶん久しぶりに聞く電子音が辺りに響いた。

【GAME CLEAR】

地面には、「バグスターズガシャット」が落ちている。

こうして、この世からすべてのラスボスバグスターが消えた。

僕を残して。

エピローグ

Life Is Beautiful So Let,
S EXCITE

あれから一週間の時間が経った。

バグスターズガシヤットには、かつての仮面ライダークロニクルで犠牲になった人々のデータが保存されていた。

僕と貴利矢さんは、苦心しながらも何とか中のデータを読み取り、今はもうほとんどの人が復活した。

飛彩さんや大我さんも同じように復活して、CRのメンバーは院長を残して全員がバグスターになった。

皆最初は気まずい雰囲気の流れていたけど、何度か話し合っているうちにまた元気を取り戻してくれた。

飛彩さんはもう小姫さんと終始くっついていて、前よりもずいぶん明るくなった。

ただ……………

戻ってこれなかった人もいる。

黎斗さんもその一人だ。

バグスターズガシャットではなくオリジンガシャットにデータが移されていたこと、そして、その黎斗さんのガシャットが蛮野の研究所の崩壊によって潰れてしまったこと。

悪いことが連続で起きてしまい、黎斗さんの復活はかなわなかった。

ラスボスバグスター達やパラドもそうだ。

ガシャットの中からそれらしいデータの塊は見つけられたけど、解読が不可能だった。

そもそも何の関係もないデータなのか、それとも復活が不可能だということの表れか、

黎斗さんがいれば、もしかしたらとも思う。

でも、黎斗さんはもういない。

そして父さんもそう。

ガシャットはともかく、使っていたドライバーが自作であったことと言う問題があり、復元することはできなかった。

これらは、きっと僕の課題になるはずだ。

いつか、全ての人を救いたい。そう願う。その願いに向かって、歩いていこう。その中で、ひとり、特に僕が再開を望んでいた人がいる。

名前は香坂若奈。僕が必ずまた会うと約束した少女。

本当は、クロニクルの被害者の人たちと一緒に開放するべきだったんだけど。

僕の我が儘で、少し遅らせていた。

しつかり、二人きりで、面と向かって話したかったから。

お礼を言いたい。助けてくれてありがとうって。

謝りたい。僕なんかのためにゴメンって。

言いたいことがあるあつて、その決心がつかなくて。

今まで遅らせていた再開を、今しよう。

誰もいないこのCRで

【バグスターズ】

ガシヤットを起動し、ポッピーから借りたバグヴァイザーIIに差し込む。

「……………若奈ちゃん」

聞こえているかどうかは分からないけれど、僕はガシヤットにささやいた。

スイッチを押し、若奈ちゃんがヴァイザーから噴射される。

輝き、人の形を作り、そして、僕がよく知る少女の姿になった。

「せんせー………?」

「若奈ちゃん、久しぶり」

僕は精いっぱい笑顔で彼女を迎えた。若奈ちゃんが走り、僕に飛びつく。

「せんせー!」

………やつと、

やつと、追いついた。

僕の、この手が、

ようやく、

君に追いついた。

全てが終わったわけじゃない。

まだ救えていない人たち、

倒さなくちゃならない敵がいる。

蛮野に資金の援助をしていた「ルーフマン」と名乗る謎の存在。

若奈ちゃんにクロニクルガシャットを渡した何者か。

戦いは、まだ終わっていない。

でもいつか、僕が全部終わらせる。

生きれなかった人たちの分まで。

人生は美しい。だから、楽しまなくちや。

そして、その人生を踏みにじろうとする存在と、僕はこれからも戦おう。
それが、僕の、

宝生永夢の人生なんだ。

小ネタ集

唐突ですが現時点での最強ランキングを始めます。

特別枠：大首領

G M 黎斗視点のお話で登場。詳細は話せませんが、私の小説内では未来永劫最強キャラです。

………何この馬鹿スペック………ちなみに、これ以上表示できなかつただけで、この人の性能は果てがありません。

特別枠2：シルバーカブト

G M 黎斗視点のお話で登場。同じく詳細は話せませんが、こちらもだいぶチートキャラです。

強い（確信）

1位：GM黎斗

流石の一位。ただし、どんどん性能は向上していくので最終地は不明。

我が小説作品最初のチートキャラ。魔法とスキルを使い、1秒に10%ずつ上がる力
………恐怖。

2位：ハイパー無敵ゲムデウスクロノスX

前作のラスボスにして若奈ちゃんが変身したアレ。強い。

純粋な戦力では恐らくGM黎斗越え。ただし、結果敵に黎斗の能力で能力を低下させ、あえなく爆死。

3位：ゲムデウスムテキ

永夢が乗っ取られた場合のゲムデウス。

恐ろしい攻撃力。ただし耐久力（防御力）は皆無。

4位：パラドクス

個人的に一番Re：ゲムデウスとの戦闘シーンに力を入れた。最後だったし多少はね？

攻撃力ではRe：ゲムデウス以上。本編では読み間違えて出し惜しみました結果、粘り勝ちされてしまう。

5位：Re：ゲムデウス

本編ラスボス。正直リア友からは「掃除要員」と呼ばれている。まるでホコリを掃くようにライダーたちが……

パラドと違って防御に全振り。戦闘内容的にはパラド勝ってたのに……

6位：ゲムデウスマクシム

心を失わなかった永夢。よわ……いやいや、強い……はず。

グラフで表すと差が見え見えで……

選外：ハイパー無敵

見比べるために一応置いておきます。

こうしてみると永夢は強くなったんやなって（棒）

さあ！気分を変えて、ここからは誰得コーナーをやっていきましょう！

まず、小説内にある別の作品、アニメ漫画などのネタを言っていこうと思います！
あなたはいくつ気づきましたか？

※作者が忘れていても数多くあるはずです。すみません！

まずはサブタイトルから行きましょう！

42話（バグスター連合：崩壊編第1話）：時渡りのCRONOS

サブタイトルで使われているのは大抵作者が気に入っている曲名です。

元の曲名は「時渡りのクロノス」音楽素材配布サイトの曲です。フリーゲームでたま

たま見つけ、気に入ってしまったのでこっそり入れました。

63話(第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年編0—1話)：アンギラスのテーマ
同じく曲名。音楽に詳しくありませんので詳細は知りませんが、元の曲名は「禁じられた遊び」です。

64話(第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年編第0—2話)：Four Diver
imentos, op. no. 1, Andantino Grazioso

私の人生で最大の神曲の1つです。仮面ライダー555の作中で、海堂直也というキャラクターが自分の夢を諦めた後の最後に弾いた曲です。聞いてて涙腺が逝った思
い出があります。

65話(第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年編第0—3話)：いつも何度でも
ジブリの曲ですね。いい思い出です。「千と千尋の神隠し」のED曲です。

66話(第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年編第0—4話)：Jupiter
説明不要。教科書にも載ってる。

67話(第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年編第0—5話)：4号より「time」
『スーパーヒーロー大戦GP』の後日談『仮面ライダー4号』の主題歌。気に入りにすぎ
入れました。本編で555も出てくるし……

68話(第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年編第0—6話)：Orion de ai

f i

「恋のマイアヒ」で親しまれているO—ZONEの曲です。ぜひぜひ聞いてみてください。
い。

69話（第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年編第0—7話）：悲しみの向こうへ
鬱アニメ？の「スクールデイズ」の曲です。怖い……

70話（第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年編第0—8話）：ノンマルトのテーマ
ウルトラセブンの「ノンマルトの使者」と言う回でとある少年が吹いていた物悲しい
曲です。

71話（第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年編第0—9話）：夢のかげら

同じく仮面ライダー555の神曲です。先ほど述べた海堂直也の弟子？が引いてい
たギターです。大好きです。……え？小説本編でも主人公の巧が登場してたり、優遇
してないかですって？ 優遇してますよ？だって一番好きな仮面ライダーですし。

72話（第3部：幻の怪獣ノンマルトと少年編第0—10話）：もののけ姫

同じくジブリの「もののけ姫」の歌ですね。落ち着きつつ、抑揚が大きい素晴らしい
曲です。

113話（第5部：永遠に眠り続ける世界編20番目）：愛してるよエリ　くどこにい
ようともく

和訳してOrion de a i f i。O-ZONEの曲です。好きなのでもう一回使いました。

147話（第5部：永遠に眠り続ける世界編41話）：純愛ラブソディ

元は不倫の曲だそうですが……今回は失恋の曲として使いました。エリーゼの最期によくあつた曲だと思います。

150話（第5部：永遠に眠り続ける世界編44話）：V.S. スタードリーム

星のカービイロボボプラネットのラスボス、星の夢と戦う時のBGMです。

153話（最終章：セカイシユウエン編3、4話）：使者：我とともに来たれ、死者：我とともに滅ぶべし

三つ目がおるといふ名作漫画の主人公、写楽のセリフです。

157話（最終章：セカイシユウエン編7話）：一人：罪と禍

「アクセルワールドVSソードアートオンライン」のエクストラクエストの名です。

158話（最終章：セカイシユウエン編8話）：接戦：消えた八月

戦争を、広島の原爆を現した歌です。怖い。よく合唱曲として登場しているようです。

160話（最終章：セカイシユウエン編10話）：消滅：散るは永遠の刹那

神曲。龍が如く2および龍が如く極2で流れたラスボス戦BGM。物悲しく、涙を誘

う曲です。

166、169話（最終章：セカイシユウエン編16、19話）：追憶する約束の数え唄、墜落する確約の忘れ詩

同じく星のカービィロボプラネットのBGMです。元の曲名は「回歴する追憶の数え唄」そして「回歴スル追約ノ忘れ具」です。

他のも様々な小ネタがキャラクターのセリフの中に隠れています。残念ながら作者は忘れていたこともあり、拾いきれていません。また今度！

三部作編GM×NEXT×ANOTHER：TRIPLE STAGE

真実と創世神の最期

「……………素晴らしい……………力だな……………ゲーム！」

「お前はここで死ぬ。この世界で苦しんで死んだ人々に、せめて詫びろ」

目の前で地に膝をつくゲムデウスMを見下ろし、私はとどめを加えようと歩を進めた。

「我は仮面ライダーCHRONICLEの真のラスボス！ゲムデウスM！そう簡単に死ぬものか！」

最期の力を振り絞り、立ち上がろうとするゲムデウスMの首を手刀でそぎ落とした。

「バカな……………」そう呟きながら、ゲムデウスMの首が転がり、光の粒子となって消滅した。

「これで……………遊びは終わりだ。皆……………私にそんな資格はないが、仇はとった。せめ

て皆、安らかに……………」

冥福を祈ろうと、目を閉じようとしたが、まだ残された首から下が蠢いていた。

「とんでもない生命力だな……まあ良い。まとめて消して……………」

残された体が崩れ去り、中から人間が転がり出た。そしてその人間の姿は、他ならぬ宝生永夢だった。

「なっ……………!? え、永夢！」

慌てて駆け寄り、永夢を抱えた。回復魔法をかけるが、永夢の体の崩壊が止まらない。

「くそ……………なぜ回復出来ない!?!」

「う……………く、黎斗さん……………ですか?」

「永夢……一体何があった?」

永夢は、途切れ途切れではあったが、この世界で何が起きたのかを話した。

新たに現れたバグスター達との悲しい戦争。その裏で動いていた狂った科学者の存在。そして、その科学者が作った世界を滅ぼす程の力を持った新たなゲームデウスとの戦い。

その戦いの中で失われた仲間たちの命。

永夢自身も戦える状態ではなくなり、苦肉の策として仮面ライダークロニクルガシャットを使用して従来のゲームデウスと融合してパワーアップを図り、結果として永夢

は乗っ取られ、世界を滅ぼす直前まで破壊の限りを尽くしてしまったこと。

「す、済みません、黎斗さん……………」

「……………大丈夫だ、永夢。まだきつとどこかに生き残っている人々がいるはずだ。その人達を集めてまたやり直そう」

何とか永夢に励ましの言葉を聞かせるが、永夢の体の崩壊が止まる気配は全くない。

「今は休め、永夢。安心してくれ。こんな傷、すぐに良くなる」

「い、良いんです、黎斗さん……………僕は、もう、助かりません……………」

永夢の体が、どんどん崩れていく。

「何を言ってるんだ永夢！ 諦めるな！ 私にもう少し時間をくれ！ 君に話したいこ

とや、謝りたいことが山ほどあるんだぞ!!!」

「黎斗さん……………今のあなたなら、安心して頼めます……………僕の……………代わりに……………」

この世界を……………お願い……………しま……………す……………」

「永夢！頼む……………待ってくれ……………」

「さ、最後に……………い、今まで起きたすべての事件は、全部、う、裏で仕組まれていたんです……………黎斗さんがバグスターウイルスを見つけたのも、それを利用しようとしたのも……………バグスター連合も蛮野も、……………皆や、僕の死も……………皆、自分の意志で動いていると思っていたけど、本当は皆操られていたんだ……………誰かが、裏で糸をひいて

いるはずですが……………それが……………誰なのかは……………ま……………だ……………」

【GAME OVER】

永夢の体が、完全に消滅した。

私は、また一人になった。

「何故……………こんなことに……………こんな……………こんな……………！」

……………永夢、君の心は、私が引き継ぐ。この世界は、私が必ず復興させる……………！約束する……………！」

あれから、数か月。笑顔が消えた私を妻たちは心配しているが、やるべき事は山のようにある。休んでいる暇などない。疲労や寝不足など、回復魔法でどうにでもなる。

今はまだ、とにかくやるべきことで頭を満たしておきたい。

さらに数か月後、この世界で生き残っていた人々は全員一か所に集めて簡易的な国に住まわせてある。毎日顔を合わせるたびに涙ながらに礼を言われるが、なぜか今の私にはその礼は響かなかつた。

ただ、悲しみだけが……………

そういえば、永夢はかつて私に行つた。「誰かが、糸をひいているはずだ」と。あまり考えたことはないが、私が救つた人々の中にその人物がいる可能性が大きい。

一度調べてみるか……………

「お前が………この世界を壊した張本人か………！」

「待ちくたびれたぞ。檀黎斗。いつ気が付くのかと楽しみだったよ」

「お前は、なぜこんなことをする!? お前は一体何なんだ!?!」

「我は死なり あらゆる世界を 滅す者」

「永夢の………皆の仇は私がとる! 変身!!!」

【HYPER CREATOR GOD X!!

HYPER CREATE OF ガシャット! ガッチャーン!!!

レベルアップ∞!!!!

創世の騎士よ! 照らせ! 太陽の如く!! 最強の創世ゲーム!!!

HYPER 無限!!! 幻夢!!!

「ぐ……………つま、まさか、ここまでの力が……………！」

「素晴らしい……………幻夢、お前と最初に戦えてよかった。おかげで知ることができた。この圧倒的な力……………私は無敵だ……………！」

私は、足を引きずりながらも家に向かって歩を進める。

体は粒子となり、消えかけながらも何とか歩みだけは止めない。

あまりにも帰りが遅い私を心配し、玄関で待つていたアリアが私に気付いて駆け寄ってきた。

その姿を見て安心し、私はその場に倒れこんだ。アリアが私の体を揺らす。

「あなたっ……！大丈夫!?何があったの?……待ってて、すぐに皆を呼んでくるわ！」
立ち上がって走ろうとするアリアの袖をつかみ、止める。

「もう……時間が無い……せめて……君に……」

アリアは少し迷ったようだったが、やがてその場に座り、私の手を優しく包み込んだ。

「……すまないアリア……君たちを置いて……先に……私が……」

「良いよ……良いのよ。あなたは私たちの世界を救ってくれたのだから。謝ることなんて何も無いわ」

……結局、私は妻たちに自分がかつて犯した罪を伝えることがな
かったな……

「アリア……最期に……」

「……?」

「愛を……ありがとう」

【GAME OVER】

道を決める者

土砂降りの雨の中、私は一人、傘を片手に道端に立ち尽くしている。

その場から一步も動かず、ただひたすらにその場にとどまるその姿は、異様そのものだろう。

「あの、どうかしたんですか?」

不意に、通りすがりの女子高校生が不思議そうに話しかけてきた。どうやら道に迷って立ち尽くしていると思われるようだ。

「お構いなく。人を待っているだけですから」

目を合わせながら形だけでも優しく微笑めば、初対面の人間程度なら簡単に騙せる。「そうですか…」

不思議に思いつつも、一応は引き下がった女子高校生が足早に去っていく。

雨は、勢いを増し続けていくばかりだった。道路がうつすら水溜りを作り、その上を走る車が蹴散らした水が吹き飛んでさらに大きく水溜りが広がる。

「あの、何かお困りですか？」

次に話しかけてきたのは、会社員風の男だった。どうやらまたしても道に迷った馬鹿だと誤解されたようだ。

「いいえ。ただ人を待っているだけですよ。お気遣いなく」

一言だけ告げ、すぐに目を離した。

どうやらこの街にはおせっかいな人間が多いようだなどと、くだらないことを考えてしまふ。

………それにしても、遅い。いい加減もう学校は終わっている時間のはずだが

もう、いつそのこと別の方法でもいいかと思いついた時、遂にその人物は現れた。

「……あの、どうか、したんですか……?」

消え入りそうな声が、聞こえた。

視線を落とすと、目の前に黄色い傘をさした少年が立っている。

「いや……人を待っていただけだよ。大丈夫」

そう……君を、ね……

「君が事故にあえば、或いはあの男は隙を見せるかもな。まあ、妻でもよかったが

……」

「え？」

目の前に立つ少年の背に手を当て、思いきり強く突き飛ばした。

軽く吹っ飛ばすような状態で少年の小さな体が道路へ転がり込み、ちょうど通りがかったトラックが少年をはねた。

主から手を離され、行き場を失った黄色い傘が宙を舞う。やがて吸い込まれるように地面へ落下し、小さな落下音が雨音の中に木魂した。

「あ、あんた！何てこと………大丈夫かい坊や!?今救急車を呼ぶから……」

大きな声で不快に喚き散らしながら懐から携帯を取り出して救急車を呼ぼうとするトラックの運転手にむけ、私は手をかざし、必要な作業を行った。

「………もしもし!?子供がトラックと接触して………はい！私の前方不注意でした！前から飛び出してきた子供に気付けなかつたんです!!はい………はい………場所………すぐ来てください!!!」

………これでもいい………

さあ、本命の場所に行こうか。

もうしばらくすれば、彼の耳にも届くはずだ。愛する息子が事故に合ったと。

いつもは冷静沈着な彼ならば、ほぼ確実に車に乗った瞬間ブレーキに細工がしてあることを見抜くだろう。知、技、剛、速、柔、心、全てを持つ彼は、ずっと目障りだった。

だがそれ故に、どうしても真正面から命を奪うにはリスクがあつた。だが息子の一大事とあらば、平静を失うだろう。

……………彼が人を愛してくれてよかつた……………

自ら弱点を作ってくれるなんてね。

山の中で、大きなトラックを静かに発進させた。ライトを点灯していなければ、カーブで向こう側から車が来ていることにも気づくまい。

無人のトラックが速度を吊り上げながら坂を駆け上がり、狙いすましたかのような夕

イミングで現れた小型自動車と接触した。

吹き飛ばされた小型自動車は真つ逆さまに眼下のガソリンスタンドへと落下し、大きな爆発が起こった。

「……………ああ……………晴れやかな気分だ」

土砂降りの雨の中で、私はそう独り言をつぶやいた。

たぶん、私は彼のことを恐れていたのだと思う。あまりに大きすぎる彼の才能に。いつか万が一にでもこの神である私に届くほどの事をしでかすのではないかと恐れていたのだ。

満足げに燃え上がる車を見ると、私は大きな問題が起きたことを悟った。

運転席には、誰も乗っていなかった。

ならば、まさか車同士が接触する直前に脱出したというのか。私は大急ぎであたりを探した。

「サーチ」

呪文を唱えるのと同時に、鬱蒼とした雑木林の中に生命反応。

私は急いで走り出した。

「……………う……………す、すみません、どなたか存じませんが、手を貸してはもらえませんか……………？息子が重体で、どうしても病院に行かなければならないのです……………」

彼の姿を見た私はほっと胸をなでおろした。強く頭を打ったのだろうか。意識は朦朧とし、立つことすらできずに這いずり回っている。

「今の君ならば、殺すことは簡単だろう……………だが、よりいい案が思い浮かんだ」
「……………？」

私は彼の……………宝生現夢の頭にを手で包み、一言だけつぶやいた。

記憶の上書き
「オーバーライト」

「う……………!? く、くそ……………お、お前……………何者だ……………？」

「私は君の死だ。そして、あらゆる世界を滅ぼす者」

「頭が……………痛い……………」

行かなくては……………あの子のもとへ……………

……………?

あの子……………?

誰のことだ……………?

私は、

誰だ……………?」

これでいい。生かしておけば、或いはいつか使えるかもしれない。

「さようなら、現夢君。またいつか会おうじゃないか。ただ……………それまでに死んでくれるなよ?」

こうして、私の計画がまた一つ前へ進んだ。

ああ、それと最後に……………

死んでも生きててもどうでもよかったが、現夢の子供の手術は、無事成功したようだ。ただ、父親に関する記憶を失っていたようだったが……………まあ、あれはあれで使えることもあるかもしれないし、しばらく様子を見て見てもいいだろう。

「黎斗……………待っているぞ……………未来で、俺を殺せ」

未来に想いを馳せ、
私は頬を緩めた。

悪意の始まり

ざあざあ ざあざあ ぽらぽら ぽらぽら ぽたぽた ぽたぽた ぴちやぴちや
ちやぴちや ぽちやぽちや ぽちやぽちや しとしと しとしと

終わりに言うものは裏側にはいつでも始まりがあつて、最初の時点で「いつかの終わり」と言うものは決まっているらしい。

地球は今、泣いていた。

終わりが始まったことを気づいているからだろう。

雲にたまつた水が涙として地に落ち、様々な音を奏でている。

男が一人、雨の中に立ち尽くしていた。

男は「時」を待っている。自分が世界に干渉するタイミングを見極めているのだ。

今か今かと待ち続け、待ち続けた末にとうとう待ち望んだ「時」が訪れる。

ごうん、ごうんと鐘が響き、時は原点へ戻る。

大時計が零時を指した。

訪れた時に安堵しながら、男は怯えたようにあたりを見回した。そして周りに誰も居ないことを確認すると震える手を天へと突き出し、光の粒子を空へと放った。

時は2000年、0時00分50秒

世界に悪意が放たれた瞬間であった。

光の粒子は蠢き、藻掻き、やがて惹かれるようにして一つの建物の中へと吸い込まれていった。

【幻夢コーポレーション】

男はこの後に起こることを考えたのか、不気味に頬を歪めた。どこか高貴な笑顔だったが、そこには隠しようのない下卑た感情と、隠しきれない恐怖、そして怒り。さらにその二つに覆い隠されて喜びの感情が燻っていた。

「復讐だ」

男は一つ呟いた。

「復讐だ」

男は一つ呟いた。

「もう少しで終わる。あと2、30年の辛抱だ。それまでに必ず私は最強を手に入れる。力の根源を見つけ出す。そして……世界を滅ぼして、儂の復讐は終わる」

記念すべき西暦2000年1月の1日深夜0時00分、悪意が世界に放たれた。

人々は知らない。

その男によって世界が危機に瀕していることを知らない。

人々は知らない。

その男が世界に復讐しようとしていることを知らない。

世界の終わりと言うものの裏側にはいつでも始まりがあつて、最初の時点で「いつかの終わり」と言うものは決まっているらしい。

より正確に言うなら、男が望む復讐は個人に向けたものとはかけ離れており、もちろん人間と言う一つの種や大地と言う小さな枠組みにも収まらない。

ただひたすらに世界に向けての復讐。そしてその感情は世界への憎悪ではない。

どこまでも、誰よりも深く冷たい復讐心と言う名の焔を内に秘め、男は雨の中、闇に消えた。

闇に消える直前、男は幻夢コーポレーションのビルを見つめ、中にいるであろう一人の少年に思いをはせた。

「黎斗………待つているぞ………未来で、俺を殺せ」

世界にバグスターウイルスが放たれた。

ざあざあ　ざあざあ　ぱらぱら　ぱらぱら　ぽたぽた　ぽたぽた　ぴちやぴちや
 ぴちやぴちや　ぽちやぽちや　ぽちやぽちや　しとしと　しとしと

悪意に染められた家族

「……………おかしいな」

ひとつ呟いた。

何故そんなことを呟いたのかと言うと、恐らくそれはこちらの望む未来が遠のいていく確信があったからだ。

「……………おかしいな」

ひとつ呟いた。

視線の先には、三人で仲良く手をつないで散歩している家族がいた。

笑顔の父親、笑顔の母親、笑顔の息子……………

真ん中で、両親の愛を一身に受ける男の子、檀 黎斗を見ながら、不思議そうに首を傾げる。

「……………あの子供が未来で自称神を名乗るほど傲慢になるとは思えない」

こちらの知る未来と、視線の先にある家族が噛み合わない。

大体、父親である檀 正宗と檀 黎斗は敵対していたはずではないか。これでは、どう考えても仲睦まじい親子になる未来しか浮かばない。

このままでは黎斗はただの天才ゲームクリエイターで終わってしまう。それだけは何としても避けねばならない。あのまま優しく思いやりのある大人になられては困るのだ。

「……………どこかで、歪ませる必要がある……………か……………」

心に歪みが生まれそうにないのなら、直接歪めてしまえばいい。

「……………また手を加えねばならないのか……………あまり干渉して刺激したくはないのだが……………」

しかし、望む未来を得るためには仕方なし。意を決して歩きだし、家族の目の前でポケットから携帯電話を取り出すし、わざとらしく一緒に財布も引っ張り出した。

携帯にばかり気を取られる道化を演じながら一緒にポケットから引っ張り出した財布を落とした。

道化を装い、そのままメモ片手に番号をかけるふりをしてしていると、ズボンのすそを引っ張られた。檀 黎斗だ。

「おや？ 道に迷ったのかい？ 坊や」

我ながら気持ち悪い作り笑顔だが、堂に入ったものだ。笑顔を向けると、黎斗はおずおずと財布を目の前に差し出し、「おじさん…これ…」と話す。

「それは……………私の……………」

落としたことに気が付かないわけがないだろう。バカな奴め。

「ありがとう。君のおかげでおまわりさんに迷惑をかける未来が無くなったよ」

そう言いながら努めて優しく気に財布を受け取り、その様子を少し離れた場所から微笑ましそうに見ていた両親：檀 正宗と檀 櫻子を見やる。

「この子のご両親ですか？」

「ええ。あなたが落とし物をしたことに息子が気付いてよかった」

「思いやりに溢れた素晴らしいお子さんですね」

吐き気を催すほどの言葉だが、言わねばなるまい。こんな程度の屈辱で未来が定まるのならば安いものだ。

「親ばかり笑われるかもしれないませんが、私の会社でゲームの企画をどんどん出してくれる、自慢の息子です」

「本当にどうもありがとうございます……坊や、本当にありがとうございます……またね」

手を振って家族の横を抜ける。すうっと……ごく自然に、母親とわずかだが肩が触れた。

一瞬触れられれば十分だ。

肩口を通して呪いを飛ばす。

愛する母を失い、黎斗の心は歪むだろうか。

「お母さん！ どうしたの!？」

「櫻子、大丈夫か!？」

確かめるように振り向くと、案の定母親が倒れ込んでいる。

「なっ…!?! た、大変だ！ 救急車を！」

わざとらしく慌てて見せ、携帯で119に通報する。少しの間待っていると、救急車が駆けつけた。

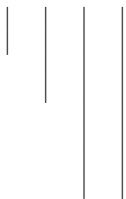
……………どうせ助からない女なのに、こいつらもご苦労なことだな。

「私も付き添わせて下さい。これも何かのご縁です」

「あ、有難うございます…さ、黎斗、お母さんは具合が悪いみたいだから病院に行くんだ。一緒に行くよ」

「う、うん……………」

何が起きているのか分からないという顔だな……………暢気なものだ。…いや、無知と言
うのも、たまには救いになるのかもしれない。子供のと言うのは面白い。



「大変申し訳ありません……しかし、ここまで進行しては、現段階の医療では手の施しようが……」

「そ、そんな………」

母親に掛けた呪いは、笑えることに不治の病と判定されたらしい。元々手の施しようがない段階まで強力な呪いをかけたが、まさか誤解と言えどともに病気と言う扱いに落とし込まれるとは思わなかった。

「あの……あの子は……黎斗君には……このことは………」

医者が部屋から出て、正宗と二人きりになった時を見計らって声をかける。

「悲しませるでしょうが……すぐにでも伝えるつもりです。そして、残された時間を全て、家族で過ごそうと……」

「それは困るな」

「え？ ……ツ!？」

誰も居ない部屋の中、正宗の首を締めあげながら壁に叩きつける。

……そう、そうやって黎斗の心を大切に扱われては困る。「いい子」に育てたては不都合だ。

「あ、あんた……何を……がはっ」

「いいものをやろう、檀 正宗」

腕が光り、正宗の体の中に光が滑り込む。直後に正宗の身体がぼやけ、半透明になって点滅する。

バグスターウイルスに感染したのだ。

「おめでとう………君は世界最初のバグスターウイルス感染症の患者だ」

「バグスタ……ウイルス……？」

仕込みは完了だ。あとは最後の仕上げをするのみ。

「命令だ……【子を愛すな】」

「が、あ……！」

「【子を愛すな】」

「ぎあ……ぐう……！」

「【子を愛すな】」

「ぐううう……！」

これほど心に干渉しても、まだ息子への想いを断つことができない。本気で愛しているのだな。自分の息子、檀 黎斗を。

「重ねて命令する……【子を愛すな】」

だが、それこそが邪魔なのだ。正しく愛されれば、黎斗は善良な人間として育つだろう。それでは駄目なのだ。あの子にはやるべきことがある。そのためにも、早い段階で

心を歪ませる必要がある。

最愛の母を失い、父からの愛も途絶えれば、黎斗は間違いなく歪むだろう。

「檀 黎斗を愛すな」

「私は…… わたしは……！」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「檀 黎斗を愛すな」

「お父さん！ お母さんは!? どうだったの?」

部屋から正宗を出すと、外で待っていたのか黎斗が正宗に飛びついた。しきりに母を心配する声をあげ、父に話しかける。

「……………いい」

「? ……お父さん?」

正宗はゆつくりと、己の息子を見下ろした。

「そんなもの、どうでもいい。母さんはもう助からん……お前は、ただゲームを作つていればいいんだ」

「おと、うさん……」

絶望的な表情を浮かべる黎斗。震える手で正宗の裾を掴むが、邪険に払われ、あろうことか父親に突き飛ばされる。

「新しいゲームの案を練れ。3日以内でだ」

それを言ったとき、振り返りもせず檀 正宗は病院から出ていった。

「坊や、大丈夫かい？」

本当は、やるべきことを終えたのならもうここに居る意味はないのだが、黎斗の心が歪んだかどうかを確かめるのが最重要だ。助け起こして近くの椅子に座らせる。

「お父さん……」

檀 黎斗は泣いている。大粒の涙を流しながら。

だが、ただ泣いているだけでは駄目だ。悲しいだけで、その悲しみを下手に乗り越えられるのが一番困る。

愛してくれる母は早死にし、父親からは愛されない。

今まで芳醇に供給されていた幸せを突如すべて失ったなら、流石に絶望くらいはして

くれるだろう。

「お父さんは…………お母さんの事が好きだったんだ…………」

……………よもやこのガキ、母の助からない事実に関係が一次的に気が動転したとでも思っているのか？ だとしたら、いくら何でも樂觀的どころの騒ぎではないぞ。バカすぎる。

「お父さんは…………ボクの事は好きじゃなかったんだ」

……………おや、何だかい方向に傾き始めたぞ？

「お父さんは…………お母さんのために、ボクの事を好きな振りをしてたんだ…………」
歓喜の感情が、体を満たす。

大成功のその先に辿り着いた気分だ。

確信を手に入れた。歪んだ、と言う程度ではない。

檀黎斗の心が、完全に壊れた。

恐らく気が付いていないのだろう。自分の心が壊れたことに。成功を確信し、すぐにその場から離れた。

「黎斗……………待っているぞ……………未来で、俺を殺せ」

あの様子なら、黎斗は必ず狂人として成長するだろう。

それを確信し、私は未来に想いを馳せた。

悪意で始まる物語

男が一人、木の陰に隠れている。木の陰に潜む男は、じいっと一点を見つめていた。

時は2017年8月27日。男にとって今日はこれまで今か今かと待ち続けてきた時だ。

今日この日、ある異世界から勇者を呼び込むために、とある大仰な次元魔法が使われることになることを男はあらかじめ知っている。そこにある人物を滑り込ませたいのだ。

「運命はこの私に味方したようだ……」

運命などと言う不確かなものではなく、実は影で懸命に支えられていて、必然の道をとどつていたことに、男の視線の先に立つ男……檀 正宗は気が付いていない。

「パーフェクトノックアウトは完全に消滅し、ハイパー無敵は変身能力を失った……もはやクロノスを攻略する術は………無い！」

嬉しそうな顔をするのだなど、木の陰に潜む男はぼんやりと思った。自分が敷かれていたレールの上を一生懸命走り続けて、あらかじめ用意されていたターニングポイントをまるで降ってわいた千載一遇のチャンスだと考えているならば、ある種男を楽しませ

るための道化師としての役割は完璧ともいえる。

「君たちの運命は…BAD ENDだ…!」

檀 正宗。かつては優しい心を持ち、家族を、妻を、息子を愛した「父親」の手本のような人物。正宗の心に、かつて男が干渉したのは事実だが、それでもここまで容赦のない存在になるとは思っていなかった。だが、男の持つ記憶と黎斗や正宗の性格が同じである以上、やはりこの狂った心の状態が正しいのだろう。

「プレイヤーでない君たちによつて不正にクリアしたゲームなど無効だ！ 君たちレアキャラは、ゲームに支障をきたすバグ！ バグは…削除する…変身」

【仮面ライダークロニクル

ガシャット…ガツチャーン バグルアツプ

天を掴めライダー 刻めクロニクル…今こそ時は！ 極まれり！】

……最後の戦いが始まる。

予め結末が決められている、闘ったとしても何の意味もない、無価値な最終決戦が。

檀 正宗は気が付かない。

檀 正宗は気が付かない。

自分が狂っていることに気が付かない。

檀 正宗は気が付かない。

自分を狂わせた相手が近くにいる事に気が付かない。

「私がある限り、このゲームは続く…仮面ライダークロニクルに、終わりの時など…無い」

否、仮面ライダークロニクルが続くことはない、何故なら、檀 正宗もまた、この少し後に死ぬ運命にあるからだ。そのことにも気が付いていない。ただひたすらに自分の望みがかなうと信じ切る道化…もはやそれは、「将来の夢は太陽になること」と物理的に不可能な話をする頭の悪い望みを掲げる子供と大差のない姿だった。

「ゲームは私の全てだ…！ お前のようなクズに、これ以上利用されてたまるかあ!!」

デンジャラスゾンビゲーマーに変身した黎斗が、正宗に向かって飛び掛かる。その他のライダーも3人続くが、木の陰に潜む男は黎斗と、正宗の姿しか見ていなかった。

何度かぶつかり合い、黎斗が大きく吹っ飛ばされる。いくらか地面を転がり、黎斗の変身が解ける。

【GAME OVER】

黎斗が死んだ。体が粒子になり、空中に解けるようにして消える。

それを確認した瞬間、木の陰に潜む男が動いた。

透明な、不可視の腕が伸び、空中に消えようとする黎斗の粒子の一部をむんずと捕ま

えた。そのまま粒子を自分の元へと引き寄せる。

「この時を待っていたんだよ……これで、君が私に合う未来が整った」

粒子の一部、黎斗の一部は何も言わない。大部分から切り離されて困惑しているのだろうか。だが、肝心の黎斗の大部分は、自分の一部が消えたことなど気にも留めていない。虎視眈々と、いつ復活して正宗の不意を突いた攻撃をしてやろうかと考えるのに必死なようだ。

男は黎斗の一部を優しく手で撫で、透明なカプセルのようなものに封じ込め、懐からもう一つの透明なカプセルを取り出し、突如発生した怪しげな光を放つ小さな紫色の渦の中に放り込んだ。

檀黎斗の片割れが、異世界に召喚された瞬間だった。

男は満足げな表情を浮かべた。これでまた一つ、男に知る未来にぐうつと近づいたからだ。あと残すところは、檀正宗と、この後に出てくるゲームデウスXを異世界に送り込むのみだった。

だが、一番重要な黎斗を送り込んだのだから、もはや終わったも同然だった。男は上機嫌に笑いながら、異世界へと送られた黎斗に想いを馳せた。

「黎斗………待っているぞ………未来で、俺を殺せ」

『GM（ゲームマスター）は異世界に行ってもGMのようですよ』が、始まる。

ルーフマン（屋根男）

男が席に座っている。

会食の席で男は葵色のスーツに身を包み、洗練された手つきで食事を口へと運ぶ。

出されたワインの香りを楽しみ、一口含み、風味を堪能して飲み干す。

「良いワインですね。銘柄は何でしょうか？」

気に入ったのか、男はグラスにわずかに残ったワインを愛おしげに見つめながら体面に座る白スーツの男に話しかけた。

「ロマネ・コンティ……1945年に作られた一点モノですよ……気に入っていただけましたかな？」

「ええ、とつても……普通のロマネ・コンティとは一線を画しますね……まるで別の酒のようだ。病みつきになってしまいそうだ……」

男がそう語ると、白スーツの男は「それはつらいことをした」とすまなそうに頭を掻いた。

「1945年のロマネコンティは20世紀最良と言われながらも、戦後の混乱の中でかき集めたブドウを使って作られたため600本しか生産できなかったそうです。通常

よりも極めて本数が少ないヴィンテージなので、そうそう気の向くままに飲むのは難しい」

それを聞くと、男は心の底から落胆したように「滅多にお会いできないのですね……残念です」とだけ呟いた。しかしすぐに気を取り直したように、運ばれてきた他の料理を楽しそうに食べ始めるあたり、他の酒より少しだけ気に入った程度の気概だったのだろう。

「そしてとても残念なことにそのすぐ後にフィロキセラの影響で1945年にロマネコンティの木は抜かれてしまったのです。そのため1946から1951年までロマネコンティは作られずにかんりの時間が経ってしまった……ワイン通の間では1945年以前とそれ以降ではロマネコンティは味わいが変わったとも言われています」

白スーツの男の表情は、全くの無表情と言ってよかった。しかし、饒舌に酒の話をまくしたてるあたり、趣味の話を楽しんでいるのもまた確かなことだ。

「私の意見では、ロマネ・コンティの味は、1945年以前とそれ以降で……つと失礼、関係のない話をばかり……」

遅れて気が付いたのか、白スーツの男は口元を抑える。そこで驚いたり、ぼつが悪そうな顔になっていないあたりがまた不気味なのだが、男は気にする風もない。

「いえいえ、私は普段から食事を義務程度に思っているような男ですから……そのよ

うにこだわり、理解し、楽しむ姿勢は素晴らしいですよ」

そして男はナイフとフォークを置き、白スーツの男を見つめた。「そろそろ」ということだろう。すぐに察した白スーツの男が指を鳴らすと、テーブルの上に置かれていた料理の数々があつという間に消えていく。

「この度は多額の援助をいただいたこと、溢れるばかりのお恵みを賜り、言葉を越えて感謝致しました」

白スーツの男はそう言つて深々と頭を下げる。その言葉には紛れもなく最上級の感謝の意が込められているはずで、事実として綺麗な言葉を並べてはいるが、「ただ」綺麗な感謝を並べただけにも見えた。無論、白スーツの男が無表情なことが最大の原因だろう。

「いえいえそんな……私ほただ、私個人の気持ちとして援助を申し出たまでです。財団の方々とは、これからも良き仲を保ちたいという打算ですよ」

白スーツの男とは対照的に、男はにこやかに話す。ただこちらもこちらで、あまりにも無垢に見える笑顔は、まさしく作り物にも見えた。

「我が財団Xの資金、そしてネットワークの補強をしてくださる方は大変希少です。感謝を」

「私などが援助をせずとも、財団Xには無尽蔵の資金があり、ネットワークの網も十分

……それでも私の僅かばかりの援助を受け入れてくださったのはそちらの寛大さあつてこそですよ」

互いに褒め称え合うだけの、恐らく世界一意味のない会話の応酬。それでも男たちは二人とも楽しそうに話し合う。

「……それで……何故我が財団Xに援助を？」

不意に財団Xの男が目を細め、男を値踏みするように見つめた。それはある種、財団Xの男が初めて見せた感情に近いものだった。

「……………秘密結社シヨツカー……………スマートブレイン……………いろいろな場に援助をしてきましたが、残念なことにとれもこれも連中のせいでつぶされてしまいました。ですから……………」

「……次は、我々に取り入る番……ということですか」

「まあそうなりますね」

男は笑う。「私が援助をしたから潰れたのか、それとも元々潰れる運命にあつたのか」と。その自嘲混じりの言葉を聞き、財団Xの男は笑う。「貴方のせいと言うのが事実か否かに限らず、我が財団Xが傾くことにはないのでご安心を」とだけ答えた。

「……………それで結局、我が財団Xへの資金援助の見返り……貴方の望みは何ですか？」

「いえ？ 特に何も？」

ここへきて、財団Xの男は目を大きく見開いた。感情を明らかにさらけ出して動揺する財団Xの男を見て、男は可笑しそうに笑った。

「私は悪の援助さえできればそれでよいのです。見返りを求める気はさらさらありませんよ」

それを言うと、男は話しはこれで終わりとしても言うように席を立った。そして財団Xの男の目を見つめて、優し気に微笑んだ。

「私が望むものはただ一つ。あなた方が魔手を世界中に伸ばし、巨悪として栄え、仮面ライダー達と鎧を削ること、ただそれだけです。それ以外、あなた方に望むものは何も無い」

ここで、「仮面ライダーを倒すこと」が望みの中に入っていない時点で、財団Xの男は自分たちの組織が仮面ライダーを倒しえないことを知っている男の存在に気が付くべきだった。

しかしその機会はもう過ぎた。財団X側から見て、男はただの不思議な協力者止まりであった。あるいは、仮面ライダー達に恨みを持っているが、力がなく復讐できないから敵組織を援助することで間接的な復讐をやろうとしている輩……と言ったところだろう。

財団Xは気が付かない。

自分たちが栄えるということは、組織が力を持つということ。

財団Xは気が付かない。

組織が力を持ちすぎれば、確実に仮面ライダー達と何度も衝突することになることを。

財団Xは気が付かない。

仮面ライダーが財団Xと言う巨悪と何度も戦うということは、すなわち仮面ライダーは財団Xの相手にかかりきりになり、援助をした男にまで手が回らなくなるということ。

財団Xは気が付かない。

それがつまり、男は自分と言う個人の悪よりもっと大きな、目立ちやすい組織悪を配置することで正義の戦士達が自分に気が付かないようにしていることに。

財団Xは気が付かない。

自分たちが、仮面ライダーが食いつくための使い捨ての餌として扱われていることに気が付かない。

財団Xは気が付かない。

これまで現れては消えてきた様々な力ある組織がつぶれた原因は、その個人の悪を隠すための捨て石として扱われてきたことに気が付かない。

財団Xは気が付かない。

男が、ここではない異世界から来たことに気が付かない。

男は自らをルーフマン（屋根男）と呼ぶ。

屋根から下の地面を見下ろし、砂糖菓子^金を地面へ落とす、それに群がるアリ^悪を、アリを求めて集まる捕食者^{飯面ライダー}を見守る。屋根から、絶対に安全な場所から見守り、アリ^悪が全て食い荒ら^ぼされればまた別のアリ^組の巣^織がある場所へ。

そうして男はこれまで生きてきた。自分以外の悪と正義をぶつけ合わせ、正義が自分に気が付かないように細心の注意を払い続けた。

それはある種、臆病者と言える。

つぶさな正義にさえ立ち向かわず、自分よりはるかに派手に暴れるものを目立たせて隠れ、生きてきた。

明確な悪事を起こさず、明確に誰かを救わずに生きてきた。

しかし、その本性は常に燃えている。

復讐心と言う名の焰を瞬かせ、男は今日も良き協力者として生き、協力した相手を切り捨て続ける。

そうやって、生きていく。

いつか達成する大いなる復讐のために、今日も男はちんけな資金援助を続ける。

会食の席から離れ、男は一人、闇に消える。

「財団Xか……ガワは大きいぶん、多少は長持ちしてくれるとありがたいのだが……それにしても、こんなに良いものから手を引くなんて、存外彼らも物を見る目が無いものだ」

財団Xからこつそりとくすねた、廃棄予定のガイアメモリに関する資料書をしげしげと見つめ、男は財団Xを嘲笑した。財団Xは男のお眼鏡にはかなわなかったが、皮肉なことにガイアメモリは男の興味を引いたようだ。

「いつかの復讐……その時のために、今まで以上に正義と悪をぶつけ合わせ、更なる大きな力の可能性を探さねば」

男が悪の組織に援助をする理由は、それ以外にはない。

色々研究させ、いろいろな力を磨かせることで力の可能性を見出すために。

全ては、男がかつて死ぬハメになった原因の存在の力を超えるために。

それは、事実的に不可能なものではないかと疑ってしまうほどの大きな力だが、その相手を超えなければ男の復讐がかなうことは決してない。

そして、現段階では男が超えたい相手にかなうほどの可能性がある力は、ほとんど存在しない。

しかし、どうやら男はガイアメモリに可能性を見出したようだ。

男にはやるべきことがたくさんある。未来の形を保つためにいちいち調整する必要もあるし、悪の組織が勝利して世界が「その力一辺倒」になってもらっても困るので、最終的に勝つのは仮面ライダー側にする配慮も忘れてはならない。

仮面ライダーと戦わせ、様々な悪の組織を入れ代わり立ち代わり、様々な種類の力を見るためにも大体一年ほどで様々な力とそれを使い闘う仮面ライダーを争わせ続ける。

男が誕生を待つ仮面ライダーゲームも、この後6〜7年ほどで世に出ることになるのだが、男はまだそれを知らず、とにかく目前の目標を片付け続ける。

「黎斗………待っているぞ………未来で、俺を殺せ」

男は笑いながら、未来で生まれる仮面ライダーに想いを馳せた。

時は、2010年8月22日

財団Xが、ガイアメモリから手を引いた日だ。